

# 千葉大学国際共同研究調査

(平成21年度)

## 目 次

文学部 .....	1
大学院人文社会科学研究科 .....	2
教育学部 .....	2
法経学部 .....	4
大学院理学研究科 .....	6
大学院医学研究院 .....	22
医学部附属病院 .....	36
大学院薬学研究院 .....	38
看護学部 .....	45
大学院工学研究科 .....	45
大学院融合科学研究科 .....	55
大学院園芸学研究科 .....	65
環境リモートセンシング研究センター .....	79
真菌医学研究センター .....	83
総合メディア基盤センター .....	89
先進科学センター .....	89
海洋バイオシステム研究センター .....	91
フロンティアメディカル工学研究開発センター .....	91
環境健康フィールド科学センター .....	92

調査の対象となっている「国際共同研究」とは、学科、研究室又は研究者個人を単位として行われた国際的な共同研究であり、すでに論文発表等の成果を得られるもの（成果が得られると予想されるものを含む）を示す。

#### 調査項目

1. ー研究プロジェクト名
2. ー本学における研究代表者  
所属／職名／氏名
3. ー海外におけるパートナー  
国名／所属機関／氏名
4. ー実施期間
5. ープロジェクトの概要
6. ー資金・助成等
7. ー主な成果
8. ーその他特記すべき事項  
(受賞、開催シンポジウム等)

# 千葉大学国際共同研究調査

(平成21年度)

文学部
<p>1. 〈銀の時代〉のロシア文学・文化研究</p> <p>2. 文学部/准教授/鴻野わか菜</p> <p>3. ロシア/国立ロシア人文大学教授/ヂーナ・マフムードヴナ・マゴメドワ</p> <p>4. 2002年～</p> <p>5. 〈銀の時代〉(1900～20年代)を中心に20世紀ロシアの文学を、美術・文化・宗教・思想と比較しつつ研究する。</p> <p>6. 科学研究費補助金(若手B)</p> <p>7. KONO, Wakana. Khdozhestvennoe prostranstvo i personazhi v &lt;Serebryanom golube&gt; A. Belogo i &lt;Pesne Sud'by&gt; A. Bloka // Problemy izucheniya khdozhestvennogo proizvedeniya v shkole i vuze. Vyp.2: Prostranstvo i vremya v khurozhestvennom proizvedenii. pp.135-139. Orenburg,2002.,</p> <p>KONO, Wakana.Obraz lesa kak &lt;russkoe prostranstvo&gt; (&lt;Serebryanyj golub&gt; A. Belogo v kontekste &lt;neonarodnichekoj&gt; literatury nachala 20 v.)『ロシア語ロシア文学研究第34号』(日本ロシア文学会, 2002) pp.67-73,</p> <p>KONO, Wakana. Zhizn'goroda i zhizn'cheloveka:Obraz Letnego sada v&lt;Peterburge&gt;A.Belogo//Japanese Slavic and East European Studies Vol.25.Japanese Society for Slavic and East European Studies,2004.pp.53-70.</p> <p>KONO, Wakana. Nauka i okkul'tizm. Glaz, vozrozhdayushij mir, v romane &lt;Moskva&gt; A.Belogo // The Frontier in Studies of Postmodern Literature (VII). Hokkaido: Slavic Research Center Hokkaido University, 2005. C.18-40.</p> <p>KONO, Wakana. Otnosheniya k miru v iskusstve russko-evrejskikh nonkonformistov // <i>Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context. 21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies Series</i>. No.17. (Ed. by Mochizuki Tetsuo). Hokkaido: Slavic Research Center Hokkaido University, 2008. C. 93-109.他</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 日露言語コーパス研究とディスコースの比較分析</p> <p>2. 文学部/准教授/鴻野わか菜</p> <p>3. ロシア/国立ロシア人文大学講師/千葉大学外国人研究員/ゾーヤ・ヴィクトロヴナ・エフィーモワ</p> <p>4. 2007年～</p> <p>5. 日本語とロシア語の言語コーパス研究とディスコースを比較分析する</p> <p>6. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費)</p> <p>7. Efimova, Zoya. Issues of referential structure annotation in corpus of spoken narratives. (Problemy razmetki referencial'noi struktury v korpuse ustnyh narrativov) // NTL. Moscow. pp.82-87. 2007</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 日本語の動詞における体系上の意味転換</p> <p>2. 文学部/准教授/鴻野わか菜</p> <p>3. ロシア/東洋学研究所 ロシア科学アカデミー/千葉大学外国人研究員/アンナ・セルゲーエヴナ・パーニナ</p> <p>4. 2008年～2011年</p> <p>5. 日本語の動詞における体系上の意味転換を、ロシア語と比較しつつ分析する。</p> <p>6. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費)</p> <p>7. なし</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 近代移行期北東アジアにおける秩序構想の比較社会史</p> <p>2. 文学部/教授/山田賢</p> <p>3. 中国/南開大学日本研究院院長/李卓教授 中国/南開大学社会史研究センター/副センター長 余新忠教授</p> <p>4. 2009年度</p>

5. 本研究は、中国大陸・朝鮮半島・日本列島を包摂する北東アジア諸地域を中心的な対象に据えつつ、近代移行期においてそれぞれの社会の内に胚胎された多様な秩序構想と、そのせめぎ合いの果てに近代国家が成立していく過程を比較史的に検討することを目的としている。具体的には、中国・朝鮮・日本における近代移行期の地域社会に出現した多様な秩序構想の実証的な考察と、かかる歴史的な展開に基礎づけられた北東アジア諸地域「近代」の特質の解明を当面の課題としているが、さらには現代の北東アジアに持ち越された諸問題にまで検討の射程を及ぼすことを期している。なお、このような比較史研究を、日本の中国史研究者（研究代表者山田賢）と中国の日本史研究者・中国史研究者が共同で立ち上げたことも本研究プロジェクトの特長の一つである。

6. 科学研究費補助金 基盤 (B)

7. 2009 年度に発表した成果は以下のようなものがある。

・山田賢「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」(日本思想文化研究会編『日本思想文化研究』第2巻第2号、2009、8-25頁)

・山田賢「戦乱と記憶—『仕隠斎涉筆』に見る清末社会—」(『史朋』第42号、2009、1-11頁)

・山田賢「宗族」から「民族」へ—近代中国における「国民国家」と忠誠のゆくえ—(久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』有志舎、2010年3月、115~136頁)

8. その他特記事項：共同研究者である南開大学日本研究院院長李卓教授の仲介により、2009年度、千葉大学と南開大学との間に部局間交流協定が締結された。

## 大学院人文社会科学研究科

1. Shifting Re-creations of European and Asian 'Others' in East Asian Schoolbook

2. 人文社会科学研究科/教授/三宅明正

3. ドイツ/ハイデルベルク大学/Wolfgang Seifert, Gotelind Müller-Saini 教授ほか12人

4. 2008年～

5. 東アジアにおける教科書の中で他者はどのようにになっているのかを、多角的に検討する。

6. ハイデルベルク大学ならびに連邦政府 cluster of excellence 経費

7. 共同研究の成果をとりまとめ中

## 教育学部

1. アジアのヘルスプロモーションスクールに関する比較研究

2. 教育学部/教授/岡田加奈子

3.

・Mainland China, Shanghai/School of Public Health, Fudan University/F. Hua,

・South Korea, Wonju, /Department of Health Administration, College of Health Sciences, Yonsei University/E. W. Nam,

・Taiwan, Taipei/Department of Health Promotion and Health Education, National Taiwan Normal University, /S. Y. Huang

4. 2008年～

5. 健康的な学校づくりを目指すヘルスプロモーションスクールは、WHOのヘルスプロモーションのセッティングアプローチの一つの戦略である。ヨーロッパから始まり、アジアでも広まりつつある。アジア型の特徴が見られ、それらをヨーロッパの発展を鑑みながら比較検討を行っている。

6. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科「研究プロジェクト」助成、coe スタートアップ奨励金、平成22年度教員研修モデルカリキュラム開発研究

7.

鎌塚優子, 展偉生, 高橋浩二他: 台湾のヘルスプロモーション・スクールの特徴からみる日本の課題 - 文献ならびに学校視察事例調査による検討 - 学校教育学研究論集, 21, 127-135, 2010. 3

岡田加奈子他: 香港のヘルスプロモーションスクール, 千葉大学教育学部研究紀要, 2010. 3

Megumi KAGOTANI, Yuko KAMAZUKA, Syusaku SASADA et. al. (2009): Three Policies for the Development of Health Promoting Schools in Japan, The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Health Education, Makuhari, Japan.

Kanako OKADA et. al. : CHARACTERISTICS OF HEALTH PROMOTING SCHOOLS IN ASIA: JAPAN, HONG KONG, CHINA, SOUTH KOREA AND TAIWAN 20th

IUHPE World Conference on Health Promotion, 11-15 July 2010, Geneva, Switzerland (発表予定)

8. ヘルスプロモーションスクールシンポジウム IN 台湾 (2009. 12) にシンポジストとして招聘された。また、国際ヘルスプロモーションスクール学会にて、特別講演を行った。(2009. 12)

ヘルスプロモーションスクールセミナー IN 上海 (2010. 1. 4) において、千葉大学教育学部教員藤川大祐、磯邊聡、砂上史子、岡田加奈子の4名が発表を行った。

1. 物理実験教育の方法と用具の開発研究

2. 教育学部/教授/東崎健一

3. カンボジア/プノンペン大学/Ing Heng, Kalyan Sou, Khun Kimleang  
ベトナム/ハノイ大学/Tran Vinh Thang

4. 平成14年度～

5. 多くの人が物理現象や実験器具に容易に触れ・動きかけることができるように、安価、省スペースで可塑性を備えた新しい実験テーマ・方法と装置を研究・開発する。

6. ユネスコアジア文化センター (ACCU)、岡本国際奨学交流財団、文部科学省

7. 発表論文

1) Novel Determination of Peltier Coefficient, Seebeck Coefficient and Thermal Resistance of Thermoelectric Module, Jpn. J. Appl. Phys., 45 No 6A (2006)

2) “DESK LAB” SERIES: A NOVEL EXPERIMENTAL APPARATUS WITH DESK TOP SIZE, EASE OF RESTRUCTURE AND LOW COST” : Kalyan SOU, Naoto OZAKI, Satoshi MATSUDA, and Ken-ichi TOZAKI, Journal of the Physics Education Society of Japan (Proc. Int. Conf. Physics Education 2006)

3) A Novel Experimental Apparatus (PDL) and Its Application in Higher Education in Japan and Cambodia: K. Sou, T. Kato, K. Oto, T. Sakurai, K. Yamamoto, E. Omosa, and K. Tozaki (Proc. Int. Conf. Physics Education 2009)

特許

1) 特許出願 2005-239958 熱電素子の特性評価法

2) 特許出願 2005-301235 高圧下で使用可能な ppm 分解能音速測定法・装置

3) 特許出願 2005-368470 流体用密度測定装置および密度測定法

4) 特許出願 2006-069380 組立式机上実験方法および装置

5) 特許出願 2006-199741 輻射熱流センサーと輻射熱測定法

6) 特許出願 2006-337152 磁束測定法及び磁気センサー

7) 特許出願 2007-010053 組立式実験装置を用いた教育システム

8) 特許出願 2007-137936 熱分析装置

8. その他

1) 2006年千葉大学オープンリサーチ 学長賞受賞

2) 平成19年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(パーソナルデスクラボによる実験教育の展開—新機器開発による少人数一組・一斉実験教育の実現—) 採択

3) PDL普及のためのワークショップ開催; 2008年10月、2009年10月 (カンボジア、プノンペン大学)

1. 日伊児童間での母国語ならびに外国語習得のための脳内認知比較研究

2. 教育学部/教授/杉田 克生

3. イタリア/ Università degli Studi di Napoli “L’Orientale” Tor Vergata University of Rome/Junichi Oue

4. 平成22年度～平成24年度

5. 日本語学習イタリア人学生と日本児童のひらがな、ローマ字読字の脳内機構を比較検討し、母国語文字と外国語文字の読字機能獲得におけるヒトの普遍的脳機能を解明する。

6. 科学研究費補助金 (萌芽研究)

7. Sugita K, Hatakeyama R, Narahashi S, Sugita K, Shimoyama I. “Meaning and meaningless Hiragana” and “Arabic numeral” phonological reaction time in children of Italian-Japanese bilinguals. IMJ Vol. 15, No. 3, 189-192, 2008

Miyuki Torii, Ichiro Shimoyama, Katsuo Sugita Phonemic and semantic working memory in information processing in children with high function pervasive developmental disorders IMJ Vol 17, No 1, 35-39, 2010

Sugita K, Suzuki N, Oi K, Allen-Tamai M, Sugita Ki, Shimoyama I. Cross-Sectional Analysis for Matching Words to Concepts in Japanese and English Languages. IMJ Vol 17, No 1, 41-45, 2010

8. なし

## 法経学部

1. 南アジアにおける消費と工業変動：1880-1950

2. 法経学部／教授／柳澤 悠

3. アメリカ／ダートマス大学／ダグラス・ハインズ

イギリス／ロンドン政治経済学院 (LSE) /ティルタンカル・ロイ

アメリカ／ヴァーモント大学／アビガイル・マクゴワン

4. 平成 15 年度～

5. ヨーロッパ、日本、中国については消費が工業化に果たした重要性を重視する研究があるが、南アジアについては同様な研究はない。本研究参加者はいずれもインド経済発展にとっての手工業の重要性に注目させることに貢献してきたが、その中で消費者の行動や嗜好を理解することがインド工業化の特徴を理解するために決定的に重要だと考えるにいたった。経済史、社会史、文化史などの視点を統合しながら、「消費」を軸に南アジアの工業を理解しようという試みである。2005年12月のインドでのワークショップを経て、4人が編者となって *Towards a History of Consumption in South Asia* を Oxford University Press (Delhi) から刊行した。

6. アジア研究協会 (USA)、科学研究費補助金 基盤研究 B

7. 柳澤悠「小規模工業・企業の展開と消費構造の変化：1920年—1950年のインド」『千葉大学経済研究』第19巻第3号。

Douglas E. Haynes, Abigail McGowan, Tirthankar Roy, and Haruka Yanagisawa eds., *Towards a History of Consumption in South India*, Oxford University Press, New, Delhi, 2010

8. パネル“Consumption and Industrial Change in South Asia : 1880-1950” を第3回国際アジア研究者会議（シンガポール、2003年8月）において組織して、発表。2005年12月に、インドのブネー市のゴーカーレー政治経済研究所において、国際ワークショップ“Towards a History of Consumption in South Asia: 1850-1950”を開催し、日・インド・英・米・シンガポールから13人が報告した。

1. インドにおける消費パターンの変動と経済成長、1950-80年：中下層階層を中心に

2. 法経学部／教授／柳澤 悠

3. インド／マドラス経済開発研究所／S. アーナンディ

4. 平成19年度～

5. 1950年から1980年代までの時期にインドの人々の消費生活は着実に変化した。中下層民の日常生活の姿も日常の消費もまた、着実に変化した。これらの変化は、農村社会の変動と深く関連していた。本研究はこれら消費の変化を解明して、下層階層の消費の増大が1980年代に加速するインド全体の経済成長を支える重要な要因であったであろうという我々の仮説を検証ことを目指している。

6. 科学研究費補助金 基盤研究 B

8. 日本南アジア学会（2009年10月3日・北九州市立大学）セッション「消費パターンの長期変動と社会構造・社会意識—南インド村落調査と雑誌・新聞広告の分析を中心に—」を組織。2009年10月11日国際ワークショップ開催

1. アジアにおけるコモنزと村落共同体：歴史と現在

2. 法経学部／教授／柳澤 悠

3. 韓国／成均館大学／李宇衍

インド／（元）シュリーラーム大学／ミノーターイー・チャクラヴァールティ・カーウル

インド／経済成長研究所／アミター・バーヴィスカル

フランス／グルノーブル大学／クレバール・ギミレ

4. 平成 18 年度～

5. 環境問題の研究の中では、村落共同体やコモنزをめぐる多様な議論がなされてきたが、アジアのコモنزの歴史的な実態に関する研究は非常に少ない。日本の江戸時代には典型的と言ってもよいようなコモنزが実在したが、こうした形態の自然資源管理の制度を見つけることが困難な地域がアジアにはありうる。本計画は、アジアの各地域の共同体やコモنزを歴史的な第一次資料に基づいて解明することを目指している。2006年12月の千葉大学で行われた国際会議で報告された論文を基礎に、成果を論文集と

して海外の出版社から刊行するための編集を進めている。

6. 21世紀COE資金、国際交流基金、千葉大学人文社会科学研究所長裁量経費

7. Papers presented at International Conference, “‘Tradition’, Environment and Publicness in Asia and the Middle East” held at Chiba in 2006: Wooyoun Lee, “The Role of Government in Establishment of Communal Rule for Using Forest Resources: The Korean Experience before and after the Liberation”; Minoti-Chakravarty Kaul, “Self-Governance of Village Common Lands, Water and Forests in Northern India, 1803-2006: Lessons from a Sustainable Eco-Culture”; Haruka Yanagisawa, “Historical Changes in Village Common Lands in South India”. Haruka Yanagisawa, “The Decline of Village Common Lands and Changes in Village Society: South India, c.1850-2000” *Conservation and Society*, Vol. 6, No. 4 (Dec. 2008), pp. 293-307; Haruka Yanagisawa, “Village Common Land, Manure, Fodder and the Intensification of Agricultural Practices: South Indian Agriculture since the Middle of the Nineteenth Century”, presented at the XVth World Economic History Congress, held on 3-7 August 2009 at Utrecht; Haruka Yanagisawa, “South Indian Village Common Lands in Transition: The Decline of the Elite-dominant Managing System and Changes in the Role of Common Lands in Local Agricultural Production and in the Village Economy”, presented at “Contemporary India Area Studies: The First International Workshop” held on 13th December 2009 at Kyoto University.

8. 国際シンポジウム「アジア・中東における『伝統』・環境・公共性」（2006年12月、千葉大学）のセッション「伝統、共同体、環境と公共性」において、本計画にかかわって8報告がなされた。

1. 「ケンブリッジ・モメント——美德、歴史、そして公共哲学」

2. 法経学部/教授/小林正弥

3. 英国/ケンブリッジ大学/ジョン・ダン

英国/ケンブリッジ大学/レイモンド・ゴイス

英国/ケンブリッジ大学/イスタヴァン・ホント

4. 2005年度～

5. 本研究は、西欧政治思想史について革新的な理論を提起しているケンブリッジ学派の中心的な研究者との対話を通じて、歴史把握のための方法論とその政治的思考を総合的に討議するものである。ケンブリッジ学派は「コンテキスト主義」という新しい思想史研究の方法論を用いて、民主主義や共和主義などについての画期的な研究を生み出している。「コンテキスト主義」とは、これまでの古典的なテキストの記述のみに内在した思想史研究に対して、そうした古典的なテキストが生み出されてくる議論の文脈を踏まえた解釈を行なうものである。ジョン・ポーコックは『マキアヴェリアン・モメント』を著し、世界的に影響を与えた。本プロジェクトにおいては、この学派と共に新たな議論を提起するとともに、国際連携の事業を進めている。

1. 『EUとアジアにおける「ソーシャル・クオリティー」：公共政策研究方法論・指標の開発』

2. 法経学部/准教授/小川哲生

3. 英国/ブリストル大学/デーヴ・ゴードン

英国/シェフィールド大学/アラン・ウォーカー

オランダ/欧州ソーシャル・クオリティー財団/ローレント・ヴァン・デ・マーセン

オランダ/社会科学研究所/デス・ギヤスパー

ロシア/モスクワ国立大学/ナタリア・グリゴリエヴァ

台湾/国立台湾大学/王麗容

大韓民国/ソウル国立大学/イ・ジェ Chol

オーストラリア/オーストラリア国立大学/デボラ・ミッシェル

オーストラリア/フリンダース大学医学部

インド/デリー大学経済成長研究所/モネール・アラム

中華人民共和国/国務院発展研究センター/森貢

中国香港特別行政区/香港城市大学/レイモンド・チャン

マレーシア/プミトラ・マラヤ大学/シャリファ・ノザラザン・アブドル・ラシッド

インドネシア/トリスキ大学医学部/スグロホ・アピクスノ（現在、WHOに出向中）

タイ王国/チュラロンコーン大学/スリチャイ・ワンゲオ

タイ王国/キング・プラジャヒポック研究所/タイウィルデ・ブレイクル

ブラジル/ブラジル政府/アナ・アメリカ・カマラノ

4. 平成 18 年度～

5. 本研究の目的は、アジア・太平洋諸国におけるソーシャル・ウェルビーイングを目標とする公共政策を欧州からの公共政策研究方法論・比較視座である「ソーシャル・クオリティー・アプローチ」によって実践する基盤を構築することである。具体的には、欧州型からアジアにおいて適用を目指した新しい公共政策立案指標の開発に主眼を置き、政策価値における「ウェルビーイング、成長と持続的な発展」の両概念を規範・記述論の両面から考察し、個人の QOL とウェルビーイングのありかたを追求するものである。また、この研究で開発された指標は「現代公共健康(保健・医療・福祉の統合)」と「人口高齢化と雇用・労働市場・福祉レジーム」の分野に応用され、総合社会政策として地域社会レベル・国家レベル・共同体的レベルで移行戦略を作成することを目標とする。また、2009 年度から千葉大学予防医学センター(センター長: 森千里教授、副センター長: 羽田明教授)との連携も始まり、「新しい公共健康学の研究拠点」として、千葉大学スタートアップ COE に採択された。

6. オランダ・欧州ソーシャル・クオリティー財団、台湾・国立台湾大学、ジェネシス財団、タイ王国・キング・プラジャヒポック研究所、千葉大学予防医学センター

7. *The Crisis of Welfare in East Asia*, Lexington Books: MD, U.S.A. (2007); *Conditions for Social Quality and its Related Indicators*, Kluwer Law International: The Hague (in print); *The International Journal of Social Quality vol. 1*, Oxford: Berghahn Books.

8. 2009 年 5 月に、タイ王国・国立発展行政研究所(NIDA)での研究セミナー「Human Security and Social Quality: *The Human and The Social*」の開催及びタイ政府社会発展・人間の安全保障省において同大臣と会談(於: タイ王国・バンコク)を行った。2009 年 6 月千葉大学予防医学センター・タイ保健振興財団(*The Thai Health Promotion Foundation*)の共同研究セミナーの開催(於: 千葉大学)をタイ保健振興財団副会長 チャニカ・チュニダ博士(マヒドル大学副学長)一行(第 2 回アジア・太平洋ヘルス・プロモーションと教育に関する国際会議の主催者)と実施した。2009 年 9 月には、オランダ・社会科学研究所(*The Institute of Social Studies*)での研究セミナーの開催(於: オランダ・ハーグ市)を行い、2009 年 1 月タイ王国・国立発展行政研究所、キング・プラジャヒポック研究所、チュラロンコン大学、欧州ソーシャル・クオリティー財団共催「第 4 回ソーシャル・クオリティー国際会議: 人間の安全保障とソーシャル・クオリティー」の開催(於: タイ王国・バンコク)をタイ王国政府社会発展・人間の安全保障省と ASEAN(東南アジア諸国連合)の後援で実施し、基調報告者としてスーリン・ピチュワン博士(ASEAN 事務局長)を招待した。また、2010 年 3 月に、千葉大学予防医学センター(法経学部との共催)国際ワークショップ「アジア・ソーシャル・クオリティー指標」を開催した。

## 大学院理学研究科

1. 低分子量 G 蛋白質とそれらの標的蛋白質の細胞機能と生理的機能の制御機構

2. 大学院理学研究科/教授/遠藤 剛

3. ドイツ/University of Saarland Medical Center/Gerald Thiel

4. 平成 18 年～

5. 研究代表者らが発見した低分子量 G 蛋白質とそれらの標的蛋白質の細胞機能および生理的機能を明らかにし、さらにそれらの分子機構を解明する。

6. 科学研究費補助金 特定領域研究「G 蛋白質シグナル」、特定領域研究「がん特性」

7. Mayer, S. I., Rössler, O. G., Endo, T., Charnay, P., and Thiel, G. (2009) Epidermal growth factor-induced proliferation of astrocytes requires Egr transcription factors. *J. Cell Sci.* 122, 3340-3350.

8. なし

1. ジアシルグリセロールキナーゼ(DGK)・1 の sterile  $\alpha$ -motif(SAM)ドメインによるポリマー形成

2. 大学院理学研究科/教授/坂根 郁夫

3. アメリカ合衆国/カルフォルニア大学ロサンゼルス校/ジェームス U. ボウイー教授

4. 2006～

5. SAMドメインを介した DGK・1 のオリゴマー形成は DGK・1 の細胞内局在性や活性制御に重要であるので、我々は DGK・1 オリゴマーの生化学的・構造的性質の解析を行う。

6. 科学研究費補助金(基盤研究(C), 特定領域研究), 科学技術振興機構(JST) 地域イノベーション創出総合支援事業 重点地域研究開発推



進プログラム「シーズ発掘試験(A:発掘型), (B:発展型)」, 北海道科学技術総合振興センター(NOASTEC 財団)「研究開発助成事業・共同研究補助金」, 日本糖尿病財団「研究助成金」, 寿原記念財団「研究助成金」, ノボ ノルディスク ファーマ「インスリン研究助成」, 武田科学振興財団「報彰基金」研究奨励金, 医科学応用研究財団「調査研究助成金」, 秋山記念生命科学振興財団「研究助成(一般助成)」, 内藤記念科学振興財団「内藤記念科学奨励金(研究助成)」, 濱口生化学振興財団「研究助成金」, 三共生命化学研究振興財団「研究助成」

7. Harada, B. T., Knight, M. J., Imai, S., Qiao, F., Ramachander, R., Sawaya, M. R., Gingery, M., Sakane, F. and Bowie, J. U. Regulation of enzyme localization by polymerization: Polymer formation by the SAM domain of diacylglycerol kinase •1. Structure 16, 380-387 (2008)

8. N/A

1. 環境変化とインダス文明

2. 大学院理学研究科/教授/宮内崇裕

3. インド ラジャスタン大学 (カラクワル教授), バローダ大学 (アジトブラサード教授)

4. 平成 18 年度 (5 カ年)

5. 本プロジェクトでは, インダス文明の成立・展開・衰退を学際的なアプローチで解明することを目的としています。とくに, 都市の発展を支えたと考えられる食料生産とメソポタミアなどとの交易ネットワークが, 環境変化によってどのような影響を受けたかを実証的に調査します。なかでも古環境研究グループは, インダス文明を支えていた流路変遷, 海岸平野の形成, 相対的海面変化と気候変動, などの研究を通して自然環境の影響評価を行う予定です。

6. 大学共同利用期間法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

7. Toshiki Osada (ed), Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper 2, Indus Project Res. Inst. For Humanity and Nature Kyoto, Japan, 137p., 2007.

Toshiki Osada (ed), Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper 3, Indus Project Res. Inst. For Humanity and Nature Kyoto, Japan, 178p., 2008.

Toshiki Osada (ed), Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper 4, Indus Project Res. Inst. For Humanity and Nature Kyoto, Japan, 137p., 2008.

Toshiki Osada (ed), Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper 5, Indus Project Res. Inst. For Humanity and Nature Kyoto, Japan, 109p., 2008.

Toshiki Osada (ed), Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper 6, Indus Project Res. Inst. For Humanity and Nature Kyoto, Japan, 116p., 2008.

長田俊樹 (編) : 環境変化とインダス文明, 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所プロジェクト H-03, 2007 年度成果報告書, 226p, 2008

8. 2007. 6-11 地球研セミナー インド研究者招聘と研究交流

2007. 12. 14-29, 2008. 12-1-14, 2009. 2-18-28. 現地調査

1. 電磁気学的アプローチによる地震・斜面崩壊の監視・予測とそのモデリング

2. 大学院理学研究科/教授/服部克巳

3. 中国北京大学地球と空間科学学院/教授/黄清華 (Qinghua Huang)

4. 2004~

5. 地上や衛星で観測された地球物理データに対して, 地震や斜面崩壊などに先行する現象を抽出し, 監視予測するための早期警戒装置を開発する。またそのために物理機構を解明を行う。

6. 2007-2009 年 NiCT 国際共同研究助成金

2009-2012 年科学技術振興機構 (JST) 戦略的国際科学技術協力推進事業「日中韓研究交流」

7.

平野拓哉・吉野千恵・服部克巳・黄清華(2008):ULF/ELF 帯磁場データの長期解析及び方位測定~地震に先行する磁場変動~。第 78 回大気電気学会, 千葉, 2008 年 1 月 10-11 日

平野拓哉・吉野千恵・服部克巳・黄清華(2008):2004 年 Sumatra-Andaman 地震に関連する ULF/ELF 帯磁場データの方位測定。日本地球惑星科学連合 2008 年大会, CDROM, 幕張メッセ国際会議場, 2008 年 5 月 25-30 日

Hirano, T C. Yoshino, K. Hattori, and Q. Huang, Direction finding of ULF/ELF geomagnetic field data possibility associated with the 2004 Sumatra-Andaman earthquake, 2009 International Workshop on Validation of Earthquake Precursors by Satellite, Terrestrial and other Observations (VESTO).Case studies of the recent Asian events, P10,Chiba University, March 2009

8. 交流

平成16年8月 服部が青島で開催された AP-RASC 国際会議の後、北京大学を訪問し、セミナー実施

平成17年3月 中国・北京大学・地球物理学院・黄清華教授：調布で開催された IWSE ワークショップの後、黄教授が千葉大学大学院理学研究科地球科学コース服部克巳准教授を訪問し、南房総観測点を視察。

平成18年7月 服部が北京で開催された WPGM 終了後、北京大学にてセミナー実施（黄教授の招聘）。国家地震局地球物理研究所等視察。

平成20年3月 中国・北京大学・地球与空間科学学院・黄清華教授：相模原で開催された IWSLEC にて招待講演（服部が招聘）を行った際に千葉大学大学院理学研究科地球科学コース服部克巳准教授を訪問し、研究打ち合わせを実施。

平成20年12月 AGU（サンフランシスコ）にて打ち合わせ

平成21年3月 中国・北京大学・地球与空間科学学院・黄清華教授：千葉大学で開催された VESTO09 国際ワークショップに参加（服部が招聘）した際に、服部克巳准教授と研究打ち合わせを実施。また、野波理事を表敬訪問。

平成21年4月 EGU（ウィーン）にて打ち合わせ

平成21年5月 中国・北京大学・地球与空間科学学院・黄清華教授：千葉市幕張で開催された 2009 年地球科学系学会連合大会において研究打ち合わせを実施

平成21年6月 服部が中国・北京大学・地球与空間科学学院・黄清華教授を訪問（黄教授が招聘）、セミナー開催、研究打ち合わせ

平成21年6月 千葉大学・五味田国際企画課長：北京大学国際課を表敬訪問

平成21年10月 北京大学・地球与空間科学学院・黄清華研究室の学部卒、中国科学院大学院大学修士課程卒の大学院生（中国国家地震局所属）を千葉大学大学院理学研究科の博士課程に受入

平成21年12月 AGU（サンフランシスコ）にて打ち合わせ

平成22年2-3月 服部が中国・北京大学・地球与空間科学学院・黄清華教授を訪問、セミナー開催、研究打ち合わせ

平成22年3月 黄教授が千葉大学を訪問し、千葉大で主催した斜面崩壊関連の国際ワークショップに参加するとともに、集中的な研究打ち合わせを実施

1. 地殻活動に関連する電磁気現象に関する研究

2. 大学院理学研究科／教授／服部克巳

3. Russia / Institute of Physics of the Earth / Dr. Oleg Molchanov

Russia / Institute of Terrestrial Magnetism, Ionosphere and Radio Wave Propagation

(IZMIRAN) / Dr. Yuri Kopytenko

Russia / Geophysical Service Kamchatka Department / Dr. Eviginii Gordeev

Ukraine / Lviv Center of Space Research / Dr. Varelly Korepanov

4. 平成10年度～

5. 地震に先行する電磁気現象のうち ULF 帯の磁場変動に注目し、その観測のための機材の開発、観測点の設置、データ解析を行い、その物理機構を解明し、地震活動を監視・予測するための手法について研究を行う。

6. 理化学研究所（2002年まで）

科研費（C）（2002-2004年度）

科研費（C）（2004-2006年度）

Mezentsev, A. Y., Hayakawa, M., and Hattori, K., Fractal ULF signature related to seismic process, Journal of Atmospheric Electricity, 29, 81-93, 2009.

Ismaguilov, V.S., Kopytenko, Y. A., Hattori, K., and Hayakawa, M., Gradients and phase velocities of ULF geomagnetic disturbances used to determine the source of an impending strong earthquake, Geomagnetism and Aeronomy 46, 403-410, 2006.

7. Y. Kopytenko, V. Ismaguilov, K. Hattori and M. Hayakawa, Determination of hearth position of a forthcoming strong EQ using gradients and phase velocities of ULF geomagnetic disturbances, Physics and Chemistry of the Earth, 31, 292-298, 2006.

A. Schekotov, O. Molchanov, K. Hattori, E. Fedorov, V. Gladyshev, G. Belyaev, V. Chebrov, V. Sinitsin, E. Gordeev and M.

- Hayakawa, Seismo-ionospheric depression of the ULF geomagnetic fluctuations at Kamchatka and Japan, *Physics and Chemistry of the Earth*, 31, 313-318, 2006.
- Yu. A. Kopytenko, V. S. Ismaguilov, K. Hattori, and M. Hayakawa, Determination of hearth position of forthcoming strong EQ using gradients and phase velocities of ULF geomagnetic disturbances, *Extended Abstracts of 2005 International Workshop on Seismo Electromagnetics*, pp. 166-169, 15-17 March, 2005, Chofu, Tokyo
- Kopytenko Yu.A., Ismaguilov V.S., Hattori K., Hayakawa M., Gradients and Phase Velocities of ULF magnetic disturbances ( $F=0.1-0.4\text{Hz}$ ) before and during strong earthquakes inf 2003 year at Bosso Peninsula (Japan), 2004 Asia-Pacific Radio Science Conference Proceedings, p. 545, August 24-27, 2004, (Qingdao, China).
- Molchanov, O.A.; Schekotov, A.Ju.; Hattori, K.; Solovieva, M.S.; Fedorov, E.N.; Chebrov, V.; Saltikov, D.; Hayakawa, M., Near-seismic effects in ULF fields and seismo-acoustic emission : statistics and explanation, *European Geosciences Union 1<sup>st</sup> General Assembly (CD-ROM)*, April 25-30, 2004, Nice, France
- Gotoh, K., Hayakawa, M., Smirnova, N., and Hattori, K., Fractal analysis of seismogenic ULF emissions, *Physics and Chemistry of the Earth*, 29, 419-424, 2004.
- M. Hayakawa, K. Hattori, A. P. Nickolaenko, and L. M. Rabinowicz, Relation between the energy of earthquake swarm and the Hurst exponent of random variations of the geomagnetic field, *Physics and Chemistry of the Earth*, 29, 379-387, 2004.
- Hattori, K., Takahashi, I., Yoshino, C., Isezaki, N., Iwasaki, H., Harada, M., Kawabata, K., Kopytenko, E., Kopytenko, Y., Maltsev, P., Korepanov, V., Molchanov, O., Hayakawa, M., Noda, Y., Nagao, T., Uyeda, S., ULF geomagnetic field measurements in Japan and some recent results associated with Iwateken Nairiku Hokubu Earthquake in 1998, *Physics and Chemistry of the Earth.*, 29, 481-494, 2004.
- Ismaguilov, V., Kopytenko, Y., Hattori, K., and Hayakawa, M., 2003: Variations of phase velocity and gradient values of ULF geomagnetic disturbances connected with the Izu strong earthquake, *Natural Hazards and Earth System Sciences*, **3**, 211-215, 2003.
- Kopytenko, Y., Ismaguilov, V., Molchanov, O., Kopytenko, E., Voronov, P., Hattori, K., Voronov, P., Hayakawa M., Zaitsev, D., Investigation of ULF magnetic disturbances in Japan during acive seismic period, *Journal of Atmospheric Electricity*, 22, 3, 207-215, 2002.
- Uyeda, S., Hayakawa, M., Nagao, T., Molchanov, O., Hattori, K., Orihara, Y., Gotoh, K., Akinaga, Y., Tanaka, H., Electric and Magnetic phenomena observed before the volcano-seismic activity 2000 in the Izu islands region, Japan, *Proceedings of the US National Academy of Science*, 99, 7352-7355, 2002.
- Gorbatikov, A., Molchanov, O., Hayakawa, Uyeda, S., M., Hattori, K., Nagao, T., Tanaka, H., Nikolaev V., Maltsev, P., Acoustic emission possibly related to earthquakes, observed at Matsushiro, Japan and its implications, *Seismo Electromagnetics: Lithosphere-Atmosphere-Ionosphere coupling*, edited by M. Hayakawa and O. Molchanov, 1-10, Terrapub, 2002.
- Kopytenko, Y., Ismaguilov, V., Hattori, K., Voronov, P., Hayakawa M., Molchanov, O., Kopytenko, E., Zaitsev, D., Monitoring of the ULF electromagnetic disturbances at the Station network before EQ in seismic zones of Izu and Chiba Peninsulas, *Seismo-Electromagnetics: Lithosphere-Atmosphere- Ionosphere coupling*, edited by M. Hayakawa and O. Molchanov, 11-18, Terrapub, 2002.
- Yagova, N., Yumoto, K., Pilipenko, V., Hattori, K., Nagao, T., Saita, K., Local variations of geomagnetic ULF noises and their relation to seismic activity, *Seismo Electromagnetics: Lithosphere-Atmosphere-Ionosphere coupling*, edited by M. Hayakawa and O. Molchanov, 45-48, Terrapub, 2002.
- Uyeda, S., Nagao, T., Hattori, K., Noda, Y., Hayakawa, M., Miyaki, K., Molchanov, O., Gladyshev, V., Baransky, L., Schekotov, A., Belyaev, G., Fedorov, E., Pokhotelov, O., Andreevsky, S., Rozhnoi, A., Khabazin, Y., Gorbatikov, A., Gordeev, E., Chevrov, V., Lutikov, A., Yunga, S., Kasarev, G., Surkov, V., Russian-Japanese complex geophysical observatory in Kamchatka for monitoring of phenomena connected with seismic activity, *Seismo Electromagnetics: Lithosphere-Atmosphere-Ionosphere coupling*, edited by M. Hayakawa and O. Molchanov, 413-420, Terrapub, 2002.
- Gladyshev, V., Baransky, L., Schekotov, A., G., Fedorov, E., Pokhotelov, O., Andreevsky, S., Rozhnoi, A., Khabazin, Belyaev, G., Gorbatikov, A., Gordeev, E., Chevrov, V., Sinitsin, V., Gorbatikov, A., Gordeev, E., Chevrov, V., Molchanov, O., Hayakawa, M., Uyeda, S., Nagao, T., Hattori, K., Noda, Y., "Some preliminary results of seismo-electromagnetic research at complex geophysical observatory, Kamchatka, *Seismo Electromagnetics: Lithosphere-Atmosphere-Ionosphere coupling*, edited by M. Hayakawa and O. Molchanov, 413-420, Terrapub, 2002

Ismaguilov, V., Kopytenko Y., Hattori, K., Voronov, M., Molchanov, O., Hayakawa, M., ULF magnetic emissions connected with under sea bottom earthquakes, *Journal of Natural Hazards and Earth System Science*, 1, 23-31, 2001.

8. 本研究に関連して理化学研究所と宇宙開発事業団の共催で以下のワークショップとシンポジウムが開催された RIKEN/NASADA Workshop on Seismo-ULF emissions, December 1998, Tokyo. RIKEN/NASADA Symposium on the Recent Aspects of Electromagnetic Variations Related with Earthquakes, December 1999, Wako.

なお、平成 12 年 9 月には宇宙開発事業団主催で International Workshop on Seismo Electromagnetics, 2000 of NASDA, September 2000, Tokyo が開催された。

平成 10 年 9 月：カムチャツカ半島パラトゥンカに地球電磁気（地電流）観測点設置

平成 10 年 11 月：ロシア・サンクトペテルブルグ IZMIRAN およびモスクワ Institute of Physics of the Earth にてそれぞれ Dr. Yuri Kopytenko, および Dr. Oleg Molchanov らと研究打ち合わせ。

平成 11 年 9 月：パラトゥンカ観測点保守点検

平成 12 年 8 月：カムチャツカ観測点保守点検

平成 13 年 11 月：Pavel Maltsev 氏(Lviv Center of Space Research, Ukraine)が研究打ち合わせのため千葉大滞在。

平成 14 年 7～8 月：Dr. Vareli Ismaguilov, Andrei Radilov 氏(IZMIRAN, Russia)が研究打ち合わせのため千葉大滞在。

平成 16 年 1 2 月：Pavel Maltsev 氏(Lviv Center of Space Research, Ukraine)が研究打ち合わせのため千葉大訪問。

平成 17 年 3 月：Dr. Yuri Kopytenko(IZMIRAN, Russia)および Dr. Oleg Molchanov (Institute of Physics of the Earth) らと研究打ち合わせ。

平成 19 年 3 月：Dr. Oleg Molchanov (Institute of Physics of the Earth) らと研究打ち合わせ（於電気通信大学）。

平成 19 年 11 月：Dr. Yuri Kopytenko(IZMIRAN, Russia)および Dr. Oleg Molchanov (Institute of Physics of the Earth) らと研究打ち合わせ（於インドネシア・バンドン）。

平成 20 年 3 月：Dr. Koerpanov(Lviv Center of Space Research, Ukraine)と研究打ち合わせ（於相模原）

平成 21 年 4 月：Dr. Koerpanov(Lviv Center of Space Research, Ukraine)および Dr. Molchanov (Institute of Physics of the Earth) と研究打ち合わせ（於ウィーン）

1. 台湾における電磁気学的アプローチによる地震活動監視に関する研究

2. 大学院理学研究科／教授／服部克己

3. 台湾国立中央大学／教授／劉正彦

台湾国立中央大学／教授／蔡龍治

台湾国立中正大学／教授／謝秋霽

大漢技術学院／教授／許華紀

4. 2001～

5. 地震に先行する電磁気現象の物理機構を解明し、台湾で地震活動の電磁気学的な監視および短期的な予測を実現する。

6. 理化学研究所（2002 年まで）

交流協会（2004-2005）

科研費海外学術B（2007-2009 年）

NiCT 国際共同研究助成金（2007-2009 年）

7. Liu, J. Y., Chen, Y. I., C. H. Chen, Liu, C. Y., Chen, C. Y., Nishihashi, M., Li, J. Z., Xia, Y. Q., Oyama, K. I., Hattori, K., and Lin, C. H., Seismo-ionospheric Anomalies Observed before the 12 May 2008 Mw7.9 Wenchuan Earthquake, *J. Geophys. Res.*, doi:10.1029 /2008JA013698, 2009.

Nishihashi, M., Hattori, K., Jhuang, H. K., and Liu, J. Y., Spatial distribution of ionospheric GPS-TEC and NmF2 anomalies during the 1999 Chi-Chi and Chia-Yi Earthquakes in Taiwan, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, 20, 779-789, 2009.

Chen, C. H., Liu, J. Y., Yang, W. H., Yen, H. Y., Hattori, K., Lin, C. R., and Yeh, Y. H., SMART analysis of geomagnetic data observed in Taiwan, *Physics and Chemistry of the Earth*, 34, 350-359, 2009.

Yumoto, K., Ikemoto, S., Cardinal, M. G., Hayakawa, M., Hattori, K., Liu, J. Y., Saroso, S., Ruhimat, M., Husni, M., Widarto, D., Ramos, E., D. McNamara, R. E. Otadoy, G. Yumul, R. Ebor, and N. Servando, A new ULF wave analysis for Seismo-Electromagnetics using CPMN/MAGDAS data, *Physics and Chemistry of the Earth*, 34, 360-356, 2009.

Saroso, S., Liu, J. Y., Hattori, K., and Chen, C. H., Ionospheric GPS TEC Anomalies and M>5.9 Earthquakes in Indonesia during 1993-2002, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, 19, 481-488, 2008.

- J.Y. Liu, C.H. Chen, Y.I. Chen, H.Y. Yen, K. Hattori and K. Yumoto, Seismo-geomagnetic anomalies and  $M \geq 5.0$  earthquakes observed in Taiwan during 1988–2001, *Physics and Chemistry of the Earth*, 31, 215-222, 2006.
- M. Nishihashi, Y. Suzuki, K. Hattori, J-Y. Liu, D. Widarto, Analysis of GPS-TEC variation associated with large earthquakes using GAMIT, Abstract of Asia Oceania Geosciences Society 3<sup>rd</sup> Annual Meeting, CDROM, July 2006, Singapore..
- Katsumi Hattori, ULF geomagnetic changes associated with large earthquakes, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, Vol.15, No.3, 329-360, 2004
- Masashi Kamogawa, Jann-Yenq Liu, Hironobu Fujiwara, Yu-Jung Chuo, Yi-Ben Tsai, Katsumi Hattori, Toshiyasu Nagao, Seiya Uyeda, and Yoshi-Hiko Ohtsuki, Atmospheric field variations before the March 31, 2002 M6.8 earthquake in Taiwan, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, Vol.15, 397-412, September 2004.
- Hattori, K., Takahashi, I., Yoshino, C., Nagao, T., Liu, J.Y., Shieh, C.F., ULF Geomagnetic and Geopotential Measurement at Chia-Yi, Taiwan, *Journal of Atmospheric Electricity*, 22, 3, 217-222, 2002.
- K. Hattori, Y. Akinaga, K.Gotoh, C. Yoshino, Y. Kopytenko, M. Hayakawa, K. Yumoto, T. Nagao, S. Uyeda, J. Y. Liu, C. H. Shieh, ULF Geomagnetic Anomalies Associated with Earthquakes and Observations in Taiwan, 2002 International Workshop on Earthquake Precursor iSTEP \_integrated Search for Taiwan Earthquake Precursors, p.96–97, 2002.
- Y. Akinaga, M. Hayakawa, J.Y. Liu, K. Yumoto, K. Hattori, “A precursory signature for Chi-Chi earthquake in Taiwan”, *Natural Hazards and Earth System Sciences*, 1, 33-36, 2001.

8. 嘉義に電磁気観測点を設置(2001年9月)

花蓮でのフィールド調査 (2002年3月)

国立中央大学に開催された“integrated Search for Taiwan Earthquake Precursors” (2002 International Workshop on Earthquake Precursor iSTEP )にて招待講演を行う(2002年6月)

花蓮に磁気観測点設置(2002年9月)

富里に電磁気観測点設置(2003年3月)

国立中央大学劉正彦教授、蔡義本教授千葉大学に來学し、講演を行う (2003年12月)

国立中央大学にて international workshop を開催し、講演を行う (2004年3月)

国立東華大学に観測点移設 (2004年10月)

国立中央大学にて研究打ち合わせ (2004年12月)

国立中央大学・陳界宏氏が千葉大学に來日し共同研究実施 (2005年3~4月)

国立中央大学にて研究打ち合わせ (2005年6月)

国立中央大学にて打ち合わせ (2005年11月)

国立東華大学に気象測器設置 (2005年12月)

国立中央大学にて international workshop (2006年3月)

国立中央大学・劉正彦教授が千葉大を訪問し、千葉大学の観測点を視察するとともにセミナーを実施。また、共同研究打ち合わせを実施。

大学院博士課程学生・西橋政秀が国立中央大学に滞在し、地震と電離圏擾乱との関連性に関する共同研究を実施 (2006年8-9月)

嘉義、花蓮、中央大の観測機器のメンテナンス実施 (2007年5月)

花蓮地区の観測点のメンテナンス実施 (2007年7月)

劉正彦教授が千葉大を訪問し、研究打ち合わせ (2007年7月)

花蓮地区の観測点のメンテナンス実施 (2007年8-9月)

インドネシアバンドンの会議にて劉教授と研究打ち合わせ (2007年11月)

2008年3月 相模原にて国際ワークショップ (IWSLEC2008) を開催。劉教授、蔡教授を招聘し、と研究打ち合わせを実施

2008年6月 台湾国立中央大にて研究打ち合わせ実施。

2008年7月 蔡教授のグループと衛星ビーコン監視用アンテナ設置のための予備観測 (阿蘇)

2008年8月 米国で開催されたURSI会議で蔡教授とアンテナ設置日程等について議論。劉教授とも研究打ち合わせを実施。

2008年10月 蔡教授のお招きで研究室の学部生 (紺晋平) が台湾中央大で開催された電離層スクールに参加。

2008年7月 蔡教授のグループが衛星ビーコン監視用アンテナを阿蘇に設置

2008年11月 つくばにて国際ワークショップ (IWSLEC-2) を開催。劉教授を招聘し議論を行った。

2009年1月 蔡教授と沖縄に衛星ビーコン監視用アンテナ設置のためのフィールドサーベイ  
 2009年2月 台湾の観測点メンテナンス実施。  
 2009年3月に千葉にて国際ワークショップVESTOを開催。インドネシアからBMGのSunaryo博士が参加。台湾から劉正彦教授、中国から黄清華教授も参加し、地震電磁気学について議論した。  
 2009年5月 蔡教授グループと沖縄・瀬底島にて衛星ビーコン監視用アンテナ設置のための予備観測実施  
 2009年6月シンガポールで国際ワークショップ (IWSLEC-3) を開催。劉正彦教授と研究打ち合わせ。BMKGの Prih Harijadi博士、Sunarjo博士、LIPIのHeri Hariyono博士、中国から黄清華教授も参加した。  
 2009年7月 蔡教授グループと沖縄・瀬底島にて衛星ビーコン監視用アンテナ設置  
 2009年9月 蔡教授グループが沖縄アンテナメンテナンス  
 2009年11月 スマトラ島プキティンギにてインドネシア気象庁主催の会議にて台湾の劉正彦教授と研究打ち合わせ

1. 地上観測および衛星観測による地球物理学（地球電磁気学）的な地殻活動の監視とそのモデリング
2. 大学院理学研究科／教授／服部克巳
3. イタリア国立環境解析研究所／教授／Vincenzo Lepenna  
 イタリア国立環境解析研究所／研究員／Luciano Telesca  
 イタリア国立環境解析研究所／研究員／Nicola Pergola
4. 2003～
5. 地上や衛星で観測された地球物理データに対して、地震に先行する現象を抽出するための統計的な信号処理法の開発を行う。その物理機構を解明し、地震活動の電磁気学的な監視および短期的な予測を実現する。
6. 2003–2004年 日伊2国間共同研究（研究代表者：電通大・早川教授）  
 2006年 中部電力基礎技術研究所助成金  
 2007年 日本学術振興会2国間セミナー 対イタリアCNR  
 2007年 千葉大学国際会議助成金  
 2007–2009年 NiCT 国際共同研究助成金
7. Hattori, K., and Telesca, L., Editors, Electromagnetics in Seismic and Volcanic Areas (Proceedings of Bilateral Seminar Italy-Japan, July 25-27, 2007), Yuubunsysa Pub., pp. 226, 2008  
Telesca, L., Lapenna, V., Macchiato, M., and Hattori, K., Investigating non-uniform scaling behavior in Ultra Low Frequency (ULF) earthquake-related geomagnetic signals, Earth and Planet. Sci. Lett., 268, 219-224, 2008.  
L. Telesca and K. Hattori, Non-uniform scaling behavior in Ultra Low Frequency (ULF) earthquake-related geomagnetic signals, Physica A, 384, 522-528, 2007.  
G. Colangelo, K. Hattori, V. Lapenna, L. Telesca, and C. Yoshino, Extraction of extreme events in geoelectrical signals; an application in a seismic area of Japan, Extended Abstracts of 2005 International Workshop on Seismo Electromagnetics, pp. 93-96, 15-17 March, 2005, Chofu, Tokyo.  
Luciano Telesca, Gerardo Colangelo, Katsumi Hattori, Vincenzo Lapenna, Principal component analysis of geoelectrical signals measured in the seismically active area of Basilicata Region (southern Italy), Natural Hazards and Earth System Sciences, 4, 663-667, 2004  
服部克巳, 吉野千恵, 芹田亜矢, 高橋一郎, Geraldo Colangelo, Luchiano Telesca, ULF帯の電磁場データの主成分解析, 電気学会研究会資料, EMT-04-101, p65-69, 2004年9月
8. 2003年10～11月 イタリア国立環境解析研究所を訪問し、イタリア南部で観測された地電位差データをの主成分解析に関する共同研究を実施した。  
 2004年6月 イタリア国立環境解析研究所の Dr. Collanero が千葉大学に滞在し、地磁気・地電位差データの解析手法に関する共同研究を実施した  
 2005年3月 イタリア国立環境解析研究所の Lepenna 教授、Telesca 博士、Collanero 博士が来日した際、今後の研究打ちあわせを行った。  
 2005年5月 ウィーンにて学会時に地滑り関連研究の打ち合わせ。  
 2006年7月 イタリア国立環境解析研究所を訪問し、Seminarを行う。地震電磁気関連および地滑り関連の共同研究打ちあわせを実施。  
 2006年10月 イタリア国立環境解析研究所の Telesca 博士が約2週間千葉大に滞在し、日本で観測されたデータにフラクタル/マ

ルチフラクタル解析を実施。

2006年10-11月 イタリア国立環境解析研究所を訪問し、地滑り関連の共同研究を実施。ポテンザ郊外の Picerno に合同観測点を設置。

2007年7月 イタリア国立環境解析研究所を訪問し、Seminar を行う。震電磁気関連および地滑り関連の共同研究打ち合わせを実施。

2007年7月 千葉で日伊2国間セミナーを3日間開催。地震・火山地帯の電磁気研究について討論。衛星データの解析についても共同研究を実施することで合意。

2008年4月 イタリア国立環境解析研究所を訪問し、Seminar を行う。斜面崩壊関連、衛星データ解析関連の研究打ち合わせを行う

2008年11月 東京・国連大学にて斜面崩壊関連の国際シンポジウムにて斜面崩壊関連および火山活動監視のための MODIS、AVHRR 等の衛星データ解析について打ち合わせを実施。

2009年4月 ウィーンにて学会時に衛星関連と地滑り関連の研究の打ち合わせ。

1. インドネシアにおける地殻活動の短期予測を目的とした地震電磁気現象観測プログラム
2. 大学院理学研究科/教授/服部克巳
3. インドネシア科学院ジオテクノロジーセンター (LIPI) /主任研究員/Djedi Widarto(ジェディ ウィダルト)  
インドネシア科学院ジオテクノロジーセンター (LIPI) /主任研究員/Eddy Gaffar(エディ ガファー)  
インドネシア国立宇宙庁(LAPAN)/主任研究員/Sarmoko Saroso (サロモコ サロソ)  
インドネシア気象庁(BMKG)/Prih Hariyadi 他
4. 2005～
5. 地震に先行する電磁気現象の物理機構を解明し、インドネシアにおける地震活動の電磁気学的な監視および短期的な予測を実現する。
6. 日本学術振興会2国間共同研究 対インドネシア科学院 (2005～2007年度まで)  
科研費海外学術B (2007-2009年)  
NiCT 国際共同研究助成金 (2007年-2009年)  
日本学術振興会若手研究者交流支援事業－東アジア首脳会議参加国からの招へい (2009-2010)
7. Yumoto, K., Ikemoto, S., Cardinal, M. G., Hayakawa, M., Hattori, K., Liu, J. Y., Saroso, S., Ruhimat, M., Husni, M., Widarto, D., Ramos, E., D. McNamara, R. E. Otadoy, G. Yumul, R. Ebor, and N. Servando, A new ULF wave analysis for Seismo-Electromagnetics using CPMN/MAGDAS data, *Physics and Chemistry of the Earth*, 34, 360-356, 2009.  
Widarto, D., Mogi, T., Tanaka, Y., Nagao, T., Hattori, K., and Uyeda, S., Co-seismic Geoelectrical Potential Changes Associated with the June 4, 2000's Earthquake (Mw 7.9) in Bengkulu, Indonesia, *Physics and Chemistry of the Earth*, 34, 373-379, 2009.  
Saroso, S., Hattori, K., Ishikawa, H., Ida, Y., Shirogane, R., Hayakawa, M., Yumoto, K., Shiokawa, K., and Nishihashi, M., ULF geomagnetic anomalous changes possibly associated with 2004-2005 Sumatra earthquakes, *Physics and Chemistry of the Earth*, 34, 343-349, 2009.  
Saroso, S., Liu, J. Y., Hattori, K., and Chen, C. H., Ionospheric GPS TEC Anomalies and M>5.9 Earthquakes in Indonesia during 1993-2002, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, 19, 481-488, 2008.  
S. Saroso, J. Y. Liu, K. Hattori, and C. H. Chen, Ionospheric GPS TEC Anomalies and M>5.9 Earthquakes in Indonesia during 1993-2002, *Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences*, 2007 (accepted).  
K. Hattori, "Space and Lithosphere Environment Changes in Indonesia", Preparatory Meeting for the 7th Science Council of Asia (SCA) Conference, March 20, 2007, Science Council of Japan, Tokyo.  
K. Yumoto and K. Hattori, Environmental Changes in Space and Lithosphere in Indonesia, 21st Pacific Science Congress, no abstract, June 12-18, 2007, Okinawa Convention Center, Okinawa, Japan.  
M. Nishihashi, Y. Suzuki, K. Hattori, J-Y. Liu, D. Widarto, Analysis of GPS-TEC variation associated with large earthquakes using GAMIT, Abstract of Asia Oceania Geosciences Society 3rd Annual Meeting, CDROM, July 2006, Singapore..  
Katsumi Hattori, Ichiro Takahashi, Masashi Hayakawa, Nobuhiro Isezaki, Kivohumi Yumoto, Toshiyasu Nagao, and Seiya Uyeda, RIKEN's Int'l Frontier Research on Earthquakes 1997-2002 and Recent Progress on ULF Geomagnetic Changes Associated with Crustal Activity, Mini-Workshop on Seismo Electromagnetic Precursors of Earthquakes: State of the Art and Research Progress, LIPI Campus, Bandung, Indonesia, September 5, 2005  
Djedi Widarto, T. Mogi, Y. Tanaka, T. Nagao, K. Hattori, JY. Liu, and S. Uyeda, Seismo-Electromagnetic signatures possibly associated with the earthquakes in southern Sumatra, Indonesia, , Mini-Workshop on Seismo Electromagnetic Precursors of Earthquakes: State of the Art and Research Progress, LIPI Campus, Bandung, Indonesia, September 5, 2005  
Sarmoko Saroso1, K. Hattori2, J. Y. Liu3, M. Hayakawa4, K. Shiokawa5, and K. Yumoto6, ULF Geomagnetic Anomaly and TEC Perturbation Related With the Aceh Earthquake of December 26, 2004, Mini-Workshop on Seismo Electromagnetic Precursors of Earthquakes: State of the Art and Research Progress, LIPI Campus, Bandung, Indonesia, September 5, 2005.
8. 2005年9月 インドネシア LIPI にてミニワークショップを開催。スマトラ島南東部 LIWA 観測点等を視察。

2006年1～3月 インドネシア LIPI のWidarto 博士および Hananto 研究員、LAPAN の Saroso 博士が千葉大学に滞在し、地震電磁気観測、データ解析に関する共同研究を実施した

2006年3月 インドネシア・スマトラ島 LIWA に地震電磁気観測点設置および今後の共同研究について議論した

2006年10月 LIPI の副理事長一行および学術振興会が千葉大学・研究室を視察。

2006年11月 インドネシア・バンドンにてミニワークショップを共催。その後、観測点ジャワ島西部のスカブミ郊外の候補地 (PLRatu・BMG) を視察。

2007年2～3月 インドネシア LIPI のWidarto 博士および Dadan 研究員、LAPAN の Saroso 博士が千葉大学に滞在し、地震電磁気観測、データ解析に関する共同研究を実施。

2007年3月 インドネシア・ジャワ島 PLRatu に地球電磁気観測点を設置。一部作業未完 (電源に問題あり)。

2007年4月 インドネシア・ジャワ島 PLRatu の観測点の電源関連の改良を実施。

2007年9月 インドネシア・スマトラ島パダン郊外コッタバンの電磁気観測点設置。

2007年11月 バンドンにて国際ワークショップ(IWSEP2007)を開催。コッタバンのメンテナンスを実施。地滑り地区やVLF観測機器設置場所を視察。

2008年2～3月 インドネシア LIPI のWidarto 博士および Gaffar 研究員、LAPAN の Saroso 博士が千葉大学に滞在し、地震電磁気観測、データ解析に関する共同研究を実施。

2008年3月 LIPI副長官のHeri Hariyono博士とインドネシア気象庁のMastrjono博士が廣井理学研究科長を表敬訪問

2008年3月 相模原にて国際ワークショップ (IWSLEC2008) を開催。LIPIのWidarto博士、LAPANのSarmoko 博士、BMGのMastrjono博士、LIPIのHeri Hariyono博士を招聘し、講演と議論を行った。

2008年3月 BMGコタブミ観測点視察および気象庁打ち合わせ。

2008年5月 BMKGコタブミ観測点で電磁環境調査

2008年8月 スマトラ島コタブミ地球電磁気観測点設置。気象庁にて研究打ち合わせ。

2008年10月 ジャワ島PLRatuの観測点のメンテナンス。気象庁にて研究打ち合わせ

2008年10月 Febti FebrinaniさんをINPEX財団奨学生 (研究生) として研究室に加わる

2008年10-11月 インドネシア地球物理会議 (HAGI) にて招待講演。その後PLRatu観測点メンテナンス実施。

2008年11月 つくばにて国際ワークショップ (IWSLEC-2) を開催。LAPANのSarmoko博士、BMKGのHusni 博士、Subarjo博士を招聘し、講演と議論を行った。

2009年2月 Widarto博士が研究室滞在。セミナー開催。

2009年3月 コタブミ観測点メンテナンス。気象庁にて研究打ち合わせ

2009年3月に千葉にて国際ワークショップVESTOを開催。インドネシアからBMGのSunaryo博士が参加。台湾から劉正彦教授、中国から黄清華教授も参加し、地震電磁気学について議論した

2009年4月 Febti FebrinaniさんをINPEX財団奨学生 (修士学生) として研究室に加わる

2009年6月シンガポールで国際ワークショップ (IWSLEC-3) を開催。BMKGのPrih Harijadi博士、Sunarjo博士、LIPIのHeri Hariyono博士を招聘し議論を行った。台湾から劉正彦教授、中国から黄清華教授も参加した。

2009年7-8月 ジャワ島PLRatuの観測点近傍にて電磁気探査 (斜面崩壊および電氣的構造推定のため)

2009年10月Widarto博士が研究室に滞在。Seminar開催

2009年11月 スマトラ島プキティンギにて気象庁主催の会議出席 (台湾の劉正彦教授も出席)

2009年12月 Gaffar研究員が研究室滞在。研究打ち合わせ実施。

2010年2月 LIPI、LAPAN、BMKGと研究打ち合わせ。

1. 有限群の表現論におけるブラウアーブロック理論
2. 大学院理学研究科/教授/越谷 重夫
3. イギリス/アバディーン大学/Markus Linckelmann, Radha Kessar
4. 平成15年度～
5. 代数学の分野に「有限個の物の置き換え」を掛け算と考える 群 という概念がある。その群を 行列の言葉で表現した群の表現論における創始者ブラウアーによるブロックの理論の研究。
6. 科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 平成17-19年度)  
ドイツ・オーバーヴォルフアッハ数学研究所  
科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 平成20-22年度)
7. 論文題目 The indecomposability of a certain bimodule given by the Brauer construction, 著者 S. Koshitani and M.



Linckelmann、

学術雑誌 *Journal of Algebra* Vol.285 (2005), 726—729 に掲載発表された。

8. 平成 17 年 3 月 17 日—4 月 18 日, 6 月 10 日—6 月 19 日, スイス連邦工科大学ローザンヌに滞在し、同じ時期に、ここに滞在していた M.Linckelmann と共同研究を行った。

平成 17 年 11 月 20 日—12 月 1 日 M.Linckelmann が勤務している上記のイギリス・アバディーン大学を訪問して、共同研究を行った。

また、この共同研究者 M.Linckelmann が組織委員の一人となっている、平成 18 年 3 月 26 日—4 月 1 日ドイツ・オーバーヴォルフアッハ数学研究所で開かれた研究集会で招待講演発表をした。

平成 18 年 11 月 19 日—11 月 29 日 M.Linckelmann が勤務している上記のイギリス・アバディーン大学を訪問して、共同研究を行った。

また、この共同研究者 M.Linckelmann が組織委員の一人となっている、平成 19 年 5 月 27 日—6 月 2 日フランス・中央数学研究所（ルミニエ数学研究所）で開かれた研究集会で招待講演発表をした。

平成 19 年 8 月 21 日—9 月 1 日 M.Linckelmann を千葉大学に招待して、千葉大学および京都大学数理解析研究所で共同研究を行った。

平成 20 年 12 月 7 日—12 月 15 日 M.Linckelmann および R.Kessar が勤務している上記のイギリス・アバディーン大学を訪問して、共同研究を行った。

平成 21 年 3 月 22 日—28 日 この共同研究者 M.Linckelmann が組織委員の一人となっているドイツ・オーバーヴォルフアッハ数学研究所で開かれた研究集会で招待講演発表をした。

平成 21 年 6 月 8 日—15 日この共同研究者 R.Kessar 主催したイギリス・スカイ島研究所を訪問して、招待講演および共同研究を行った。

平成 21 年 10 月 18 日—24 日この共同研究者 R.Kessar も出席したフランス・中央数学研究所（ルミニエ数学研究所）で開かれた研究集会に招待され共同研究を行った。

平成 21 年 6 月 16—19 日,12 月 17 日—25 日 M.Linckelmann および R.Kessar が勤務している上記のイギリス・アバディーン大学を訪問して、共同研究を行った。

1. 有限群の表現論における森田同値のブロック理論
2. 理学部／教授／越谷 重夫
3. アメリカ合衆国／イリノイ大学シカゴ校／Morton E. Harris
4. 平成 14 年度～
5. 代数学の分野に「有限個の物の置き換え」を掛け算と考える 群 という概念がある。その群を 行列の言葉で表現した群の表現論における森田同値と呼ばれている同値関係の理論についての研究。
6. 科学研究費補助金（基盤研究（C）平成 17—19 年度）
7. 論文題目 An extension of Watanabe's theorem for the Isaacs-Horimoto-Watanabe corresponding blocks, 著者 M. E. Harris and S. Koshitani,  
学術雑誌 *Journal of Algebra* 296(2006), 96—109 に掲載された。
8. 平成 17 年 9 月 23 日—10 月 3 日上記アメリカ・イリノイ大学シカゴ校およびシカゴ大学に滞在して、M.E. Harris と共同研究を行った。  
平成 19 年 3 月 7 日—3 月 24 日上記アメリカ・イリノイ大学シカゴ校およびシカゴ大学に滞在して、M.E. Harris と共同研究を行った。

1. 有限群の表現論におけるブロック理論
2. 理学部／教授／越谷 重夫
3. ドイツ連邦共和国／イエーナ大学／Burkhard Külshammer
4. 平成 7 年度～
5. 代数学の分野に「有限個の物の置き換え」を掛け算と考える 群 という概念がある。その群を 行列の言葉で表現した群の表現論におけるブロック理論についての研究。
6. 科学研究費補助金（基盤研究（C）平成 17—19 年度）  
イエーナ大学数学研究所
7. なし
8. 平成 18 年 4 月 1 日—4 月 8 日, 平成 21 年 4 月 6—13 日上記イエーナ大学に滞在して、B.Külshammer と共同研究を行った。

<p>1. 有限群の表現論におけるフロベニウス・シューア理論</p> <p>2. 理学部/教授/越谷 重夫</p> <p>3. アイルランド共和国/アイルランド国立大学メイヌース/John Murray</p> <p>4. 平成 18 年度～</p> <p>5. 代数学の分野に「有限個の物の置き換え」を掛け算と考える 群 という概念がある。その群を 行列の言葉で表現した群の表現論におけるフロベニウス・シューア理論についての研究。</p> <p>6. 科学研究費補助金（基盤研究（C）平成 17-19 年度，平成 20-22 年度） アイルランド国立大学メイヌース数学教室</p> <p>7. なし</p> <p>8. 平成 18 年 4 月 8 日-16 日アイルランド国立大学メイヌースに滞在して、J.Murray と共同研究を行った。 平成 20 年 8 月 18 日-23 日 J.Murray が組織委員長である研究集会に招待され招待講演を行った。</p>
<p>1. 有限群の表現論におけるブロック理論</p> <p>2. 理学部/教授/越谷 重夫</p> <p>3. ドイツ連邦共和国/アーヘン工科大学/Juergen Mueller, Felix Noeske</p> <p>4. 平成 18 年度～</p> <p>5. 代数学の分野に「有限個の物の置き換え」を掛け算と考える 群 という概念がある。その群を 行列の言葉で表現した群の表現論におけるブロック理論についての研究。</p> <p>6. 科学研究費補助金（基盤研究（C）平成 17-19 年度，20-22 年度） アーヘン工科大学</p> <p>7. なし</p> <p>8. 平成 21 年 3 月 28 日-4 月 6 日，平成 21 年 6 月 19 日-23 日，平成 21 年 12 月 9 日-16 日に、アーヘン工科大学に滞在して、J.Mueller, F.Noeske と共同研究を行った。</p>
<p>1. 金属ナノ粒子触媒の触媒活性サイトのみを抽出したその場活性構造変換の観測</p> <p>2. 大学院理学研究科/准教授/泉 康雄</p> <p>3. フランス/CNRS Jean Pierre Candy博士/Eric Roisin博士</p> <p>4. 平成 17 年度～</p> <p>5. ナノテクノロジーの大きな応用例として、環境・エネルギーに関するナノ粒子の触媒作用が期待されている。本研究は、表面に固定した白金等のナノ粒子にすずを添加することで数桁選択水素化活性が向上する理由、および固体高分子型燃料電池電極の三相界面での作用機構を解明する。表面白金原子に対するすずの影響（サイト構造、電子状態）等を調べるが、実際に触媒作用に関わる白金原子を高エネルギー分解能分光により抽出した上で、その場構造変換を追跡している点に独創性がある。</p> <p>6. 科研費・基盤研究B、基盤研究C、住友財団基礎科学研究助成による。</p> <p>7. (a) "State-sensitive Monitoring of Active and Promoter Sites. Applications to Au/titania and Pt-Sn/silica Catalysts by XAFS Combined with X-ray Fluorescence Spectrometry", <u>Yasuo Izumi</u>, Dishad Masih, Jean-Pierre Candy, Hideaki Yoshitake, Yasuko Terada, Hajime Tanida, and Tomoya Uruga, "<i>X-Ray Absorption Fine Structure 13th International Conference</i>", Hedman, B., Pianetta, P. Eds., AIP Conference Proceedings Vol. 882, 588 – 590 (2007).</p> <p>(b) "X-ray Absorption Fine Structure Combined with X-ray Fluorescence Spectrometry. Part 18. Tin Site Structure of Pt-Sn Catalyst", <u>Yasuo Izumi</u>, Dilshad Masih, Eric Roisin, Jean-Pierre Candy, Hajime Tanida, and Tomoya Uruga, <i>Materials Letters</i>, <b>61(18)</b>, 3833 – 3836 (2007).</p> <p>(c) "X-ray Absorption Fine Structure Combined with X-ray Fluorescence Spectrometry. Improvement of Spectral Resolution at the Absorption Edges of 9 – 29 keV (Correction)", <u>Yasuo Izumi</u>, Hiroyasu Nagamori, Fumitaka Kiyotaki, Dilshad Masih, Taketoshi Minato, Eric Roisin, Jean-Pierre Candy, Hajime Tanida, and Tomoya Uruga, <i>Analytical Chemistry</i>, <b>78(6)</b>, 2075 (2006).</p> <p>(d) "X-ray Absorption Fine Structure Combined with X-ray Fluorescence Spectrometry. Improvement of Spectral Resolution at the Absorption Edges of 9 – 29 keV", <u>Yasuo Izumi</u>, Hiroyasu Nagamori, Fumitaka Kiyotaki, Dilshad Masih, Taketoshi Minato, Eric Roisin, Jean-Pierre Candy, Hajime Tanida, and Tomoya Uruga, <i>Analytical Chemistry</i>, <b>77(21)</b>, 6969 – 6975 (2005).</p>

(e) "ナノ粒子構造解析技術の開発"

泉 康雄、ポリファイル、**45(528)**, 46 - 49 (2008).

(f) "Synthesis and Site Structure of a Replica Platinum-Carbon Composite Formed Utilizing Ordered Mesopores of Aluminum-MCM-41 for Catalysis in Fuel Cells",

Kazuki Oka, Yoshiyuki Shibata, Takaomi Itoi, and Yasuo Izumi, *Journal Physical Chemistry C*, **114(2)**, 1260 - 1267 (2010).

8. なし

1. すず修飾金属ナノ粒子触媒のファインケミカル合成への応用とその場活性構造変換の観測

2. 大学院理学研究科/准教授/泉 康雄

3. イタリア/CNR Laura Sordelli博士/Matteo Giudotti博士/Rinaldo Psaro博士

4. 平成16年度から

5. ナノテクノロジーの大きな応用例として、環境・エネルギーに関するナノ粒子の触媒作用が期待されている。本研究は、表面に固定した白金等のナノ粒子にすずを添加することでファインケミカル合成への応用を開拓する。具体的には不飽和カルボニル中間体選択水素化を行なう。見出したファインケミカル合成触媒のその場活性構造を表面金属サイトおよびすずサイトについて調べ、選択触媒の支配原理を明らかにする。

6. 科研費・基盤研究B, 基盤研究Cによる。

7. (a) "Tin K-edge XAFS of Pt-Sn/MgO Catalyst Combined with the X-ray Fluorescence Spectrometry",

Yasuo Izumi, Laura Sordelli, Sandro Recchia, Rinaldo Psaro, and Dilshad Masih, *SPring-8 User Experiment Report 2004A*, **13**, 169 (2004).

(b) "Tin K-edge XAFS study of supported Ir-Sn/SiO<sub>2</sub> bimetallic catalysts for selective propane dehydrogenation",

Yasuo Izumi, Dilshad Masih, Laura Sordelli, Matteo Guidotti, and Rinaldo Psaro, *Photon Factory Activity Report 2005*, **23B**, 38 (2006).

(c) "Tin K-edge XAFS study of supported Ir-Sn/SiO<sub>2</sub> catalysts utilizing brilliant X-ray beam at 29 keV from PF-AR",

Yasuo Izumi, Kazushi Konishi, Laura Sordelli, Matteo Guidotti, and Rinaldo Psaro, *Photon Factory Activity Report 2006*, **24B**, 16 (2007).

(d) "Characterization of supported Ir-Sn nanoparticles catalysts for dehydrogenation of propane",

A. Gallo, L. Sordelli, G. Peli, L. Garlaschelli, R. Della Pergola, V. Dal Santo, R. Psaro, Y. Izumi, *XXXV Congress of Inorg. Chem.*, (2007), 9月, Milano (イタリア国内学会) .

(e) "ナノ粒子構造解析技術の開発"

泉 康雄、ポリファイル、**45(528)**, 46 - 49 (2008).

8. なし

1. 均一メソポーラス反応場を利用した可視光応答触媒の開拓

2. 大学院理学研究科/准教授/泉 康雄

3. 中華人民共和国/Henan University of Science and Technology/Shuge Peng准教授

4. 平成17年度から

5. ナノ粒子およびメソ空間は、ナノテクノロジーにおける別個の重点開発項目として盛んに研究が行なわれている。本研究では規則性メソ空間を反応場とする光触媒合成を試み、可視光応答環境触媒の開拓を行なっている。

6. 科研費・基盤研究B, C, 光科学技術研究振興財団・研究助成による。Shuge Peng准教授の途日および千葉での滞在費用はHenan University of Science and Technologyの経費負担によった (2008. 2. 25~2008. 8. 24、千葉大で研究)

7. (a) "Site Structure and Photocatalytic Role of Sulfur or Nitrogen-Doped Titanium Oxide with Uniform Mesopores under Visible Light",

Yasuo Izumi, Takaomi Itoi, Shuge Peng, Kazuki Oka, and Yoshiyuki Shibata, *Journal of Physical Chemistry C*, **113(16)**, 6706 - 6718 (2009).

(b) "Site Structure and Photocatalytic Role of Sulfur or Nitrogen-Doped Titanium Oxide with Uniform Mesopores under Visible Light." (Erratum),

Yasuo Izumi, Takaomi Itoi, Shuge Peng, Kazuki Oka, and Yoshiyuki Shibata, *Journal of Physical Chemistry C*, **113(29)**, 12926 (2009).

(c) "Specific Oxidative Dehydrogenation Reaction Mechanism over Vanadium(IV/III) Sites in TiO<sub>2</sub> with Uniform Mesopores

<p>under Visible Light", <u>Yasuo Izumi</u>, Kazushi Konishi, and Hideaki Yoshitake, <i>Bulletin of Chemical Society of Japan</i>, <b>81(10)</b>, 1241 – 1249 (2008).</p> <p>(d) "X-ray Absorption Fine Structure Combined with X-ray Fluorescence Spectroscopy. Monitoring of Vanadium Site in Mesoporous Titania Excited under Visible Light by Selective Detection of the Vanadium <math>K\beta_{5,2}</math> Fluorescence", <u>Yasuo Izumi</u>, Kazushi Konishi, Diaa Mosbah Obaid, Tomohisa Miyajima, and Hideaki Yoshitake, <i>Analytical Chemistry</i>, <b>79(18)</b>, 6933 – 6940 (2007).</p> <p>(e) "Photo-oxidation over mesoporous V-TiO<sub>2</sub> catalyst under visible light monitored by vanadium <math>K\beta_{5,2}</math>-selecting XANES spectroscopy", <u>Yasuo Izumi</u>, Kazushi Konishi, Tomohisa Miyajima, and Hideaki Yoshitake, <i>Materials Letters</i>, <b>62(6/7)</b>, 861 – 864 (2008).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 鉄砒素系高温超伝導体の電子状態に関する理論的研究</p> <p>2. 理学研究科／教授／太田 幸則</p> <p>3. ドイツ／Karlsruhe Institute of Technology／Robert Eder</p> <p>4. 平成20年度～</p> <p>5. ごく最近発見され大きな注目を集めている鉄砒素系高温超伝導体の電子状態を、自己エネルギー汎関数理論 (SFT) に基づく変分クラスター近似 (VCA) により計算する。これにより、この系の電子状態に対する電子相関の効果が明らかにされ、その結果、超伝導発現機構の解明に向け大きな貢献を成すことができる。</p> <p>6. JST-TRIP、科学研究費補助金 (基盤研究C、特定領域研究)</p> <p>7. 論文準備中</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 銅酸化物高温超伝導を中心とした強相関電子系に関する計算物理学的研究</p> <p>2. 理学研究科／教授／太田 幸則</p> <p>3. ドイツ／Karlsruhe Institute of Technology／Robert Eder</p> <p>4. 平成15年度～</p> <p>5. 銅酸化物高温超伝導体、遷移金属酸化物、有機導体などに代表されるいわゆる強相関電子系に関して、その低エネルギー磁気及び電荷励起を記述する基本的な電子構造の理解と、観測される特異な電子輸送現象の起源の解明を目指し、ハバード模型やt-J模型等の理論的及び計算物理学的研究を行っている。</p> <p>6. 科学研究費補助金 (基盤研究C、特定領域研究A)</p> <p>7. 論文準備中</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 強相関電子系の特異な電子状態に関する計算物理学的研究</p> <p>2. 理学研究科／教授／太田 幸則</p> <p>3. ドイツ／Leibniz Institute for Solid State and Materials Research Dresden／Satoshi Nishimoto</p> <p>4. 平成13年度～</p> <p>5. 遷移金属酸化物や有機導体などを含む低次元強相関電子系の電子状態を、密度行列繰り込み群の方法など最近進歩の著しい計算物理学的手法を用いて、理論的観点から明らかにする。特に、電荷秩序相転移や異方的超伝導といった新規な量子相転移について、具体的物質に関する実験事実を説明できる理論の構築を目指す。</p> <p>6. 科学研究費補助金 (基盤研究C、特定領域研究)</p> <p>7. Disorder and Superconductivity in Doped Semiconductor Nanotubes, T. Shirakawa, S. Nishimoto, Y. Ohta, and H. Fukuyama, <i>J. Phys.: Conf. Ser.</i> <b>150</b>, 052238/1-4 (2009).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 研究プロジェクト 有機無機ハイブリッド錯体のデザイン、構造と気体吸着性</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー イタリア/ミラノ大学 /L. Carlucci 博士</p> <p>4. 実施期間 平成16年から</p> <p>5. プロジェクト概要 構造的柔軟性がある有機無機ハイブリッド錯体結晶の精密構造解析と気体取り込み機構の解明を行う。</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤S</p> <p>7. おもな成果 博士課程大学院学生 3 週間イタリアに派遣した。金子克美、加納博文、ほか大学院学生 3 名がミラノ大学訪問。</p>

<p>J.Amer.Chem.Soc. および J.Phys. Chem.に論文を発表。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト 中性子回折を用いた疎水性ナノ空間への水の濃縮機構</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー イギリス/ケント大学 /J.Dore 教授 (物理) および Rutherford-Appelton Laboratory</p> <p>4. 実施期間 平成14年から</p> <p>5. プロジェクト概要 シングルウォールカーボンナノチューブ中での水の構造</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤 S</p> <p>7. おもな成果 大場友則がフランス グルノーブルにて中性子実験を実施。 金子克美と J.Dore 教授がオーストリアでの水と氷の国際会議にて研究成果の討議。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項 共同実験、相互交流</p>
<p>1. 研究プロジェクト</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー BAT 研究所/P. Branton 博士</p> <p>4. 実施期間 平成19年から</p> <p>5. プロジェクト概要 千葉大学で開発したメソ孔のある活性炭のタバコ用フィルターへの応用の基礎研究</p> <p>6. 資金・助成など BAT からの委託研究費</p> <p>7. おもな成果 千葉大学の金子克美および Song 博士がイギリスの BAT 訪問。 Branton 博士が2日間滞在討論。 2008年開催の国際会議への発表申し込み終了。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト カーボンアエロジェル薄膜の構造と物性</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー U S A / M I T / M. Dresselhaus 教授 (応用物理学)</p> <p>4. 実施期間 平成19年</p> <p>5. プロジェクト概要 カーボンアエロジェル薄膜の簡易調製法の開発をおこない、その膜の構造と特性異常に関する研究</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤 S</p> <p>7. おもな成果 学術誌に投稿準備中。ボストンにおける MRS 会議で討議実施。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト 新機能化カーボンの開発</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー U S A / ペンシルバニア州立大学 /L. Radvic 教授 (材料科学)</p> <p>4. 実施期間 平成14年から</p> <p>5. プロジェクト概要 新機能化カーボンの電子状態と気体吸着特性の検討</p> <p>6. 資金・助成など 学術振興会の短期研究員経費 チリ政府学術支援経費 Radvic 教授のポスドク経費</p> <p>7. おもな成果 特殊なカーボンの電子スピン共鳴による局所的構造の研究実験の継続。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項 4月に金子克美がペンシルバニア州立大学訪問。 Radvic 教授がチリで指導する大学院学生が平成20年2月から半年滞在共同研究。</p>
<p>1. 研究プロジェクト ナノ空間中での極低温ヘリウム挙動</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー U S A / ペンシルバニア州立大学 /M. Cole 教授 (材料科学)</p> <p>4. 実施期間 平成19年から</p> <p>5. プロジェクト概要 極低温におけるカーボンナノスペース中でのヘリウムの異常挙動を理論的にも明らかにする。</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤 S</p> <p>7. おもな成果 4月に金子克美がペンシルバニア州立大学訪問し検討。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト 単層カーボンナノホーン上に貴金属を分散した系の触媒活性</p>

<p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー ノースカロライナ州立大学 / K.E.Gubbins 教授 (化学工学)</p> <p>4. 実施期間 平成13年から</p> <p>5. プロジェクト概要 統計力学シミュレーション、X線回折、小角散乱 触媒活性の検討</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤S</p> <p>7. おもな成果 分子シミュレーションでの理論的背景の解明 金子克美と Gubbins 教授が AIChE 会議で研究討議</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト カーボンナノホーンの触媒活性</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー カルフォルニア大学 (リバーサイド) /E. Bekyarove 博士 (化学)</p> <p>4. 実施期間 平成 15年から</p> <p>5. プロジェクト概要 ナノホーンへのナノ Pd 粒子の分散担持法の開発 水素と酸素間反応活性の検討開始</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤S</p> <p>7. おもな成果 Carbon誌に論文掲載決定</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト ナノカーボンによるメタンからの水素発生反応</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー USA/ミシガン大学 / C.Lastoskie 教授(化学環境科学)</p> <p>4. 実施期間 平成19年から</p> <p>5. プロジェクト概要 メタンからの水素発生反応の触媒について実験と分子シミュレーションによる研究</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤S</p> <p>7. おもな成果 10月に金子克美がミシガン大学に3日間滞在し、研究内容の討議。共同論文を <i>Adsorption</i> にて印刷中。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト 炭素表面での分子吸着機構</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー タイワンランド大学/ D.D. Do 教授 (化学工学)</p> <p>4. 実施期間 平成 19年から</p> <p>5. プロジェクト概要 アルコール分子と炭素表面との相互作用に関する基礎研究</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤S</p> <p>7. おもな成果 発表準備中</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. メソ細孔での分子集合体</p> <p>2. 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 韓国/韓国先端科学技術大学/Roo 教授</p> <p>4. 平成13年から</p> <p>5. 特別な構造を有するメソ空間中での分子挙動の特異性の解明</p> <p>6. 委任経理金、ナノカーボン</p> <p>7. 細孔構造モデルによる分子シミュレーションとの対応</p> <p>8. 論文発表 <i>Adsorption properties of templated mesoporous carbon (CMK-1) for nitrogen and supercritical methane-Experiment and GCMC simulation</i>, T.,Ohkubo, J. Miyawaki, K. Kaneko, R. Ryoo, N.A.Seaton, <i>J. Phys. Chem.</i>106,6523-6528 (2002).</p>
<p>1. 研究プロジェクト メタンの貯蔵と転換のためのナノ構造型カーボンモノリス</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/金子克美</p> <p>3. 海外におけるパートナー スペイン/アリカンテ大学 /Rodriguez-Reinoso 教授(無機化学)</p> <p>4. 実施期間 平成21年から</p> <p>5. プロジェクト概要 実用性レベルのメタン貯蔵用の熱伝導性に優れたナノ構造型カーボンモノリスおよびメタンからの単層カーボンナノチューブと水素創製用のナノ構造型カーボンモノリス触媒の開発を目指す研究</p>

<p>6. 資金・助成など JST 戦略的国際科学技術協力推進事業「日本-スペイン研究交流」</p> <p>7. おもな成果 2010年1月にアリカンテ大 Rodoriguez-Reinoso 教授が来訪、および3月にメンバーの加納教授がアリカンテ大訪問により、研究の現状報告と研究計画打ち合わせを行った。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 研究プロジェクト 構造柔軟性層状肺高分子錯体による選択的二酸化炭素分離</p> <p>2. 本学における研究代表者 理学部/教授/加納 博文</p> <p>3. 海外におけるパートナー USA/ミシガン大学 / C.Lastoskie 教授(化学環境科学)</p> <p>4. 実施期間 平成21年から</p> <p>5. プロジェクト概要 構造柔軟性層状肺高分子錯体による二酸化炭素吸着に対する実験と分子シミュレーションによる研究</p> <p>6. 資金・助成など 科学研究費基盤 B</p> <p>7. おもな成果 メールベースで研究内容の討議。共同研究プロジェクトの提案。</p> <p>8. そのほか特記すべき事項</p>
<p>1. 殻模型モンテカルロ法による原子核の準位密度の理論的研究</p> <p>2. 理学研究科/教授/中田 仁</p> <p>3. アメリカ合衆国/YALE UNIVERSITY/Yoram Alhassid</p> <p>4. 平成6年度～</p> <p>5. 原子核の準位密度は、低エネルギー核反応において重要な物理量であり原子炉における反応等の計算や宇宙における元素合成を理解する上でも重要なインプットとなるが、これを精度良く再現し、また予言することは困難であった。</p> <p>我々は、殻模型モンテカルロ法を用いた核準位密度の計算法を提案し、これを鉄・ニッケル領域の原子核に応用して、微視的な立場から核準位密度の実験データを精度良く再現できることを示した。現在は、より精密で幅広い核準位度の物理の解明を目指した研究を進めている。</p> <p>6. 科学研究費 (奨励研究A, 基盤研究B)</p> <p>7.</p> <p>① H. Nakada and Y. Alhassid, Physical Review Letters 79, pp.2939-2942 (1997)</p> <p>② H. Nakada and Y. Alhassid, Physics Letters B436, pp.231-237 (1998)</p> <p>③ Y. Alhassid, S. Liu and H. Nakada, Physical Review Letters 83, pp.4265-4268 (1999)</p> <p>④ Y. Alhassid, G. F. Bertsch, S. Liu and H. Nakada, Physical Review Letters 84, pp.4313-4316 (2000)</p> <p>⑤ H. Nakada and Y. Alhassid, Nuclear Physics A718, pp.691c-693c (2003)</p> <p>⑥ Y. Alhassid, S. Liu and H. Nakada, Physical Review Letters 99, 162504 (2007)</p> <p>⑦ Y. Alhassid, L.Fang and H. Nakada, Physical Review Letters 101, 082501 (2008)</p> <p>⑧ H. Nakada and Y. Alhassid, Physical Review C 78, 051304(R) (2008)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. ブラックホール降着流と状態遷移の理論シミュレーション研究</p> <p>2. 理学研究科/教授/松元 亮治</p> <p>3. 米国/ハーバード大学/prof. Ramesh Narayan</p> <p>4. 平成21年度～</p> <p>5. ブラックホール候補天体の状態遷移過程を理論解析および磁気流体シミュレーション結果に基づいて解明する。</p> <p>6. 科学研究費補助金 (基盤研究B)</p> <p>7. なし</p> <p>8. 平成21年度に理学研究科所属の日本学術振興会特別研究員が Narayan 博士の研究室に滞在して共同研究を行った。</p>
<p>1. ブラックホール降着流の理論シミュレーション研究</p> <p>2. 理学研究科/教授/松元 亮治</p> <p>3. 中国/上海天文台/prof. Feng Yuan</p> <p>4. 平成20年度～</p> <p>5. ブラックホール降着流の構造、時間変動、輻射スペクトル等を理論解析および磁気流体シミュレーション結果に基づいて解明する。</p> <p>6. 日本学術振興会二国間交流事業、科学研究費補助金 (基盤研究B)</p> <p>7. なし</p> <p>8. 平成20年度に相互訪問を行い、セミナー、研究打ち合わせ等を実施した。</p>

1. 降着天体における準周期振動の理論シミュレーション研究
2. 理学研究科／教授／松元 亮治
3. スウェーデン／Goteborg University／prof. Marek Abramowicz
4. 平成18年度～
5. ブラックホール候補天体などで観測される準周期振動 (Quasi-Periodic Oscillation: QPO) の起源を理論モデル及び磁気流体シミュレーション結果に基づいて解明する。
6. 科学研究費補助金 (特定領域研究、基盤研究B)、基礎物理学研究所
7. なし
8. 松元が議長となって京都大学基礎物理学研究所にて国際ワークショップ” Quasi-Periodic Oscillations and Time Variabilities of Accretion Flows” を開催。M. Abramowicz 教授を日本に招聘して研究打ち合わせを行った (2007年11月18日～23日)。

## 大学院医学研究院

1. 非侵襲的ヒト軸索イオンチャネル機能検査法の開発
2. 大学院医学研究院／教授／桑原 聡
3. 英国／国立神経研究所 Sobell Department of Neurophysiology／Hugh Bostock 教授  
豪州／Sydney 大学生命科学部神経生理学／David Burke 教授
4. 平成12年度～
5. ・ヒト末梢神経軸索における Na、Kチャネル機能を非侵襲的に評価する技術の開発
6. 平成17—18年度文部科学省科学研究費、平成20—22年度文部科学省科学研究費上原生命科学記念財団 (2000)
7. 主な成果
  - 1) Nakata M, Kuwabara S, Kanai K, Misawa S, Tamura N, Sawai S, Hattori T, Bostock H. Distal excitability changes in motor axons in amyotrophic lateral sclerosis. Clin Neurophysiol. 2006 Jul;117(7):1444-8.
  - 2) Kanai K, Kuwabara S, Misawa S, Tamura N, Ogawara K, Nakata M, Sawai S, Hattori T, Bostock H. Altered axonal excitability properties in amyotrophic lateral sclerosis: impaired potassium channel function related to disease stage. Brain. 2006 Apr;129(Pt 4):953-62.
  - 3) Kuwabara S, Bostock H, Ogawara K, Sung JY, Misawa S, Kitano Y, Mizobuchi K, Lin CS, Hattori T. Excitability properties of human median axons measured at the motor point. Muscle Nerve. 2004 Feb;29(2):227-33.
  - 4) Sung JY, Kuwabara S, Kaji R, Ogawara K, Mori M, Kanai K, Nodera H, Hattori T, Bostock H. Threshold electrotonus in chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy: correlation with clinical profiles. Muscle Nerve. 2004 Jan;29(1):28-37.
  - 5) Kuwabara S, Bostock H, Ogawara K, Sung JY, Kanai K, Mori M, Hattori T, Burke D. The refractory period of transmission is impaired in axonal Guillain-Barré syndrome. Muscle Nerve. 2003 Dec;28(6):683-9.
  - 6) Kuwabara S, Ogawara K, Sung JY, Mori M, Kanai K, Hattori T, Yuki N, Lin CS, Burke D, Bostock H. Differences in membrane properties of axonal and demyelinating Guillain-Barresyndromes. Ann Neurol 2002;52:180-7.
  - 7) Kuwabara S, Kanai K, Sung JY, Ogawara K, Hattori T, Burke D, Bostock H. Axonal hyperpolarization associated with acute hypokalemia: multiple excitability measurements as indicators of the membrane potential of human axons. Muscle Nerve. 2002;26:283-7.
  - 8) Cappelen-Smith C, Lin CS, Kuwabara S, Burke D. Conduction block during and after ischaemia in chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy. Brain. 2002;125:1850-8.
  - 9) Lin CS, Kuwabara S, Cappelen-Smith C, Burke D. Responses of human sensory and motor axons to the release of ischaemia and to hyperpolarizing currents. J Physiol 2002;541:1025-39
  - 10) Kuwabara S, Cappelen-Smith C, Lin CS, Mogyoros I, Burke D. Effects of voluntary activity on the excitability of motor axons in the peroneal nerve. Muscle Nerve 2002;25:176-84.
  - 11) Lin CS, Mogyoros I, Kuwabara S, Cappelen-Smith C, Burke D. Differences in responses of cutaneous afferents in the human median and sural nerves to ischemia. Muscle Nerve. 2001 Nov;24(11):1503-9.
  - 12) Cappelen-Smith C, Kuwabara S, Lin CS, Mogyoros I, Burke D. Membrane properties in chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy. Brain. 2001 Dec;124(Pt 12):2439-47.



<p>8. なし</p> <p>1. 実験的バセドウ病モデルの開発と本モデルを用いた新たな治療法の開発</p> <p>2. 大学院医学研究院／准教授／下条直樹 同／教授／河野陽一</p> <p>3. アメリカ合衆国／Ohio University. Orthopathic Medicine／Prof. LD Kohn イタリア／Universita' degli Studi "G. Annunzio" -Chieti, Faculty of Medicine and Surgery／Prof. Giorgio Napolitano</p> <p>4. 平成7年度～</p> <p>5. 実験的バセドウ病モデルの作成とそのシステムを用いたバセドウ病治療法の開発</p> <p>6. 文科省科研費</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) <u>Shimojo N, Kohno Y, Yamaguchi K, Kikuoka S, Hoshioka A, Niimi H, Hirai A, Tamura Y, Saito Y, Kohn LD, Tahara K.</u> Induction of Graves-like disease in mice by immunization with fibroblasts transfected with the thyrotropin receptor and a class II molecule. Proc Natl Acad Sci U S A. 1996;93(20):11074-9.</p> <p>2) <u>Kohn LD, Suzuki K, Hoffman WH, Tombaccini D, Marcocci C, Shimojo N, Watanabe Y, Amino N, Cho BY, Kohno Y, Hirai A, Tahara K.</u> Characterization of monoclonal thyroid-stimulating and thyrotropin binding-inhibiting autoantibodies from a Hashimoto's patient whose children had intrauterine and neonatal thyroid disease. J Clin Endocrinol Metab. 1997;82(12):3998-4009.</p> <p>3) <u>Yamaguchi K, Shimojo N, Kikuoka S, Hoshioka A, Hirai A, Tahara K, Kohn LD, Kohno Y, Niimi H.</u> Genetic control of anti-thyrotropin receptor antibody generation in H-2K mice immunized with thyrotropin receptor-transfected fibroblasts. J Clin Endocrinol Metab. 1997;82(12):4266-9.</p> <p>4) <u>Kikuoka S, Shimojo N, Yamaguchi KI, Watanabe Y, Hoshioka A, Hirai A, Saito Y, Tahara K, Kohn LD, Maruyama N, Kohno Y, Niimi H.</u> The formation of thyrotropin receptor (TSHR) antibodies in a Graves' animal model requires the N-terminal segment of the TSHR extracellular domain. Endocrinology. 1998;139(4):1891-8.</p> <p>5) <u>Shimojo N, Arima T, Yamaguchi K, Kikuoka S, Kohn LD, Kohno Y.</u> A novel mouse model of Graves' disease: implications for a role of aberrant MHC class II expression in its pathogenesis. Int Rev Immunol. 2000;19(6):619-31.</p> <p>6) <u>Kohn LD, Napolitano G, Singer DS, Molteni M, Scorza R, Shimojo N, Kohno Y, Mozes E, Nakazato M, Ulianich L, Chung HK, Matoba H, Saunier B, Suzuki K, Schuppert F, Saji M.</u> Graves' disease: a host defense mechanism gone awry. Int Rev Immunol. 2000;19(6):633-64</p> <p>7) Arima T, Shimojo N, Yamaguchi K, Tomiita T, Kohn LD, Kohno Y. Enhancement of experimental Graves' disease by intranasal administration of a T cell epitope of the thyrotropin receptor. Clin Immunol. 2007 in press.</p>
<p>8. なし</p> <p>1. 中国産植物由来化合物からの抗癌剤候補の探索および日本と中国の環境水の水質比較調査</p> <p>2. 大学院医学研究院環境影響生化学・講師・喜多和子</p> <p>3. 中国河北医科大学基礎医学院・副教授・董 玫</p> <p>4. 平成17年4月から継続</p> <p>5. 河北医科大学で中国産植物から抽出した種々の化合物を供与されている。その中から癌細胞の増殖を抑制する化合物を探索する。すでにいくつかの候補化合物を見出しており、これらの化合物については、癌細胞増殖抑制のメカニズムの研究も行う。</p> <p>6. 五峯ライフサイエンス国際基金・日中医学協会の助成を受けている。</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Dong M, Chen S, Kita K, Ichimura Y, Guo W, Lu S, Sugaya S, Hiwasa T, Takiguchi M, Mori N, Kashima A, Morimura K, Hirota M, Suzuki N. Anti-proliferative and apoptosis-inducible activity of Sarcodonin G from <i>Sarcodon scabrosus</i> in HeLa cells. Int. J. Oncol., 2009, 34:201-7.</p> <p>2) シアタン誘導体を含有する抗癌剤、特願 2006-108075 号</p>
<p>8. なし</p> <p>1. 尿中クレアチニン補正の妥当性に関する研究</p> <p>2. 大学院医学研究院環境労働衛生学／准教授／諏訪園 靖</p> <p>3. Sweden／Karolinska Institutet, The Institute of Environmental Medicine, Unit of Metals and Health／Agneta Åkesson, Marie Vahter</p> <p>4. 平成15年度～</p>

<p>5. 尿中の測定物質は発汗等による尿濃縮の変動を補正するため、一般に尿中クレアチニン濃度による補正が行われている。一方、尿中クレアチニン濃度は性、年齢、体格等により影響を受けることが知られているため、その程度と補正の妥当性について、比重補正による値と比較して検討する。さらに、スウェーデンの 2 地域、日本、バングラデシュ等多国間での調査結果の検討を行う。</p> <p>6. Yoshida Scholarship Foundation</p> <p>7. Suwazono Y, Åkesson A, Alfvén T, Kobayashi E, Nogawa K, Nakagawa H, Järup L, Vahter M. The effect of factors related to urinary creatinine excretion when evaluating creatinine adjusted urinary cadmium concentrations. 10th International Congress of Toxicology. Tampere Finland. Toxicology and Applied Pharmacology, 197: 189, 2004.</p> <p>Suwazono Y, Åkesson A, Alfvén T, Järup L, Vahter M. Creatinine versus specific gravity adjusted urinary cadmium concentrations. Biomarkers. 2005; 10:117-126</p> <p>8. なし</p>
<p>1. ベンチマークドーズ法によるカドミウムの健康影響の評価</p> <p>2. 大学院医学研究院環境労働衛生学/准教授/諏訪園 靖</p> <p>3. Sweden/Karolinska Institutet, The Institute of Environmental Medicine/Agneta Åkesson, Marie Vahter, Annette Engström</p> <p>4. 平成 16 年度～</p> <p>5. 中毒学の分野で近年注目されている Hybrid approach 法をヒトでの疫学調査に応用し、腎影響指標、骨代謝指標について、ベンチマークドーズを算出し、そのリスクを評価する。</p> <p>6. The Swedish Research Council/Medicine, Institute of Environmental Medicine, Yoshida Scholarship Foundation, Medical Faculty of Lund University, Karolinska Institutet, The National Swedish Environmental Protection Agency, The Swedish Foundation for Strategic and Environmental Research, The Swedish Society of Medicine, Primary Care, R&amp;D, County Council of Skåne, The Swedish Research Council for Environment, Agricultural Sciences and Spatial Planning, Swedish Council for Working Life and Social Research and the European Union.</p> <p>7. Suwazono Y, Uetani M, Åkesson A. Estimation of benchmark dose for Cd-induced renal effects in humans. Reverse Brain Drain Project (RBD-NSTDA) Special Conference. Cadmium in Food and Human Health &amp; Technologies for Environmental Restoration and Rehabilitation. Phitsanulok, Thailand, 2010.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 精子形成細胞特異的解糖系酵素遺伝子の発現解析：マウスにおける初期発現と毒性学的研究</p> <p>2. 大学院医学研究院環境生命医学/教授/森 千里</p> <p>3. アメリカ合衆国/U.S. National Institute of Environmental Health Science, National Institutes of Health (NIH) /Noriko Nakamura &amp; Edward M. Eddy</p> <p>4. 平成 19 年度～</p> <p>5. 精子形成細胞に特異的に発現している解糖系酵素遺伝子の発現や機能解析を行っている。また、成長段階におけるマウス精巣から Laser capture microdissection system により生殖細胞を単離し、初期の精子形成(first wave)における生殖細胞特異的な解糖系酵素遺伝子群の発現パターンの解析を行っている。生殖細胞における生殖細胞特異的遺伝子発現を解析し、その発現に及ぼす影響について調査し、得られた知見を臨床医学に応用することを目指している。</p> <p>6. 委任経理金</p> <p>7. Nakamura N, Miranda-Vizuete A, Miki K, Mori C and Eddy EM. Cleavage of disulfide bonds in mouse spermatogenic cell type 1 hexokinase isozyme is associated with increased hexokinase activity and initiation of sperm motility. Biology of Reproduction. 79:537-545, 2008</p> <p>Nakamura N, Shibata H, O' Brien DA., Mori C and Eddy EM. Spermatogenic cell-specific type 1 hexokinase is predominant hexokinase in sperm. Molecular Reproduction and Development. 75:632-640, 2008</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 侵害刺激伝達における NAAG peptidase の役割</p> <p>2. 大学院医学研究院麻酔学/准教授/山本達郎</p> <p>3. USA /Department of Biology, Georgetown University/Professor Joseph H Neale</p> <p>4. 平成 13 年度～ 現在も進行中である</p> <p>5. NAAG peptidase は N-acetyl-aspartyl-glutamate (NAAG) の分解に関与する酵素である。NAAG は、哺乳動物の中枢神経系に豊富にある神経伝達物質である。NAAG は、glutamate の受容体の 1 つである mGluR3 の作動薬として作用することが報告されているが、その生体内での役割に関しては不明な点が多い。Prof Neale は、新規に多くの NAAG peptidase の選択的阻害薬を合成している。我々</p>

の研究室では、in vivo にてその効果、特に鎮痛効果を検討することにより NAAG の侵害刺激伝達における役割を検討している。現在の結果では、NAAG peptidase 阻害薬を全身投与・炎症が発症している末梢への局所投与・髄腔内投与にて、大きな副作用無しに良好な鎮痛効果が得られることを確認している。

6. 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) Neuropathic Pain の新しい治療法の開発 電気生理学的手法・形態学的手法・行動学的手法など多角的な研究手法を用いて、基盤研究(B)(2) 骨転移による疼痛治療の新しい治療指針の作成、基盤研究(B)(2) N-acetyl-aspartyl-glutamate の生体内での役割、にて補助を受けている。

7. 第10回世界疼痛学会(2002)にて発表した。

Yamamoto T, Kozikowski A, Wroblewski J, Neale J, Antinociceptive effects of newly developed NAAG peptidase inhibitors, ZJ-11 and ZJ-17, in the rat formalin test and rat neuropathic pain model. 10th World Congress on Pain (San Diego, August 17-22)

33rd Annual Meeting of the American Society for Neurochemistry (2002)にて以下の発表を行った。

Probing the functions of NAAG via NAAG peptidases and mGluR3.

Ramadan E., Bacich\* D.J., O'Keefe\* D.S., Heston\* W.D.W, Bukhari N., Wegorzewska I., Bzdega T., Wroblewska B, Wroblewski J.T, Kozikowski A., Yamamoto# T., Neale J.T: Georgetown University, \*The Cleveland Clinic and #Chiba University

33回北米神経科学会(2003年)にて発表した

Hirasawa S, Yamamoto T, Wroblewska B, Zhang J, Kozikowski A, Wroblewski J, Neale JH Antinociceptive Effects of Newly Developed N-Acetyl-Aspartyl-Glutamate (NAAG) peptidase inhibitors, ZJ-11 and ZJ-17, in the Rat Formalin Test and in the Rat Neuropathic Pain Model.

35回北米神経科学会(2005年)にて発表した

Saito O, Aoe T, Kozikowski A, Jayaprakash S, Yamamoto T, Neale JH,  $\alpha$ -2 and N-acetylaspartylglutamate, but not NMDA antagonist, produce an analgesic effect in mouse model of bone cancer pain.

発表した論文

Kozikowski, A.P., Zhang, J., Nan, F., Petukhov, P.A., Grajkowska, E., Wroblewski, J.T., Yamamoto, T., Bzdega, T., Wroblewska, B., Neale, J.H. (2004) Synthesis of urea-based inhibitors as active site probes of glutamate carboxypeptidase II: efficacy as analgesic agents. J. Med. Chem. 47, 1729-38

Yamamoto, T., Hirasawa, S., Wroblewska, B., Grajkowska, E., Zhou, J., Kozikowski, A., Wroblewski, J., Neale, J.H. (2004) Antinociceptive Effects of N-Acetylaspartylglutamate (NAAG) peptidase inhibitors ZJ-11, ZJ-17 and ZJ-43 in the rat formalin test and in the rat neuropathic pain model. Eur. J. Neurosci. 20, 483-494.

Saito, O., Aoe, T., Kozikowski, A., Sarva, J., Neale, J.H., Yamamoto, T. (2006) Ketamine and N-acetylaspartylglutamate peptidase inhibitor exert analgesia in the bone cancer pain. Can J Anesth in press

8. なし

1. 新しいオピオイド性鎮痛薬の開発

2. 大学院医学研究院/講師/下山 恵美

3. アメリカ合衆国/コーネル大学医学部/Hazel H. Szeto

4. 平成10年度～

5. ミューオピオイド受容体に対する選択性の高いオピオイドなど、新しいオピオイドペプチドの鎮痛作用特性及び副作用を検討し、現在臨床で用いられているオピオイド性鎮痛薬に比べさらに有用なものをみいだす。また、これらの特性をもたらし機序を解明し、今後のオピオイド性鎮痛薬の開発のターゲットを明らかにする。

6. 厚生労働省科学研究費補助金

7. a) Shimoyama M, Shimoyama N, Zhao G-M, Schiller PW, Szeto HH, Antinociceptive and respiratory effects of intrathecal H-Tyr-D-Arg-Phe-Lys-Nh2 (DALDA) and [DMT1] DALDA, J Pharmacol Exp Ther 297: 364-371, 2001

b) Zhao, G.-M., Wu, D, Soong, Y., Shimoyama, M., Schiller, P.W. and Szeto, H.H., Profound spinal tolerance after repeated exposure to a highly selective  $\mu$ -opioid peptide agonist: role of  $\delta$ -opioid receptors, J. Pharmacol. Exp. Ther. 302:188-196, 2002

c) Shimoyama, M., Kuwaki, T., Nakamura, A., Fukuda, Y., Shimoyama, N., Schiller, P.W. and Szeto, H.H., Differential respiratory effects of [Dmt<sup>1</sup>]DALDA and morphine, Eur. J. Pharmacol. 511 (2005) 199-206.

8. なし

1. 転写因子 C/EBPa による細胞増殖の抑制と分化の制御に関する研究

2. 大学院医学研究院遺伝子生化学/教授/滝口 正樹

<p>3. アメリカ合衆国／ペーラー医科大学／Gretchen J. Darlington</p> <p>4. 平成10年度～</p> <p>5. C/EBPa は細胞増殖抑制と分化誘導を共役させる転写制御因子である。同因子の遺伝子標的破壊マウスの耳下腺において、分化形質マーカーのアルギナーゼ遺伝子の発現が低下し、増殖マーカーの proliferating cell nuclear antigen (PCNA) の発現が亢進していることを明らかにした。</p> <p>6. 濱口生化学振興財団助成金、山田科学振興財団助成金</p> <p>7. Akiba, T., Kuroiwa, N., Shimizu-Yabe, A., Iwase, K., Hiwasa, T., Yokoe, H., Kubosawa, H., Kageyama, R., Darlington, G.J., Mori, M., Tanzawa, H., and Takiguchi, M. (2002) Expression and regulation of the gene for arginase I in mouse salivary glands : requirement of CCAAT/enhancer-binding protein a for the expression in the parotid gland. J. Biochem. 132, 621-627</p> <p>8. なし</p>
<p>1. フォーカル・アドヒージョン・カイネース (FAK) のフィブロネクチン・マトリックス形成に与える影響</p> <p>2. 大学院医学研究院分子ウイルス学／助手／篠 諭司</p> <p>3. Dusko Ilic</p> <p>4. 平成10年～</p> <p>5. 細胞は、細胞外に存在する基質である細胞外マトリックスと接着斑と呼ばれる部位で接着する。接着斑では、細胞表面のリセプターであるインテグリンと細胞外マトリックスの主要な成分であるフィブロネクチン (FN) が結合する。FAK は接着斑の構造上及び酵素活性上重要なコンポーネントで、FN がインテグリンと結合すると FAK が活性化し細胞内シグナル伝達経路が刺激される。この FN から FAK への経路の逆の FAK から FN マトリックス形成に関与する経路の存在を、FAK ノックアウト・マウスの細胞を用いて世界で初めて明らかにした。</p> <p>6. なし</p> <p>7. J Cell Sci 2004 Jan 15;117(Pt 2):177-87. Epub 2003 Dec 02 FAK promotes organization of fibronectin matrix and fibrillar adhesions. Ilic D, Kovacic B, Johkura K, Schlaepfer DD, Tomasevic N, Han Q, Kim JB, Howerton K, Baumbusch C, Ogiwara N, Streblov DN, Nelson JA, Dazin P, Shino Y, Sasaki K, Damsky CH.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 炎症病巣やがん病態におけるヒアルロン酸とヒアルアドベリンとの分子相互作用</p> <p>2. 大学院医学研究院腫瘍病理学／教授／張ヶ谷 健一</p> <p>3. オーストリア／Boehringer Ingelheim Austria, R&amp;D Vinna／Dr. Frank Hilberg Associate Director</p> <p>4. 平成12年～</p> <p>5. ヒアルアドヘリンの一つ CD44 は膜一回貫通受容体型蛋白質である。ヒアルロン酸が主要なリガンドで細胞外マトリックスとアクチン細胞骨格とのリンカーとしての役割も重要である。最近、炎症病巣やがん浸潤転移における役割が注目され、この役割について臨床研究を通して膨大な報告がされているが、分子メカニズムについては殆ど解析されていない。我々は Dr. Hillberg が作製した CD44 遺伝子欠損マウスを利用して CD44 の急性、慢性の炎症性疾患やがん病態における分子機構を解析し、それらの病態の分子標的治療に展開する。</p> <p>6. 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究(2)15019015 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究(2)16021210 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (B) 15390122</p> <p>7. Kawana H, Karaki H, Higashi M, Miyazaki M, Hilberg F, Kitagawa M, Harigaya K. CD44 Suppresses TLR-Mediated Inflammation. The Journal of Immunology. 180, 4235-4245, 2008</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 遺伝性前立腺癌に関する研究</p> <p>2. 大学院医学研究院泌尿器科学／准教授／鈴木 啓悦</p> <p>3. アメリカ合衆国／ジョーンズ・ホプキンス大学／William B. Isaacs 教授</p> <p>4. 平成11年度～</p> <p>5. 最近ジョーンズ・ホプキンス大学と米国 NIH のグループにより、家系解析を用いて遺伝性前立腺癌(HPC)遺伝子群が第1染色体長腕ほかに存在していることが明らかになった。本研究者は、以前ジョーンズ・ホプキンス大学に在籍し、実際に HPC1 のクローニングプロジェクトに参加してきており、現在も共同研究をすすめている。本研究では日本においては、日本人における遺伝性前立腺癌家系を集めて、遺伝的に前立腺癌になりやすい個人についてスクリーニングすることを目指しており、現在も複数の候補遺伝子の解析が進行している。</p>

<p>6. 第9回日本泌尿器科学会研究助成金, 厚生労働省がん研究助成金, 平成15年度原口記念癌研究助成金</p> <p>7. Wilkens,E.P.,Freije,D.,Xu,J.,Nusskern,D.R.,Suzuki,H., et al.: No evidence for a role of BRCA1 or BRCA2 mutations in Ashkenazi Jewish families with hereditary prostate cancer. <i>Prostate</i> 39: 280-284, 1999.</p> <p>Xu, J., Zheng, S.L., Komiya, A., Mychaleckyj, J., Isaacs, S.D., Faith, D.A., Hu, J.J., Sterling, D., Lange, E., Hawkins, G.A., Turner, A., Ewing, C.M., Johnson, J.R., Suzuki, H., et al.: Germline mutations of the Macrophage Scavenger Receptor 1 gene are associated with prostate cancer risk in Caucasian and African American men. <i>Nat. Genet.</i>, 32: 321-325, 2002.</p> <p>Takahashi, H., Lu, W., Watanabe, M., Furusato, M., Katoh, T., Tsukino, H., Nakao, H., Sudo, A., Suzuki, H., et al.: Ser217Leu polymorphism of the HPC2/ELAC2 gene associated with prostatic cancer in Japanese men. <i>Int. J. Cancer</i>, 107,224-228, 2003.</p> <p>8. 第9回日本泌尿器学会研究助成金 (平成12年度)</p>
<p>1. 樹状細胞を標的としたトキソプラズマ遺伝子ワクチンの開発</p> <p>2. 大学院医学研究院/准教授/青才文江</p> <p>3. キューバ/ペドロ・コウリ熱帯医学研究所 トキソプラズマ国民研究室/助手/Martha Solangel Rodrigues Pena</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. 防御免疫誘導の司令塔である樹状細胞を標的として、難治性細胞内寄生原虫トキソプラズマ症に対する遺伝子ワクチンの開発を進めている。</p> <p>6. 日本学術振興会 科学研究費基盤C、松前国際友好財団 研究助成金</p> <p>7. Aosai F, Rodriguez Pena MS, Mun HS, Fang H, Mitsunaga T, Norose K, Kang HK, Bae YS, Yano A. (2006) <i>Toxoplasma gondii</i>-derived heat shock protein 70 stimulates maturation of murine bone marrow-derived dendritic cells via Toll-like receptor 4. <i>Cell Stress Chaperones</i>. Spring; 11(1):13-22.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. P38 mitogen-activated protein kinase の病態生理的役割</p> <p>2. 大学院医学研究院分子生体制御学/准教授/粕谷善俊</p> <p>3. アメリカ合衆国/カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部薬理部門/Michael Karin 教授</p> <p>4. 平成14年度～</p> <p>5. 細胞外からの刺激を一連の蛋白リン酸化を介して核内の転写機構制御にまで変換・伝達する mitogen-activated protein kinase (MAPK)ファミリーは、細胞の増殖、分化、形質転換、生存、アポトーシス等の様々な細胞生命現象において中心的役割を演ずる重要な酵素である。哺乳類における MAPK には、Extracellular signal-regulated kinase(ERK)、c-Jun N-terminal kinase (JNK)、p38 MAPK の3つが存在する。このうち、p38 MAPK はサイトカイン、UV および浸透圧ショック等の細胞外ストレスにより活性化され、炎症反応や血管構築には不可欠の分子と考えられている。我々は、p38 MAPK の病態下における役割を解明すべく、p38 MAPK ノックアウトマウスを用いて解析している。</p> <p>6. コスメトロジー研究振興財団/基盤研究 C</p> <p>7. ○Takanami-Ohnishi Y, Amano S, Kimura S, Asada S, Utani A, Maruyama M, Osada H, Tsunoda H, Irukayama-Tomobe Y, Goto K, Karin M, Sudo T, and Kasuya Y. : Essential role of p38 mitogen-activated protein kinase in contact hypersensitivity. <i>J. Biol. Chem.</i> 2002, 277, 37896-37903</p> <p>○Sakurai K, Matsuo Y, Sudo T, Takuwa Y, Kimura S and Kasuya Y. Role of p38 mitogen-activated protein kinase in thrombosis. <i>J. Receptor Signal Transduction</i> 2004 24, 283-296</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 動脈硬化の発症と進展に関する分子生物学的研究</p> <p>2. 大学院医学研究院細胞治療学/教授/齋藤 康 大学院医学研究院臨床遺伝子応用医学/教授/武城 英明</p> <p>3. オーストリア/ウィーン大学/Dr. W. J.Schneider</p> <p>4. 平成12年度～</p> <p>5. 動脈硬化の発症と進展について、血管を構築する細胞の機能解析とリポ蛋白の受容体の発現解析から分子生物学的手法を用いて解明する。</p> <p>6. なし</p> <p>7. 1) Zhu Y, Bujo H, Yamazaki H, Hirayama S, Kanaki T, Takahashi K, Shibasaki M, Schneider WJ, and Saito Y. Enhanced expression of LDLR family member LR11 increases migration of smooth muscle cells in vitro. <i>Circulation</i> 2002; 105: 1830-6. 2)</p>

<p>Tanaga K, Bujo H, Zhu Y, Kanaki T, Hirayama S, Takahashi K, Inoue M, Mikami K, Schneider WJ, Saito Y. LRP1B attenuates the migration of smooth muscle cells by reducing membrane localization of urokinase and PDGF receptors. <i>Arterioscler Thromb Vasc Biol.</i> 2004; 24:1422-8</p> <p>Zhu Y, Bujo H, Yamazaki H, Ohwaki K, Jiang M, Hirayama S, Kanaki T, Shibasaki M, Takahashi K, Schneider WJ, Saito Y. LR11, an LDL receptor gene family member, is a novel regulator of smooth muscle cell migration. <i>Circ Res.</i> 2004; 94:752-8</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 動脈硬化の発症と進展に関する分子生物学的研究</p> <p>2. 大学院医学研究院細胞治療学／教授／齋藤 康 臨床遺伝子応用医学／教授／武城 英明</p> <p>3. 米国／エモリ大学／Dr. Lah.JJ</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. アルツハイマー病と LDL 受容体ファミリーの研究</p> <p>6. なし</p> <p>7. Scherzer CR, Offe K, Gearing M, Rees HD, Fang G, Heilman CJ, Schaller C, Bujo H, Levey AI, Lah JJ. Loss of apolipoprotein E receptor LR11 in Alzheimer disease. <i>Arch Neurol.</i> 2004 Aug;61(8):1200-5.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 動脈硬化病変形成における Smad3 シグナルの役割の解明</p> <p>2. 大学院医学研究院／講師／横手幸太郎</p> <p>3. 米国／National Cancer Institute／Anita B. Roberts</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. 多機能サイトカインとして知られる TGF-β の主要細胞内シグナル分子 Smad が動脈硬化病変の形成に及ぼす影響を解明するため、Smad3 分子のノックアウトマウスを用いた血管病変の解析を実施する。</p> <p>6. 平成16、17年度 文部科学省基盤研究 (C) 平成17年度 武田科学振興財団報彰基金研究奨励金</p> <p>7. Kobayashi K, Yokote K, Fujimoto M, Yamashita K, Sakamoto A, Kitahara M, Kawamura H, Maezawa Y, Asaumi S, Tokuhisa T, Mori S, Saito Y. Targeted Disruption of TGF-β-Smad3 Signaling Leads to Enhanced Neointimal Hyperplasia With Diminished Matrix Deposition in Response to Vascular Injury. <i>Circ Res.</i>96:904-912 (cover article). <u>Yokote K</u>, Kobayashi K and Saito Y. (2006) Role of TGF-β/Smad3 signaling in response to vascular injury. <i>Trends Cardiovasc Med</i>, in press (2006).</p> <p>8. 1) 2004年度 (第10回) 日本心臓財団・ファイザー心血管病研究助成 優秀賞 2) Keystone symposia, “The role of TGF-β in disease pathogenesis: Novel therapeutic strategies (March 28-April 2, 2005)”にて、Organizer/Anita B. Roberts により紹介。 3) <u>Yokote K</u>.(2006) Role of TGF-β in atherosclerotic vascular diseases. American Association of Cancer Research Special Conference: TGF-β in cancer and other diseases, La Jolla.招待講演 4) 2005年度日本糖尿病合併症学会 Young Investigator Award.</p>
<p>1. 脊髄背側神経細胞の系譜解析</p> <p>2. 大学院医学研究院発生生物学／教授／齋藤 哲一郎</p> <p>3. アメリカ合衆国／テキサス大学／Jane E. Johnson</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. 胎児の発生過程で、脊髄の背側から交連神経細胞が生まれる。この時、プロニューラル因子の Math1 が直接的にホメオボックス遺伝子の Mbx1 を制御することで、交連神経細胞の運命を決定することを初めて明らかにした。</p> <p>6. 文科省科学研究費補助金・特定領域研究、学術振興会・基盤研究 B</p> <p>7. Saba, R., Johnson, J.E. and Saito, T. (2005) Commissural neuron identity is specified by a homeodomain protein, Mbx1, that is directly downstream of Math1. <i>Development</i> 132, 2147-2155.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. CD69 分子の免疫反応における役割に関する研究</p> <p>2. 大学院医学研究院／免疫発生学教授／中山俊憲</p> <p>3. アメリカ合衆国／ワシントン大学／Steven F. Ziegler</p>

<p>4. 平成13年～</p> <p>5. CD69分子の免疫反応における役割を解析する。CD69ノックアウトマウス、細胞外部分を分泌するCD69トランスジェニックマウス、wild typeのCD69トランスジェニックマウス、細胞内部分を欠損したCD69トランスジェニックマウスを樹立し、とくに関節炎の起こり方を調べた。CD69分子が関節炎の発症に必須であることがわかった。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金、基盤研究B</p> <p>7. Murata, K., Inami, M., Hasegawa, A., Kubo, S., Kimura, M., Yamashita, M., Hosokawa H., Nagao, T., Suzuki, K., Hashimoto, K., Shinkai, H., Koseki, H., Taniguchi, M., Ziegler, S. F., and Nakayama, T.: CD69-null mice protected from arthritis induced with anti-Type II collagen antibodies. <i>Int. Immunol.</i> 8:987-992, 2003.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 喘息の発症におけるNKT細胞の役割</p> <p>2. 大学院医学研究院／免疫発生学教授／中山俊憲</p> <p>3. アメリカ／ハーバード大学／Dale T. Umetsu</p> <p>4. 平成15年～</p> <p>5. アレルギー疾患である喘息の発症モデル実験系でNKT細胞の役割を調べた。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金、基盤研究B</p> <p>7. Meyer, E. H., Goya, S., Akbari, O., Berry, G. J., Savage, P. B., Kronenberg, M., Nakayama, T., DeKruyff, R. H., and Umetsu, D. T.: Glycolipid activation of invariant T cell receptor+ NKT cells is sufficient to induce airway hyperreactivity independent of conventional CD4+ T cells. <i>Proc. Natl. Acad. Sci. USA</i> 103:2782-2787 (2006).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. メモリーT細胞生存維持におけるCD8 <math>\alpha\alpha</math>の役割</p> <p>2. 大学院医学研究院／免疫発生学教授／中山俊憲/G-COE 特任研究員/新中須亮</p> <p>3. アメリカ合衆国/LIAI ラホイヤ免疫・アレルギー研究所/Dr. Hilde Cheroutre</p> <p>4. 平成20年より</p> <p>5. 細胞の免疫記憶は繰り返される病原体の感染に、即座にしかも強力に対応するために発達してきた。アレルギー反応とはこの免疫応答が非病原体である物質に対して起こってしまう事により引き起こされる。免疫記憶T細胞は大きく分けてエフェクターメモリー(EM)とセントラルメモリー(CM)に分けられるが、EMは抗原侵入時に素早く反応できるよう活性化した状態で予め様々な組織に分布し、CMは2次リンパ組織で増殖能や分化能を維持した状態のまま待機している。EMが活性化状態を維持したまま生存し続けるメカニズムにCD8の<math>\alpha\alpha</math>鎖が重要であることは、これまでの研究から徐々に明らかになりつつあるが、さらにその機序について分子レベルからの解析を行なう。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金、基盤研究B</p> <p>7. なし</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 生体内における免疫記憶の維持メカニズム</p> <p>2. 大学院医学研究院／免疫発生学助教／常世田好司</p> <p>3. ドイツ／リウマチ研究所／Andreas Radbruch</p> <p>4. 平成20年より</p> <p>5. 免疫記憶システムを制御することは、自己免疫疾患やアレルギー疾患における持続的で有害な“記憶”を効率良く抑制することや、感染源や癌に対して効率良く持続的に“記憶”を誘導するといった新しい疾患治療の開発に大きく貢献すると考えている。特にわれわれは免疫記憶の中核として働く記憶ヘルパーT細胞に焦点を当て、平成21年度初めにはその発生や維持における生体内メカニズムを世界に先駆けて明らかにしてきた。さらにその後、記憶ヘルパーT細胞の維持のために必要な分子メカニズムや免疫記憶で最も重要な現象である二次免疫応答について焦点を当てて研究を行っている。記憶ヘルパーT細胞の維持や二次応答におけるメカニズムを細胞・分子レベルで明らかにすることが、記憶ヘルパーT細胞が中心として働く免疫記憶という現象を理解することにつながると考えている。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金、若手スタートアップ</p>

7. ① Tokoyoda K., Hauser, A.E., Nakayama, T., Radbruch, A. Organization of immunological memory by bone marrow stroma. **Nat. Rev. Immunol.** 10:193-200, 2010.
- ② Tokoyoda, K., Zehentmeier, S., Radbruch, A. Organisation and maintenance of immunological memory by stroma niches. **Eur. J. Immunol.** 39:2095-2099, 2009.
- ③ Tokoyoda, K., Zehentmeier, S., Hegazy, A.N., Albrecht, I., Grün, J.R., Löhning, M., Radbruch, A. Professional memory CD4<sup>+</sup> T lymphocytes preferentially reside and rest in the bone marrow. **Immunity** 30:721-730, 2009.
8. なし

1. 肺癌における癌抑制遺伝子の methylation に関する研究
2. 大学院医学研究院／教授／藤澤 武彦
3. 米国／UT Southwestern medical center at Dallas／Adi F Gazdar
4. 平成13年度～
5. 癌抑制遺伝子の機能抑制機序には、遺伝子突然変異、欠失、挿入などの他にプロモーター領域のメチル化によるものが考えられているが、本研究は肺癌における各種癌抑制遺伝子プロモーター領域の異常メチル化を検討し、各種臨床因子との関連を調べ、その成果を発癌の機序ならびに早期診断に役立てることを目的としている。
6. Supported by an Early Detection Research Network Grant (5U01CA8497102)  
科学研究費基盤C  
平成17年度学長裁量経費（重点研究プロジェクト経費）萌芽的研究に対する助成A  
喫煙科学研究財団研究助成
7. 1) Suzuki M, Toyooka S, Miyajima K, Iizasa T, Fujisawa T, Bekele NB, Gazdar AF. Alterations in the mitochondrial D loop in lung cancers. *Clinical Cancer Research* 2003 Nov 15; 9(15):5636-5641.
- 2) Makoto Suzuki, Noriaki Sunaga, David S. Shames, Shinichi Toyooka, Adi F. Gazdar, and John D. Minna. RNAi-mediated Knockdown of DNMT1 Leads to Promoter Demethylation and Gene Re-expression in Human Lung and Breast Cancer Cells. *Cancer Res.* 2004 May 1; 64(9):3137-3143.
- 3) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, Takao Takahashi, Narayan Shivapurkar, Ubaradka G. Sathyanarayana, Toshihiko Iizasa, Takehiko Fujisawa, Adi F. Gazdar. Aberrant methylation of Reprimo in lung cancer. *Lung Cancer.* 2005 Mar; 47(3):309-314.
- 4) Makoto Suzuki, Shinichi Toyooka, Narayan Shivapurkar, Hisayuki Shigematsu, Kuniharu Miyajima, Takao Takahashi, Victor Stastny, Andrea L. Zern, Takehiko Fujisawa, Harvey I. Pass, Michele Carbone, Adi F. Gazdar. Aberrant Methylation Profile of Human Malignant Mesotheliomas and Its Relationship to SV40 infection. *Oncogene.* 2005 Feb 10; 24(7):1302-8.
- 5) Makoto Suzuki, Chang Hao, Takao Takahashi, Hisayuki Shigematsu, Narayan Shivapurkar, Ubaradka G. Sathyanarayana, Toshihiko Iizasa, Takehiko Fujisawa, Kenzo Hiroshima, Adi F. Gazdar. Aberrant methylation of SPARC in human lung cancers. *Br J Cancer.* 2005 Mar 14; 92(5):942-8.
- 6) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, Kenzo Hiroshima, Toshihiko Iizasa, Yukio Nakatani, John D. Minna, Adi F. Gazdar, Takehiko Fujisawa. Epidermal Growth Factor Receptor Expression Status in Lung Cancer Correlates with Its Mutation. *Human Pathology* 2005 Oct 36 (10):1127-34.
- 7) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, Davids S. Shames, Noriaki Sunaga, Takao Takahashi, Narayan Shivapurkar, Toshihiko Iizasa, Eugene P. Frenkel, John D. Minna, Takehiko Fujisawa, Adi F. Gazdar. DNA Methylation-associated Inactivation of TGFβ-related Genes, DRM/Gremlin, RUNX3, and HPP1 in Human Cancers. *British Journal of Cancer* 2005 93: 1029-37.
- 8) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, Toshihiko Iizasa, Kenzo Hiroshima, Yukio Nakatani, John D. Minna, Adi F. Gazdar, Takehiko Fujisawa. Exclusive mutation in EGFR, HER2, and KRAS, and synchronous methylation of non-small cell lung cancer. *Cancer* 2006 May 15; 106(10):2200-7.
- 9) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, Narayan Shivapurkar, Jyotsna Reddy, Kuniharu Miyajima, Takao Takahashi, Adi F. Gazdar and Eugene P. Frenkel. Methylation of apoptosis related genes in the pathogenesis and prognosis of prostate cancer. *Cancer Letters* (in press).
- 10) Makoto Suzuki, Hisayuki Shigematsu, David S. Shames, Noriaki Sunaga, Takao Takahashi, Narayan Shivapurkar, Toshihiko Iizasa, John D. Minna, Takehiko Fujisawa, Adi F. Gazdar. Methylation and gene silencing of the Ras-related



GTPase gene in lung and breast cancers. *Annals of Surgical Oncology* (in press).

8. なし

1. 心筋細胞分化のメカニズム解析

2. 大学院医学研究院/教授/小室一成

3. オランダ Groningen 大学 Groningen Biomolecular Sciences and Biotechnology Institute の Eggen BJ 教授ら。

4. 平成 17 年度-

5. 心筋細胞に分化することができる細胞株 mouse embryonic carcinoma P19CL6 cells を用いて、心筋細胞への分化のメカニズムの解析、分化への必須因子の同定を行う。

6. 平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金 ヒトゲノム・再生医療等研究事業、「心筋組織再生のための集約的研究」主任研究者、平成 18 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A)、「心臓再生の基盤となる心細胞分化の機序に関する研究」主任研究者、平成 17 年度 財団法人東京生化学研究会研究助成金、「心筋幹細胞/前駆細胞の解析」、第 34 回 (2005 年度) 内藤記念特定研究助成金、「心筋幹細胞の解析」、財団法人武田科学振興財団 2007 年度報彰基金研究助成金、「心不全の病態解明と新しい治療法の開発」、三菱財団自然科学研究助成、「心不全発症機序の解明と新しい治療法の開発」

7. 1). van den Boom V, Kooistra SM, Boesjes M, Geverts B, Houtsmuller AB, Monzen K, Komuro I, Essers J, Drenth-Diephuis LJ, Eggen BJ. UTF1 is a chromatin-associated protein involved in ES cell differentiation. *J Cell Biol.* 2007;178:913-24.

2). Wang Y, Morishima M, Zheng M, Uchino T, Manzen K, Takahashi A, Nakaya Y, Komuro I, Ono K. Transcription factors Csx/Nkx2.5 and GATA4 distinctly regulate expression of Ca<sup>2+</sup> channels in neonatal rat heart. *J Mol Cell Cardiol.* 2007;42:1045-53.

3). Naito AT, Akazawa H, Takano H, Minamino T, Nagai T, Aburatani H, Komuro I. Phosphatidylinositol 3-kinase-Akt pathway plays a critical role in early cardiomyogenesis by regulating canonical Wnt signaling. *Circ Res.* 2005;97:144-51.

4). Naito AT, Shiojima I, Akazawa H, Hidaka K, Morisaki T, Kikuchi A, Komuro I. Developmental stage-specific biphasic roles of Wnt/beta-catenin signaling in cardiomyogenesis and hematopoiesis. *Proc Natl Acad Sci U S A.* 2006;103:19812-7.

8. なし

1. エンドセリンの機能に関する遺伝子改変マウスを用いた研究

2. 大学院医学研究院/教授/桑木 共之

3. アメリカ合衆国/テキサス大学分子遺伝学/柳沢 正史 イタリア/聖アンナ高等大学院/Dr. Flavio Cocceani

4. 平成 7 年度~

5. エンドセリン-1、-2、-3、エンドセリン受容体-A、-B、エンドセリン合成酵素-1、-2 が循環・呼吸調節、発生および痛覚制御に果たす役割の解明

6. 文科省科研費、内藤記念財団、武田科学振興財団

7. Ohuchi T. et al., *Am. J. Physiol.* 276: R1071-7 '99

Cocceani F. et al., *Am. J. Physiol.* 277: H1521-31 '99

Kuwaki T. et al., *Clin. Exp. Pharmacol. Physiol.* 26: 989-94 '99

Cocceani F. et al., *J. Cardiovasc. Res.* 36: S75-7 '00

Nakamura A. et al., *Resp. Physiol.* 124: 1-9 '00

Kuwaki T. et al., *Clin. Sci.* 103: 48S-52 '02

Hasue F. et al., *Neurosci.* 130: 349-58 '05

8. なし

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オレキシンの機能に関する遺伝子改変マウスを用いた研究</li> <li>2. 大学院医学研究院／教授／桑木 共之</li> <li>3. アメリカ合衆国／テキサス大学分子遺伝学／柳沢 正史</li> <li>4. 平成12年度～</li> <li>5. 視床下部神経に局限して存在する新規神経伝達物質であるオレキシンの、循環・呼吸の神経性調節に果たす役割の解明</li> <li>6. 文科省科研費、島津科学技術振興財団、病態代謝研究会、三井生命厚生事業団</li> <li>7. Kayaba Y. et al., Am. J. Physiol. 285: R581-93 '03 Watanabe S, et al., Neuroreport 16: 5-8 '05 Kuwaki T. et al., Autonom. Nerv. Syst. 42: 113-9 '05 Nakamura A. et al., J. Appl. Physiol. 102: 241-8 '07 Deng BS. et al., J. Appl. Physiol. 103: 1772-9 '07 Terada J. et al., J Appl. Physiol. 104: 499-507 '08</li> <li>8. Distinguished Poster Award (International Symposium on the Study of Brain Functions, 2002)</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 水チャネル aquaporin のゲーティング機構の解析</li> <li>2. 大学院医学研究院／講師／小倉武彦</li> <li>3. アメリカ合衆国／Department of Molecular Pharmacology and Biological Chemistry, Northwestern University Medical School／Professor K. Goto</li> <li>4. 平成19年度～</li> <li>5. 結晶解析から得られた aquaporin の分子構造をもとに molecular dynamics simulation を行い、aquaporin の開閉機構を解析する。</li> <li>6. なし</li> <li>7. なし</li> <li>8. なし</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. トキソプラズマ性網脈絡膜炎のT細胞反応におけるケモカインの役割</li> <li>2. 大学院医学研究院/助教/野呂瀬一美</li> <li>3. アメリカ合衆国/Pennsylvania 大学 Pathobiology 講座/Hunter 教授</li> <li>4. 2008年～</li> <li>5. トキソプラズマ性網脈絡膜炎においてT細胞が関与しているがその反応における種々のケモカインの役割を解析する</li> <li>6. 大学教育の国際化加速プログラム（研究実践型）（2008年～2009年）、科学研究費補助金（基盤C）（2008年～2010年）</li> <li>7. なし</li> <li>8. なし</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. c-myc 遺伝子転写抑制因子を用いた消化器癌治療法の開発。</li> <li>2. 医学研究院・分子病態解析学/講師/松下一之</li> <li>3. U S A/National Institute of Health/David Levens</li> <li>4. 平成12年度～</li> <li>5. c-myc 遺伝子転写抑制因子である FBP Interacting Repressor(FIR)による c-Myc 蛋白の発現抑制を利用して、正常細胞に副作用の少ない細胞死誘導を惹起することにより、効果的ながん治療を開発することを目的として研究を進めている。</li> <li>6. A. 平成12年度～平成14年度文部科学省高度先進医療開発経費 B. 21世紀COEプログラム「消化器扁平上皮癌の多戦略治療拠点の形成」（平成15～19年度） C. 平成16, 17, 18, 19, 20年度科学研究費補助金</li> <li>7. 癌の遺伝子診断システムと国産技術による遺伝子治療臨床研究システムの開発 （平成12年度～平成14年度文部科学省高度先進医療開発経費成果報告書）</li> <li>8. 千葉大学なのはな賞（平成18年度）,UK-JAPAN Gene Therapy 2007 シンポジウムで発表</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. c-myc 遺伝子転写抑制因子を用いた癌および悪性中皮腫の遺伝子治療法の開発</li> <li>2. 医学研究院・分子病態解析学/医学部附属病院/検査部・遺伝子診療部・疾患プロテオミクスセンター/講師/松下一之</li> </ol>

3. USA/National Institute of Health/David Levens

4. 平成12年度以降

5. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子である FBP Interacting Repressor (FIR) による *c-Myc* 蛋白質の発現抑制を利用して、正常細胞に副作用の少ない細胞死誘導 (アポトーシス) を惹起することにより、効果的な癌遺伝子治療法を開発することを目的としている。近年患者数が増加することが予測される悪性中皮腫も *c-myc* 遺伝子の増大が認められる治療困難な疾患であり、FIR 遺伝子治療法の応用を視野に入れている。

6. 資金・助成等

(1) 平成12年度～平成14年度 文部科学省高度先進医療開発経費

(2) 平成15年度～平成19年度 文部科学省 21世紀COEプログラム  
「消化器扁平上皮癌の最先端多戦略治療拠点形成」

(3) 平成16, 17年度 基盤研究 (C) (2) (文部科学省)

(4) 平成16-18年度基盤研究 (B) (文部科学省)

(5) 平成18年度文部科学省特定領域研究「がん」がんの個性の分子診断

(6) 平成18, 19年度基盤研究 (C) (文部科学省) (代表)

(7) 平成18, 19年度基盤研究 (C) (文部科学省) (分担)

(8) 平成18, 19年度基盤研究 (C) (文部科学省) (分担)

(9) 平成19, 20年度基盤研究 (C) (2) (文部科学省) (分担)

(10) 平成19年度千葉大学ベンチャービジネスラボラトリー研究補助金

(11) 千葉大学なのはなコンペ2006 (教員版・自然科学先端研究部門) 補助金 (なのはな賞)

(12) 平成19, 20年度. 科学技術振興財団 (JST) 技術移転支援センター事業: 「良いシーズをつなぐ知の連携システム (つなぐしくみ)」; 癌に関連するスプライシング変異の発現抑制と医療応用

(13) 平成20, 21, 22年度基盤研究 (C) (2) (文部科学省) 350万円

*c-myc* 遺伝子転写抑制因子のスプライシングを分子標的とした癌診断・治療法開発 (代表)

7. (1) Hoshino I, Matsubara H, Akutsu Y, Nishimori T, Yoneyama Y, [Matsushita K](#), Ochiai T. Tumor suppressor Prdx1 is a prognostic factor in esophageal squamous cell carcinoma patients. *Oncol Rep.* 2007 Oct;18(4):867-71

(2) [Hoshino I](#), [Matsubara H](#), [Akutsu Y](#), [Nishimori T](#), [Yoneyama Y](#), [Murakami K](#), [Komatsu A](#), [Sakata H](#), [Matsushita K](#), [Ochiai T](#). Gene expression profiling induced by histone deacetylase inhibitor, FK228, in human esophageal squamous cancer cells. *Oncol Rep.* 2007 Sep;18(3):585-92.

(3) [Shimada H](#), [Okazumi S](#), [Matsubara H](#), [Shiratori T](#), [Akutsu Y](#), [Nabeva Y](#), [Tanizawa T](#), [Matsushita K](#), [Hayashi H](#), [Isono K](#), [Ochiai T](#). Long-term Results after Dissection of Positive Thoracic Lymph Nodes in Patients with Esophageal Squamous Cell Carcinoma. *World J Surg.* 2008 Feb;32(2):255-61. Epub 2007 Dec 7.

(4) [Shimada H](#), [Matsushita K](#), [Tagawa M](#). Recent advances in esophageal cancer gene therapy. *Ann Thorac Cardiovasc Surg.* 2008 Feb;14(1):3-8.

(5) Seimiya M, Tomonaga T, [Matsushita K](#), Sunaga M, Oh-ishi M, Kodera Y, Meda T, Takano S, Togawa A, Yoshitomi H, Otuka M, Yamamoto M, Nakano M, Miyazaki M, Nomura F. Identification of novel immunohistochemical markers for primary hepatocellular carcinoma: clathrin heavy chain and formiminotransferase cyclodeaminase. *Hepatology.* 2008 Aug;48(2):519-30.

(6) [Hoshino I](#), [Matsubara H](#), [Akutsu Y](#), [Nishimori T](#), [Yoneyama Y](#), [Murakami K](#), [Sakata H](#), [Matsushita K](#), [Komatsu A](#), [Brooks R](#), [Ochiai T](#). Role of histone deacetylase inhibitor in adenovirus-mediated p53 gene therapy in esophageal cancer. *Anticancer Res.* 2008 Mar-Apr;28(2A):665-71.

(7) [Hoshino I](#), [Matsubara H](#), [Komatsu A](#), [Akutsu Y](#), [Nishimori T](#), [Yoneyama Y](#), [Murakami K](#), [Sakata H](#), [Matsushita K](#), [Miyazawa Y](#), [Brooks R](#), [Yoshida M](#), [Ochiai T](#). Combined Effects of p53 Gene Therapy and Leptomycin B in Human Esophageal Squamous Cell Carcinoma. *Oncology.* 2008 Sep 11;75(1-2):113-119.

(8) Shimada H, Shiratori T, Takeda A, [Matsushita K](#), Okazumi S, Akutsu Y, Matsubara H, Nomura F, Ochiai T. Perioperative Changes of Serum p53 Antibody Titer is a Predictor for Survival in Patients with Esophageal Squamous Cell Carcinoma. *World J Surg.* (2009) Feb;33(2):272-7.

(9) [Matsushita K](#), Tomonaga T, Kajiwara T, Shimada H, Itoga S, Hiwasa T, Kubo S, Ochiai T, Matsubara H, Nomura F *c-myc* suppressor FBP-interacting repressor for cancer diagnosis and therapy. *Frontiers in Bioscience* (2009) 14, 3401-3408, January 1

(10) Hattori N, Oda S, Sadahiro T, Nakamura M, Abe R, Shinozaki K, Nomura F, Tomonaga T, [Matsushita K](#), Kodera Y, Sogawa K, Satoh M, Hirasawa H. YKL-40 identified by proteomic analysis as a biomarker of sepsis. *Shock.* (2009) Feb 2. [Epub ahead of print]

(11) Kawahira H, [Matsushita K](#), Shiratori T, Shimizu T, Nabeya Y, Hayashi H, Ochiai T, Matsubara H and Shimada H. Viral shedding after *p53* adenoviral gene therapy in 10 cases of esophageal cancer. *Cancer Science.* 2010 Jan;101(1):289-91.

(12) Murakami K, Matsubara H, Hoshino I, Akutsu Y, Miyazawa Y, [Matsushita K](#), Sakata H, Nishimori T, Usui A, Kano M, Nishino

N, Yoshida M. CHAP31 Induces Apoptosis Only via the Intrinsic Pathway in Human Esophageal Cancer Cells. *Oncology* 2010 Mar 6;78(1):62-74.

8. 下記のシンポジウム・講演会で研究内容を発表した。

- ①松下一之. *c-myc* 遺伝子抑制因子 FIR の Splicing variant と癌化への関与. 千葉県がんセンター研究局 第 626 回集談会 (千葉, Jan 10, 2007)
- ②松下一之, 朝長 毅, 島田英昭, 梶原寿子, 間宮俊太, 松原久裕, 山田 滋, 加野将之, 野村文夫 (2007). *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FIR 癌遺伝子治療の開発. 第 66 回日本癌学会学術総会 (横浜)
- ③松下一之. がんの早期診断に役立つ遺伝子腫瘍マーカーの開発. 千葉大学新技術説明会. 科学技術振興機構 JST ホール (東京, March .7th. 2008)
- ④松下一之. 遺伝子発現調節(転写・スプライシング)を分子標的とした癌診断法・治療法の開発. 第 1 回ちば Basic&Clinical Research Conference (千葉, Jan.9th. 2008)
- ⑤松下一之, 朝長 毅, 島田英昭, 加野将之, 山田滋, 松原久裕, 野村文夫. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FUSE-Binding Protein-interacting repressor の splicing variant と癌化への関与 (2009). 第 108 回日本外科学会学術総会 (2009 年 5 月 15-17 日、長崎)。
- ⑥松下一之, 朝長 毅, 島田英昭, 松原久裕, 野村文夫 (2009) 国産技術と特許を有する *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FIR を用いた癌遺伝子治療の開発. 第 63 回日本消化器外科学会定期学術総会, 7 月 16-18 日、札幌)。
- ⑦松下一之, 朝長 毅, 島田英昭, 梶原寿子, 間宮俊太, 松原久裕, 山田滋, 加野将之, 野村文夫. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FBP-binding protein(FIR)による癌遺伝子治療の開発 (2009). 第 6 回日本癌学会学術総会 (10 月 28-30 日、名古屋)。
- ⑧松下一之, 梶原寿子, 朝長 毅, 島田英昭, 田村 裕, 星野忠治, 野村文夫. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FIR の癌特異的スプライシングバリエーションを標的とした癌診断法および癌治療薬の開発. 第 27 回日本分子腫瘍マーカー研究会 (2009) (10 月 2 日、東京、東大本郷キャンパス)
- ⑨松下一之, 朝長 毅, 糸賀 栄, 曾川一幸, 梶原寿子, 梅村啓史, 西村 基, 野村文夫. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FIR の splicing variant を標的とした癌診断法・癌治療薬の開発 (2009). 第 55 回日本臨床検査医学会学術集会 (11 月 27-30 日、名古屋)
- ⑩松下一之, 朝長 毅, 梶原寿子, 島田英昭, 野村文夫. *c-myc* 遺伝子転写抑制因子 FIR の splicing variant を標的とした癌診断法・癌治療法の開発 (2009). 日本分子生物学会・日本生化学会合同大会 (12 月 9-12 日、神戸)。
- ⑪松下一之, 朝長 毅, 島田 英昭, 米満 吉和, 上田 泰次, 落合 武徳, 松原 久裕, 野村 文夫, 細胞質型 RNA センダイウイルスベクターに *c-myc* 遺伝子転写抑制因子を搭載した癌遺伝子治療法の開発(大腸(免疫・遺伝子治療), ハイブリッドポスター, (2009) 第 109 回日本外科学会定期学術集会) 日本外科学会雑誌 110(臨時増刊号\_2) 274

## 社会精神保健教育研究センター

1. 精神疾患の分子機構解明に関する研究

2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣

3. アメリカ合衆国／The Johns Hopkins University. Psychiatry／Prof. Akira Sawa

4. 平成 16 年度～

5. ヒト死後脳を用いた精神疾患の病態研究および PICK1 遺伝子の臨床遺伝学的研究

6. 文科省科研費

7. 主な成果

- 1) Matsuzawa, D., Hashimoto, K., Miyatake, R., Shirayama, Y., Shimizu, E., Maeda, K., Suzuki, Y., Mashimo, Y., Sekine, Y., Inada, T., Ozaki, N., Iwata, N., Harano, M., Komiyama, T., Yamada, M., Sora, I., Ujike, H., Hata, A., Sawa, A. and Iyo, M. (2007) Identification of functional polymorphisms in the promoter region of the human PICK1 gene and their association with methamphetamine psychosis. *Am. J. Psychiatry* 164, 1105-1114.
- 2) Hashimoto, K., Sawa, A. and Iyo, M. (2007) Increased levels of glutamate in brains from patients with mood disorders. *Biol. Psychiatry* 62, 1310-1316.
- 3) Hikida, T., Mustafa, A.K., Maeda, K., Fujii, K., Barrow, R.K., Saleh, M., Oby, L., Haganir, R.L., Snyder, S.H., Hashimoto, K. and Sawa, A. (2008) Modulation of D-serine levels in brains of mice lacking PICK1. *Biol. Psychiatry* 63, 997-1000.

8. なし

1. 統合失調症の病態解明に関する研究

2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣

3. スウェーデン／Karolinska Institute, Physiology and Pharmacology／Prof. Goran Engberg

<p>4. 平成 16 年度～</p> <p>5. 統合失調症患者の脳脊髄液を用いた生物学的マーカーの開発に関する研究</p> <p>6. 文科省科研費</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Hashimoto, K., Engberg, G., Shimizu, E., Nordin, C., Lindstrom, L.H. and Iyo, M. (2005) Elevated glutamine/glutamate ratio in cerebrospinal fluid of first episode and drug naive schizophrenic patients. <i>BMC Psychiatry</i> 5, 6.</p> <p>2) Hashimoto, K., Engberg, G., Shimizu, E., Nordin, C., Lindstrom, L.H. and Iyo, M. (2005) Reduced D-serine to total serine ratio in the cerebrospinal fluid of drug naive schizophrenic patients. <i>Prog. Neuropsychopharmacol. Biol. Psychiatry</i> 29, 767-769.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. ニューロペプチド S の分子機構に関する研究</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣 大学院医学研究院/助教/岡村斉恵</p> <p>3. アメリカ合衆国／University of California at Irvine, Pharmacology／Prof. Rainer Reinscheid</p> <p>4. 平成 16 年度～</p> <p>5. 精神疾患の病態における新規ニューロペプチド S の分子機構に関する研究</p> <p>6. 文科省科研費</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Okamura, N., Hashimoto, K., Iyo, M., Shimizu, E., Dempfle, A., Friedel, S., Reinscheid, R.K. (2007) Gender-specific association of a functional coding polymorphism in the neuropeptide S receptor gene with panic disorder but not with schizophrenia or attention-deficit/hyperactivity disorder. <i>Prog. Neuropsychopharmacol. Biol. Psychiatry</i> 31, 1444-1448.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 統合失調症の病態における <math>\alpha 7</math> ニコチン受容体の分子機構に関する研究</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣</p> <p>3. アメリカ合衆国／University of Colorado Health Science Center, Psychiatry／Prof. Robert Freedman and Prof. Karen Stevens</p> <p>4. 平成 16 年度～</p> <p>5. 統合失調症の病態に関係している聴覚誘発電位 P50 異常と <math>\alpha 7</math> ニコチン受容体の分子機構に関する研究</p> <p>6. 文科省科研費</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Koike, K., Hashimoto, K., Takai, N., Shimizu, E., Komatsu, N., Watanabe, H., Nakazato, M., Okamura, N., Stevens, KE, Freedman, R. and Iyo, M. (2005) Tropisetron improves deficits in auditory P50 suppression in schizophrenia. <i>Schizophrenia Res.</i> 76, 67-72.</p> <p>2) Hashimoto, K., Iyo, M., Freedman, R. and Stevens, K.E. (2005) Tropisetron improves deficient inhibitory auditory processing in DBA/2 mice: role of <math>\alpha 7</math> nicotinic acetylcholine receptors. <i>Psychopharmacol.</i> 183, 13-19.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 双極性障害のバイオマーカーに関する研究</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣</p> <p>3. スウェーデン／Gothenburg University, Psychiatry／Prof. Hans Agren and Prof. Keiko Funa</p> <p>4. 平成 21 年度～</p> <p>5. 双極性障害の生物学的マーカーに関する研究</p> <p>6. 委任経理金など</p> <p>7. 主な成果</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 新規 SPECT 放射性薬剤の開発に関する研究</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／橋本謙二 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣</p> <p>3. 中国／北京大学医学部核医学／Prof. Rong Fu Wang</p>

<p>4. 平成 20 年度～</p> <p>5. ニコチン受容体の新規 SPECT 放射性薬剤の開発に関する研究</p> <p>6. 委任経理金など</p> <p>7. 主な成果</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 覚醒剤精神病の病態発生メカニズムに関するダブル・トレーサーPET 研究 —脳内活性型ミクログリア及びドパミン・トランスポーター密度の検討—</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／関根吉統</p> <p>3. アメリカ合衆国／National Institute on Drug Abuse, National Institute of Health／Jean L. Cadet アメリカ合衆国／Department of Psychiatry, University of Florida College of Medicine／Mark S. Gold</p> <p>4. 平成 17 年度～</p> <p>5. 覚せい剤使用者の病態に対する脳内炎症の関与を、PET を用いて解明する。</p> <p>6. 文科省科研費</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Sekine Y., Ouchi Y., Sugihara G., Takei N., Yoshikawa E., Nakamura K., Iwata Y., Tsuchiya K.J., Suda S., Suzuki K., Kawai M., Takebayashi K., Yamamoto S., Matsuzaki H., Ueki T., Mori N., Gold M.S., Cadet J.L. (2008) Methamphetamine causes microglial activation in the brains of human abusers. <i>J. Neurosci.</i> 28, 5756-5761.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 覚せい剤乱用・依存の臨床遺伝学的研究</p> <p>2. 社会精神保健教育研究センター／教授／関根吉統 同センター長・教授（兼任）／伊豫雅臣</p> <p>3. アメリカ合衆国／National Institute on Drug Abuse, National Institute of Health／George R. Uhl</p> <p>4. 平成 16 年度～</p> <p>5. 覚せい剤乱用・依存者の日米サンプルを用いた臨床遺伝学的研究</p> <p>6. 厚生労働省</p> <p>7. 主な成果</p> <p>1) Uhl G.R., Drgon T., Liu Q.R., Johnson C., Walther D., Ujike H., Komiyama T., Harano M., Sekine Y., Inada T., Ozaki N., Iyo M., Iwata N., Yamada M., Sora I., Chen C.K., Liu H.C., Lin S.K. (2008) Genome-wide association for methamphetamine dependence. Convergent results from two samples. <i>Arch. Gen. Psychiatry</i> 65, 345-355.</p> <p>8. なし</p>

## 医学部附属病院

<p>1. 神経疾患における局所皮膚加温に対する皮膚血管拡張反応に関する研究</p> <p>2. 医学部附属病院 神経内科／講師／朝比奈 正人</p> <p>3. 英国／ロンドン大学 神経研究所／C J Mathias</p> <p>4. 平成 18 年度～</p> <p>5. 皮膚有毛部の局所加温により皮膚血流は 2 相性に増加する。第 1 相は感覚神経軸索反射、第 2 相は血管内皮の一酸化窒素によるとされるが、我々は過去の治験から自律神経もこの反応に関与していると推察した。この反応における自律神経の役割を明らかにし、自律神経機能検査としての応用の可能性を検討するために、自律神経病変を持つ神経疾患において局所的皮膚加温に対する皮膚血流反応を評価した。研究の結果は所皮膚加温に対する皮膚血管拡張反応に自律神経が関与していることを示唆した。この反応の評価は自律神経機能の評価に役立つと考えた。</p> <p>6. なし。</p> <p>7. Yamanaka Y, Asahina M, Mathias CJ, Akaogi Y, Koyama Y, Hattori T. Skin vasodilator response to local heating in multiple system atrophy. <i>Mov Disord.</i> 2007 (in press).</p> <p>8. なし。</p>
<p>1. 多系統萎縮症と純粋自律神経不全症の鑑別・診断に関する研究</p>

<p>2. 医学部附属病院 神経内科/講師/朝比奈 正人</p> <p>3. 英国/ロンドン大学 神経研究所/C J Mathias</p> <p>4. 平成14年度～</p> <p>5. 多系統萎縮症と純粋自律神経不全症はいずれも自律神経症状を主症状とする変性疾患である。このため発症初期では2疾患の鑑別はしばしば困難である。しかしながら、この2疾患の予後は大きく異なり、純粋自律神経不全症が予後良好な経過をとるのに対し、多系統萎縮症は5年ほどで歩行不能になり、10年以内に死亡する症例が多い。</p> <p>このため、病初期の段階で正確に鑑別・診断する意義は高い。我々は薬理的検査、生理学的検査法を用いて、この2疾患を鑑別・診断する方法を開発・確立するため、ロンドン大学の神経研究所と共同研究を行っている。</p> <p>6. なし</p> <p>7. <u>Asahina M</u>, Young TM, Bleasdale-Barr K, Mathias CJ. Related Differences in overshoot of blood pressure after head-up tilt in two groups with chronic autonomic failure: pure autonomic failure and multiple system atrophy. <i>J Neurol</i>. 2005; 252(1):72-77.</p> <p>8. 共同研究の成果は2002年12月5日にバーミンガムで開催された第19回英国自律神経学会で発表した。</p>
<p>1. 脊髄損傷患者における自律神経障害に関する研究</p> <p>2. 医学部附属病院 神経内科/講師/朝比奈 正人</p> <p>3. 英国/ロンドン大学 神経研究所/C J Mathias</p> <p>4. 平成14年度～</p> <p>5. 脊髄損傷患者では Autonomic Dysreflexia などの自律神経障害がしばしばみられる。我々は、脊髄損傷患者における皮膚自律神経機能に注目して評価し、これらの所見が脊髄損傷高位と関連があるかどうかを検討している。</p> <p>6. 国際脊髄研究基金の助成を受けた</p> <p>7. Nicotra A, Asahina M, Mathias CJ. Skin vasodilator response to local heating in human chronic spinal cord injury. <i>Eur J Neurol</i>. 2004;11(12):835-7.</p> <p>8. 共同研究の成果は2003年5月にフランスで開催された第3回ヨーロッパ自律神経学会で発表し、最優秀ポスター賞を獲得した。</p>
<p>1. 肺移植拒絶反応における自己免疫としてのV型コラーゲンの役割</p> <p>2. 医学部附属病院/講師/吉田成利</p> <p>3. 米国/インディアナ大学医学部/David S. Wilkes</p> <p>4. 平成11年度～</p> <p>5. これまで自己抗原であるV型コラーゲン[col(V)]が同種移植免疫反応の標的になり、col(V)の経口投与によりラット肺移植 allograft モデルにおいて寛容状態を誘導し、自己免疫肺疾患、移植免疫肺疾患の進展に共通の経路として係わっている可能性を報告してきた。ヒト肺移植拒絶反応において移植免疫で始まり、新たな自己免疫である col(V)特異的 Th17 細胞や単球/マクロファージの補助細胞が最終的に慢性拒絶反応としての閉塞性細気管支炎を進行させる原因であることを示した。Col(V)特異的 Th17 メモリー細胞による固有の免疫活性は肺移植後の重大な合併症としての primary graft dysfunction (PGD)に至る経路を示した。スフィンゴシン-1 磷酸塩 -1 受容体は col(V)反応性リンパ球を移送させたり、活性を調節する新たな役割を演じていることを証明した。また、他の研究で PGD における抗 col(V)特異的免疫の主たる役割や PDG の標的としての気道上皮を同定した。さらには肺移植において col(V)が低容量サイクロスポリンを介する免疫抑制を増強し、col(V)の経口投与が免疫調節の役割を行っている可能性を示した。</p> <p>6. Grant from the National Institute of Health(RO1 grant) 科学研究費補助金 (基盤研究(C)) # 19591612 平成19年度～21年度</p> <p>7. <u>Burlingham WJ, Love RB, Jankowska-Gan E, Haynes LD, Xu Q, Bobadilla JL, Meyer KC, Hayney MS, Braun RK, Greenspan DS, Gopalakrishnan B, Cai J, Brand DD, Yoshida S, Cummings OW, Wilkes DS.</u> IL-17-dependent cellular immunity to collagen type V predisposes to obliterative bronchiolitis in human lung transplants. <i>J Clin Invest</i> 2007; 117(11): 3498-3506. Bobadilla JL, Love RB, Jankowska-Gan E, Xu Q, Haynes LD, Braun RK, Hayney MS, Munoz del Rio A, Meyer K, Greenspan DS, Torrealba J, Heidler KM, Cummings OW, Iwata T, Brand D, Presson R, Burlingham WJ, Wilkes DS. Th-17, monokines, collagen type V, and primary graft dysfunction in lung transplantation. <i>Am J Respir Crit Care Med</i> 2008; 177(6):660-668. Chiyo M, Iwata T, Webb TJ, Vasko MR, Thompson EL, Heidler KM, Cummings OW, Yoshida S, Fujisawa T, Brand DD, Wilkes DS. Silencing SIP1 receptors regulates collagen-V reactive lymphocyte-mediated immunobiology in the transplanted lung. <i>Am J Transplant</i> 2008; 8(3): 537-546. Iwata T, Chiyo M, Yoshida S, Smith GN Jr., Mickler EA, Presson R Jr., Fisher AJ, Brand DD, Cummings OW, Wilkes DS. Lung transplant ischemia reperfusion injury: Metalloprotease inhibition down-regulates exposure of type V collagen, growth-related oncogene-induced neutrophil chemotaxis, and tumor necrosis factor-[alpha] expression. <i>Transplantation</i> 2008; 85(3): 417-426. Iwata T, Philipovskiy A, Fisher AJ, Presson RG Jr, Chiyo M, Lee J, Mickler E, Smith GN, Petrache I, Brand DB, Burlingham WJ, Gopalakrishnan B, Greenspan DS, Christie JD, Wilkes DS. Anti-type V collagen humoral immunity in lung transplant</p>

primary graft dysfunction. *J Immunol* 2008; 181(8): 5738-5747.

Yamada Y, Sekine Y, Yoshida S, Yasufuku K, Petrache I, Benson HL, Brand DD, Yoshino I, Wilkes DS. Type V collagen-induced oral tolerance plus low dose cyclosporine prevents rejection of MHC class I and II incompatible lung allografts. *J Immunol* 2009; 183(1): 237-245.

8. なし

## 大学院薬学研究院

1. タイ産薬用植物からの生理活性物質の抗炎症作用および抗腫瘍活性評価

2. 大学院薬学研究院／教授／上野 光一

3. タイ王国／チュラロンコーン大学薬学部／Mayuree Tantisira 助教授

タイ王国／チュラロンコーン大学薬学部／Suree Jianmongkol 助教授

4. 平成 18 年度～

5. タイ産伝承薬用植物から単理された生理活性成分の抗腫瘍活性や抗炎症作用を解析し、医薬品リード候補化合物を発見するために、広範なスクリーニングならびに成分検索研究を展開する。

6. 日本学術振興会拠点事業

7. (1) T Nakamura, N Kodama, Y Arai, T Kumamoto, Y Higuchi, C Chaichantipyuth, T Ishikawa, K Ueno, and S Yano, *J. Nat. Prod.*, Inhibitory effect of oxycoumarins isolated from the Thai medicinal plant *Clausena guillauminii* on the inflammation mediators, iNOS, TNF- $\alpha$ , and COX-2 expression in mouse macrophage RAW 264.7. *J Nat Med.* 2009, 63, 21–27.

(2) T Nakamura, N Kodama, T Kumamoto, Y Higuchi, C Chaichantipyuth, T Ishikawa, K Ueno, and S Yano Inhibitory effect of the extracts from Thai medicinal plants on iNOS expression in mouse macrophage RAW 264.7. *J Nat Med.* 2009, 63, 107–110

(3) D Watanabe, R Kerakawati, T Morita, T Nkamura, K Ueno, T Kumamoto, W Nakanishi, T Ishikawa, Isolation of  $\beta$ -sitosterol and digalactopyranosyl-diacylglyceride from citrus *hystrix*, a thai traditional herb, as pancreatic lipase inhibitors. *Heterocycles*, 2009, 78, 1497-1505

8. なし

1. 国際原子力機関国際共同研究：センチネルリンパ節の検出およびがんの診断を目的とする  $^{99m}\text{Tc}$  放射性薬剤の新規開発

2. 薬学研究院 教授 荒野 泰

3. 国際原子力機関 (IEAE)

4. 2007 年

5. センチネルリンパ節の検出やがんの画像診断に有用な新たな  $^{99m}\text{Tc}$  放射性医薬品を開発する

6. 国際原子力機関 (先進国からの参加者には会議出席のための旅費と宿泊費のみを支給)

7. IAEA Monograph に出版予定

8.

1. 植物メタボロミクスに関する研究

2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季

3. スウェーデン／ウメオ大学／par Jonsson

4. 平成 19 年度～

5.

6.

7. Miyako Kusano, Atsushi Fukushima, Masanori Arita, Par Jonsson, Thomas Moritz, Makoto Kobayashi, Naomi Hayashi, Takayuki Tohge and Kazuki Saito: Unbiased characterization of genotype-dependent metabolic regulations by metabolomic approach in *Arabidopsis thaliana*. *BMC Sys. Biol.*, 1, 53 doi:10.1186/1752-0509-1-53 (2007)

8. なし

1. 高等植物における二次代謝の分子制御

2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季

3. 英国／ジョン イネス センター／Cathie Martin

英国／食品研究所／Anthony J. Michael



<p>4. 平成18年度～</p> <p>5. 植物における二次代謝制御を分子生物学的に解明する。</p> <p>6. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））、</p> <p>7. Jie Luo, Yasutaka Nishiyama, Christine Fuell, Goro Taguchi, Katherine Elliott, Lionel Hill, Yashikazu Tanaka, Masahiko Kitayama, Mami Yamazaki, Paul Bailey, Adrian Parr, Anthony J. Michael, Kazuki Saito and Cathie Martinn: Convergent evolution in the BAHD family of acyl transferases: identification and characterization of anthocyanin acyl transferases from <i>Arabidopsis thaliana</i>. <i>Plant Journal</i>, 50, 678-695 (2007).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 高等植物の硫黄同化機構と制御</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季</p> <p>3. ドイツ／ハイデルベルク大学／Ruedinger Hell</p> <p>4. 平成17年度～</p> <p>5. 植物における硫黄同化、代謝、変換を分子生物学的に解明する。</p> <p>6. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））、科学技術振興機構（戦略的創造研究推進事業）</p> <p>7. Cintia Goulart Kawashima, Oliver Berkowitz, Ruediger Hell, Masaaki Noji, and Kazuki Saito: Characterization and Expression Analysis of a Serine Acetyltransferase Gene Family Involved in a Key Step of the Sulfur Assimilation Pathway in <i>Arabidopsis</i>. <i>Plant Physiology</i>, 137, 220-230 (2005)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 高等植物における二次代謝の分子制御</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季</p> <p>3. ドイツ／マックスプランク研究所／Jonathan Gershenzon ドイツ／ハノーバー大学／Jutta Papenbrock</p> <p>4. 平成17年度～</p> <p>5. 植物における二次代謝制御を分子生物学的に解明する。</p> <p>6. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））、科学技術振興機構（戦略的創造研究推進事業）</p> <p>7. Masami Yokota Hirai, Marion Klein, Yuuta Fujikawa, Mitsuru Yano, Dayan B. Goodenowe, Yasuyo Yamazaki, Shigehiko Kanaya, Yukiko Nakamura, Masahiko Kiyayama, Hideyuki Suzuki, Nozomu Sakurai, Daisuke Shibata, Jim Tokuhisa, Michael Reichelt, Jonathan Gershenzon, Jutta Papenbrock, and Kazuki Saito : Elucidation of Gene-to-Gene and Metabolite-to-Gene Networks in <i>Arabidopsis</i> by Integration of Metabolomics and Transcriptomics. <i>J. Biological Chemistry</i>, 280(27), 25590-25595 (2005)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 高等植物の硫黄同化機構と制御</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季</p> <p>3. 米国／フロリダ大学／Andrew D. Hanson</p> <p>4. 平成21年度～</p> <p>5. 植物における硫黄同化、代謝、変換を分子生物学的に解明する。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金（基盤研究（A））</p> <p>7. Mutsumi Watanabe, Hans-Michael Hubberten, Kazuki Saito and Rainer Hoefgen: General regulatory patterns of plant mineral nutrient depletion as revealed by serat quadruple mutants disturbed in cysteine synthesis. <i>Mol. Plant</i>, in press (2010)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 高等植物における二次代謝の分子制御</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季</p> <p>3. ドイツ／GSF-国立環境健康研究センター／Anton R. Schaeffner</p> <p>4. 平成13年度～</p> <p>5. 植物における二次代謝制御を分子生物学的に解明する。</p> <p>6. 文部省科学研究費補助金（基盤研究（A））、科学技術振興機構（戦略的創造研究推進事業）</p> <p>7. Patrik Jones, Burkhard Messner, Jun-Ichiro Nakajima, and Anton R. Schaeffner: UGT73C6 and UGT78D1, Glycosyltransferases Involved in Flavonol Glycoside Biosynthesis in <i>Arabidopsis thaliana</i>. <i>Journal of Biological Chemistry</i>, 278,</p>

43910-43918(2003)
8. なし
1. 高等植物の硫黄同化機構と制御 2. 大学院薬学研究院／教授／斉藤 和季 3. オーストラリア／CSIRO Plant Industry, Long Pocket Laboratory／Frank W. Smith 4. 平成10年度～ 5. 植物における硫黄同化、代謝、変換を分子生物学的に解明する。 6. 文部省科学研究費補助金（特定研究）、基盤研究（B）、科学技術振興団（戦略的創造研究推進事業） 7. Naoko Yoshimoto, Hideki Takahashi, Frank W. Smith, Tomoyuki Yamaya and Kazuki Saito : Two distinct high-affinity sulfate transporters with different inducibilities mediate uptake of sulfate in Arabidopsis roots. Plant J., 29, 465-473(2002) 8. なし
1. タイ産薬用植物に関する研究 2. 大学院薬学研究院／准教授／山崎 真巳 3. タイ／チュラロンコーン大学薬学部／Suchada Sukrong 准教授 タイ／チュラロンコーン大学薬学部／Nijsiri Ruangrungsi 准教授 4. 平成19年度～ 5. 有用成分を生産する植物をスクリーニングする 6. 日本学術振興会拠点交流事業 7. なし 8. なし
1. タイ産 Pueraria 属植物における二次代謝に関する研究 2. 大学院薬学研究院／准教授／山崎 真巳 3. タイ／マヒドン大学薬学部／Sompop Prathanturug 4. 平成16年度～ 5. 植物における有用物質生産制御メカニズムを解明する 6. 日本学術振興会拠点交流事業, Royal Golden Jubilee (RGJ) for Ph D Program 7. なし 8. なし
1. タイ産薬用植物からの生理活性物質の単離 2. 大学院薬学研究院／教授／石川 勉 3. タイ王国／チュラロンコーン大学薬学部／Chaiyo Chaichantipyuth 助教授 タイ王国／チュラロンコーン大学薬学部／Nijsiri Ruangrungsi 助教授 4. 平成16年度～ 5. タイ産伝承薬用植物から、抗腫瘍活性、リパーゼ阻害活性、一酸化窒素阻害活性などの生理活性成分を単離・同定し、医薬品シード候補化合物を発見するために、広範なスクリーニングならびに成分検索研究を展開する。 6. 日本学術振興会拠点事業、Royal Golden Jubilee (RGJ) for Ph D Program（タイ）など 7. (1) M. Kanlayavattanakul, N. Ruangrungsi, T. Watanabe, M. Kawahata, B. Therrien, K. Yamaguchi, T. Ishikawa, J. Nat. Prod., 2005, 68, 7-10; (2) F. Ito, M. Iwasaki, T. Watanabe, T. Ishikawa, Y. Higuchi, Org. Biomol. Chem., 2005, 3, 674-681; (3) K. Ma, T. Ishikawa, H. Seki, K. Furihata, H. Ueki, S. Narimatsu, C. Chaichantipyuth, Heterocycles, 2005, 65, 893-900. 8. RGJ Program の一環として Ms Mayuree Kanlayavattanakul は、2005 年 5 月に タイ王国チュラロンコーン大学より博士の学位を取得した。
1. タイ産アカネ科植物 <i>Mitragyna speciosa</i> に含まれる鎮痛性アルカロイドに関する化学的薬理学的研究 2. 薬学研究院／教授／高山廣光 3. タイ国／チュラロンコーン大学薬学部/Dhavadee Ponglux 准教授 タイ国／チュラロンコーン大学薬学部/Sumphan Wongseripipatana 助教授 4. 平成18年度 5. タイ国に自生するアカネ科薬用植物 <i>Mitragyna speciosa</i> に含まれるアルカロイド,7-Hydroxymitragynine を先導化合物として用い、より有効な鎮痛活性物質を創製する。

<p>6. 科学研究費補助金（特定領域研究、基盤研究 B）、上原記念生命科学財団研究助成金</p> <p>7. 7. (1) New Procedure to Mask the 2,3-<math>\pi</math> Bond of the Indole Nucleus and Its Application to the Preparation of Potent Opioid Receptor Agonists with a Corynanthe Skeleton. H. Takayama, K. Misawa, N. Okada, H. Ishikawa, M. Kitajima, Y. Hatori, T. Murayama, S. Wongseripipatana, K. Tashima, K. Matsumoto, and S. Horie. <i>Org. Lett.</i>, <b>8</b>, 5705-5708 (2006).</p> <p>(2) Partial Agonistic Effect of 9-Hydroxycorynantheidine on <math>\mu</math>-Opioid Receptor in the Guinea-pig Ileum. K. Matsumoto, H. Takayama, H. Ishikawa, N. Aimi, D. Ponglux, K. Watanabe, S. Horie. <i>Life Sci.</i>, <b>78</b>, 2265-2271 (2006).</p> <p>(3) Involvement of <math>\mu</math>-Opioid Receptors in Antinociception and Inhibition of Gastrointestinal Transit Induced by 7-Hydroxymitragynine, Isolated from Thai Herbal Medicine <i>Mitragyna speciosa</i>. K. Matsumoto, Y. Hatori, T. Murayama, K. Tashima, S. Wongseripipatana, K. Misawa, M. Kitajima, H. Takayama, and S. Horie. <i>Eur. J. Pharmacol.</i>, <b>549</b>, 63-70 (2006).</p> <p>(4) MGM-9 [(E)-Methyl 2-(3-ethyl-7a,12a-(epoxyethanoxy)-9-fluoro-1,2,3,4,6,7,12,12b-octahydro-8-methoxyindolo[2,3-a]quinolizin-2-yl)-3-methoxyacrylate], a Derivative of the Indole Alkaloid Mitragynine: A Novel Dual-acting <math>\mu</math>- and <math>\kappa</math>-Opioid Agonist with Potent Antinociceptive and Weak Rewarding Effects in Mice. K. Matsumoto, H. Takayama, M. Narita, A. Nakamura, M. Suzuki, T. Suzuki, T. Murayama, S. Wongseripipatana, K. Misawa, M. Kitajima, K. Tashima, and S. Horie : <i>Neuropharmacology</i>, <b>55</b>, 154-165 (2008).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 中国雲南省産アカネ科植物に含まれるアルカロイドに関する化学的研究</p> <p>2. 薬学研究院/教授/高山廣光</p> <p>3. 中国/昆明医学院/張榮平教授</p> <p>4. 平成 18 年度～</p> <p>5. 中国雲南省アカネ科 <i>Kopsia</i> 属植物含有インドールアルカロイドの検索と生物活性評価を行う。</p> <p>6. 科学研究費補助金（基盤研究 B）、上原記念生命科学財団助成金</p> <p>7. (1) Y. Wu, M. Kitajima, N. Kogure, R. Zhang, H. Takayama : Two Novel Indole Alkaloids, Kopsiyunnanines A and B, from a Yunnan <i>Kopsia</i>. <i>Tetrahedron Lett.</i>, <b>49</b>, 5935-5938 and 6596 (2008).</p> <p>(2) Rhazinilam and Quebrachamine Derivatives from Yunnan <i>Kopsia arborea</i>. Y. Wu, M. Suehiro, M. Kitajima, T. Matsuzaki, S. Hashimoto, M. Nagaoka, Masato, R. Zhang, and H. Takayama. <i>J. Nat. Prod.</i>, <b>72</b>, 204-209 (2009).</p> <p>(3) Kopsiyunnanines F and Isocondylocarpines: New Tubotaiwine-type Alkaloids from Yunnan <i>Kopsia arborea</i>. Y. Wu, M. Kitajima, N. Kogure, Y. Wang, R. Zhang, and H. Takayama. <i>J. Nat. Med.</i>, <b>63</b>, 283-289 (2009).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. マチン科 <i>Gelsemium</i> 属植物含有インドールアルカロイドに関する化学的研究</p> <p>2. 薬学研究院/准教授/北島満里子</p> <p>3. タイ国/チュラロンコーン大学薬学部 /Sumphan Wongseripipatana 助教授</p> <p>4. 平成 18 年度</p> <p>5. タイ国に自生するマチン科 <i>Gelsemium</i> 属植物に含有されるインドールアルカロイド類の探索と構造解析に関する研究。</p> <p>6. 科学研究費補助金（基盤研究 C）</p> <p>7. (1) Four Novel Gelsenicine-Related Oxindole Alkaloids from the Leaves of <i>Gelsemium elegans</i> Benth. N. Kogure, N. Ishii, M. Kitajima, S. Wongseripipatana, and H. Takayama. <i>Org. Lett.</i>, <b>8</b>, 3085-3088 (2006).</p> <p>(2) New Humantenine-type Indole Alkaloids with Iridoid Unit from <i>Gelsemium</i> Species. N. Kogure, H. Kobayashi, N. Ishii, M. Kitajima, S. Wongseripipatana, and H. Takayama. <i>Tetrahedron Lett.</i>, <b>49</b>, 3638-3642 (2008).</p> <p>(3) New Iridoids from <i>Gelsemium</i> Species. N. Kogure, N. Ishii, H. Kobayashi, M. Kitajima, S. Wongseripipatana, and H. Takayama. <i>Chem. Pharm. Bull.</i>, <b>56</b>, 870-872 (2008).</p> <p>(4) Four Novel Gelsedine-type Oxindole Alkaloids from <i>Gelsemium elegans</i>. Y. Yamada, M. Kitajima, N. Kogure, and H. Takayama. <i>Tetrahedron</i>, <b>64</b>, 7690-7694 (2008).</p> <p>(5) Spectroscopic Analyses and Chemical Transformation for Structure Elucidation of Two Novel Indole Alkaloids from <i>Gelsemium elegans</i>. Y. Yamada, M. Kitajima, N. Kogure, S. Wongseripipatana, and H. Takayama. <i>Tetrahedron Lett.</i>, <b>50</b>, 3341-3344 (2009).</p> <p>8. なし</p>

<p>1. インドネシアに自生するクワ科 <i>Artocarpus</i> 属植物含有フラボノイド類に関する化学的研究</p> <p>2. 薬学研究院／教授／高山廣光</p> <p>3. インドネシア/バンドン工科大学/ Sjamsul A. Achmad 教授 インドネシア/バンドン工科大学/Euis H. Hakim 教授</p> <p>4. 平成 18 年度</p> <p>5. インドネシアに自生するクワ科 <i>Artocarpus</i> 属植物に含まれるプレニル化されたフラボノイド類の探索と構造解析に関する研究。</p> <p>6. なし</p> <p>7. (1) Prenylated Flavonoids and Related Compounds of the Indonesian <i>Artocarpus</i> (Moraceae). E. H. Hakim, S. A. Achmad, L. D. Juliawaty, L. Makmur, Y. M. Syah, N. Aimi, M. Kitajima, H. Takayama, and E. L. Ghisalberti. <i>J. Nat. Med.</i>, <b>60</b>, 161-184 (2006).</p> <p>(2) Two prenylated flavones from the tree bark of <i>Artocarpus lanceifolius</i>. Y. M. Syah, S. A. Achmad, N. Aimi, E. H. Hakim, L. D. Juliawaty, and H. Takayama. <i>Z. Naturforsch., C</i>, <b>61</b>, 1134-1137 (2006).</p> <p>(3) Prenylated Flavones from <i>Artocarpus lanceifolius</i> and Their Cytotoxic Properties against P-388 Cells. I. Musthapa, J. Latip, H. Takayama, L. D. Juliawaty, E. H. Hakim, Y. M. Syah. <i>Nat. Prod. Commun.</i>, <b>4</b>, 927-930 (2009).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 熱帯産タコノキ科 <i>Pandanus</i> 属植物含有アルカロイド類の化学的研究</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／高山廣光</p> <p>3. フィリピン/ サントトマス大学/ Maribel G. Nonato 教授</p> <p>4. 平成 12 年度～</p> <p>5. 伝承民間薬として使用されてきた熱帯産タコノキ科 <i>Pandanus</i> 属植物の含有成分の解明と含有アルカロイドの合成化学、薬理活性評価に関する共同研究を行う。</p> <p>6. なし</p> <p>7. Isolation and Structure Elucidation of Two New Alkaloids, Pandamarilactonine-C and -D, from <i>Pandanus amaryllifolius</i> and Revision of Relative Stereochemistry of Pandamarilactonine-A and -B by Total Synthesis. H. Takayama, T. Ichikawa, M. Kitajima, M. G. Nonato, and N. Aimi. <i>Chem. Pharm. Bull.</i>, <b>50</b>, 1303-1304 (2002)</p> <p>(2) Isolation and Total Syntheses of Two New Alkaloids, Dubiusamines-A and-B, from <i>Pandanus dubius</i>. M. A. Tan, M. Kitajima, N. Kogure, M. G. Nonato, and H. Takayama. <i>Tetrahedron</i>, <b>66</b>, 3353-3359 (2010).</p> <p>8. なし</p>
<p>1. デオキシコール酸類結晶を用いたメカノケミストリー</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. 大韓民国／釜山大学校薬学大学／崔 植 タイ王国／ナレスワン大学薬学部／スィーサグン・スングトングジーン</p> <p>4. 平成 9 年度～</p> <p>5. 医薬品製剤工程で繁用される粉碎操作により、結晶性医薬品の性質・性状がどのように変化するかに着目して研究を行っている。デオキシコール酸と薬品との混合粉碎による包接化合物生成、ウルソデオキシコール酸の粉碎による非晶質化等について検討している。</p> <p>6. 日韓科学協力事業として行った。</p> <p>7. ・T.Oguchi, S.Limmatvapirat, C.Takahashi, S.Sungthongjeen, W.S.Choi, E.Yonemochi and K.Yamamoto, Effect of Guest Species on Inclusion Compound Formation of Deoxycholic Acid by Co-grinding, <i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i>, <b>71</b>,1573-1579 (1998)</p> <p>・T.Oguchi, K. Kazama, E.Yonemochi, W.S.Choi, S. Limmatvapirat and K.Yamamoto,, Specific Complexation of Ursodeoxycholic Acid with Guest Compounds Induced by Co-grinding, <i>Phys.Chem.Chem.Phys.</i>, <b>2</b>, 2815-2820 (2000)</p> <p>T.Uchino,Y.Tozuka, W.S.Choi, T.Oguchi and K.Yamamoto,Inclusion Behavior of Benzoic Acid Analogues to Linear AmyloseBy the Sealed-heating Method, <i>J. Pharm. Sci. Tech. Jpn.</i>, <b>62</b>, 58-66(2002)</p> <p>・H. Y. Chung, E. Yonemochi, T. Saitoh, K. Terada, Y. Tozuka, T. Oguchi, K. Yamamoto, H. Y. Chung, W. S. Choi: Factors affecting the apparent solubility of ursodeoxycholic acid in the grinding process, <i>Int. J. Pharm.</i>, <b>255</b>, 49-56 (2003)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. キトサンフィルム内での医薬品の分子状態に関する研究</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. タイ王国／マヒドン大学薬学部／サチット・プティピパットカチャー アメリカ合衆国／バーデュー大学薬学部／ガーネット・ペック</p>

<p>4. 平成11年度～</p> <p>5. キトサンフィルムを利用して医薬品の放出制御を行うための調整法について検討し、固体NMR測定やX線回折測定などを用いて、得られたフィルム中での医薬品の分散状態を調べる。</p> <p>6. なし</p> <p>7. ・ S. Puttipatkhachorn, J. Nunthaid, K. Yamamoto, G. E. Peck, Drug Physical State and Drug-polymer Interaction on Drug Release from Chitosan Matrix Films, <i>J. Controlled Release</i>, 75, 143-153 (2001)</p> <p>・ J. Nunthaid, S. Puttipatkhachorn, K. Yamamoto, G. E. Peck, Physical Properties and Molecular Behavior of Chitosan Films, <i>Drug Dev. Ind. Pharm.</i>, 27,143-157 (2001)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 胆汁酸結晶－医薬品のメカノケミカル複合化</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. タイ王国／シルパコーン大学薬学部／ソントヤ・リンマッタワピラット</p> <p>4. 平成12年度～</p> <p>5. 医薬品製剤工程で繁用される粉碎操作により、結晶性医薬品の性質・性状がどのように変化するかに着目して研究を行っている。デオキシコール酸と薬品との混合粉碎による包接化合物生成、ウルソデオキシコール酸の粉碎による非晶質化等について検討している。</p> <p>6. なし</p> <p>7. T. Oguchi, Y. Tozuka, T. Hanawa, M. Mizutani, N. Sasaki, S. Limmatvapirat, and K. Yamamoto, Elucidation of Solid-State Complexation in Ground Mixtures of Cholic Acid and Guest Compounds, <i>Chem. Pharm. Bull.</i>, 50, 887 -891 (2002)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 固形製剤中に発現する分子間相互作用の検討</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. タイ王国／チュラロンコーン大学薬学部／スチャダ・チュティマオラパン</p> <p>4. 平成13年度～</p> <p>5. 現在製剤化技術により速溶性、徐放性等の放出制御が可能となっている。分子間相互作用がこうした溶解性、放出制御とどのように関わっているか検討を行っている。</p> <p>6. 日本学術振興会の論文事業の支援を受けた。</p> <p>7. S. Chutimaworapan, G. C Ritthidej, T. Oguchi and K. Yamamoto, Controlled Release of Nifedipine from Coevaporates Prepared with Eudragit and Poloxamer, <i>J. Pharm. Sci. Technol. Jpn.</i>, 61, 21-33 (2001)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 密封加熱法によるシクロデキストリン包接化の研究</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. 中華人民共和国／瀋陽薬科大学／王 齊放</p> <p>4. 平成13年度～</p> <p>5. トリアセチルーベーターシクロデキストリンを用いた密封加熱によるゲスト包接化のメカニズムを考察すると共に、製剤としての利用法について検討している。</p> <p>6. 中国政府奨学金の支援を受けた。</p> <p>7. なし</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 混合粉碎法による dihydroartemisinin(DHA)の微粒子化に関する研究</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 恵司</p> <p>3. タイ王国／マヒドン大学薬学部／サティット・プティピパッカチョン</p> <p>4. 平成15年度～</p> <p>5. DHA の物性評価に加えて、超臨界流体を用いた微粒子調製、DHA とシクロデキストリン、および DHA/PVP/SDS (NaDC) 3成分系での混合粉碎による微粒子化を試みた。DHA はシクロデキストリンと包接化合物を形成するため、シクロデキストリンとの混合粉碎による微粒子化はうまくいかなかったが、3成分系での混合粉碎によるナノ微粒子化には成功した。今後、ナノ微粒子の安定性を考慮した組成の最適化、および in vitro, in vivo での結果が期待される。</p> <p>6. タイ王国政府奨学金の支援を受けた。</p> <p>7. なし</p>

<p>8. なし</p>
<p>1. ClpXP プロテアーゼの基質分解機構の解析</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 友子</p> <p>3. UNESCO 国際分子生物学研究所／教授／Maciej Zylicz</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. エネルギー依存型プロテアーゼである ClpXP の新規の基質蛋白として、サルモネラ鞭毛合成調節因子 FlhD,C 蛋白を見いだした。そこで、この分解の試験管内再構築系を確立し、分解機構の解明に取り組んでいる。</p> <p>6. なし</p> <p>7. (1) Tomoyasu T, Takaya, A, Isogai, E, and Yamamoto T. Turnover of FlhD and FlhC, master regulator proteins for Salmonella flagellum biogenesis, by the ATP-dependent ClpXP protease. <i>Mol. Microbiol.</i> 48: 443-52.2003</p> <p>(2) Tomoyasu T, Ohkishi T, Ukyo Y, Tokumitsu A, Takaya A, Suzuki M, Sekiya K, Matsui H, Kutsukake K, Yamamoto T. The ClpXP ATP-dependent protease regulates flagellum synthesis in <i>Salmonella enterica</i> serovar Typhimurium. <i>J Bacteriol.</i> 184: 645-53.2002</p> <p>(3) Yamamoto T, Sashinami H, Takaya A, Tomoyasu T, Matsui H, Kikuchi Y, Hanawa T, Kamiya S, Nakane A. Disruption of the genes for ClpXP protease in <i>Salmonella enterica</i> serovar Typhimurium results in persistent infection in mice, and development of persistence requires endogenous gamma interferon and tumor necrosis factor alpha. <i>Infect Immun.</i> 69: 3164-74.2001</p>
<p>8. なし</p>
<p>1. サルモネラの SPI2 遺伝子発現制御に関する研究</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／山本 友子</p> <p>3. ドイツ／ミュンヘン大学／教授／Michael Hensel</p> <p>4. 平成16年度～</p> <p>5. サルモネラ感染症発症には、ゲノム上に存在する <i>Salmonella pathogenicity island 2 (SPI2)</i> 遺伝子群の機能が必須である。我々は最近、SPI2 遺伝子発現を制御して病原性に深く関わる新規の遺伝子を見いだしたことから、SPI2 遺伝子発現制御機構の解明を行っている。</p> <p>6. なし</p> <p>7. なし</p> <p>8. なし</p>
<p>1. タイ植物からの生物活性天然物の探索</p> <p>2. 大学院薬学研究院／教授／石橋正己</p> <p>3. タイ／コンケン大学農学部／Thaworn Kowithayakorn 教授 タイ／コンケン大学薬学部／Srisomporn Preeprame 准教授</p> <p>4. 平成19年度～</p> <p>5. タイ植物に含まれる生物活性天然物を探索し、化学構造、生物活性を明らかにする。</p> <p>6. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））、日本学術振興会拠点事業</p> <p>7. (1) Li, X.; Ohtsuki, T.; Shindo, S.; Sato, M.; Koyano, T.; Preeprame, S.; Kowithayakorn, T.; Ishibashi, M. "Mangiferin identified in a screening study guided by neuraminidase inhibitory activity" <i>Planta Medica</i> 2007, 73, 1195-1196</p> <p>(2) Kikuchi, H.; Ohtsuki, T.; Koyano, T.; Kowithayakorn, T.; Sakai, T.; Ishibashi, M. "Brandisianins A-F, isoflavonoids isolated from <i>Millettia brandisiana</i> in a screening program for death-receptor expression enhancement activity" <i>J. Nat. Prod.</i> 2007, 70, 1910-1914.</p> <p>(3) Ohtsuki, T.; Kaneko, N.; Koyano, T.; Kowithayakorn, T.; Kawahara, N.; Goda, Y.; Ishibashi, M. "Cell growth and cell cycle inhibitory activities of 20-epidiosgenyl saponin from <i>Calamus insignis</i>" <i>Heterocycles</i> 2007, 74, 931-936.</p> <p>(4) Tamaki, M.; Sadhu, S. K.; Ohtsuki, T.; Toume, K.; Koyano, T.; Kowithayakorn, T.; Ishibashi, M. "Parviflorene J, a cytotoxic sesquiterpene dimer with a new rearranged skeleton from <i>Curcuma parviflora</i>" <i>Heterocycles</i> 2007, 72, 649-654</p> <p>(5) Aoki, W.; Ohtsuki, T.; Sadhu, S. K.; Sato, M.; Koyano, T.; Preeprame, S.; Kowithayakorn, T.; Ishibashi, M. "First isolation of three diterpenes as naturally-occurring compounds from <i>Sindora siamensis</i>" <i>J. Nat. Med.</i> 2007, 61, 77-79</p>

8. なし
1. バングラデシュ植物からの生物活性天然物の探索 2. 大学院薬学研究院／教授／石橋正己 3. バングラデシュ／クルナ大学／Samir K. Sadhu 准教授 4. 平成19年度～ 5. バングラデシュ植物に含まれる生物活性天然物を探索し、化学構造、生物活性を明らかにする。 6. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））、東京生化学研究会国際共同研究助成 7. (1) Sadhu, S. K.; Khatun, A.; Phattanawasin, P.; Ohtsuki, T.; Ishibashi, M. "Lignan glycosides and flavonoids from <i>Saraca asoca</i> with antioxidant activity" <i>J. Nat. Med.</i> 2007, 61, 480-482. (2) Sadhu, S. K.; Khan, M. S.; Ohtsuki, T.; Ishibashi, M. "Secoiridoid components from <i>Jasminum grandiflorum</i> " <i>Phytochemistry</i> 2007, 68, 1718-1721. (3) Sadhu, S. K.; Khatun, A.; Ohtsuki, T.; Ishibashi, M. "First isolation of sesquiterpenes and flavonoids from <i>Zingiber spectabile</i> and identification of zerumbone as the major cell growth inhibitory component" <i>Nat. Prod. Res.</i> 2007, 21, 1242-1247.
8. なし

<b>看護学部</b>
1. 中国安徽省農村部における女性のメンタルヘルス支援に関する研究 ―暮らしの中に埋め込まれた知恵を手がかりに― 2. 千葉大学看護学部 教授 岩崎弥生 3. 山東省泰山医学院看護学部 教授・看護学院長 劉化侠（平成19年11月～平成21年10月予定） 上海中医薬大学基礎医学院 准教授 黄品賢（平成19年11月～平成20年10月） 4. 平成19年11月～ 5. 中国農村部においては高い自殺率や被虐待率など女性のメンタルヘルス上の問題が浮上している。しかしながら、農村部においてはメンタルヘルス資源が圧倒的に不足しており、資源の貧困な地域の実情に合わせた女性のメンタルヘルス支援が求められる。 本研究は、中国安徽省の農村女性のメンタルヘルス維持に関わる日常生活上の知恵やつながりを明らかにして、その結果を踏まえ、女性の生活の知恵やつながりを生かした、医療福祉資源の貧困な農村部でも実現可能な新しい形のメンタルヘルス支援について検討することを目的としている。 研究第一年目は、女性たちの日常生活に焦点を当てながら、女性たちが経済的に厳しい状況と抑圧的に働く社会的文化的状況の中でどのような体験をしているのか、また女性たちがどのようにして過酷な生活を生き延びているのかについて調査し、農村部の女性たちが日々の生活の中で培ってきた生きる力や知恵を明らかにすることをめざした。なお、本研究では、「知恵」を「日常に生起する問題や葛藤を解決する助けになる実際的な技術」と定義し、データを収集・分析した。 参加観察と聞き取りにより得られたデータを質的に分析し、農村女性の苦勞とライフスキルの性質を抽出した。苦勞は、貧困、ジェンダー、教育、伝統・文化、出稼ぎによる人口移動などと関連していることが示唆された。女性のライフスキルは、働き盛りの男たち（夫や息子）が出稼ぎで不在の中で、自らの力で世帯・農業を切り盛りし世間とわたりあってきた過程で獲得されたことが示唆された。 研究第二年目に入った現在、村の女性たちの着想や意見を取り入れながら、女性たちの知恵やつながりを生かしたメンタルヘルス支援を検討しているところである。 6. トヨタ財団 2007 年度研究助成 7. トヨタ財団 2007 年度研究助成 研究活動経過報告書, pp. 1-4, 2008. 8. なし

<b>大学院工学研究科</b>
1. 計算流体力学、バイオメティクス及びUVVに関する研究 2. 工学研究科 機械系コース／教授／劉 浩 3. 中国／上海交通大学／船舶建築工学院／Gang Chen (副学長、学院長、教授), Ni Ma (副学院長、教授), Decheng Wan (教授), Tong Ge

(教授)

4. 平成20年度～
5. 上海交通大学と千葉大工学研究科劉(浩)研究室と、魚類遊泳の機動性及びバイオメティクス、そして Underwater Unmanned Vehicle(UUV)に関する3年間の共同研究プロジェクトを推進している。
6. 中国教育部「長江学者講座教授(Chang Jiang Chair Professorship)」補助金(平成20年度～21年度)
7. なし
8. ・平成19年8月 上海交通大学に招聘し「バイオメカニクスとバイオメティクス」に関するセミナーを開催し、船舶建築工学院及び生命科学院の教員らと、生物や生体のバイオメカニクス現象、バイオメティクス及び船舶海洋工学への応用について様々な観点から議論。訪問中、上海交通大学の客員教授が授与され、また中国教育部「長江学者講座教授(Chang Jiang Chair Professorship)」への申請を要請された。  
・平成20年3月 中国教育部「長江学者講座教授(Chang Jiang Chair Professorship)」への申請が採択され、上海交通大学を訪問船舶建築工学院及び生命科学院の教員らと、生物や生体のバイオメカニクス現象、今後の魚類遊泳の機動性及びバイオメティクス、そして Underwater Unmanned Vehicle(UUV)に関する研究計画について議論。また、今後上海交通大学から優秀な学生を学位取得を目的とし千葉大劉浩研究室へ留学させることに合意した。

1. 生物飛行における流体力学的現象及び運動メカニズムに関する研究
2. 工学研究科 機械系コース/教授/劉 浩
3. イギリス/ケンブリッジ大学/動物学科・教授/Charlie P. Ellington
4. 平成8年度～
5. ケンブリッジ大動物学科と千葉大工学研究科劉(浩)研究室と、昆虫羽ばたき飛行における流体力学的現象、低レイノルズ数における羽ばたき翼の空力性能に関する共同研究プロジェクトを推進している。今年度より特に超小型昆虫の羽ばたき飛行における渦構造と空気力学性能に関する共同研究を行っている。
6. 日本学術振興機構外国人特別研究員支援制度(平成17年度)
7. 発表論文と著書:
  - 1) H. Liu, Simulation-based biological fluid dynamics, *Transaction of the ASME Applied Mechanics Reviews*, **58**, 269-282, 2005.
  - 2) H. Liu, Computational biological fluid dynamics: digitizing and visualizing swimming and flying, Special issue on Dynamics and Energetics of Animal Swimming and Flying, *Integrative and Comparative Biology*, **42** (5), 1050-1059, 2002.
  - 3) H. Liu and K. Kawachi, A numerical study of insect flight, *Journal of Computational Physics*, **146** (1), 124-156, 1998.
  - 4) H. Liu, C.P. Ellington, K. Kawachi, Coen van den Berg and A. P. Willmott, A computational fluid dynamic study of hawk moth hovering, *Journal of Experimental Biology*, **201** (4), 461-477, 1998.
8. ・平成8年 東京で科学技術振興機構主催ワークショップ「昆虫飛行」でEllington教授と昆虫飛行の運動メカニズム及び羽ばたき翼まわりの前縁渦現象について様々な観点から議論。  
・平成9年～10年 劉浩教授が2回ほどケンブリッジ大学Ellington教授の研究室を訪問し昆虫羽ばたき飛行に関する計算流体力学的解析について研究打合せを重ねた結果該分野のトップジャーナルに論文発表。  
・平成11年7月 ケンブリッジ大学で科学技術振興機構とケンブリッジ大学共同主催ワークショップ「ミリバイオフライト」でEllington教授と昆虫飛行の非定常流体力学メカニズムについて様々な観点から議論。  
・平成12年6月 アメリカ航空宇宙学会主催国際会議「固定翼、回転翼及び羽ばたき翼飛行体」に於いて招待講演発表し、昆虫羽ばたき飛行メカニズム及び小型飛行体への応用について様々な観点から議論。  
・平成17年4月 共同研究及び交流を深めるため、Ellington教授の指導された博士研究員Dr. GerdaがJSPS外国人研究員として採用され劉浩教授研究室に研究滞在し大きな研究成果を上げている。  
・平成19年10月に千葉大学で「バイオマイクロ空中ロボティクスデザイン機構」を発足して、Ellington教授が千葉大学客員教授として工学研究科の集中講義や千葉大主催の国際シンポジウム等で千葉大学工学研究科の教育・研究に携わることになる。またケンブリッジ大学動物学科との部局間交流協定ならびに学生交流協定締結に至った。

1. 計算流体力学、生物飛行及び小型飛行体に関する研究
2. 工学研究科 機械系コース/教授/劉 浩
3. アメリカ/ミシガン大学/航空工学科長・教授/Wei Shyy
4. 平成10年度～
5. ミシガン大航空工学科と千葉大工学研究科劉(浩)研究室と、生物羽ばたき飛行のモデリング技術、低レイノルズ数空気流体力学及



び生物型超小型飛行機の設計指針に関して、幾つの研究プロジェクトを推進している。

6. 文部科学省の国際化推進プログラム（平成18年度）

7. 発表論文と著書：

1) W. Shyy, Y. Liang, J. Tang, H. Liu, O. Trizila, B. Stanford, L. Bernal, C. Cesnik, P. Friedmann and P. Ifju, Computational Aerodynamics of Low Reynolds Number Plunging, Pitching and Flexible Wings, *AIAA Paper 2008-xxxx*, 2008. (*Invited*)

2) H. Aono, W. Shyy, and H. Liu, Vortex dynamics in near wake of a hovering hawkmoth, *AIAA Paper 2008-0260*, 2008.

3) H. Aono and H. Liu, *Simulation-based biomechanics in insect flight*, Insect Biomimetics, NTS Publisher, 2007.

4) W. Shyy, Y.S. Lian, J. Tang, D. Viieru, and H. Liu, *Aerodynamics of low Reynolds Number Flyers*. Cambridge University Press, 2007.

5) W. Shyy, and H. Liu, Flapping wings and aerodynamic lift: the role of leading-edge vortices, *AIAA Journal*, 45(2), 2819-2821, 2007.

6) H. Aono and H. Liu, A Numerical Study of Hovering Aerodynamics in Flapping Insect Flight, Bio-mechanisms of Animals in Swimming and Flying, *Springer-Tokyo*, 2007.

7) H. Aono and H. Liu, Near- and far-field aerodynamics in insect hovering flight: an integrated computational study, *Journal of Experimental Biology*, 211, 239-257, 2007.

8) H. Liu, H. Aono, Y. Inada, and W. Shyy, Size effect in insect flight: leading-edge vortex, trailing-edge vortex and tip vortex, *Journal of Biomechanics (Supplement)*, 39(1), S356, 2006.

9) D. Viieru, J. Tang, Y. S. Liang, H. Liu, and W. Shyy, Flapping and Flexible Wing Aerodynamics of Low Reynolds Number Flight Vehicles, *AIAA Paper 2006-0503*, 2006.

8. ・平成10年～平成19年 平成16年までフロリダ大学航空工学科長の時代を含めて Shyy 教授と、毎年フロリダ大学がミシガン大学と劉浩教授の前勤務先理化学研究所か千葉大学で生物飛行や小型飛行体の研究についてセミナーを開催し様々な観点から議論。

・平成18年7月3-7日 劉浩教授が現代表を務めるエアロ・アクアバイオメカニズム研究会主催第3回エアロ・アクアバイオメカニズム国際会議（於沖縄、実行副委員長：劉浩教授）に、Shyy 教授をキーノートに招聘し、千葉大学劉浩研究室と沖縄国際会議場にて生物飛行や小型飛行体の研究について様々な観点から議論。

・平成18年8月8日—10月1日 劉浩教授が文部科学省の国際化推進プログラムでミシガン大学 Shyy 教授の研究室に研究滞在し、セミナーをひらき、生物飛行や小型飛行体の研究について、Shyy 教授、並びに研究室の学生やポストドク研究員と様々な観点から議論。またケンブリッジ大学出版社にて「Aerodynamics of Low Reynolds Number Flyers」という著書を共著出版。

・平成20年1月6-10日 アメリカ航空宇宙学会年次大会(46th AIAA Aerospace Sciences Meeting and Exhibit)に於いて招待講演を含め、共著で2つの論文を発表。更に学会誌 *AIAA Journal* に共著論文 (invited) を1編発表。

・平成20年1月21-24日 Shyy 教授が千葉大学工学研究科に於いて、バイオマイクロ空中ロボティクスデザイン機構の客員教授として「小型飛行体のための航空力学」を題した集中講義を実施。劉浩教授並びに研究室学生らと生物飛行や小型飛行体の研究について様々な観点から議論。また、部局間交流協定締結に至った。

1. 人体通信用アンテナシステムに関する研究

2. 工学研究科 メディカルシステムコース/教授/伊藤 公一

3. イギリス/ロンドン大学クイーンメリー校/ Yang Hao

4. 平成18年度～

5. 人体近傍および内部に信号を伝搬させることにより、人体を信号伝送路として用いる人体通信がさかんに研究されている。この通信システム用アンテナについて、両大学の得意分野を活かし、対等な協力のもとに、数値計算ならびに実験の両面から研究開発する。電磁波研究では伝統のあるロンドン大学クイーンメリー校が主に数値解析を担当し、一方、人体ファントムを開発している千葉大学が主に実験の評価を担当する。

6. なし

7. (1). Nozomi Haga, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Characteristics of cavity slot antenna for body-area networks," *IEEE Transactions on Antennas and Propagation*, vol.57, no.4, pp.837-843, Apr. 2009.

(2). Xia Wei, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Performances of an implanted cavity slot antenna embedded in the human arm," *IEEE Transactions on Antennas and Propagation*, vol.57, no.4, pp.894-899, Apr. 2009.

(3). Koichi Ito, "Antennas for body-centric wireless communications," *2009 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2009)*, Bangkok, Thailand, Oct. 2009.

- (4). Nozomi Haga, Koichi Ito, Masaharu Takahashi, and Kazuyuki Saito, "Numerical simulations of on-body channel in the frequency range of 2.5 MHz to 2.5 GHz," *2009 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2009)*, pp.508-511, Bangkok, Thailand, Oct. 2009.
- (5). Nozomi Haga, and Koichi Ito, "Frequency dependence of on-body channels with top-loaded monopole antennas in the range of HF to UHF," *Asia-Pacific Microwave Conference 2009 (APMC2009)*, TH2E-7(#2029), Singapore, Dec. 2009.
- (6). 宇野由美子, 齊藤一幸, 高橋応明, 伊藤公一, "2~10 GHzにおける人体の組織構造がアンテナ特性に与える影響評価," 電子情報通信学会論文誌 B, vol.J93-B, no.2, pp.278-285, Feb. 2010.
- (7). 中島崇志, 齊藤一幸, 高橋応明, 伊藤公一, "リストバンド型 RFID 用アンテナの特性解析," 電子情報通信学会論文誌 B, vol.J93-B, no.2, pp.286-293, Feb. 2010.
- (8). Koichi Ito, "Electric field distributions around the human body generated by a small wearable antenna," *International Workshop on Antenna Technology 2010 (iWAT2010)*, Lisbon, Portugal, Mar. 2010.
- (9). Hayato Mizuno, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Development of an implanted helical folded dipole antenna for 2.45 GHz applications," *International Workshop on Antenna Technology 2010 (iWAT2010)*, Lisbon, Portugal, Mar. 2010.

(平成 20 年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1). Xia Wei, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Implanted cavity slot antenna for 2.45GHz applications," *Proceedings of 2008 IEEE AP-S International Symposium and USNC/URSI National Radio Science Meeting*, CD-ROM, San Diego, CA, USA, July. 2008.
- (2). ChangYong SEO, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Propagation characteristics in body area networks by use of asymptotic analysis," *Proceedings of XXIX General Assembly of the International Union of Radio Science*, BCK-p.5, Chicago, USA, Aug. 2008.
- (3). Yumiko Uno, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Improvement of tissue-equivalent phantom with capillary blood flow for measurement of temperature rises due to microwave radiation," *2008 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2008)*, pp.1003-1006, Taipei, Taiwan, Oct 2008.
- (4). Takuya Seki, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Wristwatch-type UWB antenna for wireless body area network," *2008 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2008)*, Taipei, Taiwan, Oct 2008.
- (5). Nozomi Haga, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Fundamental study on a perturbed patch antenna on small ground plane aimed at multi polarization and matching stability on WBAN applications," *Proceedings of the International Workshop on Antenna Technology 2008 (iWAT2008)*, p.206, Santa Monica, USA, Mar. 2009.
- (6). Koichi Ito, Nozomi Haga, Masaharu Takahashi, and Kazuyuki Saito, "Electric field distributions around the human body with a small antenna in the frequency range of 2.5 MHz to 2.5 GHz," *Proceedings of the International Workshop on Antenna Technology 2008 (iWAT2008)*, Special Session 6-5, Santa Monica, USA, Mar. 2009.
- (7). Moe Sakuraoka, Masaharu Takahashi, Kazuyuki Saito, Koichi Ito, and Norio Ishikawa, "Input characteristics and radiation pattern of RFID tag antenna attached to teeth," *Technical Committee on Antennas and Propagation*, pp.59-62, Macau, China, Mar. 2009.
- (8). Yumiko Uno, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Characteristics of antennas closely-placed to different arm models" *Technical Committee on Antennas and Propagation*, pp.63-66, Macau, China, Mar. 2009.

(平成 19 年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1). Koichi Ito, "Numerical and experimental human body phantoms," *The institution of engineering and technology seminar on Antennas and propagation for body-centric wireless communications*, London, UK, Apr. 2007.
- (2). Daisuke Ochi, Masaharu Takahashi, Kazuyuki Saito, Koichi Ito, Aya Ohmae, and Kouichi Uesaka, "Evaluation on performances of wristband type RFID antenna using a biological tissue-equivalent solid phantom," *Taiwan-Japan Joint Meeting on Antennas and Propagation*, pp.1-4, Chung-Li, Taiwan, Mar. 2007.
- (3). Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Electromagnetic field distributions of wearable devices using the human body as a transmission channel," *IEEE Trans. on Antennas and Propagation*, vol.55, no.7, pp.2080-2087, July 2007.
- (4). Koichi Ito, Hiroki Usui, "Implanted H-shaped Cavity Slot Antenna," *CNC/USNC North American Radio Science Meeting (URSI 2007)*, URSI514, Ottawa, Canada, July 2007.

- (5).Koichi Ito, "Electric Field distributions around the Human Body with a Wrist-type Wearable Device at HF Band," *CNC/USNC North American Radio Science Meeting (URSI 2007)*, URSI527, Ottawa, Canada, July 2007.
- (6).Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, Naoki Inagaki, "A Study on the Electric Field Distribution around Human Body with Wearable Devices Focused on the Earth Ground," *2007 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2007)*, pp.410-413, Niigata, Japan, Aug. 2007.
- (7).ChangYong SEO, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, "Asymptotic Analysis of a Wearable Device Attached to the Human Body by Using Sommerfeld integral," *2007 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP 2007)*, pp.1146-1149, Niigata, Japan, Aug. 2007.
- (8).ChangYong SEO, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Full-Wave Analysis of a Wearable Device Using the Human Body as a Transmission Channel," *International Workshop on Health Effects on EMF and Bioelectromagnetic Environment*, Seoul, Korea, Sep. 2007.
- (9).Koichi Ito, "Human Body Phantoms for Evaluation of Wearable and Implantable Antennas," *European Conference on Antennas and Propagation (EuCAP 2007)*, CD-ROM, Edinburgh, UK, Nov. 2007.
- (10).Nozomi Haga, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "A cavity-backed slot antenna for on-body BAN devices," *Proceedings of the International Workshop on Antenna Technology 2008 (iWAT2008)*, pp.510-513, Chiba, Japan, Mar. 2008.

(平成18年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1). Keisuke Hachisuka , Yusuke Terauchi, Yoshinori Kishi, Ken Sasaki, Terunao Hirota, Hiroshi Hosaka, Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Simplified circuit modeling and fabrication of intrabody communication devices, " *Sensors & Actuators: A. Physical* 130-131, pp.322-330, Apr. 2006.
  - (2). Hiroki Usui, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Radiation characteristics of an implanted cavity slot antenna into the human body," *2006 IEEE Antennas and Propagation Society International Symposium*, pp.1095-1098, Albuquerque, USA, July 2006.
  - (3). Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, "Study on the Electromagnetic Field Distributions of Realistic Japanese Adult Male and Female Models with a Wearable Device Using the Human Body as a Transmission Channel," *2006 IEEE Antennas and Propagation Society International Symposium*, pp.2121-2124, Albuquerque, USA, July 2006.
  - (4). Koichi Ito, Masaharu Takahashi, and Katsuyuki Fujii, "Antennas and Propagation for Body Centric Wireless Communications Systems: Chapter 4. - Transmission Mechanism of the Wearable Devices Using the Human Body as a Transmission Channel- ", (分担執筆) , ARTECH HOUSE, Sept. 2006.
  - (5). Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, and Naoki Inagaki, "Study on the electric field distributions around whole body model with a wearable device using the human body as a transmission channel," *European Conference on Antennas and Propagation (EuCAP 2006)*, CD-ROM, Nice, France, Nov. 2006.
8. ロンドンで開かれた IET セミナー (2009 年 4 月) およびリバプール大学 (2010 年 3 月) において、研究代表者・伊藤公一が相手側代表者の Yang Hao と会い、研究打ち合わせを行なった。

1. 電磁波と人体との相互影響評価法に関する研究

2. 工学研究科 メディカルシステムコース/教授/伊藤 公一

3. イギリス/ロンドン大学クイーンメリー校/Xiaodong Chen

4. 平成15年度～

5. ますます多様化する携帯無線機器から放射される電磁波が人体へ与える影響および人体が携帯無線機器の特性に与える影響の双方を精度良く評価する方法について、両大学の得意分野を活かし、対等な協力のもとに、数値計算ならびに実験の両面から研究開発する。電磁波と人体との相互影響評価法に関する研究について、電磁波研究では伝統のあるロンドン大学クイーンメリー校が主に数値解析を担当し、一方、人体ファントムを開発している千葉大学が主に実験的評価を担当する。

6. なし

7. (1).Keisuke Hachisuka , Yusuke Terauchi, Yoshinori Kishi, Ken Sasaki, Terunao Hirota, Hiroshi Hosaka, Katsuyuki, Fujii, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Simplified circuit modeling and fabrication of intrabody communication devices, " *Sensors & Actuators: A. Physical* 130-131, pp.322-330, Apr. 2006.

(2). Hiroki Usui, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Radiation characteristics of an implanted cavity slot antenna into the

human body," *2006 IEEE Antennas and Propagation Society International Symposium*, pp.1095-1098, Albuquerque, USA, July 2006.

- (3).Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, "Study on the Electromagnetic Field Distributions of Realistic Japanese Adult Male and Female Models with a Wearable Device Using the Human Body as a Transmission Channel," *2006 IEEE Antennas and Propagation Society International Symposium*, pp.2121-2124, Albuquerque, USA, July 2006.
- (4). Tomoaki Nagaoka, Toshihiro Togashi, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, Takuya Ueda, Hisao Osada, Hisao Ito, and Soichi Watanabe, "An anatomically realistic voxel model of the pregnant woman and numerical dosimetry for a whole-body exposure to RF electromagnetic fields," *28th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society*, pp.5463-5467, New York, USA, Sep. 2006.
- (5).Hiroki Kawai, Koichi Ito, Masaharu Takahashi, Kazuyuki Saito, Takuya Ueda, Masayoshi Saito, Hisao Ito, Hisao Osada, Yoshio Koyanagi, and Koichi Ogawa "Simple modeling of an abdomen of pregnant women and its application to SAR estimation, " *IEICE Transactions on Communications*, vol. E89-B, no. 12, pp.3401-3410, Dec. 2006.
- (6). Toshihiro Togashi, Tomoaki Nagaoka, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, Soichi Watanabe, Takuya Ueda, Masayoshi Saito, Hisao Ito, and Hisao Osada, "Development of a Japanese 7-month pregnant woman model and evaluation of SAR generated by mobile radio terminals," *European Conference on Antennas and Propagation (EuCAP 2006)*, CD-ROM, Nice, France, Nov. 2006.
- (7). Katsuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, and Naoki Inagaki, "Study on the electric field distributions around whole body model with a wearable device using the human body as a transmission channel," *European Conference on Antennas and Propagation (EuCAP 2006)*, CD-ROM, Nice, France, Nov. 2006.

(平成 17 年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1). Katuyuki Fujii, Masaharu Takahashi, Koichi Ito, Keisuke Hachisuka, Yusuke Terauchi, Yoshinori Kishi, Ken Sasaki, and Kiyochi Itao, "Study on the transmission mechanism for wearable device using the human body as a transmission channel, " *IEICE Trans. Commun.*, vol.E88-B, no.6, pp. 2401-2410, June 2005.
- (2). Koichi Ito, Kazuyuki Saito, Masaharu Takahashi, and Atsushi Hiroe, "Applications of coaxial-slot antenna for interstitial and intracavitary microwave hyperthermia," *Proceedings of 11th International Symposium on Antenna Technology and Applied Electromagnetics*, p. 156-157, Saint Malo, France, June 2005.
- (3). Koichi Ito, Hiroki Kawai, Masaharu Takahashi, Kazuyuki Saito, Takuya Ueda, Masayoshi Saito, Hisao Ito, Hisao Osada, Yoshio Koyanagi, and Koichi Ogawa, "Evaluation of the local SAR in a simple abdomen model of pregnant women at 150 MHz," *Abstract collection of Bioelectromagnetics 2005*, pp. 133-136, Dublin, Ireland, June 2005.
- (4). Teruo Onishi , Ryo Ishido, Takuya Takimoto, Kazuyuki Saito, Shinji Uebayashi, Masaharu Takahashi, and Koichi Ito, "Biological tissue-equivalent agar-based solid phantoms and SAR estimation using the thermographic method in the range of 3-6 GHz, " *IEICE Trans. Commun.*, vol. E88-B, no. 9, pp. 3733-3741, Sep. 2005.
- (5). Koichi Ito and Kazuyuki Saito, "Coaxial-slot antennas for interstitial and intracavitary microwave hyperthermia," *Abstract on Annual Scientific Meeting of Institute of Physics and Engineering in Medicine*, p. 58, Glasgow, United Kingdom, Sep. 2005.
- (6). Koichi Ito, "Microwave Antennas for Medical Applications", *Final program of ISOCOM 2005*, p.8, Kaohsiung, Taiwan, Nov. 2005.
- (7). Kazuyuki Saito, Yutaka Aoyagi, Koichi Ito, Hirotochi Horita, "Interstitial microwave hyperthermia using coaxial-slot antennas - clinical trials based on numerical calculations of heating patterns-, " *Japanese Journal of Hyperthermic Oncology*, vol. 21, no. 4, pp. 237-245, Dec. 2005.
- (8).Koichi Ito, Kazuyuki Saito, "Thin coaxial antennas for interstitial and intracavitary microwave thermal therapies," *17th International Zurich Symposium on Electromagnetic Compatibility*, pp. 71-74, Singapore, Singapore, Mar. 2006.
- (9).Koichi Ito, Katsuyuki Fujii, "Development and Investigation of the Transmission Mechanism of the Wearable Devices Using the Human Body as a Transmission Channel," *2006 IEEE International Workshop on Antenna Technology*, pp. 140-143, New York, USA, Mar. 2006.

(平成 16 年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1).Koichi Ito, Hiroki Kawai, "Phantoms for evaluation of interactions between antennas and human body," *Proceedings of URSI Symposium on Electromagnetic Theory*, vol. 2, pp. 1104-1106, Pisa, Italy, May 2004.
- (2).Ryo Ishido, Teruo Onishi, Kazuyuki Saito, Shinji Uebayashi, and Koichi Ito, "A study on the solid phantoms for 3-6 GHz and evaluation of SAR distributions based on the thermographic method," *Proceedings of 2004 International Symposium on Electromagnetic Compatibility, EMC'04*, vol. 3B3-2, pp. 577-580, Sendai, Japan, Jun. 2004.
- (3).Teruo Onishi, Ryo Ishido, Kazuyuki Saito, Shinji Uebayashi, and Koichi Ito, "The influence of a phantom shell on SAR measurement in higher frequency range (3-6GHz)," *BEMS Twenty-Sixth Annual Meeting*, P-B-26, pp. 163-164, Washington DC, USA, Jun. 2004.
- (4).Yoshio Koyanagi, Shoichi Kajiwara, Koichi Ogawa, and Koichi Ito, "Movement of the peak SAR location in close proximity to the surface of a COST 244 phantom exposed to a dipole array antenna," *Proceedings of the 2004 International Symposium on Antennas and Propagation*, vol. 2, pp. 789-792, Sendai, Japan, Aug. 2004.
- (5).Hiroki Kawai, and Koichi Ito, "Simple evaluation method of estimating local average SAR," *IEEE Transactions on Microwave Theory and Techniques*, vol. 52, no. 8, pp. 2021-2029, Aug. 2004
- (6).Koichi Ito, Hiroki Kawai, Masaharu Takahashi, Kazuyuki Saito, Takuya Ueda, Masayoshi Saito, Hisao Ito, Hisao Osada, Yoshio Koyanagi, Koichi Ogawa, "A simple abdomen phantom of pregnant women at VHF band," *Proceedings of United States National Committee International Union of Radio Science*, K1-6, P. 460, Colorado, USA, Jan. 2005.
- (7).Koichi Ito and Hiroki Kawai, "Solid phantoms for evaluation of interactions between the human body and antennas," *Proceedings of 2005 IEEE International Workshop on Antenna Technology (IWAT)*, pp. 41-44, Singapore, Singapore, Mar. 2005.

(平成 15 年度に発表された主な論文, 出版物等)

- (1).Yoshio Koyanagi, Hiroki Kawai, Koichi Ogawa, and Koichi Ito, "Estimation of the local SAR in the human abdomen using a human body phantom and small antennas at 150 MHz," *The transactions of the Institute of Electronics, Information and Communication Engineers B*, vol. J86-B, no. 7, pp. 1207-1218, Jul. 2003.(in Japanese)
- (2).Teruo Onishi, Koichi Ito, "The relationship between electromagnetic field outside the surface of a lossy object close to a dipole antenna and SAR distribution," *The transactions of the Institute of Electronics, Information and Communication Engineers B*, vol. J86-B, no. 7, pp. 1255-1258, Jul. 2003.(in Japanese)
- (3).Yoshio Koyanagi, Hiroki Kawai, Koichi Ogawa, and Koichi Ito, "Internal distribution of the local SAR in the human abdomen measured by a split phantom and small helical antennas at 150 MHz," 2003 IEEE International Antennas and Propagation Symposium and USNC/CNC/URSI North American Radio Science Meeting, vol. 3, pp. 1079-1082, Columbus, USA, Jun. 2003.
- (4).Hiroki Kawai, Yoshio Koyanagi, Koichi Ogawa, Kazuyuki Saito, and Koichi Ito, "A study on the evaluation of the electromagnetic exposure in the human fetus model at 150 MHz," 2003 IEEE International Antennas and Propagation Symposium and USNC/CNC/URSI North American Radio Science Meeting, vol. 3, pp. 1087-1090, Columbus, USA, Jun. 2003.
- (5).Hiroki Kawai, Toshihiro Yokota, Yoshio Koyanagi, Koichi Ogawa, Kazuyuki Saito, and Koichi Ito, "A study on the human abdomen phantom for SAR estimation based on the electric constants of internal organs of a rabbit," Technical Report of IEICE, Tokyo, vol. 103, no. 29, pp. 17-22, Apr. 2003.(in Japanese)
- (6).Koichi Ito, "General considerations on the human alike phantom," Proceedings of the 2003 IEICE general conference Tutorial on the Systematization of investigation on human alike electromagnetic phantom, Niigata, TB-5-1, Sep. 2003.(in Japanese)
- (7).Toshihiro Yokota, Hiroki Kawai, Koichi Ito, Kazuyuki Saito, Hiroyuki Yoshimura, Takuya Ueda, Masayoshi Saito, Hisao Ito, Yoshio Koyanagi, Koichi Ogawa, "Evaluation of the SAR using a simple abdomen model based on pregnant women data," Technical Report of IEICE, IEICE Technical Group on Electromagnetic Compatibility, Tokyo, vol. EMCJ2003-126, pp. 13-18, Jan. 2004.(in Japanese)
- (8).Ryo Ishido, Teruo Onishi, Kazuyuki Saito, Shinji Uebayashi, and Koichi Ito, "Study on solid phantoms and Measurement of SAR in the frequency range 3-6 GHz," Technical Report of IEICE, YRP, vol. 103, no. 674, AP2002-299, pp. 115-120, Mar. 2004.(in Japanese)

8. 2007 年 3 月に、研究代表者・伊藤公一がイギリスで開催される国際会議参加の折りに、相手側代表者

<p>の Xiaodong Chen と会い、研究打ち合わせを行なった。</p>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. PLUS50 環境共生ビルディング</li> <li>2. 工学研究科 都市環境システムコース／教授／小林秀樹, 助教／丁 志映</li> <li>3. 韓国／韓国建設技術研究院／金洙岩 建築都市研究室長</li> <li>4. 平成 18 年度～</li> <li>5. 長寿命共同住宅 (SI 住宅など) の法制度・政策に関する共同研究</li> <li>6. 韓国中・長期国家研究開発 (R&amp;D) 課題</li> <li>7. 最初の共同論文を準備中</li> <li>8. なし</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 設計荷重の信頼性に関する研究</li> <li>2. 工学研究科 建築学コース／教授／高橋 徹</li> <li>3. アメリカ合衆国／ジョージア工科大学／ブルース・エリングウッド</li> <li>4. 2000.11～現在に至る</li> <li>5. 建築構造物の構造設計に用いる荷重外力の評価とその国際協調に関する研究討議を行っている。</li> <li>6. 山下太郎顕彰育英会奨学金</li> <li>7. T. Takahashi, B.R. Ellingwood: Reliability-based assessment of roofs in Japan subjected to extreme snows, <i>Structural Engineering</i>, Vol.27, No.1, pp.89-95, 2005.1.</li> <li>8. なし</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 印刷インキのレオロジー制御と印刷適性評価</li> <li>2. 工学研究科 都市環境システムコース／教授／大坪泰文</li> <li>3. 韓国／釜慶大学／南 壽龍</li> <li>4. 2001年～現在</li> <li>5. 印刷インキのレオロジー的性質と印刷適性との関係の解析と工業的に応用するための制御法の確立</li> <li>6. なし</li> <li>7. (1) 「Rheological Behavior during Phase Separation Induced by UV Curing」 Su Yong NAM, Mikihiro SAKAI, and Yasufumi OTSUBO, <i>Material Science Research International</i>, 8, 9-13(2002)</li> <li>(2) 「蛍光体層のスクリーン印刷と熱転写による平面モノクロム CRT の開発」 南 壽龍、季 賢哲、大坪泰文、<i>日本印刷学会誌</i>、39, 388-393(2002)</li> <li>(3) 「Rheology and Firing Properties of Phosphor Pastes for CRT Displays」 Su Yong NAM, Mi Young LEE, Young Bea KIM, Yasufumi OTSUBO, <i>日本レオロジー学会誌</i>, 32, 123-128(2004)</li> <li>8. なし</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ベトナムにおける伝統工芸村建設に関する総合的調査・研究</li> <li>2. 工学部／准教授／植田憲 (名誉教授／宮崎清)</li> <li>3. オーストリア／UNIDO (United Nations Industrial Development Organization : 国際連合工業開発機関)／鈴木直人主任研究員 ベトナム／ハノイ大学／Dinh Thi Dung 教授</li> <li>4. 平成 10 年度～</li> <li>5. ベトナム北部に建設が予定されている「ベトナム伝統工芸村」の建設計画、ならびに運営方策を具体的に設定するため、国際連合の一機関である UNIDO との共同で行なっている調査・研究。とくに、現在は、ベトナム中央政府・農業農村発展省 MARD(Ministry of Agriculture and Rural Development)、JICA (Japan International Cooperation Agency)とともに、ベトナムの伝統的工芸品産業振興の法整備に関する諸作業を進めている。</li> <li>6. 財団法人・伝統的工芸品産業振興協会、UNIDO、MARD、JICA</li> <li>7. Kiyoshi Miyazaki, Report on Establishing A Traditional Art and Craft Village, UNIDO(United Nations Industrial Development Organization),1998.11, Total page 48 (A4)</li> <li>Kiyoshi Miyazaki, Report on Establishing A Traditional Art and Craft Village, UNIDO(United Nations Industrial Development Organization),1999.10, Total page 65 (A4)</li> <li>Establishing a Traditional Vietnamese Art and Craft Village (TF/VIT/96/10E) Terminal Report, Prepared for the Government of the Socialist Republic of Vietnam, UNIDO (United Nations Industrial Development Organization), 2000.10, Total page 200 (A4)</li> <li>8. 2000 年 5 月、ベトナム中央政府農村農業発展省主催で、ニンビン省、および、ハノイ市にて、「伝統的工芸品産業の保</li> </ol>

護と振興に関する国際シンポジウム」を実施し、基調講演「日本における伝統的工芸品産業の保護と振興」「日本における伝統的工芸品産業の保全と振興に関する政策」を行った。2002年6-7月、ベトナム中央政府農村農業発展省主催により、ホーチミンシティ、および、ハノイ市にて、「伝統的工芸品産業の保護と振興に関する国際シンポジウム」を実施し、基調講演「伝統的工芸品産業振興に基づく維持可能な地域づくり」を行った。

1. 中国における伝統的工芸産業の振興に関するトータルデザイン
2. 工学部/准教授/植田憲 (名誉教授/宮崎清)
3. 中国/江南大学/教授・張福昌  
中国/四川大学/教授・李偉
4. 平成9年度～
5. 中国は伝統的工芸品産業の宝庫ではあるものの、今日にあっては、工業化による近代化が進展していくなかで、衰微の傾向にある。本プロジェクトは、とりわけ中国西南地域における少数民族を中心に、今日に伝えられてきた伝統的工芸品制作の実態把握に基づき、その振興のあり方をトータルデザインの視点から考察・実践する。
6. (財) 伝統的工芸品産業振興協会
7. ① 張福昌、宮崎清：日本伝統的工芸品産業及其振興政策 (中国語)、工芸美術、No.1、pp.8-9、1999  
② 張福昌、宮崎清：内発性的郷鎮建設 (中国語)、無錫輕工大學學報、pp.102-106、1999.3  
③ 宮崎清、李偉：民族地域文化的營造與設計 (中国語)、四川大學學報、pp.41-47、1996.6
8. 2000年1月に、四川大学にて、三星遺跡保存地区振興計画に関する共同シンポジウムを実施し、四川大学の名誉教授に着任した。  
2000年10月、北京中央美術學院において、「日本の伝統工芸産業の振興」に関する講演を行った。また、中央美術學院デザイン分院のスタッフたちとの交流会を開催した。  
2000年10月、四川大学芸術學院において、「日本の伝統工芸産業の振興」に関する講演を行った。  
2000年10月、江南大学において、「日本の伝統工芸産業の振興」に関する講演を行った。  
2002年5月、北京理工大学における国際デザイン会議に参加するとともに、北京理工大学の客座教授に着任した。

1. 地域資源を活用した地域振興計画に関する研究
2. 工学部/准教授/植田憲 (名誉教授/宮崎清)
3. ①台湾/国立台湾工藝研究所/翁 徐得 所長  
②台湾/雲林科學技術學院/黃 世輝 副教授
4. 平成9年度～
5. 地域社会が有するさまざまな資源の発掘とその評価に基づき、地域振興を図っていくための方法論を構築するとともに、その具体的実践事例に関する情報を相互交換する。
6. 国立台湾工藝研究所
7. ① 仰山文教基金會文化環境工作室編『全國社區總體營造博覽會』(The Community Renaissance Fair & Festival)、宜蘭縣立文化中心、A4版総頁396、1997.12  
② 行政院文化建設委員會『社區總體營造的理念與实例：全國社區總體營造博覽會：宮崎館』、A4版総頁135、1997.4  
③ 行政院文化建設委員會『社區總體營造的理念與实例II』、A4版総頁213、1998.3
8. 宜蘭県にて開催の『全國社區總體營造博覽會』にて、日本における地域振興事例をA1パネル200枚にまとめて展覧(1997.5)

1. 地域資源を活用した伝統的ものづくりと地域づくりに関する国際シンポジウム開催
2. 工学部/教授/鈴木直人  
工学部/准教授/植田憲
3. ①中国/江南大学/張 福昌 教授  
②韓国/啓明大学/ 副教授  
③台湾/雲林科學技術學院/黃 世輝 副教授  
④韓国/建國大學大學院/朴 燦一 副教授  
⑤インドネシア/バンドン工科大学/デュディ・ウィアンチョコ 副教授  
⑥タイ/タマサート大学/アーチャン・ナクソン 副教授
4. 平成16年度～
5. 地域社会が有するさまざまな資源の発掘とその評価に基づき、生活者が主体となった地域振興を図っていくための方法論を構築するとともに、その具体的実践事例に関する

情報を相互交換する。

6. ①平成16年度 千葉大学「ひとづくり・ものづくりシンポジウム」
- ②平成18年度 中国・江南大学「2006 亜洲国際検討会」
- ③平成19年度 台湾・雲林科技大学「第三屆地方資源活用與地域振興亞洲國際研討會」
- ④平成20年度 台湾・実践大学「文化創意産業發展新趨勢國際研討會」
- ⑤平成21年度 韓国・啓明大学「デザイン文化の創造国際シンポジウム」

7. ①「ひとづくり・ものづくりシンポジウム」 proceedings
- ②「2006 亜洲国際検討会」 proceedings
- ③「第三屆地方資源活用與地域振興亞洲國際研討會」 proceedings
- ④「文化創意産業發展新趨勢國際研討會」 proceedings
- ⑤「デザイン文化の創造国際シンポジウム」 proceedings

8. なし

1. 運動視の脳内機構

2. 工学研究科 デザイン科学コース／教授／日比野治雄

3. アメリカ合衆国／ボストン大学心理学部／Prof. Takeo Watanabe, Ph.D.

4. 平成14年度～

5. 運動情報の二段階処理仮説では、運動情報が視覚的に処理される過程は二段階に分かれており、第一段階で局所運動情報が処理され、第二段階で局所運動情報が全体運動情報へと統合されると仮定されている。本研究の目的は、二段階処理仮説に基づいて、視覚皮質のどの領域が局所運動情報と全体運動情報を処理しているか、心理物理学的方法と機能的MRI(fMRI)を用いて調べることであった。それぞれの方法で実験を行った結果、いずれの方法も二段階処理仮説を支持していた。心理物理学の実験の結果は局所運動の知覚学習が低次の視覚野である一次視覚野で生じ、全体運動の知覚学習がそれより高次のMT+で生じていることを示唆していた。同様に、fMRIの実験結果は、一次視覚野が局所運動刺激によって活性化され、MT+が全体運動刺激によって活性化されることを示唆していた。

6. アメリカ合衆国ボストン大学心理学部 Takeo Watanabe 教授への NSF (National Science Foundation) からの研究費  
千葉大学自然科学研究科特別研究員迎いくこへの科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)

7. Watanabe, T., Sasaki, Y., Nanez, J. E., Sr., Koyama, S., Mukai, I., Hibino, H., & Tootell, R. B. (2002). Psychophysics and fMRI reveal V1 as the locus of passive learning [Abstract]. *Journal of Vision*, 2(7), 557a

8. なし

1. 高電子供与性高分子の分子設計

2. 工学研究科 共生応用化学コース／准教授／笹沼 裕二

3. 英国／Imperial College (化学科)／Dr. Joachim H. G. Steinke and Dr. Robert V. Law

4. 平成14年度～ (平成13年度開始の「Gene Delivery ポリマーの分子設計」をより広範に改訂)

5. 燃料電池用固体高分子電解質や癌の遺伝子治療の Gene Delivery 用ポリマーとして有望視されているポリエーテル、ポリイミン、ポリスルフィドの分子内・分子間相互作用の解明を通して、高性能な電子供与性高分子ポリマーの分子設計指針を示すことを目的とする。

6. 科研費 基盤研究 (C)「含ヘテロ元素高分子の発現する分子内・分子間相互作用の解明」(課題番号 14655003)

旭硝子財団 特定研究助成 B「含ヘテロ元素高分子の電子論的解明」(平成16～18年度)

7. ① 笹沼裕二：ポリエーテルが形成する弱い水素結合，高分子加工，51(5)，218-223，2002年5月1日。

② 今津晋一，貝塚朋芳，飯嶋孝行，澤登美紗，笹沼裕二，Muhammad A. Azam，Robert V. Law，Joachim H. G. Steinke：ポリエチレンイミンおよびそのモデル化合物のコンホメーション解析，第51回高分子学会年次大会(パシフィコ横浜)，IPj040，p.479，2002年5月29日。

③ 服部聖，今津晋一，飯嶋孝行，貝塚朋芳，澤登美紗，笹沼裕二，M. A. Azam，R. V. Law，J. H. G. Steinke：ポリエチレンイミンおよびそのモデル化合物のコンホメーション解析，日本化学会第82秋季年会(大阪大学)，4A6-02，p.52，2002年9月28日。

④ 笹沼裕二：鎖状ポリエーテルの分子内・分子間相互作用，日本化学会第82秋季年会(大阪大学)，4A6-17，p.57，2002年9月28日。

⑤ Yuji Sasanuma, Satoshi Hattori, Shinichi Imazu, Tomoyoshi Kaizuka, Takayuki Iijima, Misa Sawanobori, Muhammad A. Azam, Robert V. Law, and Joachim H. G. Steinke: Intramolecular and Intermolecular Hydrogen Bonds Found in Poly(ethylene imine) and Its Model Compounds, IUPAC Polymer Conference on the Mission and Challenges of Polymer Science and Technology (Kyoto), 44PA-018, 2002年12月4日。



- ⑥ Yuji Sasanuma : Intramolecular Interactions of Polyethers and Polysulfides, Investigated by NMR, Ab Initio Molecular Orbital Calculations, and Rotational Isomeric State Scheme: An Advanced Analysis of NMR Data, *Annual Reports on NMR Spectroscopy*, Vol. 49, (G. A. Webb Ed.), Academic Press (Elsevier Science), New York; Chapter 5 , 2003 年 5 月.
- ⑦ Yuji Sasanuma, Satoshi Hattori, Shinichi Imazu, Satoshi Ikeda, Tomoyoshi Kaizuka, Takayuki Iijima, Misa Sawanobori, Muhammad A. Azam, Robert V. Law, and Joachim H. G. Steinke, “Conformational Analysis of Poly(ethylene imine) and Its Model Compounds: Rotational and Inversional Isomerizations and Intramolecular and Intermolecular Hydrogen Bonds”, *Macromolecules*, 37, 9169-9183 (2004).

8. なし.

1. 地震防災に関する共同研究
2. 工学研究科 都市環境システムコース/教授/山崎文雄
3. アルジェリア/フェリ・ブメディエン科学技術大学/Prof. Djillali Benouar
4. 平成 19 年度～継続中
5. 世界の地震多発地帯に位置する日本とアルジェリアの間で、地震防災に関するさまざまなテーマの共同研究を推進する.
6. 奨学寄付金
7. Remote Sensing Technologies in Post-Disaster Damage Assessment, F. Yamazaki, M. Matsuoka, *Journal of Earthquakes and Tsunamis*, World Scientific Publishing Company, Vol. 1, No. 3, 193-210, 2007.
8. 地震防災に関する日本-アルジェリア国際ワークショップ開催(2007 年 9 月)

1. 地震防災に関する共同研究
2. 工学研究科 都市環境システムコース/教授/山崎文雄
3. ペルー/ペルー国立工科大学/Prof. Carlos Zavala
4. 平成 17 年度～継続中
5. 世界の地震多発地帯に位置する日本とペルーの間で、地震防災に関するさまざまなテーマの共同研究を推進する.
6. 科学研究費, 奨学寄付金
7. 1) Damage detection in earthquake disasters using high-resolution satellite images: F. Yamazaki, Y. Yano., M. Matsuoka, Structural Safety and Reliability: Proceedings of the 8th International Conference on Structural Safety and Reliability, 8p, 2005.
- 2) Remote Sensing Technologies for Earthquake and Tsunami Disaster Management, F. Yamazaki, M. Matsuoka, Proceedings of the 2nd Asia Conference on Earthquake Engineering, Manila, Philippines, Paper No. IA4, 20p, 2006.
8. 地震防災に関する日本-ペルー国際ワークショップ開催(2005, 2007)  
<http://ares.tu.chiba-u.jp/~workshop/index.htm>  
 山崎文雄教授が、ペルー人留学生の教育と地震防災に関する共同研究の推進への貢献により、2007 年にペルー国立工科大学から名誉博士号を授与される。  
<http://www.uni.edu.pe/sitio/novedades/2007/dryamasaki.htm>

## 大学院融合科学研究科

1. 有機半導体界面の電子状態
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. 中国/香港市立大学/S.T.Lee 教授  
中国/蘇州大学/J. Tang 教授グループ
4. 平成 17 年 10 月開始
5. 有機半導体薄膜・界面の電子状態に関する共同研究
6. 21 世紀 COE プログラムおよびグローバル COE プログラム
7. 最初の共同論文を準備中
8. 平成 21 年 11 月 6-7 日、千葉大学にて、“Global-COE Workshop on Organic Electronics: Electronic States, Charge Transport and Devices” (Fastening Asian researcher’s network), 72 名 (うち外国人 15 名): 主な招待講演者 Prof. A. Wee /National Univ. Singapore, Prof. W.-Y. Chou /National Cheng Kung Univ., Dr. T.Hasegawa/ AIST.を開催。  
平成 22 年 1 月 25-28 日、千葉大学にて、“The 5th Edition of The International Workshop on Electronic Structure and

Processes at Molecular-Based Interfaces (ESPMI-V)”, 89名(うち外国人 33名): 主な招待講演者 Prof. J-L. Brédas/ Georgia Ins. of Tech., Prof. C. Woell/ Karlsruhe Ins. of Tech., Prof. A. Kahn/ Princeton Univ.を開催。

1. 分光学的手法による低次元有機半導体薄膜の電子構造研究
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. インド/マドラス工学研究所/A. Patnaik 教授
4. 平成 14 年～
5. 構造を制御した高秩序有機薄膜の低次元性に着目しその電子構造を研究する。これらの研究によって、有機デバイスへの応用だけでなく、その界面でのエネルギーレベル接合に関する基本的問題の解明をはかると共に、ナノスケールの分子デバイスの電極問題への発展もはかる。
6. JSPS 外国人研究者招聘事業、科学技術振興調整費、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど。
7. Archita Patnaik, Hiroyuki Setoyama and Nobuo Ueno: Surface / Interface Electronic Structure in C<sub>60</sub> Anchored Aminothiolate Self-Assembled Monolayer: An Approach to Molecular Electronics J. Chem. Phys. 120(13), 6214-6221 (2004).
8. Selected to: March 29, 2004 issue of Virtual Journal of Nanoscale Science & Technology.

1. 高精度光電子分光法による高配向有機薄膜・界面の価電子構造に関する研究
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. スウェーデン/リンシェーピン大学 /R. Friedlein 博士ほか W.R.Salaneck 教授の研究室メンバー  
米国/ジョージア工科大学/J. L. Brédas 教授
4. 平成 15 年～
5. 複雑な構造の新有機半導体や、高度に配列した有機半導体の最上部の価電子状態を高精度光電子分光法をはじめとする分光法によって研究し、弱い相互作用の有機系に特徴的な物性の物理的原因を解明する。
6. 日本学術振興会外国人研究者招聘事業、学術創成研究費、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど
7. Electronic Delocalization in Discotic Liquid Crystals: A Joint Experimental and Theoretical Study, ,Xavier Crispin, Jérôme Cornil, Rainer Friedlein, Koji Kamiya Okudaira, Vincent Lemaur, Annica Crispin, Gaël Kestemont, Matthias Lehmann, Mats Fahlman, Roberto Lazzaroni, Yves Geerts, Göran Wendin, Nobuo Ueno, Jean-Luc Brédas, and William R. Salaneck: J. Am. Chem. Soc., (2004).
8. 平成 15 年 10 月 21-25 日、日本-スウェーデン 2 国間協力、学術創成研究、21 世紀 COE などによる国際会議 ASOMEAII ( The 2nd Japan-Sweden Workshop on Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications) を湘南国際村 (神奈川県横須賀市) にて 開催。  
平成 17 年 6 月 30 日-7 月 4 日、ASOMEAIII ( The 3rd Japan-Sweden Workshop on Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications) をスウェーデンで開催。  
平成 19 年 10 月 8-12 日、 ASOMEA IV (The 4th Japan-Sweden Workshop on Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications) を千葉県で開催。  
平成 21 年 9 月 30 日-10 月 2 日、スウェーデン、Krusenberg Herrgard にて “The 5th Japan-Sweden Workshop on Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications”、 参加者 50 名 (うち外国人 34 名) : 主な招待講演者 Prof. C. S. Fadley/Univ. California – Davis, Prof. P. Rudolf/Univ. Groningen, Prof. O. Inganäs/ Linköping Univ.を開催。

1. 有機半導体の電子状態：電荷移動度の研究
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. スウェーデン/リンシェーピン大学/W.E.Salaneck 教授  
スウェーデン/リンシェーピン大学/R. Friedlein 博士
4. 平成 16 年 7 月から継続中
5. 有機半導体の移動度を支配するホール-振動カップリングを高分解能光電子分光法で研究
6. 日本学術振興会(外国人研究者招待)、学術創成研究 (科研費)、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど
7. (1)Hole-vibration coupling of the highest occupied state in pentacene thin films, H. Yamane, S. Nagamatsu, H. Fukagawa, S. Kera, R. Friedlein, K.K. Okudaira, and N. Ueno, Phys. Rev. B 72, 153412 (2005).  
  
(2)Hole-vibration coupling in the uppermost valence band photoemission of pentacene monolayer on graphite, H. Yamane, S. Nagamatsu, H. Fukagawa, S. Kera, K.K. Okudaira, N. Ueno and R. Friedlein,

Mol. Cryst. Liq. Crys. 455, 235-240 (2006).

8. Selected to Virt. J. Nano. Sci. & Tech., 12(20) 2005 and Virt. J. Ultrafast Sci., 4(11) 2005. (<http://www.vjnano.org>) (<http://www.vjultrafast.org>)

1. 単分子デバイスの電子状態
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. イスラエル/ワイツマン科学研究所/D. Cahen 教授, L. Kronik 教授グループ  
米国/プリンストン大学/A. Kahn 教授グループ  
ドイツ/デュルツブルグ大学/ E. Umbach 教授, A. Schoell 博士等のグループ,
4. 平成 17 年 11 月から開始
5. 単分子デバイスの分子と電極の接合における電子状態を解明する。
6. 学術創成研究 (科研費)、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど
7. Radiation damage to alkyl chain monolayers on semiconductor substrates investigated by electron spectroscopy, F. Amy, C. K. Chan, W. Zhao, J. Hyung, M. Ono, T. Sueyoshi, S. Kera, G. Neshet, A. Salomon, L. Segev, O. Seitz, H. Shpaisman, A. Schoell, M. Haeming, T. Boelckig, D. Cahen, L. Kronik, N. Ueno, E. Umbach, and A. Kahn, J. Phys. Chem. B. 110, 21826-21832 (2006).
8. 平成 22 年 1 月 25-28 日、千葉大学において、“The 5th Edition of The International Workshop on Electronic Structure and Processes at Molecular-Based Interfaces (ESPMI-V)”を開催。参加者 89 名 (うち外国人 33 名) : 主な招待講演者 Prof. J-L. Brédas/ Georgia Ins. of Tech., Prof. C. Woell/ Karlsruhe Ins. of Tech., Prof. A. Kahn/ Princeton Univ.

1. 有機デバイス界面の電子状態
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. 米国/プリンストン大学/A. Kahn 教授グループ
4. 平成 13 年 4 月から開始
5. 分子と電極の接合における電子状態を解明する。
6. 学術創成研究 (科研費)、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど
7. (1)Impact of an interface dipole layer on molecular level alignment at an organic-conductor interface studied by UPS, S. Kera, Y. Yabuuchi, H. Yamane, H. Setoyama, K.K. Okudaira, A. Kahn, and N. Ueno, Phys. Rev. B. 70(8), 085304-1-6 (2004)  
(2)Study of excited states of fluorinated copper phthalocyanine by inner shell excitation, K.K.Okudaira, H. Setoyama, H. Yagi, M. Mase, S. Kera, A. Kahn and N. Ueno, J. Electron Spec. & Relat. Phenom.137-140, 137-140 (2004).
8. 平成 22 年 1 月 25-28 日、千葉大学において、“The 5th Edition of The International Workshop on Electronic Structure and Processes at Molecular-Based Interfaces (ESPMI-V)”を開催。参加者 89 名 (うち外国人 33 名) : 主な招待講演者 Prof. J-L. Brédas/ Georgia Ins. of Tech., Prof. C. Woell/ Karlsruhe Ins. of Tech., Prof. A. Kahn/ Princeton Univ.

1. 有機半導体界面の電子状態
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. ドイツ/フンボルト大学/N. Koch 教授グループ  
ドイツ/チュービンゲン大学/ F. Schreiber 教授グループ
4. 平成 16 年 9 月から開始
5. 有機半導体の接合における電子状態を解明する。
6. 21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムなど
- 7 (1)Vacuum sublimed  $\alpha$ ,  $\omega$ -dihexylsexithiophene thin films: Correlating electronic structure and molecular orientation, S. Duhm, I. Salzmann, N. Koch, H. Fukagawa, T. Kataoka, S. Hosoumi, K. Nebashi, S. Kera, and N. Ueno, J. Appl. Phys. 104,033717-1-7 (2008).  
(2)Influence of intramolecular polar bonds on interface energetics in perfluoro-pentacene on Ag(111) , S. Duhm, S. Hosoumi, I. Salzmann, A. Gerlach, M. Oehzelt, B. Wedl, T.-L. Lee, F. Schreiber, N. Koch, N. Ueno, and S. Kera, Phys. Rev. B 81, 045418-1-6 (2010).
8. 平成21年8月10-12日、東京大学柏キャンパスにて、“ISSP Workshop on Physics and New Phenomena of p-Electronic Interfaces”

を開催。参加者160名(うち外国人9名):主な招待講演者 Prof. V. Podzorov/Rutgers Univ., Prof. S. Tautz/ Jülich, Prof. F. Schreiber/ Tuebingen Univ.

平成22年1月25-28日、千葉大学において、“The 5th Edition of The International Workshop on Electronic Structure and Processes at Molecular-Based Interfaces (ESPMI-V)”を開催。参加者89名(うち外国人33名):主な招待講演者 Prof. J-L. Brédas/ Georgia Ins. of Tech., Prof. C. Woell/ Karlsruhe Ins. of Tech., Prof. A. Kahn/ Princeton Univ.

1. 有機半導体界面の構造と電子状態
2. 融合科学研究科/教授/上野信雄
3. シンガポール/シンガポール国立大学/A. Wee 教授、W. Chen 博士グループ
4. 平成 21 年 4 月から開始
5. 有機半導体の接合における電子状態を解明する。
6. 日本学術振興会、グローバル COE プログラムなど
7. 準備中
8. 平成21年11月6-7日、千葉大学にて、“Global-COE Workshop on Organic Electronics: Electronic States, Charge Transport and Devices” (Fastening Asian researcher’s network) を開催。参加者72名(うち外国人15名):主な招待講演者 Prof. A. Wee /National Univ. Singapore, Prof. W.-Y. Chou /National Cheng Kung Univ., Dr. T.Hasegawa/ AIST.  
平成 21 年 11 月 6-7 日、千葉大学にて、“Global-COE Workshop on Organic Electronics: Electronic States, Charge Transport and Devices” (Fastening Asian researcher’s network) を開催。参加者 72 名(うち外国人 15 名): 主な招待講演者 Prof. A. Wee /National Univ. Singapore, Prof. W.-Y. Chou /National Cheng Kung Univ., Dr. T.Hasegawa/ AIST.

1. 半導体レーザー励起高出力 Nd ドープ固体レーザーの開発
2. 融合科学研究科 画像マテリアルコース/教授/尾松孝茂
3. 英国/Imperial College London/Prof. M.J. Damzen
4. 1997 年 2 月-present
5. 半導体レーザー側面励起固体レーザーの高出力化と高機能化に関する共同研究である。特に、新しいレーザー素子であるセラミック材料やバナデート混晶を中心にレーザー素子の評価と高出力化を行った。
6. 平成 15 年度日本学術振興会特定国派遣研究事業  
平成 18 年度日本学術振興会二国間共同研究事業  
平成 20 年度日本学術振興会二国間共同研究事業
7. (1) “High repetition rate Q-switching performance in transversely diode-pumped Nd doped mixed gadolinium yttrium vanadate bounce laser“, Takashige Omatsu, Masahito Okida, Ara Minassian, Michael J. Damzen, Optics Express **14** No.7 (2006) 2727-2734.  
(2) “Over 40-watt diffraction-limited Q-switched output from neodymium-doped YAG ceramic bounce amplifiers”, Takashige Omatsu, Kouji Nawata, Daniel Sauder, Ara Minassian, Michael J. Damzen, Optics Express **14** No.18 (2006) 8198-8204.  
(3) “Passive Q-switching of a diode-side-pumped Nd doped mixed gadolinium yttrium vanadate bounce laser”, T. Omatsu, A. Minassian, M.J. Damzen, Appl. Phys. B **90** No.3-4 (2008) 445-449.  
(4) "Passive Q-switching of a diode-side-pumped Nd doped 1.3 μm ceramic YAG bounce laser", T. Omatsu, A. Minassian, M.J. Damzen, Opt. Commun. **282** (2009) 4784-4788.  
共著論文総数 10 件、国際会議 12 件、共著書 1 編
8. 2000 年には尾松孝茂助教授(当時) が日本学術振興会特定国派遣研究員として Imperial College London に 6 カ月滞在、共同研究を行った。2003 年より日本学術振興会の日英共同研究事業として継続している。2005 年 7 月には A.Minassian 博士、2008 年 7 月には M.J. Damzen 教授が来日し、学内講演を行った。

1. 全固体黄色レーザーの開発
2. 融合科学研究科 画像マテリアルコース/教授/尾松 孝茂
3. 豪州/マククワリー大学(Macquarie University)/Dr. H.Pask, Prof. J.Piper
4. 平成 9 年度～

<p>5. 固体レーザーの可視域における未踏波長である黄色領域で発振する全固体レーザーを開発する。 酸化ヘモグロビンの吸収波長にあたるこのレーザーは眼底治療をはじめとする医療応用が可能である。</p> <p>6. 日本学術振興会日豪共同研究事業（平成13－15年度）</p> <p>7. (1) “Heat generation in Nd doped vanadate crystals with 1.34 <math>\mu</math>m laser action”, M. Okida, M. Itoh, T. Yatagi, H. Ogilvy, J. Piper, T. Omatsu, <i>Opt.ics Express</i> <b>13</b> No.13 (2005) 4909-4915. (2) “All-solid-state continuous-wave yellow laser based on intracavity frequency-doubled self-Raman laser action”, H.M. Pask, P.Dekker, A. Lee, T. Omatsu, J.A. Piper, <i>Appl. Phys. B</i> <b>88</b> No.4 (2007) 539-544. (3) “Passively Q-switched yellow laser formed by a self-Raman composite Nd:YVO<sub>4</sub>/YVO<sub>4</sub> crystal”, T. Omatsu, A. Lee, H.M. Pask, J.A. Piper, <i>Appl. Phys. B</i> <b>97</b> (2009) 799–804. 共著論文総数 10 件</p> <p>8. 尾松孝茂教授はマッコーリー大学客員研究員として 1997 年、1998 年、1999 年、2006 年、2008 年、招待されて、研究活動と招待講演を行った。また、1998 年にはマッコーリー大学博士課程学生（当時）J.L.Blows が来日し、千葉大学にて研究を行った。2001 年度より日本学術振興会の日豪共同研究事業として継続している。2004 年 7 月、2009 年 7 月に J.M.Dawes 助教授が来日し、学内講演を行った。現在、融合科学研究科との部局間交流締結を準備中。</p>
<p>1. 新規フォトリフラクティブ結晶 Sn<sub>2</sub>P<sub>2</sub>S<sub>6</sub> 結晶を用いた高出力ピコ秒レーザーの開発</p> <p>2. 融合科学研究科 画像マテリアルコース/教授/尾松孝茂</p> <p>3. スイス連邦/Swiss Federal Institute of Technology Zurich/Dr. M. Jazbinsek</p> <p>4. 2008 年-present</p> <p>5. フェロエレクトリック半導体結晶である Sn<sub>2</sub>P<sub>2</sub>S<sub>6</sub> 結晶を側面励起ピコ秒固体レーザーに導入し、高出力化と高ビーム品質化をはかる共同研究である。</p> <p>6. 平成 20 年度日本学術振興会外国人特別研究員(短期)</p> <p>7. (1) "Optical phase conjugation of picosecond pulses at 1.06<math>\mu</math>m in Sn<sub>2</sub>P<sub>2</sub>S<sub>6</sub>:Te for real-time wavefront correction in high-power Nd-doped amplifier systems", Tobias Bach, Kouji Nawata, Mojca Jazbinsek, Takashige Omatsu, Peter Gunter, <i>Optics Express</i> 18, No. 1., (2010) 87–95 国際会議 1 件</p> <p>8. 2008 年に T. Bach 博士が日本学術振興会外国人特別研究員として来日し、共同研究を行った。2008 年、2009 年、M. Jazbinsek 博士が来日し、学内講演と博士前期課程学生のための講義を担当した。</p>
<p>1. 半導体表面上の低次元ナノ構造体の物性研究</p> <p>2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/准教授/坂本一之</p> <p>3. スウェーデン/リンショーピン大学/R.I.G. Uhrberg 教授</p> <p>4. 平成 14 年度～</p> <p>5. 金属原子の吸着によって半導体表面上に誘起された一・二次元ナノ構造体は種々の興味深い低次元物性を示す可能性を秘めている。本国際共同研究においては、シリコンやゲルマニウム表面上に金属原子の吸着によって形成される低次元ナノ構造体の電子構造と原子構造を決定することにより、これまでに報告のない種々の低次元物性を観測・解明する。</p> <p>6. 科学研究費補助金（若手研究(B)平成 14 年度-16 年度、基盤研究(C)平成 17 年度-19 年度、基盤研究(A)平成 20 年度—）、Swedish Research Council</p> <p>7. (1) “Abrupt Rotation of the Rashba spin to the direction perpendicular to the surface”, K. Sakamoto, T. Oda, A. Kimura, K. Miyamoto, M. Tsujikawa, A. Imai, N. Ueno, H. Namatame, M. Taniguchi, P.E.J. Eriksson, and R.I.G. Uhrberg, <i>Phys. Rev. Lett.</i> 102, 096805-1-4 (2009). (2) “Electronic structure of the Si(110)-(16x2) surface: High-resolution ARPES and STM investigation”, K. Sakamoto, M. Setvin, K. Mawatari, P.E.J. Eriksson, K. Miki, and R.I.G. Uhrberg, <i>Phys. Rev. B</i> 79, 045304-1-6 (2009). (3) “High-temperature annealing and surface photovoltage shifts on Si(111)7<math>\times</math>7”, H. M. Zhang, K. Sakamoto, G.V. Hansson, and R.I.G. Uhrberg, <i>Phys. Rev. B</i> 78, 035318-1-7 (2008). (4) “Lithium-induced dimer reconstructions on Si(001) studied by photoemission spectroscopy and band-structure calculations”, P.E.J. Eriksson, K. Sakamoto, and R.I.G. Uhrberg, <i>Phys. Rev. B</i> 75, 205416-1-9 (2007). (5) “Core-level photoemission study of thallium adsorbed on a Si(111)-(7<math>\times</math>7) surface: Valence state of thallium and the charge state of surface Si atoms”, K. Sakamoto, P.E.J. Eriksson, S. Mizuno, N. Ueno, H. Tochiyama, and R.I.G. Uhrberg, <i>Phys. Rev. B</i></p>

74, 075335-1-5 (2006).

(6) "Structural investigation of the quasi-one-dimensional reconstructions induced by Eu adsorption on a Si (111) surface", K. Sakamoto, A. Pick and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 72, 195342-1-9 (2005).

(7) "Electronic structure of the Ca/Si (111)-(3x2) surface", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 69, 125321-1-7 (2004).

(8) "Band structure of the Ca/Si (111)-(2x1) surface", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 68, 245316-1-5 (2003).

(9) "Surface electronic structures of Au-induced reconstructions on the Ag/Ge (111)  $\sqrt{3}\times\sqrt{3}$  surface", H.M. Zhang, K. Sakamoto, and R.I.G. Uhrberg, Surf. Sci. 532-535, 934-939 (2003).

(10) "Structural investigation of the Ca/Si (111) surfaces", K. Sakamoto, W. Takeyama, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 66, 165319-1-8 (2002).

8. なし

1. 高速時間分解光電子分光による酸素分子の吸着・反応過程の研究

2. 工学部/准教授/坂本一之

3. スウェーデン/リンショープ大学/R.I.G. Uhrberg 教授

4. 平成 14 年度～

5. シリコン表面上の酸素吸着は、2 原子分子の吸着・反応過程を研究する典型的な系であるとともに、ナノメートルスケールデバイステクノロジーなど応用面からも興味もたれる研究対象である。本国際共同研究では準安定化学・物理吸着種に特に着目し、高速時間分解高分解能光電子分光を用いて原子レベルで酸化過程を理解する。

6. 科学研究費補助金若手研究(B)平成 14 年度-16 年度、基盤研究(C)平成 17 年度-19 年度)、Swedish Research Council

7. (1) "Adsorption and reaction processes of physisorbed molecular oxygen on a Si(111)-(7×7) surface", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 72, 075346-1-6 (2005).

(2) "Photoemission study of metastable oxygen adsorbed on a Si(111)-(7×7) surface", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 70, 035301-1-5 (2004).

(3) "Initial oxidation process of a Si(111)-(7×7) surface studied by photoelectron spectroscopy", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Thin Solid Films, 464-465, 10-13 (2004).

(4) "Observation of two metastable oxygen species adsorbed on a Si(111)-(7×7) surface; reinterpretation of the initial oxidation process", K. Sakamoto, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 68, 075302-1-5 (2003).

(5) "Determination of the bonding configuration of the metastable molecular oxygen adsorbed on a Si(111)-(7×7) surface", K. Sakamoto, F. Matsui, M. Hirano, H.W. Yeom, H.M. Zhang, and R.I.G. Uhrberg, Phys. Rev. B 65, 201309(R)-1-4, (2002)

8. なし

1. 水溶液の構造と熱物性

2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/教授/西川恵子

3. カナダ/ブリティッシュコロンビア大学/Y. Koga 博士 (化学)

デンマーク/ロスキレ大学/P. Westh 教授 (化学)

4. 平成 12 年度～

5. X線回折法、化学ポテンシャル測定、熱量測定、エントロピー測定など多角的な実験から非電解質水溶液の構造を解明する。

6. 教育研究拠点支援形成経費、科学研究費基盤B、委任経理金

7. 様々な非電解質水溶液の構造、特に水の構造組織化と疎水基の関連を明らかにしてきた。

<発表論文>

1) A Thermodynamic Study of Aqueous Acetonitrile: Excess Chemical Potentials, Partial Molar Enthalpies, Entropies and Volumes, and Fluctuations.

P. V. Nikolova, S. J. B. Duff, P. Westh, C. A. Haynes, Y. Kasahara, K. Nishikawa and Y. Koga  
*Can. J. Chem.*, **78**, 1553-1560 (2000).

2) Mixing Schemes of Aqueous Dimethyl Sulfoxide: A Support by X-ray Diffraction Data.

Y. Koga, Y. Kasahara, K. Yoshino and K. Nishikawa  
*J. Sol. Chem.* **30**, 885-893 (2001).

3) Chemical Potential and Concentration Fluctuation in Some Aqueous Alkane-mono-ols at 25 °C.

J. Hu, C. A. Haynes, A. H. Y. Wu, C. M. W. Chang, M. G. M. Chen, E. G. M. Yee, T. Ichioka,  
K. Nishikawa and Y. Koga

*Can. J. Chem.* **81**, 141-149 (2003).

4) Excess Partial Molar Entropy of Alkane-mono-ols in Aqueous Solutions at 25 °C.

Y. Koga, P. Westh and K. Nishikawa

*Can. J. Chem.* **81**, 150-155 (2003)

5) The Effects of Na<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> and NaClO<sub>4</sub> on the Molecular Organization of H<sub>2</sub>O.

Y. Koga, P. Westh and K. Nishikawa

*J. Phys. Chem. A* **108**, 1635-1637 (2004).

6) "Icebergs" or No "Icebergs" in Aqueous Alcohols?: Composition-dependent Mixing Schemes.

Y. Koga, K. Nishikawa and P. Westh

*J. Phys. Chem. A* **108**, 3873-3877 (2004).

7) Towards Understanding the Hofmeister Series (1): The Effect of Sodium Salts of Some Anions on the Molecular Organization of H<sub>2</sub>O.

Y. Koga, P. Westh, J. V. Davies, K. Miki, K. Nishikawa H. Katayanagi

*J. Phys. Chem. A* **108** (in press).

8. なし

1. 半導体量子細線・量子ドットの輸送現象に関する研究

2. 融合科学研究科 ナノ物性コース／教授／落合勇一

3. アメリカ合衆国／アリゾナ州立大学／電気工学科／D. K. フェリー教授

4. 平成10年度～

5. アリゾナ州立大学と千葉大学融合科学研究科落合研究室とで、半導体量子細線や量子ドットにおける輸送現象に関する共同研究プロジェクトを推進している。とくに極低温走査ゲート顕微技術による量子輸送現象のイメージングといった新しい研究手法の開発を進めている。

6. 日本学術振興会・日米科学協力（平成10年度～12年度）

科学技術研究費補助金・基盤研究A（平成19年度～21年度）

7. 1) L. -H. Lin, N. Aoki, K. Nakao, A. Andresen, C. Prasad, F. Ge, J. P. Bird, D. K. Ferry, Y. Ochiai, K. Ishibashi, Y. Aoyagi, and T. Sugano: Localization effect in mesoscopic quantum dots and quantum-dot arrays, *Physical Review B*, **60**, No. 24, p.R16299-R16302 (1999).

2) Y. Takagaki, M. ElHassan, A. Shailos, C. Prasad, J. P. Bird, D. K. Ferry, K. H. Ploog, L. -H. Lin, N. Aoki and Y. Ochiai: Magnetic-field-controlled electron dynamics in quantum cavities, *Phys. Rev. B*, **62**, p.10255-10259 (2000).

3) C. Prasad, D. K. Ferry, A. Shailos, M. ElHassan, J. P. Bird, L. -H. Lin, N. Aoki, Y. Ochiai, K. Ishibashi and Y. Aoyagi: Phase braking and energy relaxation in open quantum-dot arrays, *Phys. Rev. B*, **62**, p.15356-15358 (2000).

4) A. Shailos, J. P. Bird, C. Prasad, M. ElHassan, L. Shifren, D. K. Ferry, L. -H. Lin, N. Aoki, K. Nakao, Y. Ochiai, K. Ishibashi, and Y. Aoyagi: Confinement-induced enhancement of electron-electron interactions in open quantum-dot array, *Phys. Rev. B*, **63**, p.241302-1-4 (2001).

5) M. ElHassan, J. P. Bird, A. Shailos, C. Prasad, R. Akis, D. K. Ferry, Y. Takagaki, L. -H. Lin, N. Aoki, Y. Ochiai, K. Ishibashi and Y. Aoyagi: Coupling-driven transport from multiple to single-dot interference in open quantum-dot arrays, *Phys. Rev. B*, **64**, p.085325-1-7 (2001).

6) N. Aoki, D. Oonishi, Y. Iwase, Y. Ochiai, K. Ishibashi, Y. Aoyagi, J. P. Bird: Influence of interdot coupling on electron-wave interference in an open quantum-dot molecule, *Appl. Phys. Lett.* **80**, p.2970-2972 (2002).

7) N. Aoki, C. R. da Cunha, R. Akis, D. K. Ferry, and Y. Ochiai: "Imaging of integer quantum Hall edge state in a quantum point contact via scanning gate microscopy", *Phys. Rev. B*, **72**, 155327-1-4 (2005).

8) N. Aoki, C. R. Da Cunha, R. Akis, and D. K. Ferry, and Y. Ochiai: "Scanning gate microscopy investigations on an InGaAs quantum point contact, *Appl. Phys. Lett.* **87**, 223501-1-3 (2005).

9) C. R. da Cunha, N. Aoki, T. Morimoto, R. Akis, D. K. Ferry, and Y. Ochiai: Imaging of quantum interference patterns

within a quantum point contact, Appl. Phys. Lett., **89**, p.242109-1-3 (2006).

10) Yuichi OCHIAI, Youhei UJIIE, Noboru YUMOTO, Shigeki HARADA, Takahiro MORIMOTO, Nobuyuki AOKI, Jonathan P. BIRD, David K. FERRY: Chaotic Behavior in the Magneto-Resistance of Quantum Dot and Quantum Point Contact, Prog. Theor. Phys. Suppl, **166**, p.127-135 (2007).

11) A. M. Burke, N. Aoki, R. Akis, Y. Ochiai, and D. K. Ferry: Imaging classical and quantum structures in an open quantum dot using scanning gate microscopy, J. Vac. Sci. Technol. B **26**, p.1488-1491 (2008).

8. 平成20年6月 フェリー教授が千葉大学落合研究室を訪問し、1週間の滞在中にグラフェン試料や量子ドットのSGM観察に関する研究討議を行った。また、国際融合特別講義にて「CMOS Technology-Present Status and Future Trends」と題した講演をしていただいた。

1. 半導体量子細線・量子ドットおよびカーボンナノ材料の輸送現象に関する研究

2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/教授/落合勇一

3. アメリカ合衆国/ニューヨーク州立大学バッファロー校/電気工学科/J. P. パード教授

4. 平成10年度～

5. アリゾナ州立大学と千葉大学融合科学研究科落合研究室とで、半導体量子細線や量子ドットおよびカーボンナノチューブやフラーレンナノウィスカーにおける輸送現象に関する共同研究プロジェクトを推進している。

6. 日本学術振興会・日米科学協力(平成10年度～12年度)

科学技術研究費補助金・基盤研究A(平成16年度～18年度)

科学技術研究費補助金・萌芽研究(平成16年度～17年度)

科学技術研究費補助金・基盤研究A(平成19年度～21年度)

7. 1) L. -H. Lin, N. Aoki, K. Nakao, A. Andresen, C. Prasad, F. Ge, J. P. Bird, D. K. Ferry, Y. Ochiai, K. Ishibashi, Y. Aoyagi, and T. Sugano: Localization effect in mesoscopic quantum dots and quantum-dot arrays, Physical Review B, **60**, p.R16299-R16302 (1999).

2) Y. Takagaki, M. ElHassan, A. Shailos, C. Prasad, J. P. Bird, D. K. Ferry, K. H. Ploog, L. -H. Lin, N. Aoki and Y. Ochiai: Magnetic-field-controlled electron dynamics in quantum cavities, Phys. Rev. B, **62**, p.10255-10259 (2000).

3) C. Prasad, D. K. Ferry, A. Shailos, M. ElHassan, J. P. Bird, L. -H. Lin, N. Aoki, Y. Ochiai, K. Ishibashi and Y. Aoyagi: Phase braking and energy relaxation in open quantum-dot arrays, Phys. Rev. B, **62**, p.15356-15358 (2000).

4) A. Shailos, J. P. Bird, C. Prasad, M. ElHassan, L. Shifren, D. K. Ferry, L. -H. Lin, N. Aoki, K. Nakao, Y. Ochiai, K. Ishibashi, and Y. Aoyagi: Confinement-induced enhancement of electron-electron interactions in open quantum-dot array, Phys. Rev. B, **63**, p.241302-1-4 (2001).

5) M. ElHassan, J. P. Bird, A. Shailos, C. Prasad, R. Akis, D. K. Ferry, Y. Takagaki, L. -H. Lin, N. Aoki, Y. Ochiai, K. Ishibashi and Y. Aoyagi: Coupling-driven transport from multiple to single-dot interference in open quantum-dot arrays, Phys. Rev. B, **64**, p.085325-1-7 (2001).

6) N. Aoki, D. Oonishi, Y. Iwase, Y. Ochiai, K. Ishibashi, Y. Aoyagi, J. P. Bird: Influence of interdot coupling on electron-wave interference in an open quantum-dot molecule, Appl. Phys. Lett. **80**, p.2970-2972 (2002).

7) T. Morimoto, Y. Iwase, N. Aoki, T. Sasaki, Y. Ochiai, A. Shailos, J. P. Bird, M. P. Lilly, J. L. Reno, J. A. Shimmons: Nonlocal resonant interaction between coupled quantum wires, Appl. Phys. Lett., **82**, p.3952-3954 (2003).

8) J. F. Song, Y. Ochiai, J. P. Bird: Fano resonances in open quantum dots and their application as spin filters, Appl. Phys. Lett., **82**, p.4561-4563 (2003).

9) J. P. Bird and Y. Ochiai: Electron Spin Polarization in Nanoscale Constrictions, Science, **303**, p.1621-1622 (2004).

10) J-F. Song, Y. Ochiai, and J. P. Bird: Manipulating the transmission of a two-dimensional electron gas via spatially varying magnetic fields, Appl. Phys. Lett., **86**, p.062106-1-3, (2005).

11) T. Morimoto, M. Henmi, R. Naito, K. Tsubaki, N. Aoki, J. P. Bird, and Y. Ochiai: Resonantly Enhanced Nonlinear Conductance in Long Quantum Point Contacts near Pinch-Off, Phys. Rev. Lett., **97**, p.096801-1-4 (2006).

12) N. Aoki, K. Sudou, K. Okamoto, J. P. Bird and Y. Ochiai: Scanning gate microscopy of copper phthalocyanine field effect transistors, Appl. Phys. Lett, **91**, p.192113-1-3 (2007).

13) M.-G. Kang, T. Morimoto, N. Aoki, J.-U. Bae, Y. Ochiai, and J. P. Bird: Aharonov-Bohm effect in the magnetoresistance of a multiwalled carbon nanotube with tunneling contacts, Phys. Rev. B, **77**, p.113408-1-4 (2008).



- 14) T. Morimoto, N. Yumoto, Y. Ujiie, N. Aoki, J. P. Bird and Y. Ochiai: Phenomenological investigation of many-body induced modifications to the one-dimensional density of states of long quantum wires, *J. Phys.: Cond. Matt.*, **20**, p.164209-1-9 (2008).
- 15) Y. Ochiai, Y. Ujiie, N. Yumoto, S. Harada, T. Morimoto, N. Aoki, J. P. Bird, D. K. Ferry: Chaotic Behavior in the Magneto-Resistance of Quantum Dot and Quantum Point Contact, *Prog. Theor. Phys. Suppl*, **166**, p.127-135 (2007).
- 16) Y. Yoon, L. Mourokh, T. Morimoto, N. Aoki, Y. Ochiai, J. L. Reno, and J. P. Bird: Probing the Microscopic Structure of Bound States in Quantum Point Contacts, *Phys. Rev. Lett.*, **99**, p.136805-1-4 (2007).
- 17) Y. Yoon, T. Morimoto, L. Mourokh, N. Aoki, Y. Ochiai, J. L. Reno, and J. P. Bird: Detecting Bound Spins Using Coupled Quantum Point Contacts, *J. Phys.: Cond. Matt.*, **20**, p.164216-1-9 (2008).
- 18) K. Ogawa, N. Aoki, K. Miyazawa, S. Nakamura, T. Mashino, J. P. Bird, and Y. Ochiai: C60 NW-FET Application for Nano-Electronics, *Jpn. J. Appl. Phys.*, **47**, p. 501-504 (2008).
- 19) T. Kawamura, T. Hatori, Y. Nakamura, N. Aoki, J. P. Bird, and Y. Ochiai: Magneto-resistance peaks and phase breaking behaviour in a thin multi-walled carbon nanotube, *Journal of Physics: Conference Series*, **109**, p.102018-1-4 (2008).

8. ・文部科学省平成15年度最先端分野学生交流推進制度にて、千葉大学落合研究室の博士課程学生である石井聡氏が、バード教授研究室(当時アリゾナ州立大学)に平成15年8月から12月の5カ月間滞在し、カーボンナノチューブにおける超伝導近接効果の研究を行った。さらに、バード教授研究室の博士課程学生である林傑峯氏が千葉大学落合研究室に平成15年12月から平成16年3月の4カ月間滞在し、Ptナノワイヤにおける伝導現象に関する研究を行った。
- ・平成20年10月 バード教授が千葉大学落合研究室を訪問し、1週間の滞在中にグラフェンやカーボンナノチューブの伝導特性に関する研究討議を行った。また、国際融合特別講義にて「ナノデバイスの基礎研究：量子現象から応用へ」と題した講演をしていただいた。
- ・平成21年1月～3月 バード教授の研究室の博士課程学生である Jungwoo Song 氏が千葉大学に滞在し、1次元細線によるテラヘルツ波検出素子の開発に関する研究を行った。この研究は千葉大学、ニューヨーク州立大学バッファロー校、理化学研究所(石橋極微デバイス研究室)と共同研究である。

1. フラールン電界効果トランジスタに関する研究
2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/教授/落合勇一
3. 台湾/南台科技大学/邱裕中教授
4. 平成20年度～
5. 南台科技大学と千葉大学融合科学研究科落合研究室と、半導体量子細線や量子ドットおよびカーボンナノチューブやフラールンナノウイスキーカーにおける輸送現象に関する共同研究プロジェクトを推進している。
6. 日本学術振興会・日米科学協力(平成10年度～12年度)  
学技術研究費補助金・基盤研究A(平成16年度～18年度)  
学技術研究費補助金・基盤研究A(平成19年度～21年度)
7. 1) S-R. Chen, H. Tsuji, M. Ueno, Y. Chiba, N. Aoki, J. Onoe and Y. Ochiai: Electornic properties of Photo-beam-irradiated C<sub>60</sub>, The IUMRS International Conference in Asia 2008, NP-6, Nagoya, Japan, December 9-13, 2008.  
2) Y. Chiba, S-R. Chen, H. Tsuji, M. Ueno, N. Aoki, and Y. Ochiai: Electornic properties of Photo-beam-irradiated C<sub>60</sub>, *J. of Phys: Conference Series*, accepted.
8. 平成20年4月～3月 教授の研究室から修士課程の大学院生である陳仕任氏を特別研究生として受け入れ、フラールンナノウイスキーカーの電界効果トランジスタ応用に関する研究を行った。

<p>1. 不規則2次元電子系での量子ホール効果に関する研究</p> <p>2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/教授/落合勇一</p> <p>3. 台湾/台湾大学/物理学科/梁啓徳准教授</p> <p>4. 平成18年度～</p> <p>5. 台湾大学梁啓徳准教授研究室と千葉大学融合科学研究科落合研究室とで、不規則散乱ポテンシャルを持つ2次元電子系での量子ホール効果に関する共同研究プロジェクトを推進している。</p> <p>6. 交流協会・サマープログラム (平成19年度) 千葉大学国際交流事業 (平成20年度)</p> <p>7. 1) K-Y. Chen, Y-H. Chang, C-T. Liang, N. Aoki, Y. Ochiai, C-Y. Huang, L-H. Lin, K. A. Cheng, H-H. Cheng, H- H. Lin, J-Y. Wu and S-D. Lin, Probing insulator-quantum Hall transitions near the onset of Landau quantization in GaAs/AlGaAs heterostructures, American Physical Society, 2008 APS March Meeting, abstract #K1.202, March 10-14, 2008,</p> <p>2) K-Y. Chen, Y-H. Chang, C-T. Liang, N. Aoki, Y. Ochiai, C-Y. Huang, L-H. Lin, K. A. Cheng, H-H. Cheng, H- H. Lin, J-Y. Wu and S-D. Lin, Probing Landau quantization with the presence of insulator-quantum Hall transition in a GaAs two-dimensional electron system, J. Phys.: Condens. Matter <b>20</b>, 295223-295228 (2008).</p> <p>8. 平成19年7月～8月 梁教授の研究室から博士課程学生である陳光耀氏が千葉大学に2ヶ月間滞在し、低温磁気伝導の観測を行った。</p>
<p>1. 半導体量子細線におけるスピン偏極伝導現象の研究</p> <p>2. 融合科学研究科 ナノ物性コース/教授/落合勇一</p> <p>3. 中国/吉林大学/物理学科/宋俊峰教授</p> <p>4. 平成15年度～</p> <p>5. 吉林大学宋俊峰教授と千葉大学融合科学研究科落合研究室とで、半導体量子細線におけるスピン依存量子伝導現象に関する共同研究プロジェクトを推進している。</p> <p>6. 千葉大学ベンチャービジネスラボラトリー・中核的研究機関研究員 (平成15年度)</p> <p>7. 1) J. F. Song, Y. Ochiai, J. P. Bird: Fano resonances in open quantum dots and their application as spin filters, Appl. Phys. Lett., <b>82</b>, p.4561-4563 (2003).</p> <p>2) N. Aoki, L-H. Lin, T. Morimoto, T. Sasaki, J-F. Song, K. Ishibashi, J.P. Bird, A. Budiyo, K. Nakamura, T. Harayama, and Y. Ochiai: "Fractal behavior in magnetoconductance in coupled quantum dot systems", Physica E, <b>22</b>, pp.361-364 (2004).</p> <p>3) J-F. Song, Y. Ochiai, and J. P. Bird: "Manipulating the transmission of a two-dimensional electron gas via spatially varying magnetic fields", Appl. Phys. Lett., <b>86</b>, pp.062106-1-3, (2005).</p> <p>4) J-F. Song, J. P. Bird, and Y. Ochiai: "A nanowire magnetic memory cell based on a periodic magnetic superlattice", J. Phys., Condens. Matter, <b>17</b>, pp.5263-5268 (2005).</p> <p>8. 平成15年10月～平成16年3月まで、千葉大学ベンチャービジネスラボラトリー・中核的研究機関研究員として千葉大学落合研究室にて、量子細線におけるスピン依存量子伝導現象に関する研究を行った。</p>
<p>1. ホヤの内柱における Duox 遺伝子の発現解析</p> <p>2. 融合科学研究科/助教/小笠原道生</p> <p>3. イギリス/University of Reading/Dr. Françoise Mazet</p> <p>4. 平成17年度～</p> <p>5. カタウレイボヤ内柱における Duox 遺伝子の発現を解析し、下等脊索動物の内柱における甲状腺関連遺伝子の進化を考察する。</p> <p>6. 科学研究費特定領域研究 (2)</p> <p>7. Hiruta J, Mazet F, Ogasawara M. Restricted expression of NADPH oxidase/peroxidase gene (Duox) in zone VII of the ascidian endostyle. Cell Tissue Res (in press)</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 新規フォトリフレクティブ結晶 Sn<sub>2</sub>P<sub>2</sub>S<sub>6</sub> 結晶を用いた高出力ピコ秒レーザーの開発</p> <p>2. 融合科学研究科 画像マテリアルコース/教授/尾松孝茂</p> <p>3. スイス連邦/Swiss Federal Institute of Technology Zurich/Dr. M. Jazbinsek</p>

4. 2008年-present

5. フェロエレクトリック半導体結晶である  $\text{Sn}_2\text{P}_2\text{S}_6$  結晶を側面励起ピコ秒固体レーザーに導入し、高出力化と高ビーム品質化をはかる共同研究である。
6. 平成20年度日本学術振興会外国人特別研究員(短期)
7. (1) "Optical phase conjugation of picosecond pulses at 1.06 $\mu\text{m}$  in  $\text{Sn}_2\text{P}_2\text{S}_6$ :Te for real-time wavefront correction in high-power Nd-doped amplifier systems", Tobias Bach, Kouji Nawata, Mojca Jazbinsek, Takashige Omatsu, Peter Gunter, Optics Express 18, No. 1., (2010) 87-95  
国際会議1件
8. 2008年にT. Bach博士が日本学術振興会外国人特別研究員として来日し、共同研究を行った。2008年、2009年、M. Jazbinsek博士が来日し、学内講演と博士前期課程学生のための講義を担当した。

## 大学院園芸学研究所

1. ヨーロッパ北部及び日本の土壌における微生物バイオマスのダイナミクスと微生物生き残り戦略に関する比較研究
2. 園芸学研究所/教授/犬伏 和之
3. 連合王国/AFRC 耕地作物研究所 ロザムステッド試験場/フィリップ C ブルックス
4. 昭和61年度～(継続中)
5. 地球上の物質循環における土壌微生物の役割は重視されており、かれらの働きなくしては物質循環や食料生産ばかりか全生物の存在すら危機に瀕する。本研究は各種土壌中の微生物バイオマスの定量法確立と生元素循環のダイナミクスにおける役割に評価を目的としている。日本と英国など北ヨーロッパでは土壌の種類がかなり異なるので、試料や情報を交換しつつ両者に適用可能な手法を開発した。
6. British Council、科学研究費補助金(基盤研究(B))H11年度～13年度、研究科長裁量経費(H19年度)
7. Brookes, P. C., Inubushi, K., Wu J. and Patra, D. D. (1991) Properties of the soil microbial biomass, Japanese Journal of Soil Science and Plant Nutrition, 62, 79-84 (日本土壌肥科学雑誌)  
Inubushi, K., Brookes, P. C. and Jenkinson, D. S. (1991) Measurements of soil microbial biomass C, N and ninhydrin-N in aerobic and anaerobic soils by the fumigation-extraction method, Soil Biology and Biochemistry, 23, 737-741  
Shibahara, F. and Inubushi, K. (1995) Measurements of microbial biomass C and N in paddy soils by the fumigation-extraction method, Soil Science and Plant Nutrition, 41, 681-689.  
Inubushi, K (ed.) (2001) Microbial Diversity and Environmental Remediation in Biosphere, Chiba University International Symposium (千葉大学国際研究集会資料)、千葉大学、pp. 145.  
犬伏和之・安藤昭一(2001) 国際研究集会報告、生物圏における微生物の多様性と環境修復、バイオサイエンスとインダストリー, 59, 61  
Kanazawa S., et al (ed.) (2002) Nutrient Metabolisms and Bioremediation by Soil Microorganisms, 科研費国際共同研究報告書、九州大学、pp.321.  
Inubushi, K. and Acquaye, S. (2004) Role of microbial biomass in biogeochemical processes in paddy soil environments, Soil Science and Plant Nutrition, 50 (6), 793-805  
Inubushi, K., Sakamoto, K., and Sawamoto T. (2005) Properties of microbial biomass in acid soils and their turnover, Soil Science and Plant Nutrition, 51 (5), 605-608  
Tirol-Padre, A., Tsuchiya, K., Inubushi, K., and Ladha, J.K. (2005) Enhancing soil quality through residue management in a rice-wheat system in Fukuoka, Japan. Soil Sci. Plant Nutr., 51 (6) 849-860  
Xu, X, Han, L., Wang, Y., and Inubushi, K. (2007) Influence of vegetation types and soil properties on microbial biomass carbon and metabolic quotients in temperate volcanic and tropical forest soils, Soil Sci. Plant Nutr., 53(4), 430-440  
Ushiwata, S., Sasa, H., and Inubushi, K. (2007) Influence of steam-treated grass clipping on grass growth, drainage water quality and soil microbial properties in a simulation of green course, Soil Sci. Plant Nutr., 53(4), 489-498
8. 千葉大学国際研究集会;平成13年7月6日、日本土壌肥科学会賞;平成17年4月4日

1. 有機質肥料やコンポストの土壌生態系への影響
2. 園芸学研究所/教授/犬伏 和之、准教授/坂本一憲、宍戸雅宏
3. ハンガリーHungary/テッセディックシャムエル大学・デブレッセン大学/Dr. Peter Simandi、Mr. Imre Vano
4. 平成10年度～（継続中）
5. 有機物農業は、急速に世界各地で普及しておりその有効性の判定と環境影響評価が重要になっている。本研究は、新興国で問題となっている有機質肥料やコンポストの有効性を判定し、コンポスト中の有害成分を同定し土壌生態系への影響を評価する手法を確立することを目的として、コンポスト中の有害有機酸濃度の変化や土壌ガス生成への影響、作物生育への効果を調査している。
6. JICA、JASSO
7. Simandi, P., Takayanagi, M., and Inubushi, K. (2004) Changes in the pH of various composts are dependent on the production of organic acids, 6th International Symposium on Plant-Soil Interactions at Low pH, Sendai, Proceeding, 374-375.  
Simandi, P., Takayanagi, M., and Inubushi, K. (2005) Changes in the pH of two different composts are dependent on the production of organic acids, *Soil Science and Plant Nutrition*, 51 (5), 771-774.  
Momma, N., Yamamoto, K., Simandi, P., Shishido, M. (2007) Roles of organic acids in the mechanisms of biological soil disinfestation (BSD), *Journal of Gen. Plant Pathol.*, 72, 247-252.  
Vano, I., Inubushi, K. and Sakamoto, K. (2007) Effect of different organic amendments and ferrous sulfate application on the mycorrhizal infection of highbush blueberry root system. *日本土壌肥科学会講演要旨集*, 53, p.136  
Imre, V., Sakamoto, K. and Inubushi, K. (2008) : Selection of root-associated fungal endophytes from Ericaceae plants to enhance blueberry seedling growth, *日本土壌肥科学会講演要旨集*, 54, p.57  
Vano, I., Sakamoto, K., Inubushi, K. (2009): Evaluation of Fungal N<sub>2</sub>O Production in Boreal Peat as Soil Amendment. *日本土壌肥科学会講演要旨集*, 55, p.38  
Vano, I., Sakamoto, K. and Inubushi, K. (2009) : Selection of dark septate endophytes from Ericaceae plants to enhance blueberry (*Vaccinium corymbosum* L.) seedling growth. Abstracts of 7th International Symposium on Integrated Field Science, p.15 (Organized by Field Science Center, Tohoku University and Ecosystem adaptability Global COE, Tohoku University) (October 10-12, 2009, Sendai, JAPAN)  
Silvio Ushiwata, Yoshimiki Amemiya, Kazuyuki Inubushi (Aug. 2009): Inhibition of in vitro growth of *Rhizoctonia solani* by liquid residue derived from steam-treated grass clippings, *Journal of General Plant Pathology* 75: 312-315
8. 千葉大学エクセレントスチューデントアワード受賞、平成19年～

1. 未利用植物資源のコンポスト化と土壌の微生物性・化学性・物理性への影響
2. 園芸学部/教授/犬伏 和之
3. ネパール/Consultant (Agricultural, Environmental Microbiology)/Dr. Shashi S. Rajbanshi  
インド India/ハルヤナ農業大学微生物学科/Dr. Sneha Goyal, Prof. K.K. Kapoor, Prof. R.S. Antil  
マレーシア Malaysia/プトラマレーシア大学/Dr. Rosenani Abu Bakar
4. 平成7年度～（継続中）
5. 都市や農業生態系から排出される大量の有機物は、近年世界各地で問題化しておりその有効な資源化が緊急の課題となっている。本研究は、途上国で問題となっている野生植物の有効なコンポスト化技術を確立し、そのコンポストを農耕地土壌へ還元利用する際の土壌微生物性・化学性・物理性への影響を予測する手法を確立することを目的として、実際にコンポストを製造しその過程での微生物的ないし化学的变化を追跡し、土壌生態系への影響を調査した。
6. 日本学術振興会、科学研究費補助金（特別研究員奨励費・短期招聘）、中島平和財団、戸定学術奨励金
7. Rajbanshi, S. S., Endo, H., Sakamoto, K. and Inubushi, K. (1998) Stabilization of chemical and biochemical characteristics of grass straw and leafmix during in-vessel composting with and without seeding material, *Soil Science and Plant Nutrition*, 44, 485-495.  
Goyal, S., Inubushi, K., Kato, S., Xu, H.L., and Umemura, H. (1999) Effect of anaerobically fermented manure on the soil organic matter, microbial properties and growth of spinach under greenhouse conditions, *Indian Journal of Microbiology*, 39, 211-216.  
Inubushi, K., Goyal, S., Sakamoto, K., Wada, Y., Yamakawa, K. and Arai, T., (2000) Influence of application of sewage sludge compost on N<sub>2</sub>O production in soils, *Chemosphere*, 2, 329-334.  
Miyittah, M. and Inubushi, K. (2003) Decomposition and CO<sub>2</sub>-C evolution of okara, sewage sludge, cow and poultry manure composts in soils, *Soil Science and Plant Nutrition*, 49(1), 61-68.  
Goyal, S., Sakamoto, K., Inubushi, K. and Kamewada, K. (2006) Long-term effects of inorganic fertilization and organic

amendments on soil organic matter and soil microbial properties in Andisols, Archives of Agronomy and Soil Science, 52(6), 617-625

Goyal, S., Sakamoto, K. and Inubushi, K. (2006) Decomposition of sewage sludge compost and its effect on soil microbial biomass and growth of spinach, Research on Crops, 7(2), 517-521

犬伏和之・川上明日香・大久保史奈・オスラン ジュマディ・ルリメリング・河西英一・仁井田恵(2009): インドネシア・マレーシアの油ヤシプランテーション土壤中の温室効果ガス生成、熱帯農業学会第 105 回講演要旨集、p.73-74

大久保史奈・犬伏和之・川上明日香・オスラン ジュマディ・ルリメリング・河西英一(2009): インドネシア・マレーシアの油ヤシプランテーション土壤中の有機物分解と温室効果ガス生成、日本微生物生態学会第 25 回講演要旨集、p. 1

8. 千葉大学園芸学部セミナー、平成 16 年 7 月 31 日

1. 熱帯アジアの泥炭湿地・農耕地における温室効果ガスの発生・吸収

2. 園芸学研究科/教授/犬伏 和之

3. インドネシア/ランブン・マンクラット大学/Ir. Muhammad Rasmadi 大学長、Abdul Hadi 講師

4. 平成 10 年度～(継続中)

5. 微量で強力な温室効果ガス、メタン発生量の自然湿地からの地球全体からの発生量の約 20% を占めると推定されるがその推定精度は特に熱帯地域で低く、成層圏オゾン層破壊ガスでもある亜酸化窒素について十分な推定はない。本研究では、現地でこれらガスフラックスを測定するとともに、湿地や土地利用の進んだ農耕地土壤中でのガス生成・吸収の支配因子を明らかにする。

6. 環境省(農業環境技術研究所より委託)、JASSO

7. Hadi, A., Inubushi, K., Purnomo, E., Razie, F., Yamakawa, K. and Tsuruta, H. (2000) Effect of land-use changes on nitrous oxide (N<sub>2</sub>O) emission from tropical peatlands, Chemosphere, 2, 347-358.

Hadi, A., Haridi, M., Inubushi, K., Purnomo, E., Razie, F. and Tsuruta, H. (2001) Effects of land-use change in tropical peat soil on the microbial population and emission of greenhouse gases, Microbes and Environments, 16 (2), 79-86

Hadi, A. and Inubushi, K. (2001) Applicability of method to measure organic matter decomposition in peat soils, Indonesian Journal of Agricultural Sciences, 1, 25-28

Hadi, A., K. Inubushi, E. Purnomo, and H. Tsuruta (2002) Effect of hydrological zone and land-use management on the emissions of N<sub>2</sub>O, CH<sub>4</sub>, and CO<sub>2</sub> from tropical peatlands, Agroscientiae, 9, 53-60.

Hadi, A., Inubushi, K., Furukawa, Y., Purunomo, E., Rasmadi, M., and Tsuruta, H. (2005) Greenhouse gas emissions from tropical peatlands of Kalimantan, Indonesia, Nutrient Cycling in Agroecosystems, 71, 73-80.

Murakami, M., Furukawa, Y., and Inubushi, K. (2005) Methane production after liming to tropical acid peat soil, Soil Science and Plant Nutrition, 51 (5), 697-699.

Hadi, A., Jumadi, O., Inubushi, K. and Yagi, K. (2008) Mitigation options for N<sub>2</sub>O emission from a corn field in Kalimantan, Indonesia: A case study, Soil Sci. Plant Nutr., 54 (4), 644-649

Yasuhiko MURAMATSU and Kazuyuki INUBUSHI (2009) Financial Viability and its Analysis of CDM Projects for Mitigation of Methane Emissions from Paddy Fields in Indonesia: A cost-benefit simulation study, HortResearch, 63, 35-43

8. 第 7 回尾瀬賞、平成 16 年 6 月 16 日

1. 熱帯温帯アジアの農耕地におけるメタン・亜酸化窒素など微量ガスの発生・吸収

2. 園芸学研究科/教授/犬伏 和之

3. インドネシア/ボゴール農科大学/Daniel Murdiyarso, Iswandi Anas

インドネシア/マッカサル大学/Yusminah Hala

中国/中国科学院大气物理研究所/Xu Xingkai

4. 平成 10 年度～(継続中)

5. 水田からのメタン発生量は地球全体からの発生量の約 15% を占めると推定されるがその推定精度は低く、亜酸化窒素について同様な推定はない。本研究では、現地でこれらガスフラックスを測定するとともに、大気二酸化炭素濃度上昇の影響やエチレンなどその他の微量ガスの農耕地や森林など土地利用変化を受ける前後での土壌中でのガスの動態を明らかにする。

6. 環境省(農業環境技術研究所より委託)、科学研究費(外国人特別研究員)

7. Xingkai, Xu and K. Inubushi (2004) Effects of N sources and methane concentration on methane uptake potential of a typical coniferous forest and its adjacent orchard soil, Biology and Fertility of Soils, 40, 215-221.

Furukawa, Y., Inubushi, K., Ali, M., Itang, AM. and Tsuruta, H. (2005) Effect of changing groundwater levels caused by land-use changes on greenhouse gas emissions from tropical peatlands, Nutrient Cycling in Agroecosystems, 71, 81-91.

- Inubushi, K., Otake, S., Furukawa, Y., Shibasaki, N., Ali, M., Itang, AM. and Tsuruta, H. (2005) Factors influencing methane emission from peat soils: Comparison of tropical and temperate wetlands, *Nutrient Cycling in Agroecosystems*, 71, 93-99.
- Xu, Xingkai, and Inubushi, K. (2005) Mineralization of nitrogen and N<sub>2</sub>O production potentials in acid forest soils under controlled aerobic conditions, *Soil Science and Plant Nutrition*, 51 (5), 683-688.
- Oslan Jumadi, Yusminah Hala, and Inubushi, K. (2005) Production and emission of nitrous oxide and responsible microorganisms in upland acid soil in Indonesia, *Soil Science and Plant Nutrition*, 51 (5), 693-696
- Murakami, M., Furukawa, Y., and Inubushi, K. (2005) Methane production after liming to tropical acid peat soil, *Soil Science and Plant Nutrition*, 51 (5), 697-699.
- Ali, M., Taylor, D., and Inubushi, K. (2006) Effect of environmental variations on CO<sub>2</sub> efflux from tropical peatland in eastern Sumatra, *WETLANDS*, 26(2), 612-618
- Zheng X, Zhou Z, Wang Y, Zhu J, Wang Y, Yue J, Shi Y, Kobayashi K, Inubushi K, Huang Y, Han S, Xu Z, Xie B, Butterbach-Bahl K, Yang L (2006) Nitrogen-regulated effects of free-air CO<sub>2</sub> enrichment on methane emissions from paddy rice fields. *Global Change Biology* 12, 1717-1732
- Xu, X., Inubushi, K., and Sakamoto, K. (2006) Effect of vegetations and temperature on microbial biomass carbon and metabolic quotients of temperate volcanic forest soils, *Geoderma*, 136, 310-319
- Lou, Yunsheng, Mizuno, T., Kobayashi, K., Okada, M., Hasegawa, T., Hoque, M.M., and Inubushi, K. (2006) CH<sub>4</sub> production potential in a paddy soil exposed to atmospheric CO<sub>2</sub> enrichment, *Soil Sci. Plant Nutr.*, 52, 769-773
- Lou Yunsheng, Ren Lixuan, Li Zhongpei, Zhang Taolin and Inubushi, K. (2007) Effect of rice residues on carbon dioxide and nitrous oxide emissions from a paddy soil of subtropical China, *Water Air Soil Pollution*, 178, 157-167
- Xu X., Han, L., Wang, Y., and Inubushi, K. (2007) Influence of vegetation types and soil properties on microbial biomass carbon and metabolic quotients in temperate volcanic and tropical forest soils, *Soil Sci. Plant Nutr.*, 53(4), 430-440
- Khalil, M.L. and Inubushi, K. (2007) Possibilities to reduce rice straw-induced global warming potential of a sandy paddy soil by combining hydrological manipulations and urea-N fertilizations, *Soil Biol. Biochem.*, 39, 2675-2681
- Xu X and Inubushi K. (2007) Production and consumption of ethylene in temperate volcanic forest surface soils, *European Journal of Soil Science*, 58, 668-679
- Xu X., Inubushi, K. (2007) Effects of nitrogen sources and glucose on the consumption of ethylene and methane by temperate volcanic forest surface soils, *Chinese Science Bulletin*, 52 (23):3281-3291
- Oslan J., Yusminah H., Abd. M., Alimuddin A., Muhiddin P., Yagi, K. and Inubushi, K. (2008) Influences of chemical fertilizers and a nitrification inhibitor on greenhouse gas fluxes in a corn (*Zea mays* L.) field in Indonesia, *Microbes Environ.*, 23(1), 29-34
- Cheng, W., Inubushi, K., Hoque, M.M., Sasaki, H., Kobayashi, K., Yagi, K., Okada, M. and Hasegawa, T. (2008) Effect of elevated [CO<sub>2</sub>] on soil bubble and CH<sub>4</sub> emission from a rice paddy: A test by <sup>13</sup>C pulse-labeling under free-air CO<sub>2</sub> enrichment. *Geomicrobiology Journal*, 25(7-8):396-403, 2008
- Yunsheng LOU\*, Kazuyuki INUBUSHI, Takayuki MIZUNO, Toshihiro HASEGAWA, Yanhung LIN, Hidemitsu SAKAI, Weiguo CHENG and Kazuhiko KOBAYASHI (2008) CH<sub>4</sub> emission with differences in atmospheric CO<sub>2</sub> enrichment and rice cultivars in a Japanese paddy soil, *Global Change Biology* 14: 2678-2687.
- 八木一行、犬伏和之、松島未和、Oslan J, Suphachai A, Khalil I, Xu X, Lou Y, 村松康彦、村上未央、大久保亜希恵、水野崇行、下西翼、Iswandi Anas, Suprihati, Abdul Hadi, Yusminah Hala, Alimuddin A, Muis A, Patcharee Lawongs、(2009) (3) 農林業生態系を対象とした温室効果ガス吸収排出制御技術の開発と評価 (3 a) 農業生態系における CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O ソース抑制技術の開発と評価 (1) わが国とアジア諸国の農耕地における CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O ソース抑制技術の開発: 環境省地球環境研究総合推進費終了研究成果報告書 平成 15 年度～平成 19 年度 陸域生態系の活用・保全による温室効果ガスシンク・ソース抑制技術の開発—大気中温室効果ガス濃度の安定化に向けた中長期的方策—:339-367
- Xu X and Inubushi K (2009): Responses of ethylene and methane consumption to temperature and soil pH in temperate volcanic forest soils, *European Journal of Soil Science* 60 : 489-498
- Xu X K, Inubushi K. (2009) Ethylene oxidation, atmospheric methane consumption, and ammonium oxidation in temperate volcanic forest soils. *Biology and Fertility of Soils*, 45 : 265-271

8. 第7回尾瀬賞、平成16年6月16日

1. ユーラシア中南部における古環境の復元と周辺寒冷地生態系の保護に関する比較研究
2. 園芸学研究所/教授/犬伏 和之、沖津 進/助教/松島 未和

<p>3. ロシア/ロシア科学アカデミー土壌科学研究所/PRIKHODKO, Valentina ほか  ロシア/モスクワ大学/Manakhov Dmitry Valentinovich ほか  ロシア/チェリアビンスク大学/Zdanovich Gennady Borisovich ほか</p> <p>4. 平成21年度～(継続中)</p> <p>5. 上記、ロシア側に加え、日本側から千葉大学・日本大学・京都大学・北海道大学・東京農工大学の考古学者、生態学者、土壌学者等様々な分野の研究者が参加し、ウラル山脈南部に位置するアルカйм生態保護区とその周辺生態系における土壌・植生・調査研究を実施している。</p> <p>6. 日本学術振興会二国間交流事業、日露共同研究(継続中)</p> <p>7. 沖津 進, Valentina PRIKHODKO, 松島未和, 犬伏和之(2009); ウラル山脈南東部南アルカйм生態保護区周辺の植生景観、植生学会第14回大会(鳥取)  Hirohiko Nagano, Ikumi Utsugi, Mai Adachi, Fumina Okubo, Satoshi Horaguchi, Miwa Matsushima, Susumu Okitsu, Valentina E. Prikhodko, Elena Manakhova, Gennady B.Zdanovich, Dmitry G. Zdanovich, So Sugihara, Shinya Funakawa, Masayuki Kawahigashi and Kazuyuki Inubushi (2010): Biological aspects of soils in Arkaim and surround area, south Urals, Russia, World Congress of Soil Science, Brisbane, (accepted)</p> <p>8. 日露共同セミナー; 平成21年11月9日、千葉大学園芸学部; 同11月11日、日本大学生物環境科学研究センター</p>	<p>1. 栽培および野生のエンサイ系統の収集および生理生態的特性の解明</p> <p>2. 園芸学部/教授/高垣 美智子</p> <p>3. タイ/カセサート大学農学部/パリヤヌット チュラカ  タイ/BIOTEC/チャランポン カドマニー</p> <p>4. 平成12年度～(継続中)</p> <p>5. 熱帯原産の水生野菜であるエンサイ (<i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.) は、熱帯地域では古くから多く食用として利用されて来ているが、生理生態的特性は不明な点が多い。利用されている系統の中でも茎の色、葉の形は遺伝的多様性がある。茎の色は栽培系統では緑であり、野生系統では赤であるとされるが、その遺伝的差異や特性は未知の部分が多い。これまでの調査から、栽培形態は畑栽培～水田栽培～河川栽培と多様であることがわかった。河川や運河の栽培では、無施肥で水中の養分のみの吸収での収穫も見ることができた。このような養分吸収能力の高さは、他の葉菜類に比べても特筆できる。このエンサイの系統を、タイやベトナムにおいて、数多く収集し、系統間での生理生態的特性を調査し、より養分吸収能力に優れ、環境耐性の強い系統の選抜や、遺伝的な解析を行っている。</p> <p>6. 平和中島財団(アジア地域重点学術研究助成)、平成14年度  科学研究費補助金(基盤研究B)、平成18-20年度</p> <p>7. ①タイにおけるエンサイの栽培様式 熱帯農業 46(別1)11-12. 2001  ②エンサイはどこまで薄い培養液を吸収できるか 農業環境工学関連4学会 2001年合同大会発表要旨: 220. 2001  ③タイにおける <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.の遺伝的変異、熱帯農業、45(別2)105-106.、2001  ④培養液濃度が <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.の生育に及ぼす系統間差異、熱帯農業、45(別2)107-108. 2001  ⑤生育地の水質と <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk 系統の葉色の関係、熱帯農業、46(別1)3-4、2002  ⑥ <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk 系統の葉形状分析、熱帯農業、46(別1)1-2、2002  ⑦ <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.の開花時期と日長処理との関係、熱帯農業、47(別1)33-34、2003  ⑧ <i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.優良系統の <i>in vitro</i> 選抜、農業環境工学関連5学会 2003年合同大会発表要旨: 315  ⑨低温期におけるエンサイ系統の地上部生育速度、熱帯農業、48(別2):49-50 2004  ⑩An effective <i>in vitro</i> selection of water spinach for NaCl-, KH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub>- and temperature-stresses, Environ. Control in Biol. 44(4): 265-277, 2007  ⑪A rapid method for identifying salt tolerant water convolvulus (<i>Ipomoea aquatica</i> Forsk) under <i>in vitro</i> photoautotrophic conditions, Plant Stress, 1(2): 228-234, 2007  ⑫Improving Water Quality by Using Plants, with Water Convolvulus (<i>Ipomoea aquatica</i> Forsk.) as a Model, Acta Horticulture, 797: 455-460, 2008.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 栽培様式による環境負荷の差異と肥料成分の動態に関する研究</p> <p>2. 園芸学部/教授/高垣美智子</p> <p>3. タイ/カセサート大学農学部/スパチャイ アウムカ</p>	

4. 平成12年度～(継続中)
5. 研究の目的 緑の革命後、化成肥料の施用量が急速に増大した熱帯では、周年的に野菜栽培が行われるため施肥による汚染が大きい。特に、バンコクなど大都市近郊の小規模農家では、換金作物としての野菜栽培が増加し、化学肥料だけでなく有機肥料も過剰に施肥されている。本研究は、熱帯アジアにおける園芸作物生産活動による環境負荷の実態を、窒素・リン酸肥料の動態から明らかにしようとするものである。
6. 科学研究費補助金(海外調査)、平成14年度～16年度(代表;菊池眞夫)
7. ①エンサイはどこまで薄い培養液を吸収できるか 農業環境工学関連4学会2001年合同大会発表要旨:220. 2001  
 ②培養液濃度 *Ipomoea aquatica* Forsk.の生育に及ぼす系統間差異、熱帯農業、45(別2)107-108. 2001  
 ③*Ipomoea aquatica* Forsk 系統の葉形状分析、熱帯農業、46(別1)1-2,2002  
 ④*Ipomoea aquatica* Forsk 系統の葉中の無機成分に生育地の水質が及ぼす影響、熱帯農業、47(別1)31-32,2003  
 ⑤Effect of Nitrogen Fertilizer Amount on Early Growth of Leafy Vegetable in Thailand, *Jap. J. Tropic. Agric.*, in press, 2006.  
 ⑥Effects of Controlled-Release Nitrogen Fertilizer Application on Nitrogen Uptake by a Leafy Vegetables (*Brassica campestris* L.), Nitrate Leaching and N<sub>2</sub>O Emission, *Jap. J. Tropic. Agric.*, 51(4):152-159
8. なし

1. 持続可能なグリーンツーリズムのマーケティング戦略
2. 園芸学部/教授/大江 靖雄
3. イタリア/ペルーシア大学農学部/アドリアーノ チアニ
4. 平成10年～
5. (1)目的:先進諸国では深刻な農村過疎に対処するため、地域資源を活用して環境調和的なグリーンツーリズムが提唱されている。グリーンツーリズムでは特にマーケティング戦略の確立がその成否の鍵を握るため共同してその研究を行い持続可能な農村活性化方策に資する。  
 (2)協力内容:日常的情報交換はもとより研究者の相互派遣を通じて、グリーンツーリズム経営者および組織がどのような最適マーケティング戦略を採用すべきであるか、その手順を明らかにして、今後の我が国での展開方向を解明する。
6. 平成11年度国際研究会参加派遣(99 International Farm Management Congress,7月19日～7月24日、南ア共和国、ダーバン市)  
 平成12年度日本学術振興会特定国派遣(8月28日～9月29日、イタリア、ペルーシア大学)  
 平成13～15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)代表 大江靖雄  
 平成16～19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)代表 大江靖雄
7. 大江靖雄(1999):アグリツーリズム農家の経営特性と活動,農業経営研究成果集報,18,33-38.  
 Ohe,Y. and A. Ciani(1999): Activities of Farm Tourism and Attitudes of Operators: Japan-Italy Comparison, P. Simms Eds. Proceedings of the 12th International Farm Management Congress, 801-811, Durban.  
 Ohe, Y. and Ciani, A. (1999): Characteristics and Activities of Agri-tourism Farms in Umbria, Italy, Ixth European of Agricultural Economists, poster paper,1999.  
 Ohe,Y and A. Ciani (2000): On-farm Tourism Activity and Attitudes of the Operations: A Hiroshima-Umbria Comparative Case Study, The Technical Bulletin of Faculty of Horticulture, Chiba University, No.54, 73-80.  
 Ohe, Y.(2003):Multifunctionality and Farm Diversification: A Case of Rural Tourism,14th International Farm Management Congress, Proceedings CD-ROM,761-768.  
 大江靖雄・Adriano Ciani(2003):イタリア中部・ウンブリア州におけるアグリツーリズムの展開とその特徴,総合観光研究,2,11-18.  
 大江靖雄(2003)農業と農村多角化の経済分析,農林統計協会,2003.  
 大江靖雄(2005) イタリア・アグリツーリズムの地域的特徴, 総合観光学会第8回学術研究大会報告要旨,9-10.  
 大江靖雄(2005) アグリ・ツーリズム活動の多様化と資源利用の関連性ーイタリア・ウンブリア州を対象としてー,農業経営研究,43(1),124-27
8. (1)グリーンツーリズムに関する国際シンポジウム(平成11年2月1日、財団法人21世紀村づくり塾主催・農林水産省後援、東京九段会館、参加者約400名)にて、本共同研究の成果をもとにチアニが基調報告し、続いて大江が報告を行った。  
 (2)セミナー「イタリアのアグリツーリズム」(平成12年7月17日、イタリア大使館主催、参加予定250名)にて、チアニ、大江が本研究成果について報告を行った。  
 (3)アルバニア、ティラナ農業大学(平成14年度3月4日・5日)において開催のセミナーで「持続的農村開発にむけて」にて、チアニが総括し、大江がグリーンツーリズムおよび我が国の農業政策の展開について発表した。



(4)ペルーシア大学農学部（平成 17 年 9 月 27 日）において開催のセミナーにて、大江が多面的機能と農村ツーリズムについて発表した。

(5) 国際会議「持続的発展の戦略」（平成 21 年 9 月 4 日、イタリア科学文化団体 Biosphera 主催、開催地ペルーシア）において、大江が日本の酪農教育ファームの取り組みについて報告した。

1. 果実における生理活性物質と香り成分合成に関する研究

2. 大学院園芸学研究科/教授/近藤 悟

3. アメリカ合衆国/ 農務省果樹研究所/ ジェームズ マサイス

4. 平成 16 年～（継続中）

5. 香り成分は果実の品質を決定する重要な要素の 1 つである。生理活性物質は果実追熟および香り成分合成を促進あるいは抑制するが、その影響については不明な点が多い。

6. 科学研究費補助金等

7. 1) Kondo, S., J. P. Mattheis et al. 2005. Aroma volatile biosynthesis in apples affected by 1-MCP and methyl jasmonates.

Postharvest Biol. Technol. 36:61-68.

2) Kondo, S., J. P. Mattheis et al. 2006. Aroma volatile emission and expression of 1-aminocyclopropane-1-carboxylate (ACC) synthase and ACC oxidase genes in pears treated with 2,4-DP. Postharvest Biol. Technol. 41:22-31.

8. 国際園芸学会シンポジウムでの招待講演（平成 17 年 6 月、メキシコ）

1. 果樹におけるジャスモン酸の役割に関する研究

2. 大学院園芸学研究科/教授/近藤 悟

3. イタリア/ボローニャ大学/教授/グリエルモ コスタ ; パトリジア トリジアニ

4. 平成 18 年～（継続中）

5. 生理活性物質、ジャスモン酸は果実の着色、成熟、果樹の花芽形成、および休眠など果樹の様々な生理に影響する。本研究は果樹および果実におけるジャスモン酸の代謝および生理を検討する。

6. ボローニャ大学

7. 1) Ziosi, V., Torrigiani, P., G. Costa, S. Kondo et al. 2008. Jasmonates-induced transcriptional changes suggest a negative interference with the ripening syndrome in peach fruit. Journal of Experimental Botany. 59:563-573.

2) Kondo, S. Roles of jasmonates in fruit ripening and environmental stress. 2010. Acta Hort. (In press).

8. ボローニャ大学大学院での特別講義（平成 18 年 5 月）

国際園芸学会シンポジウム招待講演（The 11<sup>th</sup> international symposium on plant bio-regulators in fruit production）（平成 21 年 9 月、イタリア）

1. 熱帯果実の貯蔵生理に関する研究

2. 大学院園芸学研究科/ 教授/ 近藤 悟

3. タイ/ キングモンクット工科大学/ 准教授/ シリチャイ カンラヤナラット

4. 平成 12 年（継続中）

5. 熱帯性果樹および果実は、その気候帯のもと温帯性果実とは異なる栽培特性および生理を示すが、十分に解明されていない。本研究ではマンゴー、マンゴスチン、パパイヤなどの栽培特性、成熟特性を生理活性物質との関連から検討する。

6. 日本学術振興会、JASSO 他

7. 1) Kondo, S., S. Kanlayanarat et al. (2001). Abscisic acid metabolism during development and maturation of rambutan fruit. J. Hort. Sci Biotech. 76: 235-241.

2) Kondo, S., S. Kanlayanarat et al. (2001). Changes in physical characteristics and polyamines during maturation and storage of rambutan. Scientia Hort. 91: 101-109.

3) Kondo, S., S. Kanlayanarat et al. (2002). Effects of chilling injury on cell wall metabolism during storage of rambutan fruit. J. trop. Agri. 46:259-264.

4) Kondo, S., Kanlayanarat et al. (2002). Abscisic acid metabolism during fruit development and maturation of mangosteens. J. Amer. Soc. Hort. Sci. 127:737-741.

5) Kondo, S. Kanlayanarat et al. (2002). Cell wall metabolism during development of rambutan fruit. J. Hort. Sci. Biotech. 77:300-304.

6) Kondo, S., S. Kanlayanarat et al. (2003). Relationship between ABA and chilling injury in mangosteen fruit treated with spermine. Plant Growth regulat. 39:119-124.

- 7) Kondo, S., Kanlayanarat et al. (2004). ABA catabolism during development and storage in mangoes: Influence of jasmonates. *J. Hort. Sci. Biotech.* 79:891-896.
- 8) Kondo, S. et al. (2004). Relationship between jasmonates and chilling injury in mangosteens are affected by spermine. *HortScience* 39:1346-1348.
- 9) Kondo, S., Kanlayanarat et al. (2004). Changes in jasmonates of mangoes during development and storage after varying harvest times. *J. Amer. Soc. Hort. Sci.* 129:152-157.
- 10) Kondo, S., Kanlayanarat et al. (2005). Preharvest antioxidant activities of tropical fruit and the effect of low temperature storage on antioxidants and jasmonates. *Post harvest Biol. Technol.* 36:309-318.
- 11) Kondo, S. et al. (2007). Effects of jasmonates differed at fruit ripening stages on ACC synthase and ACC oxidase gene expression in pears. *J Amer. Soc. Hort. Sci.* 132: 120-125.
- 12) kondo, S. (2007). Chilling-related browning of rambutan. *Stewart Postharvest review.* 3 (6). On line ISSN: 1945-9656.
- 13) kondo, S., Meemak, S., Ban, Y., Moriguchi, t., Harada, T. (2009). Effects of auxin and jasmonates on 1-aminocyclopropane-1-carboxylate (ACC) synthase and ACC oxidase gene expression during ripening of apple fruit. *Postharvest Biol. Technol.* 51: 281-284.
- 14) Setha, S. and kondo, S. (2009). Abscisic acid levels and anti-oxidant activity are affected by an inhibitor of cytochrome P450 in apple seedlings. *J. Hort. Sci. Biotech.* 84: 340-344.
- 15) kondo, S., Sae-Lee, K. and Kanlayanarat, S. (2010). Xyloglucan and polyuronide in the cell wall of papaya fruit during development and storage. *Acta Hort.* (In press).
8. 1) キングモンクット工科大学での特別講義 (平成12年以降毎年)
- 2) 国際園芸学会シンポジウム発表 (Southeast asia symposium on quality and safety of fresh and fresh cut produce) (2009年8月、バンコク、タイ)

1. 各種果樹における果実の着生と発育に及ぼす植物ホルモンの影響
2. 園芸学部/教授/松井 弘之  
環境健康都市園芸フィールド科学教育研究センター/准教授/小原 均
3. アメリカ合衆国/ミシガン州立大学/Martin J. Bukovac
4. 平成2年度～
5. 各種果樹の安定した果実生産と高品質果実生産を目的に、着果および果実発育と内生植物ホルモンとの関連を研究している。また、本研究と平行して、果実に対する植物ホルモンの透過性に関する要因についても検討している。
6. ミシガン州立大学
7. ①N-Substituted phthalimide-induced of parthenocarpy in sour cherry (*Prunus cerasus* L. Montmorency) enhanced by auxin. 1994. 24th Inter. Hort. Congress, Abstracts 269.
- ②Gibberellins in immature seed of *Prunus cerasus*: Structure determination and synthesis of gibberellins, GA<sub>95</sub> (1,2-didehydro-GA<sub>20</sub>). 1996. *Phytochemistry*, 42(4):913-920.
- ③GA<sub>95</sub> is a genuine precursor of GA<sub>3</sub> in immature seed of *Prunus cerasus* L.. 1998. 16th Inter. Conference on Plant Growth Substances, Abstracts 146.
- ④Induction of fruit set and growth of parthenocarpic 'Hayward' kiwifruit with plant growth regulators. 1997. *J. Japan. Soc. Hort. Sci.* 66(3.4):467-473.
- ⑤Endogenous gibberellin-induced parthenocarpy in grape berries. 2000. *Acta Hort.* 514:69-74.
- ⑥Endogenous gibberellins in immature seeds of *Prunus persica* L.: identification of GA<sub>118</sub>, GA<sub>119</sub>, GA<sub>120</sub>, GA<sub>121</sub>, GA<sub>122</sub> and GA<sub>126</sub>. 2001. *Phytochemistry* 57:749-758.
- ⑦Effects of the combination of gibberellic acid and ammonium nitrate on the growth and quality of seedless berries in 'Delaware' grape. 2001. *J. Japan. Soc. Hort. Sci.* 72(5):366-371.
- ⑧Effect of gibberellins on induction of parthenocarpic berry growth of three grape cultivars and their endogenous gibberellins. 2001. 52<sup>nd</sup> ASEV Annual Meeting, Technical Abstracts, 81.
- ⑨Effects of gibberellin A<sub>3</sub> and ammonium sulfate of growth and quality of seedless Delaware grapes. 2003. *J. ASEV Jpn.* 14(2):58-63.
- ⑩Induction of parthenocarpic fruit growth with endogenous gibberellins of Loquat. 2004. *Acta Hort.* 653:67-70.
- ⑪Production of seedless loquat fruits. 2004. *Regulation of Plant Growth and Development.* 39(1):106-113.

⑫Effects of grape berry development stages on ammonium nitrate-enhanced penetration of gibberellin A3. 101<sup>st</sup> Abstracts ASHS Annual Conference, HortScience, 39(4):793.

8. なし

1. 生物的防除法による植物病害抑制効率安定化の研究

2. 園芸学部/生物生産科学科/准教授/穴戸雅宏

3. アメリカ合衆国/オレゴン州立大学/植物学・植物病理学部/Kenneth B. Johnson 教授

4. 平成16年4月～

5. 本プロジェクトは、植物病害に対する生物的防除を単に短期的な病害減少だけに着目せず、微生物の生態を解析して防除効率の安定化を図る目的で行う。生物的防除の研究は、有用微生物の探索とそのメカニズムの解明がほとんどで、それらを一般化するためのモデル研究は進んでいない。そこで、有用微生物-病原菌の拮抗性を表現する生態モデルを検討し、有用微生物と病原菌の生態的な特性が生物的防除効率に及ぼす影響を明らかにする。よって、開発されたモデルを利用する新たな生物的防除の評価は、その効果の安定性も加味したものとなり、より効率的な生物的防除の利用が可能となる。

6. 科学研究費補助金（基盤研究C2）14560037

7. Shishido, M., Miwa, C., Usami, T., Amemiya, Y., and Johnson, K. B. (2005) Biological control efficiency of Fusarium wilt of tomato by nonpathogenic Fusarium Fo-B2 in different environments. *Phytopathology* (in press)

Shishido, M., Naoi, M., Momma, N., Usami, T., Amemiya, Y., and Johnson, K. B. (2005) Nutrient availability in the rhizosphere influences the efficacy of biological control of Fusarium wilt of tomato. *J. Gen. Plant Pathol.*

8. なし

1. 中国乾燥地域における農業生産向上に関する研究

2. 園芸学部/准教授/磯田 昭弘

3. 中華人民共和国/石河子中亜干旱農業環境研究所/王 培武

4. 平成11年度～（継続中）

5. 中国乾燥地域での農業生産の向上と、新しい農業技術の開発のための研究を行うことを目的とする。現在は、石河子中亜干旱農業環境研究所において、節水型のかん水方法、作物の耐乾性、大規模有機栽培に関して共同で研究を行っている

6. なし

7. 磯田ら、2000. 乾燥地におけるかんがい法の違いがテンサイの生育に及ぼす影響について、日本作物学会記事、69（別1）：182-183.

(1) 磯田ら、1999. 異なる環境条件下におけるワタとダイズの葉温と蒸散の反応。第2回千葉大学環境リモートセンシング研究センター環境リモートセンシングシンポジウム論文集、149-152.

(2) 磯田昭弘・藤木央子・王培武・李治遠、2001. 異なる水分条件下におけるワタとダイズの乾物生産および生理的特性、日本作物学会関東支部会報、16：40-41

(3) 磯田昭弘・高橋一平・王培武・李治遠、2001. 中国乾燥地域における加工用トマトの品種間差異、日本作物学会関東支部会報、16：60-61.

(4) Isoda, A. and P. Wang, 2001. Effects of leaf movement on leaf temperature, transpiration and radiation interception in soybean under water stress conditions. *Tech. Bull. Faculty Hort. Chiba Univ.*, 55, 1-9.

(5) Isoda, A. and P. Wang, 2002. Leaf temperature and transpiration of field grown cotton and soybean under arid and humid conditions. *Plant Prod. Sci.*, 5: 224-228.

(6) 磯田昭弘・森正延・高野真理・王培武・李治遠・毛洪霞、2002. 中国乾燥地域におけるダイズの収量および乾物生産特性、日本作物学会関東支部会報、17：68-69.

(7) Wang, C., A. Isoda, P. Wang and Z. Li, 2002. Varietal differences in leaf temperature and sap flow rate of field grown cotton, 日本作物学会関東支部会報、17：76-77.

(8) Wang, C., A. Isoda, Z. Li and P. Wang, 2004. Transpiration and leaf movement in field grown cottons under arid conditions. *Plant Prod. Sci.*, 7:266-270

(9) Wang, C., A. Isoda and P. Wang, 2004. Growth and yield performance of some cotton cultivars in Xinjiang, China, an arid area with short growing period. *J. Agron. Crop Sci.*, 190: 177-183

(10) Isoda, A., M. Mori, S. Matsumoto, Z. Li and P. Wang. 2006. High yielding performance of soybean in northern Xinjiang, China. *Plant Prod. Sci.*, 9: 401-407.

(11) Wang, C., A. Isoda, D. Wang, M. Li, M. Ruan and Y. Su, 2006. Canopy structure and radiation interception of cotton grown under high density condition in northern Xinjiang. *Cotton Science*, 18: 223-227.

(12) Isoda, A., H. Konishi, P. Wang and Z. Li. 2007. Effects of different irrigation methods on yield and water use efficiency of sugar beet in the arid area of China. HortScience, 61:7-10.

(13) Isoda, A., H. Mao, Z. Li, P. Wang. 2010. Growth of high-yielding soybeans and its relation to air temperature in Xinjiang, China. Plant Prod. Sci., 13 (in press).

8. なし

1. プリティッシュ・コロンビア大学新渡戸稲造記念庭園に関する研究

2. 園芸学部／教授／藤井英二郎

3. カナダ／マニトバ大学／五島聖子

4. 平成16年度から

5. 日本と北米との交流に多大な功績のあった新渡戸稲造博士を顕彰し、末永く交流を図る場として、日本国外務省とプリティッシュ・コロンビア大学総長によって企画された日本庭園で、千葉高等園芸学校教授・森敏之助氏によって1959年設計、翌60年竣工された。その後、森教授の教え子で、同じく世界的に活躍された造園家・小形研三氏による維持管理技術の指導などを経て良好に維持されていたが、10年程前、枡野氏によって部分的に改変・改修され、大学や地元造園関係者から復原要望が強く寄せられていた。このような経緯を受けて、当初の設計の特徴を明確にする必要があり、現地研究者とともに共同研究を始めた。

6. 科学研究費（基盤研究B）

7. Fujii, E., Goto, S. (2004) Characteristics of Nitobe Memorial Garden designed by Prof. Kannosuke Mori, Report to Univ. of British Columbia

8. なし

1. 経済発展下のフィリピン農村における家計行動の長期動態分析

2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦

3. アメリカ合衆国／カリフォルニア大学バークレー校／James N. Anderson

4. 平成12年度～現在

5. 本研究では、Anderson 教授が1962年に始めて以来断続的に継続しているフィリピン・ルソン島北部の一農村における長期農村調査を継続・発展させることにより過去40年間の農村世帯パネルデータを構築し、それをもとに①経済発展下の農村社会の変容の諸側面を長期的且つ動態的視点から叙述・分析すること、及び②データを農村家計行動の計量経済学的実証分析に応用することにより、例えば、海外出稼ぎ労働の増加が家庭内資源配分の家計行動に与える影響の分析等に新たな視角から接近する。

6. 科研費

7. \*Nobuhiko Fuwa and James N. Anderson. "Filipina Encounters with Japan: Diverse Stories from a Pangasinan Barangay." Paper presented at the 7th International Conference on Philippine Studies, Leiden, The Netherlands. June 2004.

\*不破信彦「農村貧困からの脱出と教育：フィリピン農村の事例」『教育と経済発展：途上国における貧困削減に向けて』（大塚啓二郎・黒崎卓編著）（分担）東洋経済新報社。（2003年）

\*Nobuhiko Fuwa. "Pathways from Poverty toward Middle Class: Determinants of Socio-Economic Class Mobility in the Rural Philippines." A paper presented at the conference "Staying Poor: Chronic Poverty and Development Policy," organized by Chronic Poverty Research Centre, University of Manchester. April 7-9, 2003.

8. なし

1. バングラデシュ中等教育奨学金プロジェクトのインパクト評価

2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦

3. アメリカ合衆国／世界銀行／Shahidur R. Khandker

4. 平成11年度～現在

5. バングラデシュにおいて1994年からはじまった女子中等教育奨学金制度が女子就学率、男子就学率、男女学生の学力、奨学生の出身家庭の経済状況などに対していかなる影響を及ぼしたかを、計量的に調査することにより、同制度に対して資金を提供している世界銀行の今後の政策立案に資する。本プロジェクトでは、関係機関からの情報、データ収集を行なうのはもとより、独自にデザインされた家庭レベルのサーベイ・データの収集を行なうことにより奨学金制度の影響を計量経済学的手法により定量評価する。

6. 世界銀行

7. \*Shahidur R. Khandker, Mark M. Pitt, and Nobuhiko Fuwa. "Subsidy to Promote Girls' Secondary Education: The Female Stipend Program in Bangladesh." A paper presented at Annual Meeting of the Population Association of America. May 2003.

\*Nobuhiko Fuwa. "The Net Impact of the Female Secondary School Stipend Program in Bangladesh." 千葉大学園学報 55. 2001.

\*Nobuhiko Fuwa. "Measuring the Net Impact of the Female Secondary Stipend Program on Girls' Enrolment Using School-level Data in

Bangladesh.” Mimeographed, Poverty Reduction and Economic Management, The World Bank. 2000.

8. なし

1. 東インド天水稲作地域における農業生産性及び貧困動態に関する研究

2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦

3. インド／インド統計研究所／Pabitra Banik

米国／東西センター／Christopher M. Edmonds

4. 平成13年度～現在

5. 東部インド・ビハール高原地域は農業を行う自然条件が厳しく、また少数民族住民の割合も比較的高いことで知られ、貧困率も高い。そこで天水稲作を営む農家所帯の所得増大にの自然上及び社会経済上の制約条件を明らかにするため、1998年に詳細な家計調査を行った。其のデータの定量的分析により、調査対象家計群の経済活動(農業・非農業を含む)の実態や米作の技術的効率性等の分析を行う。更に2004-2005年にも再調査を行い、その間の農業生産の変化や貧困率の推移等の要因を詳細に分析することにより、持続可能な食糧増産・所得増大のための技術導入や政策提言につなげることを目標としている。

6. 国際稲研究所、東西センター、インド統計研究所

7. \*P.B. Banik, C.M. Edmonds, N. Fuwa, S.P. Kam, L. Villano and D.K. Bagchi. 2004. “Sustainability Criteria in Rice-Based Cropping Systems in the Bihar Plateau of Eastern India: Initial report of the ISI-IRRI research project.” International Rice Research Institute Discussion Paper No. 47. Los Baños: International Rice Research Institute. May 2004.

\*Nobuhiko Fuwa, Christopher Edmonds and Pabitra Banik. 2005. “How inefficient are small-scale rice farmers in eastern India really?:

Examining the effects of microtopography on technical efficiency estimates.” East-West Center Working Paper No. 79. Honolulu: East-West Center. May 2005.

8. なし

1. 経済環境変化と農村家計のミクロ経済分析

2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦

3. インド／M. Venkatarangaiya Foundation／Shantha Sinha

4. 平成16年度～

5. インド、アーンドラ・プラデーシュ州における家計の意志決定について研究する。とくに、貧困家計における児童の就学・就労の意志決定について重点的に研究する。児童労働解放のNGOであるMV財団と共同で調査を行うことにより、実態の明らかでない貧困家計の意志決定プロセスについて個別の家計調査を行い、データと理論による理解をすることを目指している。既存の研究と異なり、児童労働の実体解明を主たる目的とするデータ収集を行うことで、児童の時間配分がどのような要因で決定するのかを詳細に明らかにすることができる。また、児童労働解放で実績のあるMV財団のプログラムの効果を厳密に示すことで、教育政策立案における新たな視点を提供することも目的としている。

6. 日本貿易振興会アジア経済研究所

7. Seiro Ito (ed.), *Agricultural Production, Household Behavior, and Child Labor in Andhra Pradesh*. Institute of Developing Economies Joint Research Program Series No. 135. 2005.

8. なし

1. フィリピン農村発展の歴史と貧困削減政策への提言

2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦

3. フィリピン／フィリピン大学大学院経済学研究科／Arsenio M. Balisacan

4. 平成10年度～現在

5. フィリピンにおける過去30年間にわたる農村発展の歴史を、農業生産、所得、農村貧困の度合い等の観点から長期的・叙述的に概観し、更に、その様な農村発展に大きな影響をあたえたと思われる政府の様々な政策（農業政策、国家開発政策、工業化政策、貿易政策、公共投資政策、土地政策等）とその様な政策が取られた歴史的・政治的背景をもあわせて考察する。更にまた、過去約20年間の州レベルの所得の成長及び貧困率の変化と、各州の自然・経済・社会的特性及び政策の変容との間の定量的関係を計量経済モデルの推定によって明らかにすることを旨とする。それらの分析をもとに農村貧困削減に有効な各種政策立案に資する教訓を導き出すことを目的とする。

6. 世界銀行、科研費

7. \*Arsenio Balisacan and Nobuhiko Fuwa (2005). Changes in Spatial Income Inequality in the Philippines: An Exploratory Analysis (with Arsenio Balisacan) in *Spatial Disparities in Human Development: Perspectives from Asia*. (eds.) Ravi Kanbur, Tony Venables and Guanghua Wan. United Nations University Press. 2005.

- \*Arsenio Balisacan and Nobuhiko Fuwa (2004). "Going beyond Cross-country Averages: Growth, Inequality, and Poverty in the Philippines." *World Development*, 32, pp.1891-1907
- \*Arsenio Balisacan, Nobuhiko Fuwa and Margarita Debuque (2004). "The Political Economy of the Philippine Rural Development since the 1960s." In T. Akiyama and D. Larson (eds.) *Rural Development and Agricultural Growth in Indonesia, the Philippines and Thailand*. Asia Pacific Press at the Australian National University.
- \*Arsenio Balisacan and Nobuhiko Fuwa (2003). "Growth, Inequality and Politics Revisited: A Developing-Country Case." *Economics Letters*, 79. pp. 53-58.
- \*Arsenio Balisacan and Nobuhiko Fuwa (2002). "Going beyond Cross-country Averages: Revisiting Growth, Inequality, and Poverty in the Philippines." Foundation for Advanced Studies on International Development (FASID) Discussion Paper Series on International Development Strategies No. 2001-005. Mar. 2002.
- \*Arsenio Balisacan and Nobuhiko Fuwa (2001). "Growth, Inequality, Politics and Poverty Reduction in the Philippines." University of the Philippines School of Economics Working Paper 0109.

8. なし

1. フィリピン農村経済の変容と貧困ダイナミクスの研究
2. 大学院園芸学研究科（開発経済学）／准教授／不破 信彦
3. フィリピン／国際稲研究所（IRRI）／Mahabub Hossain
4. 平成14年度～現在
5. IRRI では1990年代初頭以降、灌漑施設の有無や自然地理条件が異なるフィリピンの4箇所の米作村において断続的に全戸調査による詳細な家計調査を続けている。調査開始から10年以降を経て、村住民の経済活動（米作を初めとした農業及び非農業活動を含む）の内容や所得水準等は大きく変化してきている。そこで、2003-2004年にかけてそれら4箇所の村を再訪問して住民からの各種聞き取り調査を行うとともに、過去のデータを含めた定量的分析を行うことより、農村経済の変容を明らかにする。更に、貧困家計の行動パターンに着目し、貧困から脱出できる家計とそうでない家計との間の違いを明らかにすることを旨とする。フィリピン国内の多様な地理条件の違いに配慮したきめ細かな農村貧困削減の立案に資することを目標とする。

6. 国際稲研究所（IRRI）

7. なし

8. なし

1. 栽培様式による環境負荷の差異と作物を利用した水質浄化に関する研究
2. 園芸学部／准教授／丸尾 達
3. タイ／カセサート大学農学部／ステビー スクプラカーン、パリアヌット チュラカ、スパチャイ アウムカ
4. 平成12年度～
5. 研究の目的：緑の革命後、化成肥料の施用量が急速に増大した熱帯では、周期的に作物栽培が行われるため施肥による汚染が大きい。特に、バンコクなど大都市近郊の小規模農家では、換金作物としての野菜栽培が増加し、化学肥料だけでなく有機肥料も過剰に施肥されている。本研究は、熱帯アジアにおける農業活動による環境負荷の実態を、窒素・リン酸肥料の動態から明らかにしようとするものである。これまで環境に優しい産業として考えられてきた農業による環境汚染の実態を、社会学的・栽培学的見地から捉え、表面水・地下水の富栄養化を例として定量的に明らかにする。

6. 科学研究費補助金(海外調査)、平成14年度～16年度（代表；菊池眞夫）

7. ①エンサイはどこまで薄い培養液を吸収できるか 農業環境工学関連4学会2001年合同大会発表要旨：220, 2001

②培養液濃度 *Ipomoea aquatica* Forsk. の生育に及ぼす系統間差異、熱帯農業、45(別2)107-108, 2001

③ *Ipomoea aquatica* Forsk 系統の葉形状分析、熱帯農業、46(別1)1-2, 2002

④ *Ipomoea aquatica* Forsk 系統の葉中の無機成分に生育地の水質が及ぼす影響、熱帯農業、47(別1)31-32, 2003

⑤Development of Vegetable Production System by Purification of Euthrophic Tega-Lake Water, *Acta Hort.* No.644, 85-90, 2004

⑥Critical Nutrient Concentrations for Absorption of Some Vegetables, *Acta Hort.* No.644, 493-499, 2004

8. なし

1. 地域のアイデンティティと対立におけるコミュニティデザインに関する研究
2. 千葉大学園芸学部／准教授／木下 勇
3. 米国／州立ワシントン大学（University of Washington）／ジェフリー・ハウ（Jeffrey Hou）
4. 平成14年度～
5. 歴史ある地区のアイデンティティと開発と保全などの対立要因からどのように、まちづくりのビジョンを形成していくか、日米の事

例を比較しながら共同研究を行った。地域を一新する新しい都市開発に直面している歴史的な地区において、歴史性をアイデンティティとして地域のまとまりと方向性を、対立点を明確にしながら、対案としてのコミュニティデザインの方角を模索した。米国ではシアトルの旧日本人街であるインターナショナルディストリクトを対象に、日本では旧水戸街道の宿場町であった松戸市小金地区を対象に分析した。その成果は2002年12月16-20日香港で開催のパシフィック・リム国際コミュニティデザイン会議で発表した。またその上での提案の計画はワシントン大学と千葉大学との共同のWEBを介したグローバルクラスルームという共同の実習を行い、また双方に学生が訪問しあい、最後に松戸市小金地区で街の中の7箇所に展示とミニシンポジウムを行ない、日米の学生と教官が地域住民の前で発表し、意見交換を行った。

さらに2003年度には地域内の対立が組織や住民層の間の差異に起因すると注目し、差異の実態を把握した。差異の元となる住民層のアイデンティティが重視されると全体のアイデンティティの形成の障害となるという現象は両地区に共通してみられた。またその後の進展の状況をアクションリサーチ的方法を使いながらモニタリングした。小金地区では米国の事例にあるCDC（コミュニティ開発の協同体）を目指した組織が立ち上がり、地域改善のプロジェクトに着手し、ワシントン大学のDesign&Buildという方法にならない、学生提案をコミュニティと学生が協働して実施し、小さなポケットパークが整備された。

6. 自己資金、およびパシフィック・リム・国際会議での会議参加の助成、および国内での展示、ミニシンポジウムは戸定会、園芸学部後援会の助成を受けた。
7. Participatory Planning in Community of Differences: Comparative Case Studies from Japan and the U.S., on submitting to JAPR, and a part was reported at the 5<sup>th</sup> Pacific Rim Community Design Conference in Seattle in Sep.2, 2004
8. Journal of American Planning and Research に投稿、および Journal of Landscape Architecture に記事掲載予定、そして第5回パシフィック・リム国際コミュニティデザイン会議にて発表（2004年9月）

1. 都市再生における緑地環境の役割についての国際比較研究

2. 園芸学部/准教授/木下 剛

3. ① 大韓民国/恵泉女学園短期大学部/イエ 京祿 (Ye, Kyung-rock)
- ② 中華人民共和国/姫路工業大学自然・環境科学研究所/沈 悦 (Shen, Yue)
- ③ 中華人民共和国/山東農業大学園芸学院/朴 永吉 (Boku, Eikichi)
- ④ アメリカ合衆国/ハーバード大学デザイン大学院/霜田亮介 (Shimoda, Ryosuke)
- ⑤ 連合王国/A Aスクール・ランドスケープアーバニズム大学院/鈴木 卓 (Suzuki, Taku)

4. 平成14年度～

5. 平成11年度より開始した国際共同研究プロジェクト「歴史的都市・街の保存における伝統的庭園の役割」を発展させた研究プロジェクトである(旧テーマについては平成13年度で終了とした)。都市環境の再生にともなう緑地及び緑地計画の意義と役割についてグローバルに情報を収集し比較することで、アジア都市における望ましい環境再生と緑地計画のあり方を検討することを目的としている。

6. なし

7. Formation of Greenery Space in the Vacant Lot of the Former Athletes' Village of the Tokyo Olympic Games - From Athletes' Village to Forest Park - について、第5回日・中・韓国際ランドスケープ専門家会議2002(北京市開催)にて、発表・討議を行った。「アーバニズム」とどう向き合うか?と題し、平成15年度日本造園学会全国大会分科会にて研究発表・討議を行った。

8. 3ヶ国の研究者による共同研究

1. 日中韓の古代庭園に関する研究

2. 園芸学部/教授/藤井英二郎

3. 中国/清華大学/章俊華
- 韓国/全南大学/白志星

4. 平成12年度～

5. 相互に関連の深い日本、中国、韓国の古代庭園を対象に各々の国の特徴と相互関係、共通性を明らかにする。

6. 科学研究費(基盤研究A)

7. 藤井英二郎・金眞成・高瀬要一・白志星・小野健吉(2002)近年の発掘調査に基づく韓国・百済の宮南池に関する考察、日本造園学会誌65(5),443-446

Fujii, E. (2003) Comparative studies on the gardens of seclusion between Japan and Korea, Proceedings of International Symposium in memory of the 500<sup>th</sup> Anniversary of Yang San-bo's Birth, 29-52

8. 日本と韓国の古代庭園に関するシンポジウム:平成12年度に奈良国立文化財研究所で開催。

日本、中国、韓国の隠棲の庭に係わる国際シンポジウムを平成15年度に韓国・全南大学で開催。

1. 人間活動の盛んな流域における水循環および水質変遷に関する研究
2. 園芸学部／教授／唐 常源
3. 中国／中国科学院地理科学自然资源研究所／宋 献方
4. 平成17年度～
5. 経済発展の著しい地域では、地域開発、環境悪化、人口増大などの問題は世界の各地にみられる。そこで、流域スケールにおける水循環および水質変遷に与える人間活動の影響を水文学の観点から明らかにし、特に地域経済発展による水循環構造変化のメカニズムを解明することを目的としている。これまで現地調査、ワークショップ共催などを通じ、研究協力をしてきた。  
2007年4月9日中国科学院水問題研究センター主任・中国科学院地理科学資源研究所教授劉昌明が東京で千葉大学新藤名誉教授らと研究打ち合わせをした。  
2007年6月～9月中国科学院地理科学資源研究所教授於清潔が外国人研究者として園芸学部で共同研究をした。  
2007年9月7日千葉大学新藤名誉教授と唐教授が中国科学院地理科学資源研究所を訪問し、研究打ち合わせをした。  
2007年9月8日から十日間、唐教授が中国科学院地理科学資源研究所の研究者らと一緒に中国淮河流域の水質調査を実施した。  
2007年10月25日中国科学院地理科学資源研究所劉昌明、夏軍、宋献方教授らが東京で中国淮河流域の水環境に関する日中共同シンポジウムに参加し、共同研究成果を発表した。翌日、千葉大学園芸学部を訪問し、研究打ち合わせをした。  
2008年3月3日～3月9日、千葉大学近藤、唐教授が北京訪問し、中国科学院陸地過程重点実験室主催するアジアの地下水会議を出席し、研究成果を発表した。その間、流域の水質調査を実施した。
6. 文部省科学研究費（唐 常源/千葉大学園芸学研究科教授）
7. Shen YJ, Tang C, Xiao JY, Oki T, Kanae S. (2005): Effects of urbanization on water resource development and its problems in Shijiazhuang, China. IAHS Publ., No 293, 380-388.  
Xiao JY, Shen YJ, Ge JF, Tateishi R, Tang C, Liang YQ and Huang ZY. (2006) Evaluating urban expansion and land use change in Shijiazhuang, China, by using GIS and remote sensing, Landscape and Urban Planning, Vol.75, 69-80.  
Tang C., Chen JH., Kondo K. and Lu Y. (2006): Characteristics of soil water movements and water table at the Leizhou peninsula, Guangdong province, China. Advances in Geosciences, Vol. 4: Hydrol. Sci., World Scientific, 219-227.  
Chen JY., Tang C and Yu JJ. (2006): Use of  $^{18}\text{O}$ ,  $^2\text{H}$  and  $^{15}\text{N}$  to identify nitrate contamination of groundwater in a wastewater irrigated field near the city of Shijiazhuang, China. Jour. Hydrol., Vol.326, 367-378.  
Aji K., Tang C., Kondo K. Song, XF. and Sakura, Y. (2006): Environmental isotopes of precipitation, groundwater and surface water in Yanshan Mountain, China. Advances in Geosciences, Vol. 4: Hydrol. Sci., World Scientific, 11-16.  
Liu XC, Xia J., Song XF, Yu JJ., Tang C. and Zhan CS (2006): A study of surface water and groundwater using isotopes in Huaishahe basin in Beijing, China. IAHS Publ., NO.302,106-114.  
Li Fadong, Song Xianfang, Tang Changyuan et al., (2007): Tracing infiltration and recharge using stable isotope in Taihang Mt., North China. Environmental Geology, 53:687-696 (DOI 10.1007/s00254-007-0683-0)  
Song Xianfang, Li Fadong, Liu Changming *et al.*, (2007): Water cycle in Taihang Mt. and its recharge to groundwater in North China Plain. Journal of Natural Resources, 22(3): 398-408.  
Song Xianfang, Li Fadong, Yu Jingjie, Tang Changyuan et al. (2007): Characteristics of groundwater cycle using deuterium, oxygen-18 and hydrochemistry in Chaobai River Basin. Geographical Research. 26(1):11-21.  
Li Fadong, Tang Changyuan, Zhang Qiuying et al. (2008): Surface water-groundwater interactions in a Yellow River alluvial fan. Surface Water-Groundwater Interactions: Process Understanding, Conceptualization and Modelling (Proceedings of Symposium HS1002 at IUGG2007, Perugia, July 2007). IAHS Publ. 321, (in revision)  
Zhang Qiuying, Li Fadong, Tang Changyuan, *et al.* (2008): Effects of maize straw and gravel mulches on soil water content in Taihang Mt., northern China. Hydrology in Mountain Regions: Observations, Processes and Dynamics (Sponsor ICSIH with co-sponsorship of UCCS, ICRS, ICSW, ICCLAS, ICGW, PUB), IUGG 2007 Perugia. IAHS Publ. 3\*\*, (in revision)  
Fadong Li, Xianfang Song, Changyuan Tang et al. (2008): Stable isotopic characterization in precipitation, soil water and groundwater in Taihang Mountain, North China. IAHS Publ. 319.
8. なし



1. 日本とロシアの自然風景の評価・比較研究
2. 大学院園芸学研究所／准教授／古谷 勝則
3. ロシア連邦共和国／モスクワ大学／Elena PETROVA  
 ロシア連邦共和国／V.B. Sochava Institute of Geography SB RAS／Yuri SEMENOV  
 ロシア連邦共和国／Vernadsky State Geological Museum of RAS／Yury MIRONOV  
 ロシア連邦共和国／Institute of Orientalistic RAS／Anastasia PETROVA
4. 平成20年4月1日～
5. 日本とロシアは、お互いの気候風土や文化的背景が大きく異なる。気候風土や文化的背景の違いと風景評価の関連を研究するには、国境を接する2つの国で、同じ風景を両国民に評価させ、結果を比較するのが簡単な方法である。しかしながら、両国の言語の違いや交流の少なさから今までこのような試みは行われなかった。本研究では、日本とロシアの人々に両国で撮影した写真を見せ、評価させることにより、両国の人々の風景理解の違いを明らかにすると共に、評価される風景要素の特徴について明らかにすることを目的とした。
6. 2008-2009 二国間交流事業 共同研究, JSPS と RFBR
7. Elena Petrova, Yoji Aoki, Yury Mironov, Anastasia Petrova, Katsunori Furuya, Hajime Matsushima, Norimasa Takayama, Comparison of natural landscapes appreciation between Russia and Japan: methods of investigation, Monitoring and Management of Visitor Flows in Recreational and Protected Areas, Pisa (Italy), 198-202.  
 Katsunori Furuya, Hajime Matsushima, Introduction of the natural landscape evaluation between Japan and Russia, International Seminar of Chiba University Expert Program, 2009.8.12  
 Yoji AOKI, Elena PETROVA, Yury MIRONOV, Anastasia PETROVA, Katsunori FURUYA, Hajime MATSUSHIMA, Norimasa TAKAYAMA Toshihiro NAKAJIMA, Comparison of natural landscapes appreciation between Russia and Japan: photo selection, Special seminar at Moscow University, 2009.2.19  
 Hirofumi Ueda, Toshihiro Nakajima, Norimasa Takayama, Elena Petrova, Hajime Matsushima, Katsunori Furuya, Yoji Aoki, Ways of Seeing the Forest -Landscape Image Sketches in Japan and Russia-, Monitoring and Management of Visitor Flows in Recreational and Protected Areas, Wageningen, 2010. 6.  
 Katsunori Furuya ed., Summaries of technical reports of JAPAN-RUSSIA Joint Research Project and Scientific Seminar, Chiba University, 2009.8.12
8. 千葉大学国際セミナー, 2009. 8. 12

## 環境リモートセンシング研究センター

1. 大気環境のリモートセンシング研究
2. 環境リモートセンシング研究センター／教授／久世宏明
3. 中国／中国科学院安徽光学精密機械研究所／所長 刘文清
4. 平成9年度～
5. 長光路光伝搬による大気エアロゾル・微量気体成分の検出法 (DOAS 法) やライダー・衛星リモートセンシング観測について、研究者の相互訪問、研究会・国際会議への参加、客員研究員としての滞在などを通じて幅広い共同研究活動を展開している。
6. 拠点形成経費、奨学寄付金、中国科学院からの補助など
7. ・Si Fuqi, Hiroaki Kuze, Yotsumi Yoshii, Masaya Nemoto, Nobuo Takeuchi, Toru Kimura, Toyofumi Umekawa, Taisaku Yoshida, Tadashi Hioki, Tsuyoshi Tsutsui, Masahiro Kawasaki, Measurement of regional distribution of atmospheric NO2 and aerosol particles with flashlight long-path optical monitoring, Atmospheric Environment, 39 (27) (September 2005) 4959-4968.  
 ・Si Fuqi, Liu Jianguo, Xie Pinghua, Zhang Yujun, Liu Wenqing, Hiroaki Kuze, Liu Cheng, Nofel Lagrosas and Nobuo Takeuchi, Determination of aerosol extinction coefficient and mass extinction efficiency by DOAS with a flashlight source, Chinese Phys. 14(11), (November 2005) 2360-2364.  
 ・Si Fuqi, Liu Jianguo, Xie Pinghua, Zhang Yujun, Liu Wenqing, Hiroaki Kuze, Nofel Lagrosas and Nobuo Takeuchi, Correlation study between suspended particulate matter and DOAS data, Advances in Atmospheric Sciences (Science Press, co-published with Springer-Verlag GmbH, ISSN 0256-1530), Vol. 23, No. 3: DOI 10.1007/s00376-006-0461-z, (May 2006) 461-467.  
 ・Hiroaki Kuze, Masashi Miyazaki, Daisuke Kataoka, Ippei Harada, Measurement of NO2 and SPM in the lower troposphere by means

of DOAS method based on white flashlight sources, The 4th DOAS International Workshop for Environmental Research and Monitoring, March 30-April 3, 2008 (Anhui).

・Wenqing Liu, Pinhua Xie, Jianguo Liu, Yihuai Lu, Min Qin, Fuqi Si, Ang Li, Liang Xu, Dexian Wu, Tianshu Zhang, Xuesong Zhao, Air quality study in Beijing during Olympics with optical measurements, CEReS Colloquium, March 13, 2009 (CEReS).

8. なし

1. リモートセンシングとその環境研究への応用

2. 環境リモートセンシング研究センター／教授／久世宏明

3. インドネシア ハサヌディン大学 Syamsir Dewang 准教授

4. 平成11年～

5. 可視・赤外域やマイクロ波を利用した様々なリモートセンシング手法を環境モニタリングへの応用について、研究者の交流、とくに留学生の受け入れを通じて共同研究活動を展開している。

6. 拠点形成経費、文部科学省奨学金、インドネシア政府奨学金など

7. ・Bannu, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, Musali Knishnaiah, Hiroaki Kuze, Study on interannual variation of sea surface temperature anomalies in the Indo-Pacific region and Indonesian rainfall variability, 3rd Indonesia Japan Joint Scientific Symposium (Chiba University) 9-11 September, 2008.

・Bannu, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, Musali Knishnaiah, Hiroaki Kuze, The impact of El Nino and the positive Indian Ocean Dipole on rainfall variability in the Indo-Pacific region, The 14th CEReS International Symposium, pp.107-110 (Chiba University) 13-14 November 2008.

・Merna Baharuddin, Prilando Rizki Akbar, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, and Hiroaki Kuze, Development of circularly polarized synthetic aperture radar sensor mounted on unmanned aerial vehicle, ISRS2008, Korea Institute of Geoscience and Mineral Resources (KIGAM), Daejeon, Korea, Oct. 29-31, 2008.

・Merna Baharuddin, Victor Wissan, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, and Hiroaki Kuze, Equilateral triangular microstrip antenna for circularly-polarized synthetic aperture radar, Progress in Electromagnetics Research C (PIERC) 8, page 107-120, 2009

・Merna Baharuddin, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, and Hiroaki Kuze, Microstrip Antenna Subarray for Circularly-polarized Synthetic Aperture Radar, March 22-26, The 27th Progress in Electromagnetics Research Symposium (PIERS) (Xi'an, China)

8. なし

1. ライダーリモートセンシングを利用した大気エアロゾルと雲の特性解析

2. 環境リモートセンシング研究センター／教授／久世宏明

3. インド スリ・ベンカテスワラ大学 ムサリ・クリシュナイア教授

4. 平成20年～

5. Krishnaiah 教授は、これまで、全球的に大きな影響をもつ熱帯の大気について、地上設置のライダーおよびレーダーにより研究を行ってきており、その観測対象は、対流圏、成層圏、および中間圏の広い高度範囲に及んでいる。同教授のこうした広い範囲にわたる知識・経験を活用し、CEReS 久世研究室において研究が進行している地上計測と衛星計測を組み合わせた対流圏現象の観測とその包括的解析、とくに放射伝達や温暖化にともなう気候変化の観点に立った共同研究を推進することができた。

6. 学術振興会外国人招聘研究者（長期）

7. ・Musali Krishnaiah, Atmospheric features over a tropical station Gadanki, India - Lidar observations from troposphere to mesopause region, The 14th CEReS International Symposium and SKYNET workshop on "Remote Sensing of the Atmosphere for Better Understanding of Climate Change", Invited Talk, November 13-14, 2008, Keyaki-Hall, Chiba University.

・Y. Padmavathi kulkarni, Bhavani Kumar, Bannu, M. Krishnaiah, H. Kuze, C. Sujathamma, A. Kondoh, Remote sensing of tropical high altitude clouds and aerosols using ground based lidar and MODIS, The 14th CEReS International Symposium, November 13-14, 2008 (Chiba University).

・Y. Bhavani Kumar, M. Krishnaiah, H. Kuze, High altitude cloud observations using Dual polarization Raman lidar technique, The 14th CEReS International Symposium, November 13-14, 2008 (Chiba University).

・Y. Bhavani Kumar, M. Krishnaiah, H. Kuze, Comparing water vapor mixing ratio profiles using Indo-Japanese lidar in Raman mode of operation with GPS radiosondes, The 14th CEReS International Symposium, November 13-14, 2008 (Chiba University).

・Y Bhavani Kumar, Bannu, M. Krishnanaih, H. Kuze, High altitude cloud observations using ground based lidar and simultaneous comparison with satellite lidar observations, The 14th CEReS International Symposium, November 13-14, 2008 (Chiba University).

- ・Musali Krishnaiah, Y. Bhavani Kumar, H. Kuze, Portable lidar observations of aerosol layers over a tropical site Gadanki (13.5° N, 79.2° E), The 26th Laser Sensing Symposium, September 11-12, 2008 (Fukuoka).
- ・Musali Krishnaiah, Padmavathikulkarni, Y. Bhavani Kumar, H. Kuze, Lidar and satellite observations of cirrus climatology over a tropical station Gadanki India, The 26th Laser Sensing Symposium, September 11-12, 2008 (Fukuoka).

8. なし

1. リモートセンシングによるグローバル/大陸規模の土地被覆現況・変化の調査

2. 環境リモートセンシング研究センター/教授/建石隆太郎

3.

・インドネシア/バンドン工科大学/ケトット・ウィカンティカ (部局間交流協定あり)

・ヨルダン/ヨルダン大学人間社会科学部/ホサム・アルビルビシ (部局間交流協定あり)

・中国/内モンゴル師範大学/バヤリ

4. 平成13年度～

5. グローバルな環境変動の実態を土地被覆の観点から調査する。衛星データを用いてグローバルな土地被覆データおよびグローバルな森林被覆率データを作成する。このための現地調査 (グラントルース収集)、グローバル衛星データの前処理、分類・推定処理、検証方法の研究を行う。

6. 科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) (平成13～16年度)

7. Hoan, N.T., Tateishi, R., 2009, Cloud removal of optical image using SAR data for ALOS applications - Experimenting on simulated ALOS data, Journal of The Remote Sensing Society of Japan, vol. 29, No. 2, pp. 410-417.

Alimujiang Kasimu and Ryutaro Tateishi, GLCNMO global urban mapping, validation and comparison with existed global urban maps, Journal of The Remote Sensing Society of Japan, 28(5) 427-440, 2008

Ryutaro Tateishi, Javzandulam Tsend-Ayush, Mohamed Aboel Ghar, Hussam Al-Bilbisi, and Takaki Okatani, Sampling methods for validation of large area land cover mapping, Journal of the Remote Sensing Society of Japan, Vol.27, No.3, pp.195-204, 2007

小林利行、建石隆太郎、1981-2000年時系列 AVHRR/NDVI データを用いたグローバル土地被覆変化可能性地域マップの作成、日本リモートセンシング学会誌、Vol.27, No.3, pp.216-227, 2007

Rakhmatuloh, Daisuke Nitto, Hussam Al Bilbisi, Kota Arihara, and Ryutaro Tateishi, Estimating percent tree cover using regression tree method with very-high-resolution QuickBird images as training data, Journal of the Remote Sensing Society of Japan, Vol.27, No.1, pp.1-12, January 2007

M. A. Ghar, T. Renchin, R. Tateishi and T. Javzandulam, Agricultural land monitoring using a linear mixture model, International Journal of Environmental Studies, Vol.62, No.2, pp.227-234, 2005

T. Javzandulam, R. Tateishi and T. Sanjaa, Analysis of vegetation indices for monitoring vegetation degradation in semi-arid and arid areas of Mongolia, International Journal of Environmental Studies, Vol.62, No.2, pp.215-225, 2005

Adel Shalaby, Mohamed Aboel Ghar, Ryutaro Tateishi, Desertification Impact Assessment in Egypt Using Low Resolution Satellite Data and GIS, International Journal of Environmental Studies, Vol.61 (4), pp. 375-383, 2004.

Aboel Ghar, Adel Shalaby, Mohamed, Ryutaro Tateishi, Agricultural land monitoring in the Egyptian Nile Delta using Landsat data, International Journal of Environmental Studies, Vol.61 (6), pp. 651-657, 2004.

Tateishi, R. and M. Ebata, Analysis of phenological change patterns using 1982-2000 Advanced Very High Resolution Radiometer (AVHRR) data, Int. J. of Remote Sensing, vol.25, no 12, 2287-2300, 2004

Sato, H.P. and R. Tateishi, Land cover classification in SE Asia using near and short wave infrared bands, Int. J. of Remote Sensing, vol.25, no 14, 2821-2832, 2004

H. Al-Bilbisi, R. Tateishi, J. Tetuko S.S., A technique to estimate topsoil thickness in arid and semi-arid areas of north-eastern Jordan using synthetic aperture radar data, Int. J. of Remote Sensing, vol.25, No. 19, pp.3873-3882, 2004

Tateishi, R., Y. Shimazaki, and P.D. Gunin, Spectral and temporal linear mixing model for vegetation classification, Int. J. of Remote Sensing, vol.25, no. 20, pp.4203-4218, 2004

Thomas G. Ngigi and Ryutaro Tateishi, Monitoring deforestation in Kenya, Int. J. of Environmental Studies, vol.61, no.3, pp.281-291, June 2004

Josaphat Tetuko Sri Sumantyo and Ryutaro Tateishi, A technique to analyse scattered waves from forest fire scars and its application to estimate its scars thickness in central Borneo using a SAR data, Journal of Japan Society of Photogrammetry

and Remote Sensing, vol.43, no.6, pp.48-61, January 2005

Y. O. Ouma and R. Tateishi, A fast environmental change detection approach based on unsupervised multiscale texture clustering, Int. J. Environmental Studies, Vol.62, No.1, pp.79-93, February 2005

8. 成果として得られた下記のデータは CEReS のホームページから公開されており、研究者は自由にダウンロードできる。

<http://www.cr.chiba-u.jp/databaseGGI.htm>

[GG-1] 20年 global 4分 AVHRR NDVI データセット

[GG-5] グローバル MODIS データ

[GG-6] 地球地図-グローバル土地被覆

[GG-7] 土地被覆トレーニングデータ (GLCNMO 作成に使用)

[GG-8] 既存地図一覧 (GLCNMO 作成に使用)

[GG-9] 地球地図-樹木被覆率

[GA-1] アジア 30 秒土地被覆データセット

[GA-2] アジア砂漠化地図データ

1. モンゴル草原バイオマス計測プロジェクト

2. 環境リモートセンシング研究センター/准教授/本多嘉明

3. モンゴル/国立リモートセンシングセンター/Mr. S. Khudumul

4. 平成 14 年度～

5. 衛星データによる草原バイオマス計測手法の確立を目指すものである。成果としては、砂漠化モニタリングや植物産量推定に役立つことができる。

6. 科学技術振興事業団 基礎的研究発展推進事業

7. なし

8. なし

1. 東アジアの気候変動に関わる日射・放射量の経年変動調査

2. 環境リモートセンシング研究センター/教授/高村 民雄

3. 中国/中国科学院大气物理研究所/石 廣玉

4. 平成 8 年度～

5. 中国を中心とした東アジア地域の日射・放射データから、東アジア域のエアロゾルや雲が日射の経年変動に与える影響を調査し、気候の変化を明らかにすることを目的とする。一方、気象衛星のデータ解析を通して、同時に広域の日射量等の情報を推定し、点（地上観測）と面の解析を総合して変動を明らかにする。

6. 科学研究費補助金(2002-2004)、日中科学協力事業(1999-2001)、宇宙開発事業団、地球観測システム構築推進プラン(GEOSS)(2006-2010)

7. G. -Y. Shi, T. Nakajima, T. Takamura, T. Hayasaka, L. Xu, B. Wang, X. Jin, X. -B. Fan, R. -m. Hu, P. Zhang, L. -S. Zhang X. -H. Wang, and H. Zhang, Observational Study on the Radiative Properties of Atmosphere Aerosols over China. CEReS International Symposium on Atmospheric Correction of Satellite Data and its Application to Global Environment, p.280-283, Chiba, Jan.21-23, 1998.

T. Takamura, I. Okada, N. Takeuchi, G-Y. Shi, T. Nakajima, 2001: Estimation of surface solar radiation from satellite data and its validation using SKYNET data, P2-37, p536-541, Proceedings of the Fifth International Study Conference on GEWEX in Asia and GAME, Oct. 3-5, 2001, Aichi Trade Center, Nagoya, Japan.

T. Takamura, I. Okada, T. Nakajima, G-Y Shi, J. Zhou, 2001: SKYNET aerosol / radiation observation network in the East Asia, 55-61,, Proceedings of Nagasaki Workshop on Aerosol-Cloud Radiation Interaction and Asian Lidar Network, 27-29 Nov. 2001, Nagasaki.

T. Takamura, A. Arao, H. Fukushima, G. Shi, N. Sugimoto (Editors), 2001: Proceedings of Nagasaki Workshop on Aerosol-Cloud Radiation Interaction and Asian Lidar Network, pp.119.

Zhen-zhu Wang, J. Zhou, Chao Li, T. Takamura, and N. Sugimoto, Studies on net long-wave radiation on clear days in Hefei region, Proceedings of the 14th CEReS Int' l Symposium and SKYNET Workshop on "Remote Sensing of the Atmosphere for Better Understanding of Climate Change", 65-68, Nov. 13-14 2008, Keyaki-Hall, Chiba University.

8. Nagasaki Workshop on Aerosol-Cloud Radiation Interaction and Asian Lidar Network, 27-29 Nov. 2001, Nagasaki University,

Nagasaki.

CEReS International Symposium and SKNET workshop on "Remote Sensing of the Atmosphere for Better Understanding of Climate Change", 13-14, Nov. 2008, Chiba University

1. 衛星観測による東アジアの環境変動に関する研究
2. 環境リモートセンシング研究センター／准教授／本多嘉明
3. 中国／中国科学院遥感応用研究所／劉 紀遠
4. 平成10年度～
5. ①両国サイドにとって有益な研究上の協力関係を築くとともに共同プロジェクトの役割分担を明確にする。  
②基本的な考え方と現地調査結果を共有することにより共同研究を設定する。  
③特に陸上植生の変化がもたらす炭素循環への影響と土地利用・被覆変化を中心に、衛星観測による環境変動モニタリング手法の開発を行う。
6. 科学技術振興事業団 炭素循環に関するグローバルマッピングとその高度化に関する国際共同研究（委託研究）
7. なし
8. なし

1. 中国の水問題・環境問題に関する研究
2. 環境リモートセンシング研究センター／教授／近藤昭彦
3. 中国／中国科学院地理科学・資源研究所／宋 献方
4. 平成10年～
5. 中国の経済発展にともない、様々な水問題・環境問題が顕在化している。本研究はこの課題に取り組むため、平成9年に現地を視察して研究を立案後、複数の外部資金を獲得し継続している研究プロジェクトである。
6. 科学研究費補助金（基盤B）（1998-1999, 2000-2002, 2003-2005, 2006-2008, 2009-2011）
7. ①Fadong Li, Xinfabg Song, Changyuan Tang, Akihiko Kondoh, Wanjun Zhang(2008): Stable isotopic charavterisation of precipitation, soil water and groundwater in Tanhang Mountain, north China. IAHS Publ., 319, 83-90.  
②Dilinar Aji, Akihiko Kondoh, Changyuan Tang(2008): Analysis of hydrological changes of lakes and rivers in XinJiang using GIS techniques and remote sensing data. IAHS Publ., 319, 175-183.  
③Tang, C., Chen, J., Kondoh, A., and Lu, Y. (2006): Characteristics of soil water movements and water table at the Leizhou Peninsula, Guangdong Province, China. Advances in Geosciences, 4, 219-227.  
④Aji, K., Tang, C., Kondoh, A., and Song, X. (2006): Environmental Isotopes of Precipitation, groundwater and surface water in Yanshan Mountain, China. Advances in Geosciences, 4, 11-16.  
⑤Jianyao Chen, Changyuan Tang, Yasuo Sakura, Akihiko Kondoh, Jingjie Yu, Jun Shimada and Tadashi Tanaka(2004): Spatial geochemical and isotopic characteristics associated with groundwater flow in the North China Plain. Hydrological Processes, 18, 3133-3146.  
⑥YanJun Shen, Yongqiang Zhang, Akihiko Kondoh, Changyuan Tang, Jianyao Chen, Jieying Xiao, Yasuo Sakura, Changming Liu and Hongyong Sun(2004): Seasonal variation of energy partitioning in irrigated lands, Hydrological Processes, 18, 2223-2234.
8. 中国の留学生の受け入れ

## 真菌医学研究センター

1. 分裂酵母の遺伝学的、細胞生物学的研究
2. 真菌医学研究センター／教授／川本 進
3. ハンガリー共和国／デブレツェン大学遺伝学教室／Matthias Sipiczki 教授
4. 平成8年度～
5. クリプトコックス・ネオフォルマンスの転写因子遺伝子 CnFKH1 および CnFKH2 をクローニングし、構造解析を行った。これらを分裂酵母に組み込み、機能解析を行った。
6. ハンガリー・日本政府間科学技術プロジェクト
7. 1) Sipiczki M, Takeo K, Yamaguchi M, Yoshida S, Miklos I: Environmentally controlled dimorphic cycle in a fission yeast. Microbiology 144: 1319-1330, 1998.  
2) Sipiczki M, Takeo K, Agnes Grallert: Growth polarity transitions in a dimorphic fission yeast. Microbiology 144: 3475-3485, 1998.

- 3) Sipiczki M, Takeo K: The effect of caffeine on cell cycle progression, polar growth in *Schizosaccharomyces pombe*. *Biologia Bratislava* 53(3): 291-296, 1998.
- 4) Sipiczki M, Yamaguchi M, Grallert A, Takeo K, Zilahi E, Bozsik A, Miklos I: Role of cell shape in the determination of division plane in *Schizosaccharomyces pombe*: random orientation of septa in spherical cells. *J Bacteriol* 182: 1693-1701, 2000.
- 5) Drivinya A., Szilagy S., Sipiczki M., Takeo K. and Shimizu K.: Structural and functional analysis of genes encoding fork head proteins in *Cryptococcus neoformans*. *Biologia Bratislava* 59 (6): 711-718, 2004.
8. 大学間学術交流協定 (千葉大学/デブレツェン大学) の一環として共同研究を実施している。

1. 病原酵母クリプトコックス・ネオフォルマンスの分子細胞生物学的研究
2. 真菌医学研究センター/教授/川本 進
3. チェコ共和国/パラツキー大学医学歯学部微生物学教室/Vladislav Raclavsky 講師
4. 平成 13 年度～
5. クリプトコックス・ネオフォルマンスの細胞周期解析を目的とした同調培養法を確立した。さらに細胞周期制御遺伝子 CDC28 をクローニングし解析した。
6. チェコ・日本政府間科学技術プロジェクト 及び日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期) 事業
7. 1) Ohkusu M, Raclavsky V, Takeo K: Deficit in oxygen causes G<sub>2</sub> budding and unbudded G<sub>2</sub> arrest in *Cryptococcus neoformans*. *FEMS Microbiol Lett* 204: 29-32, 2001.
- 2) Raclavsky V, Drivinya A, Hruskova P, Takeo K: *Cryptococcus neoformans* is able to escape the Rylux BSU and Congo red antifungal action. 29th Annual Conference on Yeasts, Abstracts p. 19. 2001. SAS Congress Center, Smolenice, Slovakia, May 23-25. *Folia Microbiol* 46: 251, 2001.
- 3) Raclavsky V, Ohkusu M, Hruskova P, Takeo K: Preparation of *Cryptococcus neoformans* synchronous culture. 20th Intl Conference on Yeast Genetics and Molecular Biology, Prague, 26-31 August 2001. *Yeast* 18: Suppl. 1, S326, 2001.
- 4) Raclavsky V., Hruskova P., Ohkusu M., Kafkova L., Kolar Z., Takeo K.: Effect of the inhibitor of cyclin dependent kinases boheminine in *Cryptococcus neoformans*. *Cells III: 3rd Conference on Cell Biology, Abstracts* p. 192, 2001, South Bohemian University, Ceske Budejovice, Czech Republic, 17-19 September 2001.
- 5) Raclavsky V, Ohkusu M, Hruskova P, Takeo K: Preparation and characterization of *Cryptococcus neoformans* synchronous culture. *J Microbiol Method* 51(1): 29-33, 2002.
- 6) Ohkusu M, Raclavsky V, Takeo K: Induced synchrony in *Cryptococcus neoformans* after release from G<sub>2</sub>-arrest. *Antonie van Leeuwenhoek*. 85: 37-44, 2004.
- 7) Takeo K, Ogura Y, Virtudazo E, Raclavsky V, Kawamoto S: Isolation of CDC28 homologue from *Cryptococcus neoformans* that is able to complement *cdc28* temperature-sensitive mutants *Saccharomyces cerevisiae*. *FEMS Yeast Research* 4: 737-744, 2004.
- 8) Raclavsky V, Pavlicek J, Ohkusu M, Trtkova J, Husickova V, Novotny R, Kunert J, Takeo K, Kawamoto S: Hypoxia response in the pathogenic yeast *Cryptococcus neoformans*. *Yeast* 22: S103, 2005.
- 9) Raclavsky V, Husickova V, Moranova Z, Ohkusu M, Fischer O, Precek J, Trtkova J, Takeo K, Kawamoto S: Growth strategy of the pathogenic yeast *Cryptococcus neoformans* submerged culture under different cultivation formats. *Folia Microbiol (Praha)* 2009, 54(4):349-352, 2009.
- 10) Raclavsky V, Pavlicek J, Novotny R, Moranova Z, Ohkusu M, Trtkova J, Takeo K, Kawamoto S: Peculiar clusters of daughter cells observed in *Cryptococcus neoformans* grown in sealed microtiter plates. *Folia Microbiol (Praha)* 54(4): 369-371, 2009.
- 11) Moranova Z, Kawamoto S, Raclavsky V: Hypoxia sensing in *Cryptococcus neoformans*: Biofilm-like adaptation for dormancy? *Biomed Pap Med* 153(3):189-193, 2009.

8. Vladislav Raclavsky 博士は、2006 年千葉大学真菌医学研究センター客員教授として滞在して共同研究を行った。また、2007 年 11 月に締結した部局間学術交流協定 (千葉大学真菌医学研究センター/パラツキー大学医学歯学部) の一環として共同研究を実施している。日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期) 事業のサポートにより、2008 年 1 0 月より 2009 年 8 月まで Moranova Zuzana 修士が 1 0 ヶ月間の予定で滞在し共同研究を進めた。

<p>1. 病原酵母クリプトコックスのゲノム情報に基づく国際標準規格マイクロアレイの作製研究</p> <p>2. 真菌医学研究センター／教授／川本 進</p> <p>3. アメリカ合衆国／ウイソコンシン大学マジソン校、医学部、生物分子化学・医微生物学・免疫学教室／Christina Hull 講師</p> <p>4. 平成17年度～</p> <p>5. 全ゲノム解析の完了がすでに報告されている、クリプトコックスのゲノム情報に基づく国際標準規格マイクロアレイの作製を行い、それを活用して解析しつつある。</p> <p>6. 日本学術振興会2国間交流事業：アメリカ合衆国との共同研究</p> <p>7. 学会、論文に発表予定</p> <p>8. なし</p>
<p>1. 真菌の細胞骨格に関する細胞生物学的研究</p> <p>2. 真菌医学研究センター／准教授／山口 正視</p> <p>3. チェコ共和国／マサリク大学医学部／コペツカ・マリエ教授</p> <p>4. 平成12年度～</p> <p>5. クリプトコックス・ネオフォルマンズ、オーレオバシジウム、フェロマイセスなどの病原真菌の細胞骨格をなす微小管とアクチンについて、蛍光顕微鏡と電子顕微鏡を用いて形態学的側面から研究している。</p> <p>6. なし</p> <p>7. 1)Kopecka M, Yamaguchi M, Gabriel M, Takeo K, Svoboda A: Morphological transitions during the cell division cycle of <i>Cryptococcus neoformans</i> as revealed by transmission electron microscopy of ultrathin sections and freeze-substitution. <i>Scripta Medica (Brno)</i> 73 (6): 369-380, 2000.</p> <p>2)Kopecka M, Gabriel M, Takeo K, Yamaguchi M, Svoboda A, Ohkusu M, Hata K, Yoshida S: Microtubules and actin cytoskeleton in <i>Cryptococcus neoformans</i> compared with ascomycetous budding and fission yeasts. <i>Eur J Cell Biol</i> 80: 303-311, 2001.</p> <p>3)Kopecka M, Gabriel M, Takeo K, Yamaguchi M, Svoboda A, Hata K: Analysis of microtubules and F-actin structures in hyphae and conidia development in opportunistic human pathogenic black yeast <i>Aureobasidium pullulans</i>. <i>Microbiology</i> 149: 865-876, 2003.</p> <p>4)Gabriel M, Kopecka M, Yamaguchi M, Svoboda A, Takeo K, Yoshida S, Ohkusu M, Sugita T, Nakase T: The cytoskeleton in the unique cell reproduction by conidiogenesis of the long-neck yeast <i>Fellomyces (Sterigmatomyces) fuzhouensis</i>. <i>Protoplasma</i> 229: 33-44, 2006.</p> <p>5)Yamaguchi M, Kopecka M: Ultrastructural disorder of the secretory pathway in temperature-sensitive actin mutants of <i>Saccharomyces cerevisiae</i>. <i>J Electron Microsc.</i> (in press) doi:10.1093/jmicro/dfp050, 2010.</p> <p>6)Kopeck? M, Ilkovics L, Ramikova V, Yamaguchi M: Effect of cytoskeleton inhibitors on conidiogenesis and capsule in the long neck yeast <i>Fellomyces</i> examined by scanning electron microscopy. <i>Chemotherapy</i> in press, 2010.</p> <p>8. なし</p>
<p>1. チトクローム b 遺伝子に基づく糸状菌の系統解析、同定、診断に関する研究</p> <p>2. 真菌医学研究センター／准教授／横山耕治</p> <p>3. 中国／吉林大学／王 麗 教授</p> <p>4. 平成14年度～</p> <p>5. 糸状菌のミトコンドリア DNA 中のチトクローム b 遺伝子を解析すると、種によって固有の塩基配列を示し、種内でも DNA タイプの違いを示すために、病原真菌の疫学的な調査に利用できる。従って、これらに関する基礎研究と菌株の疫学、系統関係の共同研究を行う。</p> <p>6. 科学技術振興調整費</p> <p>7. Swarajit Kumar Biswas, Li Wang, Koji Yokoyama and Kazuko Nishimura. Molecular Analysis of Mitochondrial Cytochrome b Gene Sequences of <i>Cryptococcus neoformans</i>, <i>Journal of Clinical Microbiology</i> vol.41.No12, p5572-5576. 2003.</p> <p>Swarajit Kumar Biswas, Li Wang, Koji Yokoyama and Kazuko Nishimura. Molecular Phylogenetics of the genus <i>Trichosporon</i> Inferred from Mitochondrial Cytochrome b Gene Sequence, <i>Journal of Clinical Microbiology</i> vol.43.No10, 2005</p> <p>Preparing: Koji Yokoyama, Li Wang, Swarajit K Biswas, Kazuko Nishimura. Rapid identification of <i>Penicillium marneffeii</i> and the phylogenetic relationship of the genus <i>Penicillium</i> based on mitochondrial cytochrome b gene . <i>Journal of Clinical</i></p>

Microbiology.

8. なし

1. 病原性酵母のチトクローム b 遺伝子に基づく系統解析、同定、診断に関する研究
2. 真菌医学研究センター／准教授／横山耕治
3. アメリカ合衆国／モレハウス医科大学（アトランタ）／スワラジット・クマール・ビスワス博士
4. 平成 14 年度～
5. 酵母のミトコンドリア DNA 中のチトクローム b 遺伝子を解析すると、種に依って固有の塩基配列を示し、種内でも DNA タイプの違いを示すために、病原真菌の疫学的な調査に利用できる。従って、これらに関する基礎研究と菌株の疫学、系統関係の共同研究を行う。
6. 委任経理金
7. Swarajit Kumar Biswas, Li Wang, Koji Yokoyama and Kazuko Nishimura. Molecular Analysis of Mitochondrial Cytochrome b Gene Sequences of *Cryptococcus neoformans*, *Journal of Clinical Microbiology* vol.41.No12, p5572-5576. 2003.  
Swarajit Kumar Biswas, Li Wang, Koji Yokoyama and Kazuko Nishimura. Molecular Phylogenetics of the genus *Trichosporon* Inferred from Mitochondrial Cytochrome b Gene Sequence, *Journal of Clinical Microbiology* vol.43.No10, 2005  
Preparing: Koji Yokoyama, Li Wang, Swarajit K Biswas, Kazuko Nishimura. Rapid identification of *Penicillium marneffei* and the phylogenetic relationship of the genus *Penicillium* based on mitochondrial cytochrome b gene . *Journal of Clinical Microbiology*.

8. なし

1. 高度病原性真菌症原因菌 *Paracoccidioides brasiliensis* およびその関連菌種の研究
2. 真菌医学研究センター／准教授／佐野文子
3. ブラジル連邦共和国／パラナ州立ロンドリーナ大学生物科学研究所／Eiko Nakagawa Itano 准教授
4. 2003 年 11 月から
5. 中南米の風土病パラコクジオイデス症患者より原因菌 *Paracoccidioides brasiliensis* を分離・同定することは流行地以外では様々な要因から難しい。本菌種に特異的な糖蛋白抗原遺伝子 gp43 の検出法に loop-mediated isothermal amplification (LAMP)法がある。本法を口腔内粘膜に病巣を持つ患者の唾液、16 検体に応用した。検出率は 8/16 であったが、非培養系迅速診断法として、唾液も検査材料となりうる。また、当センター保存 *P. brasiliensis* 株の遺伝子情報を検索中、本菌種と *Arthrographis kalrae* との抗原交差性を確認した。さらにパラナ州立ロンドリーナに居住する患者より分離された 1 株は、多遺伝子解析の結果、本菌属の新種 *Paracoccidioides lutzii* に相当することが判明し、この新種発表への足がかりとなる遺伝子データを論文として発表した。現在、同地域における *P. lutzii* の分離頻度および関連菌種との抗原性についての研究を進めている。
6. 海外日系人協会日系研修員事業、国際協力事業機構 (JICA) / 研究交流型。  
2009 年 5 月-6 月 Itano Eiko Nakagawa 准教授, 来日, 研究討論および研究成果発表。  
2010 年 6 月-7 月 Belenise Tomoko Tatibana 講師, 来日, 研究討論および研究手法の確認をする予定。
7. 1) Ramos SP, Sano A, Ono MA, Camargo ZP, Estavao D, Miyaji M, Nishimura K, Itano EN: Antigenuria and antigenemia in experimental murine paracoccidioidomycosis. *Med Mycol*, 43:631-6, 2005.  
Pavanelli WR, Kaminami MS, Geres JR, Sano A, Ono MA, Camargo IC, Itano EN. Protection induced in BALB/c mice by the high-molecular-mass (hMM) fraction of *Paracoccidioides brasiliensis*. *Mycopathologia*.163: 117-28, 2007.  
2) Tatibana BT, Sano A, Uno J, Mikami Y, Miyaji M, Nishimura K, Itano EN. Humoral immune response in experimental ddY mice paracoccidioidomycosis. *Semina: Ciencias Agrícolas, Londrina*, v. 28, n. 2, p. 287-294, abr./jun. 2007.  
3) Tatibana BT, Sano A, Uno J, Kamei K, Igarashi T, Mikami Y, Miyaji M, Nishimura K, Itano EN: Detection of *Paracoccidioides brasiliensis* gp43 gene in sputa by loop-mediated isothermal amplification method (LAMP) *Journal of Clinical Laboratory Analysis*, 2009;23(2):139-43.  
4) Takayama A, Itano EN, Sano A, Ono MA, Kamei K. An atypical *Paracoccidioides brasiliensis* clinical isolate based on multiple gene analysis. *Medical Mycology*,48:64-72, 2010.  
5) Sano A, Itano EN (Other 57 writers), Voigt K ed. Part II. "Current Advances in Molecular Identification of Fungi". Human pathological and clinical contributions. 18- Applications of loop-mediated isothermal amplification methods (LAMP) for identification and diagnosis of mycotic diseases: Paracoccidioidomycosis and *Ochroconis gallopava* infection.  
6) Vivian RH, Leonello PC, Nagashima LA, Kaminami MS, Tristão FS, Sano A, Ono MA, Béjar CV, Itano EN.



Soluble components of *Histoplasma capsulatum* var. *capsulatum* have hemagglutinin activity and induce syngeneic hemophagocytosis in vitro. Mycopathologia. 2010 Mar;169(3):151-7. Epub 2009 Nov 8.

8. なし

1. 中央アジアにおける真菌症原因菌および関連菌の生態学的研究

2. 真菌医学研究センター／准教授／矢口 貴志

3. 中華人民共和国／新疆医科大学／惠艶教授、Palide Abliz 助教授

4. 平成 18 年度－

5. 中央アジアにおける真菌症原因菌および関連菌において、形態的、生理的、分子系統的な知見を勘案した多相的な分類研究を実施し、種内多型、地域多型などについて検討する。

6. 平成 18－21 年度科学研究費補助金（基盤 B）1 年延長

7. Yaguchi T, Matsuzawa T, Tanaka R, Abliz P, Hui Y, Horie Y: Two new species of *Neosartorya* isolated from soil in Xinjiang, China. Mycoscience 2010 Web 公開 (DOI 10.1007/s10267-010-0037-8)

8. 第 50 回日本医真菌学会総会ポスター賞受賞：矢口貴志, 堀江義一, 松澤哲宏, 田中玲子：「遺伝子解析による *Neosartorya* 属および *Aspergillus* section *Fumigati* の分類と種の評価および新分類」(2006.10.22)

1. 病原真菌 *Candida albicans* 全ゲノムシーケンスの決定

2. 真菌医学研究センター／准教授／知花博治

3. アメリカ合衆国／ミネソタ大学／ピート・マギー教授

4. 平成 11 年～

5. 病原性真菌カンジダ・アルビカンスの全ゲノム配列(15.6 Mb)を決定する。この情報を用いた比較ゲノム解析により、抗真菌ゲノム創薬をめざしている。

6. アメリカ合衆国グラント、文部科学省科研費 特定領域

7. Jones T, Federspiel NA, Chibana H, Dungan J, Kalman S, Magee BB, Newport G, Thorstenson YR, Agabian N, Magee PT, Davis RW, Scherer S: The Diploid Genome Sequence of *Candida albicans*, Proc Natl Acad Sci U S A 101, 7329-7334, 2004.

・Hiroji Chibana, Nao Oka, Hironobu Nakayama, Toshihiro Aoyama, B.B. Magee, P.T. Magee and Yuzuru Mikami: Sequence finishing and gene mapping for *Candida albicans* Chromosome 7, and syntenic analysis against *Saccharomyces cerevisiae* genome, Genetics, 170(4) 1525-1537, 2005.

・Paul R. Lephart, Hiroji Chibana, Paul T Magee: Effect of the Major Repeat Sequence (MRS) on chromosome segregation in *Candida albicans*. Eukaryotic Cell, 4(4):733-741, 2005.

・Marco van het Hoog, Timothy J Rast, Mikhail Martchenko, Suzanne Grindle, Daniel Dignard, Herve Hogues, Christine Cuomo, Matthew Berriman, Stewart Scherer, B B Magee, Malcolm Whiteway, Hiroji Chibana, Andre Nantel, P T Magee: Assembly of the *Candida albicans* genome into sixteen supercontigs aligned on the eight chromosomes. Genome Biology 8(4): R52, 2007.

8. 平成 17 年日本医真菌学会奨励賞「*Candida albicans* のゲノム構造に関する研究」

1. 真菌感染症に関する研究

2. 真菌医学研究センター／名誉教授／三上 襄

3. ブラジル／Campinas 大学 (UNICAMP)／M. L. Moretti-Branchini 教授, Vilela MMS 教授

4. 平成 14 年度－

5. エイズ患者等において増加している病原性真菌による感染症の原因菌について、薬剤感受性および分類学的な研究を行った

6. JICA、ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)、客員教授経費

7. (1) Delgado CAN, Taguchi H, Mikami Y, Miyaji M, Villares MCB, Branchini ML: Human cryptococcosis: relationship of environmental and clinical strains of *Cryptococcus neoformans* var. *neoformans* from urban and rural areas. Mycopathologia 159: 7-11, 2005.

(2) Morelira-Oliveira MS, Mikami Y, Miyaji M, Imai T, Schreiber AZ, Branchini ML: Diagnosis of candidemia by polymerase chain reaction and blood culture: Prospective study in a high-risk population and identification of variables associated with development of candidemia. Eur J Clin Microbiol Infect Dis 24: 721-726, 2005.

(3) Iida S, Imai T, Oguri T, Okuzumi K, Yamanaka A, Branchini MLM, Nishimura K, Mikami Y: Genetic diversity of the internal transcribed spacers (ITS) and 5.8S rRNA genes among the clinical isolates of *Candida parapsilosis* in Brazil and Japan. Jpn J Med Mycol 46: 133-137, 2005.

- (4) Binelli CA, Moretti ML, Assis RS, Sauaia N, Menezes PR, Ribeiro E, Geiger DC, Mikami Y, Miyaji M, Oliveira MS, Barone AA, Levin AS : Investigation of the possible association between nosocomial candiduria and candidaemia. Clin Microbiol Infect 12: 538-543, 2006.
- (5) Melo NR, Taguchi H, Culhari VVP, Kamei K, Mikami Y, Smith SN, Vilela MMS: Oral candidiasis of HIV infected children undergoing sequential HIV therapies. Med Mycol 47: 149-156, 2009.
- (6) Delgado ACD, de Jesus Pedro R, Aoki FH, MD\*, Resende MR, Trabasso P, Colombo AL, MD#,,? Moreira de Oliveira MS,? Mikami Y, Moretti ML: Clinical and microbiological assessment of long-term diagnosed HIV1-infected patients and *Candida* oral colonization. Clin Microbiol Infect 15: 364-371, 2009.
- (7) Kang Y, Tanaka H, Moretti MR, Mikami Y: New ITS genotype of *Cryptococcus gattii* isolated from an AIDS patient in Brazil. Microbiol Immunol 53: 112-116, 2009.
- (8) Zhu J, Kang Y, Uno J, Taguchi H, Liu Y, Ohata M, Tanabe R, Mretti ML, Mikami Y: Comparison of genotypes between environmental and clinical isolates of *Cryptococcus neoformans* var. *grubii* based on microsatellite pattern. Mycopathol 169: 47-55, 2010.

8. 大学間交流協定が2006年に再度延長

1. 病原真菌 *Cryptococcus neoformans* の遺伝子解析
2. 真菌医学研究センター／名誉教授／三上 襄
3. オーストラリア／Sydney 大学／W. Meyer 博士
4. 平成13年度－
5. 患者由来および環境由来の病原真菌 *Cryptococcus neoformans* の遺伝子解析を通して開発した簡便な遺伝子型解析法を報告した
6. 科学技術振興調整費
7. Hanafy A, Kaocharoen S, Jover-Botella A, Katsu M, Iida S, Kogure T, Gono T, Meyer W, Mikami Y: Multilocus microsatellite typing for *Cryptococcus neoformans* var. *grubii*. Med Mycol, 46: 685-696, 2009.
8. なし

1. 病原真菌 *Candida albicans* および関連菌の薬剤耐性に関する研究
2. 真菌医学研究センター／名誉教授／三上 襄
3. インド／Madras 大学／M. Thangam 教授
4. 平成16年度－
5. 臨床分離の *Candida dubliniensis* と *Candida albicans* の薬剤感受性に関する研究
6. 科学技術振興調整費
7. (1) Kumar G, Hanafy AM, Katsu M, Mikami Y, Thangam M: Molecular analysis and susceptibility profiling of *Candida albicans* isolates from immunocompromised patients in South India. Mycopathol 161: 153-159, 2006.
- (2) Kumar G, Prabu D, Mitani H, Mikami Y, Thangam M: Environmental isolation of *Cryptococcus neoformans* and *Cryptococcus gattii* from living trees in Guindy National Park, Chennai, South India. Mycoses, 2009, in press.
8. 学位審査委員として協力

病原真菌の分子疫学的研究

2. 真菌医学研究センター／名誉教授／三上 襄
3. 中国／貴陽医学院／王 和教授
4. 平成17年度－
5. 貴陽医学院病院から分離した病原真菌の分類と同定
6. ナショナルバイオリソースプロジェクト
7. (1) Kang Y, Takeda K, Yazawa K, Mikami Y: Phylogenetic studies of *Gordonia* species based on *gyrB* and *secA1* gene analyses. Mycopathol 167: 95-105, 2009.
- (2) Takeda K, Kang Y, Yazawa K, Gono T, Mikami Y: Phylogenetic studies of *Nocardia* species based on *gyrB* gene analysis. J Med Microbiol 59: 165-171, 2009.
8. 菌株保存機関としての菌株の交換業務

1. 環境由来の病原真菌の系統分類学的研究
2. 真菌医学研究センター／名誉教授／三上 襄

3. エジプト/AinSham 大学微生物学部/SM Zaki 講師、AA E-Din 教授
4. 平成 16 年度-
5. カイロ近郊のナイル川の堤防の土壌より好ケラチン性真菌を分離して、その分類学的な位置を明らかにした。
6. ナショナルバイオリソースプロジェクト
7. (1) Zaki SM, Mikami Y, El-Din AA, Youseff YA: Keratinophilic fungi recovered from muddy soil in Cairo vicinities. Mycopathol 160: 2456-251, 2005.  
(2) Hanafy A, Ito J, Iida S, Kang Y, Kogure T, Yazawa K, Takashi Y, Mikami Y: Majority of Actinomadura clinical isolates from sputa or bronchialveolar lavage fluid in Japan belongs to the cluster of *Actinomadura cremea* and *Actinomadura nitritigenes*, and the description of *Actinomadura chibensis* sp. nov. Mycopathol 164: 281-287, 2006.  
(3) Zaki SM, Ibrahim N, Aoyama K, Shetia YM, Abdel-Ghabt K, Mikami Y: Dermotophytes infections in Cairo, Egypt. Mycopathol, 167: 3314-3317, 2009.
8. エジプト政府派遣研究員受け入れ (平成 18,19, 20 年)

### 総合メディア基盤センター

1. 偏微分方程式を利用した数値画像科学
  2. 総合メディア基盤センター/教授/井宮淳
  3. 1)ドイツ連邦/Saarland 大学 数学科/Joachim Weickert 教授  
2)オランダ王国/Eindhoven 工科大学 生体工学科/Bart ter Haar Romeny 教授  
3)カナダ/Western Ontario 大学 計算機科学科/John Barron 教授
  4. 1)は 2000 年より、2)は 2003 年より、3)は 1998 年より継続中
  5. 計算機の能力の進歩により、MRI で計測した画像系列から心臓の動きを見ることができるようになった。本研究では、動的電子  
人体アトラス作成のための心臓の標準モデルを計測から構成するために、心臓の動きをきめる、力学的、生態学的、解剖学的パラメータを計測画像から非侵襲に求める手法を開発している。
  6. 日本側からは、校費のみである。渡航費に関しては私費である。
  7. 2006 年 6 月開催の Dagstuhl Seminar において招待講演
  8. なし
1. 離散幾何学とその応用に関する研究
  2. 総合メディア基盤センター/教授/井宮淳
  3. 1)米国/ニューヨーク州立大学/Valentin Brimkov 教授  
2)スウェーデン王国/Uppsala 大学/Gunilla Borgefords 教授  
3)ニュージーランド/Auckland 大学/Reinhard Klette 教授  
4)フランス共和国/ESIEE/Gilles Bertrand 教授
  4. 1)は 2005 年より、2)は 2003 年より、3)は 1997 年より、4)は 2005 年より継続中
  5. 計算機の中で有限の解像度のボクセルとしてあらわされるデータの効率的な処理方法を開発し、脳の形状モデルを高解像度で生成することを目的としている。
  6. 日本側からは、校費のみである。渡航費に関しては私費である。
  7. 2<sup>nd</sup> International Symposium on Visual Computing November 2006, Nevada, USA において Special Track Discrete and Computational Geometry and their Applications in Visual Computing を開催
  8. なし

### 先進科学センター

1. 有機ヘテロ界面におけるキャリアブロッキング機構の解明
2. 先進科学センター/助教/野口 裕

3. ドイツ/Augsburg University/Wolfgang Bruetting、台湾/National Tsing-Hua University/Shu-Jun Tang

4. 平成 20 年度

5. 有機エレクトロニクス素子の機能発現のキーとなる異種材料界面における電荷蓄積機構を複数の手法を用いて調べた。実デバイスにおける電荷蓄積過程の解析には変位電流評価法(DCM)およびインピーダンス分光法(IS)を、モデル界面における電子構造解析には紫外光電子分光法(UPS)および光電子収量分光法(PYS)を用いた。実験は、本学(DCM、PYS)とドイツ Augsburg 大学の W. Bruetting 教授研究室(IS)、および台湾シンクロトン施設(UPS)で行われた。プロジェクトは平成 20 年度からの 2 年間で実施された。上述した研究室間で、年間数回程度、相互に人的交流を行うことで、国際的研究協力体制を強化した。

6. 千葉大学 G-COE 若手主導国際協力研究

7. 論文

1) "Light- and ion-gauge-induced space charges in tris-(8-hydroxyquinolate) aluminum-based organic light-emitting diodes"  
Yutaka Noguchi, Naoki Sato, Yukimasa Miyazaki, Hisao Ishii, Applied Physics Letters, in press.

2) "Higher resistance to hole injection and electric field distribution in organic light-emitting diodes with copper phthalocyanine interlayer"

Yutaka Noguchi, Naoki Sato, Yukimasa Miyazaki, Yasuo Nakayama, Hisao Ishii, Japanese Journal of Applied Physics, 49 (2010) 01AA01.

3) "Electronic Structures of Model Interfaces of an Organic Bistable Devices:

AIDCN(2-amino-4,5-imidazoledicarbonitrile)-metal interfaces"

Yasuo Nakayama, Yen-Hao Huang, Ching-Hsuan Wei, Shinichi Machida, Takuya Kubo, Tun-Wen Pi, Shu-Jung Tang, Yutaka Noguchi, Hisao Ishii in preparation.

学会発表

1) "Electronic Structures of Model Interfaces of an Organic Bistable Devices:

AIDCN(2-amino-4,5-imidazoledicarbonitrile)-metal interfaces"

Yasuo Nakayama, Yen-Hao Huang, Ching-Hsuan Wei, Shinichi Machida, Takuya Kubo, Tun-Wen Pi, Shu-Jung Tang, Yutaka Noguchi, Hisao Ishii

The 5th edition of the international workshop on "Electronic Structure and Processes at Molecular-Based Interfaces" (ESPMI-V); Chiba, Jan./2010

2) "2-amino-4,5-imidazoledicarbonitrile (AIDCN) 被覆層の基板金属に依存した吸着状態"

中山泰生, Yen-Hao Huang, Ching-Hsuan Wei, 久保卓也, 町田真一, Tun-Wen

Pi, Shu-Jung Tang, 野口裕, 石井久夫

第 29 回表面科学学術講演会; 東京都江戸川区, Oct./2009 口頭

3) "Photoemission study of model interfaces of an organic bistable device:

2-amino-4,5-imidazoldicarbonitrile/metal interfaces"

Yasuo Nakayama, Yen-Hao Huang, Ching-Hsuan Wei, Shinichi Machida, Takuya

Kubo, Tun-Wen Pi, Shu-Jung Tang, Yutaka Nogichi, Hisao Ishii

11th International Conference on Electronic Spectroscopy and Structure (ICES11); Nara, Oct./2009

4) "有機双安定素子材料 AIDCN-電極モデル界面の電子構造"

中山泰生, 町田真一, 久保卓也, 黄彦豪, 唐述中, 野口裕, 石井久夫

2009 年春季 第 70 回応用物理学学会学術講演会; 富山大学, Sep./2009

5) "有機ヘテロ界面におけるキャリア蓄積過程-界面電荷による効果"

宮崎行正, 野口裕, Wolfgang Bruetting, 石井久夫

2010 年 第 57 回応用物理学関係連合講演会; 東海大学, Mar./2010

8. なし

1. ガンマ線バーストジェット
  2. 先進科学センター/特任助教/水田晃
  3. スペイン/ Valencia Univ./ M. A. Aloy
  4. 2005年度
  5. 高エネルギー天体現象のエンジンモデルである高速回転する大質量星の最期に起きるコラプサーモデルに基づいてジェットの親星中、星周物質中の伝播の数値流体シミュレーションを行った。星周物質中に伝播するジェットは親星から遠くはなれた場所でガンマ線を出す即時放射、残光フェーズを向かえる。ジェット状の爆発では、視線方向の違いによって観測される放射が異なり、観測されるエネルギーはエネルギー角度分布依存と相関があると考えられる。様々な質量、半径を持った親星に対して、ジェットのエネルギー角度分布を調べ、質量軽い親星からのジェットのエネルギー角度分布の方がより早く大きな角度で落ち込むことが分かり、以上の内容を論文にまとめた。
  6. 科学研究費補助金（特定領域公募研究、基盤B, 基盤C）
  7. "Angular Energy Distribution of Collapsar-Jets"
- Akira MIZUTA, & Miguel A. Aloy, The Astrophysical Journal, Volume 699, Issue 2, pp. 1261-1273 (2009)
8. なし

### 海洋バイオシステム研究センター

1. 海産緑藻類の繁殖戦略の進化と生息環境
2. 千葉大学海洋バイオシステム研究センター/教授/富樫 辰也
3. 米国 National Tropical Botanical Garden/Paul Alan Cox 教授、同 John L. Bartelt 博士
4. 平成14年度より開始
5. 進化生態学の理論と実験データに基づいて海産緑色藻類の繁殖戦略の進化プロセスと生息環境の相関関係を明らかにする研究を行っている。
6. 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業
7. Togashi, T., M. Nagisa, T. Miyazaki, J. Yoshimura, K. Tainaka, J.L. Bartelt and P.A. Cox. 2008. Effects of gamete behavior and density on fertilization success in marine green algae: insights from three-dimensional numerical simulations. *Aquatic Ecology* **42**: 355-362.  
Togashi, T., Y. Sakisaka, T. Miyazaki, M. Nagisa, N. Nakagiri, J. Yoshimura, K. Tainaka, P.A. Cox and J.L. Bartelt. 2009. Evolution of gamete size in primitive taxa without mating types. *Population Ecology* **51**: 83-88.
8. Ecological Research Award 2005 を受賞。  
第17回国際植物学会（2005年7月、オーストリア・ウィーンで開催）において国際シンポジウム *Sexual selection and the evolution of anisogamy* を主催。

### フロンティアメディカル工学研究開発センター

1. 日本学術振興会、フィンランド科学アカデミー共同研究 外国人研究者受入 Prof. Arto KAARNA
  2. フロンティアメディカル工学研究開発センター長/教授/三宅洋一
  3. フィンランド/ラッペンラッタ工科大学
  4. 平成16年5月6日～
  5. 医用画像処理に関する研究
  6. 渡航費：フィンランド、フィンランドアカデミー  
滞在費：日本学術振興会
  7. A I C（国際色彩科学連合大会）にて発表 分光画像処理
  8. 2004年5月14日医用画像に関するワークショップ開催（千葉大学松韻会館）
1. 分光画像処理とその医学への応用—フィンランド科学アカデミー共同研究— 外国人研究者受入 ジュッシー パッキネン教授
  2. フロンティアメディカル工学研究開発センター長/教授/三宅洋一

3. フィンランド/ヨーエンス大学
4. 平成19年10月1日～
5. 医用画像処理に関する研究
6. 渡航費：千葉大学学長裁量経費  
滞在費：千葉大学学長裁量経費
7. P P I Cにて発表 分光画像処理
8. グローバルCOE申請に関する討論, 医用画像処理についての研究計画

## 環境健康フィールド科学センター

1. ラチリズムに関する神経薬理学的研究
2. 環境健康フィールド科学センター/教授/池上 文雄
3. ベルギー王国/Institute Plant Biotechnology for Developing Countries (IPBO), Ghent University/Fernand Lambein 教授
4. 平成8年度～
5. マメ科 *Lathyrus* 属植物中に含まれ、重症な神経中毒症のラチリズムを引き起こす 8-ODAP とその関連化合物の脳神経レセプターへの作用機序に関する神経薬理学的研究を行い、ラチリズムの発症メカニズムの解明と治療薬開発の基礎研究を行う。
6. 校費および文部科学省学術フロンティア推進事業研究費（日本大学薬学部）
7. 1) Kusama-Eguchi, K., Y. Yamazaki, T. Ueda, A. Suda, Y. Hirayama, F. Ikegami, K. Watanabe, M. May, F. Lambein and T. Kusama: Hind-limb paraparesis in a rat model for neurolathyrism associated with apoptosis and an impaired vascular endothelial growth factor system in the spinal cord. *J. Comp. Neurol.* **518**, 928-942 (2010).  
2) Lambein, F., Y.-H.Kuo, K. Kusama-Eguchi, F. Ikegami: 3-N-oxalyl-L-2,3-diaminopropanoic acid, a multifunctional plant metabolite of toxic reputation. *ARKIVOC* **9**, 45-52 (2007).
8. なし

1. タイ産薬用資源植物の生物活性成分研究
2. 環境健康フィールド科学センター/教授/池上 文雄
3. タイ王国/チュラロンコン大学薬学部/Nijsiri Ruangrungsi 准教授/  
タイ王国/チェンマイ大学薬学部/Siriporn Okonogi 准教授
4. 平成8年度～
5. タイ国等の東南アジア諸国で伝承民間薬として種々の疾患に用いられている薬用資源植物について、活性成分の化学構造解析を行うと共に生物活性評価を行い、医薬品開発のリード化合物としての可能性を探る。
6. 校費
7. 1) Tachakittirungrod, S., F. Ikegami and S. Okonogi: Antioxidant active principles isolated from *Psidium guajava* grown in Thailand. *Scientia Pharmaceutica* **75**, 179-193 (2007).  
2) Ikegami, F.: Active constituents in Chinese, Ayurvedic and Thai herbal medicines: Applicable separation procedures. *Thai J. Health Res.* **19**, 1-12 (2005).
8. なし

1. 各種果樹における果実の着生と発育に及ぼす植物ホルモンの影響
2. 園芸学部/名誉教授/松井 弘之  
環境健康フィールド科学センター/准教授/小原 均
3. アメリカ合衆国/ミシガン州立大学/Martin J. Bukovac
4. 平成2年度～
5. 各種果樹の安定した果実生産と高品質果実生産を目的に、着果および果実発育と内生植物ホルモンとの関連を研究している。また、本研究と平行して、果実に対する植物ホルモンの透過性に関係する要因についても検討している。
6. ミシガン州立大学/校費
7. ①N-Substituted phthalimide-induced of parthenocarp in sour cherry (*Prunus cerasus* L. 'Montmorency') enhanced by auxin. 1994. 24th Inter. Hort. Congress, Abstracts 269.  
②Gibberellins in immature seed of *Prunus cerasus*: Structure determination and synthesis of gibberellins, GA<sub>95</sub> (1,2-didehydro-GA<sub>20</sub>). 1996. *Phytochemistry*, 42(4):913-920.  
③GA<sub>95</sub> is a genuine precursor of GA<sub>3</sub> in immature seed of *Prunus cerasus* L.. 1998. 16th Inter. Conference on Plant Growth Substances, Abstracts 146.

- ④植物生長調節物質によるキウイフルーツ‘ヘイワード’の単為結果誘起について. 1997. J. Japan. Soc. Hort. Sci. 66(3.4):467-473.
- ⑤Endogenous gibberellin-induced parthenocarpy in grape berries. 2000. Acta Hort. 514:69-74.
- ⑥Endogenous gibberellins in immature seeds of *Prunus persica* L.: identification of GA<sub>118</sub>, GA<sub>119</sub>, GA<sub>120</sub>, GA<sub>121</sub>, GA<sub>122</sub> and GA<sub>126</sub>. 2001. Phytochemistry 57:749-758.
- ⑦Effects of the combination of gibberellic acid and ammonium nitrate on the growth and quality of seedless berries in ‘Delaware’ grape. 2001. J. Japan. Soc. Hort. Sci. 72(5):366-371.
- ⑧Effect of gibberellins on induction of parthenocarpic berry growth of three grape cultivars and their endogenous gibberellins. 2001. 52<sup>nd</sup> ASEV Annual Meeting, Technical Abstracts, 81.
- ⑨ジベレリンA<sub>3</sub>と硫酸アンモニウムとの混用処理がブドウ‘デラウェア’の無核果粒の成長と品質に及ぼす影響. 2003. J. ASEV Jpn. 14(2):58-63.
- ⑩Induction of parthenocarpic fruit growth with endogenous gibberellins of Loquat. 2004. Acta Hort. 653:67-70.
- ⑪ビワの無種子果実生産. 2004. 植物の生長調節. 39(1):106-113.
- ⑫Effects of grape berry development stages on ammonium nitrate-enhanced penetration of gibberellin A<sub>3</sub>. 2004. 101<sup>st</sup> Abstracts ASHS Annual Conference, HortScience, 39(4):793.
- ⑬ジベレリン、ホルクロールフェニユロン、ストレプトマイシンおよび内生ジベレリン様物質処理がブドウ‘甲州’の無種子果形成に及ぼす影響. 2005. J. ASEV Jpn. 16(2): 68-79.
- ⑭ブドウ‘甲州’、‘コンコード’および‘ナイアガラ’の無種子果形成について. 2006. J. ASEV Jpn. 17(1): 14-20.
- ⑮Effect of ethychlozate in combination with ammonium nitrate on fruit thinning in ‘Takabayashi-wase’ Satsuma mandarin (*Citrus unshu* Marc.). 2006. 27th International Horticultural Congress, Abstracts: 310.
- ⑯Effect of application of gibberellins in combination with forchlorfenuron (CPPU) on induction of seedless fruit set and growth in triploid loquat. 2006. Acta Hort. 727: 263-267.

8. なし

1. 自然セラピーがもたらす生理的リラックス効果

2. 環境健康フィールド科学センター／教授／宮崎良文

3. 韓国／忠南大学校農業生命科学大学／李峻雨（教授）

4. 平成21年度から

5. 本研究の目的は、今まで経験的に知られていた自然セラピーがもたらす生理的リラックス効果を明らかにすることである。自然セラピーに関する関心が高まっている中、その生理的リラックス効果の解明は重要であると考えられる。本研究では20代の大学生を被験者とし、自然セラピー前・後あるいは自然セラピー中に被験者の自律神経活動（心拍変動性（心拍のゆらぎ分析）、心拍数、血圧）と内分泌活動（唾液中コルチゾール濃度）を測定することにより、自然セラピーがもたらす生理的リラックス効果の解明を行うことである。

6. 受託研究（7212000443）

7. 1) 大学構内緑地の主観的快適性増進効果—パーソナリティによる分類—. 朴根兌、李旻宣、李宙嘗、朴範鎮、具滋馨、李峻雨、吳京玉、安起完、宮崎良文. 日本生理人類学会第3回研究奨励発表会概要集, 1. 2009.

2) 園芸作業がもたらす生理的リラックス効果. 李旻宣、朴根兌、李宙嘗、朴範鎮、具滋馨、李峻雨、吳京玉、安起完、宮崎良文. 日本生理人類学会第3回研究奨励発表会概要集, 2. 2009.

8. なし